

歌と爆弾 ～コズミック・イラ 東京異聞～

V S B R

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東アジア共和国政府が直接統治するトウキョウ特別行政府は、コスミック・イラの歪みが重く蠢く都市である。かつて独立国の首都であったその街は今、その内に抱えた矛盾を吐き出そうとしている。

頻発するテロ、政府による強権的な統治体制、マフィアは闇に巢食い、スパイや工作員が暗躍する。そして上空を舞うのは幽霊MS。

サブカルチャーを標榜する歌声がアンダーグラウンドにこだまする時、「トウキョウ」という虚構は「東京」という真実に目覚めた。かくして街は暴走をはじめめる。

これは、魔都と化した東京を訪れた男が、一人の女と出会う物語。

そんな街の片隅で出会う男女に、幸福な物語を紡ぐことは出来るのだろうか。

目次

作品の解説	1
プロローグ	4
第一話 ポップスハーモナイズサマーライブ	20
第二話 トウキョウ特別行政区	37
第三話 モザイク	54
第四話 めぐり逢い	70
第五話 SEED／エヴィデンス	85
第六話 測れぬ距離	100
第七話 老人	116
第八話 すべき事	134
第九話 秘密	152
第十話 街の深層	170
第十一話 生の情報	187
第十二話 船上パーティー	203
第十三話 強奪	219
第十四話 投げかける想い	235
第十五話 発火	250
第十六話 変わる空気	266
第十七話 舞台設営	282
第十八話 東京祭	298
第十九話 爆弾	314
第二十話 スタンプード	330
第二十一話 幕引き	346
エピローグ	374

作品の解説

コズミック・イラの東京

コズミック・イラの国際秩序は、再構築戦争と呼ばれた戦争によって形成された。極東地域においてもそれは同様であったが、かつて極東に存在した国は再構築を目指す国際的潮流に乗り遅れていた。

その国は、地理的には極東・東アジアに位置しながら、大西洋連邦の前身となった国家との政治的・経済的な繋がりが強く、再構築に際してどの陣営に付くかの判断が遅れたのだ。

結果としてその国は、大西洋連邦の前身国家から事実上切り捨てられる形で東アジア共和国に併合された。経済規模の大きさや言語上の問題から、日本自治区として広範な自治を認められはしたが、首都であった東京は東アジア共和国政府が直接統治する形をとる事となった。トウキョウ特別行政府と呼ばれるその地域は、西の境を多摩川、東の境を利根川として、圏央道の内側地域を指す。

房総半島は全域が特別行政府内であり、これは東京湾防衛のためである。横須賀に大西洋連邦が海軍部隊を駐留させているため、房総半島の側から浦賀水道を牽制する必要があるとの判断であろう。

トウキョウ特別行政区を特徴付けるのは、身分証確認ゲートと呼ばれる検問システムである。道路のいたるところに駅の自動改札のような装置が設置されており、身分証がなければそこを通行する事が出来ないのだ。車道にも同様のゲートが設けられており、ゲートの開閉は車載装置に身分証をセットする事で行われる。

さらに身分証の種類によって通行可能な人間を選別しており、その選別は一日の間に何度も変更される。これによって、特別行政府当局にとって都合の悪いものは市民の目から物理的に隔離する事が可能なのだ。鉄道網の運行システムもこれに連動されており、市民の動きは完全に監視・管理されている。

東アジア共和国では、情報通信に関する規制が厳しく、特にトウキョウ特別行政府では市民が触れる情報の全てに監視の目が光って

いるという話もある。だが、そのような当局の監視を逃れるアングラのネットワークが存在するという噂もまた、まことしやかに語られているのだ。

さらにトウキョウ特別行政府には、二つの特別地域が存在する。

一つは旧世界と呼ばれている、日本人特別居留区。もう一つは、オーブ連合首长国の租借地であるタマユラ地区だ。

日本人特別居留区は、東アジア共和国による併合を良しとせず、トウキョウ特別行政府で反東アジア政府活動を行った人々やその関係者を隔離するための地域である。隅田川と江戸川、首都高速7号小松川線で囲まれた区域で、現在は日本軍と名乗る武装勢力の拠点と化している。

特別行政府当局による攻撃も頻繁に行われ、インフラなどは多くが機能不全に陥っている。そのため、住民の人道的危機に対処するための支援などを行う団体も存在する。

タマユラ地区は、ブレイク・ザ・ワールドに伴う津波被害が大きかった場所を、オーブ連合首长国が復旧・復興の資金援助と引き換えに租借地とした区域である。日本人特別居留区の南側の区域であり、首都高速7号小松川線の高架下には分離壁が築かれている。

オーブの租借地であるため身分証確認ゲートはなく、またオーブ本国との直通海底ケーブルが存在するため、タマユラ地区から発信される情報は東アジア共和国政府も簡単には手を出せないと言われている。

しかし、その租借期限は間近に迫っており、その延長がなされるか否かが政治問題になっている。なお現在のタマユラ地区は、オーブ本国にとっても負担が大きく、本国政府は租借期限の延長に後ろ向きだとされる。

このように、トウキョウ特別行政区はその形成過程も内部構造も極めて複雑で不安定なものとなっていた。

東アジア共和国による直接統治という形であるが、末端の行政職員まで派遣する事などでできず、現地で採用された職員がほとんどを占めている。それらの職員が、東アジア共和国の方針に無条件で従う保証

がないのは当然である。

トウキョウ特別行政府に住む市民もまた、その統治体制に納得などはしていないであろう。

プロローグ

表の喧騒は夜になっても絶えない。安ホテルの薄っぺらなカーテンは外の光を遮る事をせず、部屋の中は薄明かりに沈んでいる。男がベッドから降りた事を背中越しに感じた。シャワーの音が無造作に響く。

けだるい体を起こし、乱れた髪を押さえる。セックスの時に髪を触りたがる男はどんなタイプだったろうか。ファッション雑誌のどうでもいい記事の事を思い出してしまった。シャワールームから出てきた男は、「起こした？」とだけ聞く。体を隠す事無く、入れ違うようにシャワールームに向った。

体の表面に残る男の残滓を洗い流すように、シャワーを浴びる。それで消えてしまう程度の相手だった。もちろん、交際は男女相互の関係である。相手の責任だけに押し付けるのはフェアではない。それでも、あの男にはそう思わせる何かがあった。いや正確には、何もなかったからそう思ってしまうのだ。

付き合いって一年半ほど、周囲からもそう認識されているし、自分たちもそう認識しているはずだ。最初の頃は、それらしくじゃれあったりもして見せた。少なくとも、自分はそう努めたはずだと女は思う。だが、男の方はどうだったのだろう。未だにそれが分からないのだ。もちろん、立ち居振る舞いは交際相手に気を遣う普通の青年だ。だがそれは、徹底して外形だけだったようにも思う。男の本心は見えないままだった。

しかもそれは、本心を隠しているのではない。まるで無色透明であるかのように見えないのだ。何を欲しているのか、そんな根本のものですら見えない。

ベッドの上でもそうだった。男が見せるのは生理的欲求だけであり、男としての欲情はおろか、雄の本能すら見えてこない。上手い下手で言えば、間違いなく上手いだろう。それが比較できる程度には経験を積んできたつもりだ。それでも、こんな男は初めてだった。自分の生理的欲求は充足されるが、それ以外に全く得るものがないセック

ス。それは苦痛や退屈をもたらすものよりも、ずっと不気味だ。

そんな疑問を相手に問うた事もある。しかし、返ってくる答えはやはり無色透明だった。あの男には、何かがないのだ。

湯気で満たされたシャワールームに静寂が訪れた。軽く髪を拭いてバスタオルを体に巻きつける。ガウンを羽織り、ベッドの端に小さく腰をかけている男と目が合う。「飲むかい？」と差し出されたグラスを断ってベッドに滑り込んだ。

せめて自分から別れを切り出すかと思ったが、その気すらないようだ。番組制作のためにしばらく海外にロケに出る、そんな話をしただけだった。そしてそのまま、この関係を終わりにするのだろうか。

自分から別れを切り出しても、この男は何ら反応を示さないだろう。取り乱すでもなく、ほつとするのもなく、ただ淡々とその事実を受け止めるだけだ。だからもう、ただ眠る事にした。

もしかしたら、この男にとっては交際という事実すらなかったのかもしれない。結局、ルーイ・キリロフという男について分かったのは、その程度の事であった。別に未練を覚えるわけではない。ただ無性に腹立たしかった。この男にとって、自分は最初から無意味だったのだから。

世界で最も国際空港の使い勝手が悪い場所だとは聞いていた。だがまさか、都心部に出るまで電車を乗り継がなくてはならないとは思っていなかった。海上に浮かぶカンサイ中央空港から対岸の駅まで、雨に煙る窓の外を眺める。

スーツ姿が目立つのはビジネス客の多さだろう。ラフないでたちの自分たちは少々目立つようだ。といっても、今回の取材クルーは自分を含め3人しかいない。後は、現地の放送局との共同作業となる。編集その他諸々は、戻ってから本社で行うので、こちらではそのための素材を集めるだけだ。現地のスタッフについて歩けば、それで十分だと考えている。

電車天井にはスクリーンシートが吊るされており、そこには様々

なCMが映し出されていた。中吊りと呼ばれる広告手法は、この国独特のものであった。クルーの一人は、何かと現地の治安情勢を気にしているようだが、この広告を見ればそれが杞憂だという事はよく分かるだろう。

東アジアの公用語ではなく現地の言葉で書かれているため何が書いてあるかはよく分からないが、少なくともあの色使いや使われている写真に、緊迫した情勢は読み取れない。無国籍ないでたちの女性の写真は、ファッション雑誌か何かの広告であろう。

「やつぱ、宣伝してますね」

クルーが指差す先の広告はアルファベットで書かれていたために読む事ができた。ポップスハーモナイズサマーライブ、彼らが取材するイベントだ。

再構築戦争以前は国であったこの地域は、旧世紀において常にサブカルチャーの一角の最先端を走っていた。その伝統はCEに入ってからも続き、マンガ・アニメ・ゲーム、それらに付随する様々なメディアの複合体からなるソフトの一大集積地であり発信地であった。

再構築戦争による世界のブロック化、さらには連合とプラントとの二度に渡る大規模な戦争の中、世界の文化状況もブロック化してしまう。ナシヨナリスティックな表現や、遺伝子差異に基づく差別的な表現が、忌諱されるどころか推奨されるような事態まで生じた。

そんなメインカルチャーの停滞を他所に、サブカルチャーは強固にネットワークを保持し、独自の発展を続けていく。それは国家による抑圧や、遺伝子イデオロギーの強制に対して、カウンターカルチャーとして役割を果たしていた。サブカルチャーネットワークに連なる者は自分達を「オタク」と称し、それをCEにおけるコスモポリタンのあり方だとしている。

今回のイベントはその集大成であり、新たな出発点であると位置付けられていた。ユーラシアのテレビ局としても、極東の音楽祭だとして無視できるものではなかった。

「融和と共存・・・」

ルーイ・キリロフは窓に映る顔にそうつぶやいた。CEにおいて、

この言葉ほど消費された言葉もないだろう。しかしその消費に見合うだけの供給があったのだろうか。そして彼は考えるのをやめた。ない、そう考えれば何かをしなければならぬからだ。彼にとってそれは、ただ後ろめたさを感じさせるだけのものだから。

立て続けの地響きと、サイレンの音はほぼ同時だった。子供たちは防災用の簡易ヘルメットをすかさず机の下から取り出し、教師は避難誘導を開始する。校内放送は避難経路を4番と指示していた。

複数の避難経路を用意して、その都度使用するルートを変更するのは、別の地域で三年前に起きた大規模な被害からの教訓である。再び地響きが聞こえ、子供たちはその場にしゃがみこむ。窓ガラスが奇妙な振動をおこし、ヒビが入ったものもあつた。体育館の地下に設置されたシエルターに全校の生徒が収容される。

シエルターの中のモニターには、被害の状況が速報で流れていた。撃ち込まれたロケット弾は五発、内二発は不発ながらも住宅密集地のすぐそばに落下したという。爆発した三発はいずれも河川敷に落ちたため被害は軽微であつた。

しかし、橋の近くで爆発したものがあつたため、現在橋が通行止めになつてゐるといふ。教師たちは、残つた授業をどうするかを検討を始めた。シエルターの外から戻つてきた教師が状況を伝える。

「今日は多いですよ、見えただけでも五機。それも全部MSでした」「空爆だけじゃないという事か・・・ひとまずは大丈夫そうですね」腕時計を見た教師がそう言う。とりあえず昼休みまでシエルターで待機し、午後の授業は平常通り実施する事になつた。

この時代にあつて、飛び込んでくるのはパイプと簡単な火薬で作られた手製のロケット弾であり、ロケット弾攻撃が始まつて以来、この町での被害者は二年前に軽傷者が出ただけである。それでも、平均して二日に一回のペースでこの騒ぎとなれば、嫌がらせ以上の効果が生じる。

何より、この町が狙われる理由はなく、単に発射地点となつてゐる

地域とロケット弾の平均射程距離の関係からこの付近によく落ちてくるといっただけである。風の強い日はもつと風下の町に落ちるのだ。

行政は転居などを住民に勧めているのだが、余裕のある人たちは既に安全な場所に移り住んでいた。他に選択肢のない人ばかりがこの町に残る事になっている。

子供たちは慣れたもので、シエルターの中はだんだんと騒がしくなっていた。教師の注意も効果が薄くなっていく。だが、この子供たちが今の状況に平気であるということではない。地元の教育委員会の調査で、他地域の子供たちに比べて精神的に不安定な子供が多いという結果が出ている。ここに留まっている教師たちも同様であった。

出口のない今の状況は、精神をゆっくりと削っていくのだ。形にならない不安は、いつからかこの町を覆いつくし、そしていつまでも居座り続けている。モニターの速報は、先ほどから同じ事を伝え続けていた。

「繰り返します。新川付近に着弾したロケット弾の影響で、国道16号線は現在通行止めとなっています。この攻撃による死者、負傷者は確認されていません」

都市インフラは一朝一夕で作られるものではない。そこには歴史と呼べるだけの時間的蓄積が存在する。いや、歴史こそが都市を形作るのだ。都市の姿は、その都市の歴史そのものである。都市を見下ろせば、その歴史を理解する事ができ、歴史を理解する者は未来を見通す事ができる。

オープンしたての超高層ビルは、そんな都市を丸ごと見渡せるかのような高さを誇っている。最上階では、盛大なパーティーが執り行われていた。ガラスが高々と差し上げられる。

「我々はずいぶん、トウキョウ進出というスタートラインに立つ事ができました！」

正装の男女がにこやかに談笑する背景には、ガラス張りの壁越しに

トウキョウの夜景が煌いている。さらにその背後には、明治神宮から皇居に至る闇の壁が控えていた。夜の闇が正しくあるからこそ、トウキョウの夜景はいつそう妖しく輝くのだ。

パーティーの出席者は、ビジネス関係者だけではない。日本自治区からは、立法院院長、行政院長官、司法院最高判事と三院の長がそろって出席している。横須賀の司令官も地球連合軍の肩書きで列席し、さらには大西洋やユーラシアの大使、オーブの領事までいた。

裏を返せば、東アジア中央政府に連なる人物だけがここにいないのだ。だからこそ、中国の民族衣装のような服を着た老人は異彩を放っていた。チャイナドレスの美女を二人従わせ、ゆったりとした足取りで出席者に挨拶をして回る。

終始穏やかに話すその老人は、出席者へのお礼とビジネスの話題しからない。あくまでも、彼がオーナーを勤める会社の一つが、新たな支店を開設したに過ぎないといった態度である。酒を勧め、食事を勧め、ただパーティーを楽しむようにと話して回っていた。

「田舎料理ばかりで、お口に合わないかもしれません」

それが度の過ぎた謙遜である事は、次から次へと運ばれてくる料理を見れば一目瞭然である。だが、それをひけらかすような事は決してしない。シェフもボーイも質問に対してだけ、短い答えを返すだけである。だが、質問をした者は一様に驚嘆の声をあげていた。

しかも、ほんの少しでも冷めると料理は惜しげもなく下げられ、新たな料理が代わりに運ばれてくる。それも、出席者に対して可能な限り目立たないようにとの配慮が行き届いていた。ただ漫然とパーティーに来ていてだけの者がいれば、自分の皿の上に常に出来立ての料理が載せられていく事に気付きもしないだろう。

だが、今ここに集まっている者は全て、ただ呼ばれてパーティーに来ただけの者ではない。このビルは、モザイク都市・トウキョウに打ち込まれた楔なのだ。集まった人間の数だけの思惑があり、それらの織り成す打算がパーティー会場をくまなく覆っている。

老人の快活な笑い声だけが響く。

廃材とトタンで作られたトラックや、瓦礫をセメントで塗り固めただけの建物が並ぶ町。慈善団体のトラックの荷台では、拡声器を持った男が援助物資の配布開始を呼びかけていた。老若男女がトラックを取り囲み、奪い合うように物資が行き渡っていく。

トラックの運転席の男が、打ち上げられた花火を確認する。夕方とはいえまだ明るく、花火はポンポンと煙を上げるだけだ。

「やばい、近いぞ!!」

荷台の男は周りの人間に避難を呼びかける。そして取り囲む人達を押しよけるように車は動き始めた。その時にはすでに上空をいくつもの影が通り過ぎ、爆発音と黒い煙が立ち上る様子が確認された。

助手席の無線機が盛んに雑音をかき鳴らしている。男達は、必死になつてその中から意味のある言葉を拾い上げていく。煙の数はだんだんと増えていった。

「小松川線と京葉道路に沿って爆撃してるな」

「間か!? 毎度、学校も病院もお構いなしか・・・」

だが爆撃の意図がそんなところにあるのでは無い事は分かっている。分離ラインに沿って攻撃する事で、南への越境を阻害しようとしているのだ。地上部隊の侵攻があるのは明確であった。

今までの事から、地上部隊は6号線を上ってくる。そこに部隊を配備した後、南に向つてローラー作戦を展開するのだ。敵部隊が荒川を渡る前に、6号線より北の出来るだけ離れた場所まで出なくてはならない。爆撃で生じた穴や、瓦礫でふさがれた道を避けながらトラックは猛スピードで道を進む。住民も家財道具を乗せたりヤカーを曳きながら、北に向つて移動を始めていた。

こういった移動や避難は、もはや生活の一部になってしまっているかのようだ。ただ淡々と住民たちは歩いていく。

「東アジア軍部隊を荒川と隅田川の分岐地点で確認したとの情報です。そのまま荒川を下る模様」

「北に逃げた連中を堀切辺りで一網打尽にするつもりか・・・作戦続行！」

現在は使われなくなった地下鉄の構内に展開するのは、トウキョウ特別行政区保安局の特別強襲部隊。既に両国、錦糸町、押上、本所吾妻橋の四ヶ所に部隊の配置を完了していた。目的は潜伏するテロリストの拘束である。爆撃を行った軍部隊も、同様の目的を持っているが、やり方から利害まで見事なほどに一致していない。

6号線から南に軍部隊が展開するようであれば、そのまま撤収もありえた。軍と正面切ってぶつかるわけにもいかないのだ。だが軍がやり方を変えてきたため、彼らとしても動きやすくなった。ただ先ほどの爆撃によって、撤退ルートの一つである11号半蔵門線の安全性が低下した事は否めない。押上駅に待機している司令部隊から、探索ルートの変更が指示される。

非常灯すら消えた地下鉄の線路を伝令の隊員が走っていく。現在のNジャマー濃度は薄くなっているため無線の使える距離であるが、使用できる周波数の少なさから傍受される可能性が高いのだ。固い足音だけが、狭いトンネルの中に反響し続ける。

時間となり、地下鉄構内と地上を繋ぐ階段を閉ざっていた封印がガストーチで焼き切られる。濃紺の防弾服の一団が階段を駆け上っていく。

部隊集結を可能とする場所がないのが、都市における軍部隊運用の困難さである。特にMSという兵器が軍の主要兵器となった現状では、その困難さが顕在化する。都道318号線、通称環七通りと国道4号線が交差する地点で部隊は一旦停止していた。

作戦目的がテロリストの掃討である以上、MSキャリアーは後回しにされる。兵員輸送車と装輪装甲車が高架をくぐり4号線を南下していく。もう一つの部隊は既に荒川を下り上陸準備を整えているはずだ。MSキャリアーの一部を首都高速6号線にあげ、上陸部隊の支援に回らせる。

作戦自体は、4号線の荒川から隅田川までの区間を封鎖し、堀切に上陸させた部隊とともに挟み撃ちにする単純なものだ。一般住民で

あれば、その後に行われるローラー作戦の対象外となる6号線の北側の地域で足を止めるであろうが、テロリストであれば部隊が配備される6号線の近くに留まる事は無い。首都高速の高架を越え、北千住辺りまで向かうであろう。

「そうなれば、我々の思う壺・・・どうした!?!」

指揮車両の中で有線電話をとった隊長が声を荒げる。斥候の車両から、アンノウンの情報が入ったのだ。すかさず、壁面の地図が明かりを点す。

荒川にかかっている橋を渡り終えた斥候の車両が、営団地下鉄千代田線、国鉄常磐線、筑波急行線の三線の鉄橋の上にMSらしき一機の機影を発見したのだ。距離と暗さから機体の種類までは判別できないでいる。

このご時勢、テロリストがMSを所有するなど珍しくもなんともないが、少なくともこの地域におけるMS運用は今までなかった。

「だが・・・鉄道橋に陣取ったという事は、傭兵か何かだろう。MSで排除する」

交通網を維持するなどのため、道路橋や高架道路に対する攻撃は敵味方の関係なく禁止というのが不文律となっている。一方で、それ以外の橋であれば攻撃しても構わないのだ。アンノウンは4号線の道路橋を渡るこちらの部隊へは攻撃できないが、こちらは鉄道橋の上のアンノウンを攻撃できる。MSキャリアーの荷台が唸りを上げ、サードダガーがそのカメラを光らせる。

三機のサードダガーがスラスタを吹かすと、その突風が街路樹を揺らし付近のビルのガラスはビリビリと震える。首都高速中央環状線を一気に飛び越えたサードダガーは、落下速度を調整しながらライフルを構える。

アンノウンの頭部デザインは、俗にガンダムと呼ばれる形状であった。先頭の機体が放ったビームはそのままアンノウンを直撃する。しかしパイロットが見た物は、爆発するMSの姿ではなかった。

「ビームシールド・・・!? いや、色がない・・・なら何だ!?!」

鉄橋のトラスの上に直立するアンノウンは、顔を上げる。直撃した

はずのビームは、何かに弾かれて川に着弾していた。水しぶきと水蒸気があたりに立ちこめ、視界が一気に失われる。

直後に聞こえた爆発音を僚機のものだと判断できるか否かが生死を分けた。すかさずスラスターを吹かしてその場を離脱したサードダガーのパイロットは、さらにもう一つの爆発音を聞く。だが、ビームの発射音もサーベルの発振音も聞こえなかった。

夜の闇を背景にして、アンノウンはそこから少し離れた場所を走っている東武伊勢崎線の鉄橋に跳び移った。スラスターの噴流炎は見えず、熱紋センサーは何も捉えなかった。

そのまま姿をくらませたアンノウンに、サードダガーのパイロットは息をついた。そして。機体の交戦記録のコピーをマイクロメモリーにコピーすると、それをアンダーウェアのポケットにしまいこむ。

勝手知りたる人の家とはよく言った物である。旧世紀の町並みが基本となっている以上、相手側にも相当正確な地図があると見て間違いない。あえて爆撃されている方向に近づいて、敵をやり過ごそうとした作戦が裏目に出たようだ。

爆撃の間隙をぬって首都高速7号小松川線の南側へと越境するつもりだったが、行政区保安局が入り込んでいるとは予想外だった。軍の作戦行動中に保安局が動くなど、これまでは一度もなかった。

地下鉄を利用して侵入してきたのであれば、今回の敵の探索範囲は天神川の西側だろう。それが分かっていたら、北十間川をそのまま旧中川まで移動してそこから南に下ればよかった。

「今さら愚痴ってもどうしようもないだろう！ 腹くくれ！」

そうやって腹をくくった奴の中で、生き残った人間を見た事が無い。おそらくボートによる移動は、敵も重点的に監視しているはずだ。早く川から上がって、東側に逃げなくてはならない。三ツ目通りで南に向った仲間は、軒並み捕まっている事だろう。それだけに、自分たちまで捕まる訳には行かないのだ。

だがそんな事を考えている時間こそが無駄であった。蔵前通りの橋にはすでに、いくつもの懐中電灯らしき灯りがチラついている。オールがたてる水音すらうるさく感じる。もはやゴムボートの上につつぶして、祈る以外に方法がない。

警告が聞こえた。連合公用語でもなければ東アジアの公用語でもない、日本語での警告。追う側も追われる側も同じ言葉を話す人間だ。三度の警告の直後に発砲音が聞こえる。東アジア軍の使う自動小銃とは異なる音が、別組織である事を明確に示している。弾丸が水を切る音と悲鳴、そしてゴムボートから空気の抜ける音。前を進んでいたボートが水に沈んでいく。

弾丸から身を守ろうと、水に飛び込もうとした男を押し留めた。水に浮いた死体からうつすらと煙が上がっている。おそらく、断続的に高圧電流を流しているのだ。緩やかに流れる川の流れに乗ったゴムボートは、次々と標的になっていく。

「いいから白旗揚げろよー！」

橋の上から機関拳銃を撃ち下ろしている隊員が叫ぶように言う。彼らの作戦は、殺害ではなく拘束なのだ。同じように橋の上にいる隊員同士で嫌な目配せが飛ぶ。不意にヘルメットの無線機が鳴った。

作戦中の無線使用は原則禁止である。何らかの緊急事態だ。雑音の中から聞こえるのは撤退命令と交錯する銃撃音。有線電話を背負った隊員が、慌てて受話器を取る。

「両国の部隊に襲撃!？」

どの部隊からも同じような言葉が返ってくる。だが、その驚きと動揺を抑えて部隊を撤退させなくてはならない。襲撃者は自分たちと同じく地下鉄構内を使って移動してきた。両国の部隊を全滅させれば、都営大江戸線で蔵前まで移動しそこから浅草線でここ押上を目指すだろう。

行政府保安局特殊急襲部隊を全滅に追いやる敵というものを想像したくは無いが、通信は明らかにそれを伝えていた。

「本所吾妻橋の部隊にトラップを仕掛けさせる。最悪、崩落させても構わん」

短く指示を伝えた隊員は、自分の部隊をまとめめる。隅田川を渡れば、とりあえずの安全は確保されるはずだ。だが、銀座線を使われ浅草駅で待ち伏せされる危険性があるため、撤収ルートは東武伊勢崎線鉄橋ではなく、国道6号線を使用する事にした。ルートを確認させて、隊員を偵察に向わせる。

夜中断続的に続いていた爆撃の音は、明け方には聞こえなくなつた。幾筋もの煙がうつすらと立ち上つているのが見える。だがそれも分離壁の向こう側、緩衝地帯を越えた先の出来事に過ぎない。市井の生活には、夜中の騒音で安眠を妨害されるのが最大の被害である。

そのせいで朝から機嫌の悪い妻と子供を避けるように、いつもより早く家を出た男は、真つ直ぐ会社に向わず、とある雑居ビルに足を向けた。既に仲間たちが集まり、地図を広げて検討を開始している。

「小松川公園にたどり着いたのは33名か・・・恩賜公園の方は？」
「4人、ボート一艘だけだ」

収容した人間を匿う場所は既に選定が済んでおり、今は空爆によって失われたトンネルの把握と再建の計画が進められている。おそらく、民間業者は今朝からトンネルの掘削作業を開始しているだろう。組織というのは、こういう場面で意思決定の遅さが現れるものだ。

もともと、民間業者のトンネルが1キロ弱の長さを必要とするのに対して、彼らは恩賜公園北端から200メートルほどの長さのトンネルを作ればいいのだ。修復作業もそれだけ早く終わるといふ事である。幸いにも水路へのダメージはなかったようなので、すぐにでも作業に取り掛かれるとのことだった。

しかしそれ以上に、集められたいくつかの奇妙な情報の分析の方が急務だった。一つは、堀切の周辺で起こったという謎の戦闘、もう一つは地下鉄構内への侵入者である。そのうち後者については、彼らの仲間を追っていた保安局であることが判明しているが、どうやらそれ以外にも侵入者がいるらしいとのことだった。

恩賜公園にたどり着いた者の一人は、保安局の人間が急に撤退を開

始したと証言している。謎の侵入者とそれが何か関係しているとも考えられる。

堀切周辺での戦闘は、北に脱出しようとしたメンバーを拘束しようとしていた東アジア軍に対して、何者かが攻撃を仕掛けたらしいというのだ。未確認ではあるが荒川から上陸しようとした東アジア軍部隊が、全滅に近い打撃を受けたという話だ。首都高速6号向島線の上では破壊されたMSが確認されているという。

何か、大きな動きのようなものが、彼らの知らない部分で動いているかのようだ。

「今後はより慎重に動いた方がいいな。分からない事が多すぎる」
彼らの住んでいるこの場所が、いつまでも安全であると保証されているわけではない。再構築戦争によって形作られたCEという時代の政治的な不安定さの上に立脚した土地であるからこそその安全は、そもそもが不安定なのだ。

そして、それをどうやって安定させるかというビジョンの差異が、今のトウキョウの状況を混乱させている。昨晚の空爆は、その一端に過ぎない。

だが、ペデイオニーテ動乱が連合やオーブ、プラントの思惑通りに推移したという事は、今後も彼らの思惑の中で世界は安定化を目指すだろうという事だ。その時、この街はどのような形になる事を求められるのか。

朝のニュースは、空爆の情報に軽く触れる程度であった。

太平洋は、その名にたがわぬ海であった。360度のパノラマが全て水平線であり、波もない海面がただ太陽の光に輝いている。その中を航海する船など、景色の中の染みでしかない。例えそれが、世界でも有数の大型船であったとしてもだ。

大洋州連邦の海運会社が所有する客船・グレートバリアリーフ号。旧世紀には存在したという巨大な珊瑚礁の名前が冠された豪華客船だ。客船の中では、排水量こそ世界第三位だが、収容人数や各種の設

備は間違いなくナンバーワンと呼べる船である。イオウジマ沖合いを航行中のその船は、一路日本列島を目指していた。

「艦長、オオサカへは寄港するのですか？」

「いや、このままヨコハマに向う」

そして監視員からの報告に、発着用甲板の準備を命じた。前大戦で世界中に打ち込まれたNジャマー発生装置は、電源である核電池が切れない限りNジャマーを撒布し続ける。一説には数百年などと言われているが、機械の信頼性を含めて、作ったプラントですら正確な事は分からないらしい。この頼りないレーダーとも付き合い続けなくてはならないという事だ。

艦長は双眼鏡を覗いた。青い空の中に僅かな黒い点を見つめる。ゆっくりと姿を露わにするのは小型の飛行機のようなものであった。

船の上を旋回したそれは、四肢を広げて機体のバランスを制御すると、フワリと発着用甲板に降り立った。再び変形してハッチを下に降ろし、乗っていた者達が降りてくる。可変MS・ドウル、サブフライトシステムに可変機能を持たせ、使い捨てでなく戦闘支援を可能とするように開発された機体だ。

しかしMS単独での飛行を可能とさせるようなパックパックの実用化とともに、その役割は薄れてしまう。それでもMS二機を運搬できる余剰推力は、この機体に小型輸送機としての役割を与える事となった。今では大洋州をはじめとする民間にも払い下げられ、垂直離着陸可能な高速輸送機として活躍している。

だが降りてきたのはそろって、ザフトの制服を着ている人間である。色こそ赤では無いが、裾の長いタイプの制服で、一般将兵とは異なる役割を持った者達だと分かった。青い制服は、行政官庁からザフトに出向してきた者だ。

「遠路、ご苦勞様です」

「こちらこそ・・・と言いたい所ですが、我々も急遽招聘された者です。詳しい話は船についてからだ」と

最も折り目正しい敬礼をしていた年の若い男性が挨拶とともに言う。キリル・ローレンスと名乗ったその男性は、先日までバイコヌー

ルの出張所勤務であった。現在建設中の物資専用マストライバーによる、プラント・地球間交易の問題点洗い出しを仕事としていた。

それがいきなり豪華客船である。おそらく他の者も、同じような戸惑いを覚えている事だろう。

真っ直ぐな瞳とはこういう物を指す言葉なのだろう。まだあどけなさすら消えないような顔だというのに、その瞳は年齢など無関係に力強かった。一体、誰に似たというのだろう。少なくとも、彼女ではない。

だからといって、自分に似たのだろうか。そうも思えなかった。ただ、自分の息子を名乗って現れたこの青年の言葉が嘘だとは思っていない。息子に、自分と同じ名前を付けた彼女の真意など量りかねるが、彼はそれだけを頼りに自分のもとにたどり着いたのだ。

もつとも、彼が生まれる以前に彼女の母親とは別れている。それも幾重もの裏切りとともに捨てられたのだ。未だに冬になると疼く傷は、彼女の事を許そうとはしないだろう。

顔も知らない父親のもとを尋ねたこの青年は、ただ「自分のルーツを知りたかった」とだけ理由を述べた。それが何を意味するのかはよく分からないが、今のザフトに進んで地球勤務を申し出る者は少ないはずだ。彼なりに深く思うところがあつての行動なのだろう。

門前払いにせず彼を招き入れたのは、そんな事を感じたからだ。

初対面の男同士、当たり障りのないことをポツポツと話しながら、彼を観察する。立ち居振る舞いも話し方も、堅苦しいほどに真面目であった。正直、本当に彼女が育てたのだろうかと思う。

有能であったが、どこまでも冷徹に損得勘定のできる女も、子育てはまともだったのかも知れない。そんな話題を振ってみると、彼はただ一言「いいえ」とだけ答えた。彼の瞳に影が射すのを見て、それ以上その話題に深入りしない事にする。彼が父親に会いに来た理由が、何となく分かった。

奥の部屋から妻が顔を出した。今日は少し調子がいいようだ。来

客の姿に何かしようとする彼女を押し留めて、ベッドに横たわらせる。居間に戻ると、彼がコートを持って立っていた。

形ばかりに引き止める言葉を口にするが、彼は丁寧にそれを断った。玄関先で妻の体をいたわる言葉を残して、彼は帰っていく。その後姿は、真つ直ぐに背筋を伸ばしているというのに、どこか頼りなく漂泊しているようだ。彼は二日後、バイコヌールを発つと言っていた。

きつと、息子と会うのはこれが最初で最後だろう。ここは、キリル・ローレンスという青年を迎え入れる場所ではない。

第一話 ポップスハーモナイズサマーライブ

見渡す限りの人の頭。オオサカの都心部から少し離れた公園、広大なはずの記念公園が人で埋め尽くされていた。おそらく、主催者の側の集客予想を大きく上回っているのだろう。この手のイベント開催に慣れていないという事も原因の一つかもしれない。現地スタッフとはぐれないようにするだけで一苦労だ。

会場の様子をリポートするために出てきたが、これではリポートも何もあったものではない。取材関係者としてメインステージのイベントなどの映像は押さえられるが、それ以外の取材は困難であった。来場者にインタビューを行おうなどという発想すら出てこない。

メインステージ以外にも、会場のあちこちにサブステージが設けられ、また通路や広場にはパフォーマンス用のスペースが設けられている。種々雑多な音楽やダンスパフォーマンスが繰り広げられ、そのたびに観客が足を止めるため、スムーズに歩く事も難しかった。

「あかん、これ出直したほうがええわ・・・キリロフさん、どないします?」

「僕はもう少し歩いてみます。ハンディでも、修正かければ使える映像もありますし」

ルーイも現地の言葉、日本語の聞き取りなら出来る。だが、独特のイントネーションはやはり聞きづらい。連合の公用語で答えると、現地スタッフは後で連絡すると言って人ごみの中に分け入って行った。

音楽だけではなく、映画などの映像コンテンツやファッション、絵画や彫刻のようなアート作品までもが寄せ集められた、無秩序で混沌としたイベント。それも、いわゆる大家や大御所、トップスターが集まるのではない。それぞれの世界で、ニッチを開拓したもののやカルト的人気を集めるもの、マニアックで評価の対象となるのかどうかの評価すらされていないようなクリエイターと作品が世界中から集まっているのだ。

ポップスハーモナイズサマーライブ。

サブカルチャーをもってカウンターとし、オタクネットワークのコ

スモポリタンのうねりでメインカルチャーを揺さぶり飲み込み乗り越える。そんな大仰で意味不明なお題目も、この人ごみを見れば理屈抜きで納得してしまいそうだ。

何より、集まっている人の種類が多い。極東の島国のイベントに、まさに世界中の人間が集まっているかのようだ。人種、民族、国家、遺伝子、それらの枠組みはここには無いのであろうか。

『コスプレとは共通理解に基づく共同体的ペルソナであり、それを身につける物は即座にその共同体の一員として、承認され抱擁される』昨日行われていたファッションのイベントで、新進気鋭と呼ばれているデザイナーの一人がそんな事を言っていた。ルイーはただ、その言葉を疑問を持って聞いた。承認され抱擁されるのは、ペルソナであってそれを身につけている者のパーソナルではないのではないかと。

周囲の人達が時計を気にしだしている。そろそろ時間であった。このイベントの目玉、プラントミュージックシーンを揺るがせている新人アイドルの到着時間だ。ライブは二日後だが、今日はステージでトークイベントが行われるはずだった。

ルイーは、人に押されるようにメインステージの方に流されている。少なくともこの人の多さは、十分に放送に値する映像だ。

近くにある地方空港からはヘリでの移動となった。その空港がMSの発着許可を出さなかった事に、キリルはほっとしていた。もし許可が下りていたら、間違いなく自分がそのパイロットとしてアイドルを乗せなくてはならなかっただろう。

バイコヌールから特命を受けて、豪華客船に派遣されたと思ったら、命じられた任務はアイドルの護衛であった。確かにペディオニーテ動乱後、プラント・連合間の緊張緩和が劇的に進んでいるとはいえ、コーディネーターに対する排斥運動やテロが無くなったわけではない。

プラントは相変わらず積極的な移民の受け入れを表明しているし、連合加盟国は様々な政策を組み合わせてコーディネーターをプラントに送り出そうとしている。むしろ分断が進んでいると見る事もできるのだ。緊張緩和など、それまでの比較対象が最悪以下だったからに過ぎない。

だが、そうであればわざわざ自分を呼んだりするであろうか。護衛ならザフトのしかるべき部署がやればいい。それをわざわざ別の者にやらせるという事は、何か別の目的があると言うことだ。

「あれが太陽の塔ね」

前の席に座っているアイドルが、無邪気に指を差す。キリルも窓の外を見た。

会場となつている公園にそそり立つ奇妙な物。今行われている奇妙なイベントに相応しいコメントだった。旧世紀に作られた物だというが、これは永遠にアヴウングャルドでいられるだろう。

臨時のヘリポートが近くの野球場に作られている。ヘリのローターが巻き起こす風の中、主催者側のスタッフや日本自治区の行政機関職員、プラント当局者がゾロゾロとやってきた。外の道路にはパトカーがずらりと並び、それなりの警備体制が敷かれているようだ。

実はすぐ北側にあるゴルフ場をザフトは貸し切っており、そこにMSを隠しパイロットを待機させていた。キリルはそちらとの連絡のため、一人で別の車に乗る。

「何も無ければそれでいいや」

クラブハウスで待機していた隊長が、事も無げにそういう。テレビではイベントの様子が生中継され、パイロット達がアイドルの登場をいまや遅しと待っている。その弛緩した様子に、キリルは文句を言う。

「こうやって生中継を見ていれば、お前さんがたから連絡を受けるより早く動ける」

キリルは一度強く相手を睨みつけ、ゴルフ場を後にした。膝を付いた姿勢のグレブが三機、木立の中に擬装ネットを被せられている。気を取り直してアクセルを踏む。地上のザフトの士気が低いのは今に

始まった事ではない。

現在のザフトは地上軍を縮小し、カーペンタリアとジブラルタルに機能を集中させている。軍事費の縮小や、連合との関係改善による物資の安定供給の目途がたった事などがその要因であるが、結果としてザフト地上軍は閑職になってしまったのだ。そのため地上への派遣はイコール左遷であり、一部の高級将校を除いては、兵士の士気は一様に低い。

キリルにとって、そんな現状はどうにも耐え難いものだった。

拍手と歓声がどよめき、まるで地響きのように聞こえる。ステージ上に現れたアイドルへの声援が、津波のように聞こえてきた。スタツフがせわしなく走り回るステージの裏で、キリルは同僚とともに周囲を警戒する。だがこの熱狂ともいえる人々の姿に、彼は自分の興味の範囲の狭さを思い知る気分だった。

プラントの音楽シーンはラクス・クラインの絶対視、正確に言えばミリア・キャンベルという虚像の崩壊に伴うラクス・クラインという偶像の確立によって、非常に硬直化したものとなっていた。プラントで供されるべき音楽とは、ラクス・クラインが歌った物と同じ方向性の物だけであり、それ以外の音楽は極端な話ブルークコスモスやザラ派、デュランダル派のような遺伝子原理主義者の音楽だと見なされるようになっていた。

今ステージの上で手を振っているアイドルが歌うのは、キリルからしてみれば稚拙なラブソングに過ぎない。プラントでの当初の評価はそれ以下であり、そのステージパフォーマンスがミリア・キャンベル的であるとして批評家からのバッシングを受けたりもしていた。

そのため彼女の歌は、少数のファンが作った複数の音楽配信サイトからの発信が主であった。そのサイトの管理人の一人がカーペンタリア勤務となった際、地上での音楽配信も始めたところ、爆発的な反響を得たのだ。その理由は後世の音楽史家なり、風俗研究家に任せね

ばならないとして、地上での爆発的な人気がプラントに逆輸入される形となり、彼女は今プラント音楽シーンの台風の目となっている。

そしてそのような彼女のあり方こそが、このイベントの理念に合致するのだろう。メインカルチャーを揺さぶるカウンターとしてのサブカルチャー。

「だが、これが・・・カルチャーか？」

ここに来るまでの間に叩き込んだ資料の中身と、この目の前で繰り広げられる熱狂の間には何らかの落差がある。少なくともここに集まっている連中に、カルチャーの現状に対する危機意識や、サブカルチャーの持つ可能性への期待感のような物は全く感じられない。数が多いだけで、そのエネルギーを外部に発信する気がないような気がするのだ。

もちろん、こういうイベントを企画する側にはそれなりの考えもあるのだろう。だが大多数の人間は、その考えを共有はしていない。ただ一時の祝祭として、このイベントは消費されてしまっただろう。

確かに、これをきっかけにプラントと地球での人的交流を活性化させようという機運が盛り上がるかもしれない。政治経済的な要請ではなく文化面の交流が、相互理解の基盤となる事は十分に考えられる。そういう意味では、このイベントを無駄だとは思わない。

「だが融和も共存も、ここからは生まれない」

アイドルに向けられる野太い声援に、キリルは確信めいたものを感じていた。

人の流れに押されながらも、巧みにその本流ではなく支流の方に体を流していく。メインステージ方向への人の流れが一段落したところ、ルーイはようやく人ごみの中から脱出していった。

この人の流れを崩し、将棋倒しのような事故を起こさないでいる警備員や誘導スタッフはたいしたものだ。自動販売機の周りには、疲れた顔の人々がほっと一息入れている。自分も同じ顔をしているだろ

うと、硬貨を入れながら思った。

遠くから聞こえてくる唸り声は、おそらくメインステージの歓声だ。缶の炭酸飲料に口をつけながら、彼はとりあえず報道関係者用のスタツフルームに戻ろうと思う。缶をゴミ箱に捨てるとき、ベンチに腰を下ろしてしきりに足をさすっている女性の姿が眼に入った。声を掛けてみたのは、彼女が日本語を話す人に見えなかったからだ。「ちよつと、くじいてしまったみたいで」

帰ってきたのは連合の公用語。だが、パツと見ただけではこの人間か分かりにくい。

「歩けますか？ なんなら人を・・・」

「いえ、大丈夫です」

外国人二人の会話に居心地が悪くなったのか、同じベンチに座っていた日本人が席を立つ。この辺りの排他性は旧世紀以来の伝統らしい。ルイーは彼女の横に座って身分を明かす。そして、インタビュを申し込んだ。

快く応じてくれた彼女は、トウキョウから職場の同僚とともにこのイベントを見に来たのだと言う。日本へは、仕事のために来ているという話だった。

「何か、目当てのイベントが？」

「タダ券をもらったというのが最大の理由ですけど。でも歌は好きですし、自分でも歌ったりするんですよ」

そしてこのイベントの理念に興味を引かれたのだと付け加えた。

「サブカルチャーでメインカルチャーを揺るがす？」

「難しい言葉はよく分からないけど・・・歌で世界を変えてみようって、事でしょう」

変わりますか、というルイーの問いかけに、彼女は小さく笑った。そして、ナチュラルとコーディネーターが長い間互いに殺し合っても変わらなかったこの世界を、歌が変えてしまえるのであれば、それはどんな奇跡よりも素敵な事だろうと言う。それを素敵だと思える人は、きつと素敵な人に違いない、そう言っただけ彼女は視線を空に向けた。

ルーイもつられるように空を見る。明るくとも厳しさのない日差しが、高く澄んだ空を満たしている。

不意に彼女が立ち上がって手を振った。どうやら一緒に来ていたという同僚らしい。ルーイは礼を言っただけで立ち上がる。今のインタビューを番組で使わせてもらうかもしれないと言い添えて、彼はそこを後にした。

「素敵な事・・・か」

何か、とてもいい言葉を聞いたような気がする。立ち止まって振り返るが、もはや彼女の姿は見えなくなっていた。

宿泊先は、現地テレビ局の社員寮だった。あの人出である、都心部はおろか相当遠くのホテルまで軒並み満室であろう。ベッドではなく、畳という植物性の床材を敷き詰めた部屋に木綿のマットレスが敷き詰められている。一緒に来ていたディレクターは、ビール一本を空けると早々に寝てしまっていた。

テレビの配線を終わると、ルーイは今日の分の映像のチェックをしておく。本社に戻ってから行えばいいのだが、一通り目を通しておきたい。よく撮れているとはいいがたいが、ハンデイの方も使えるレベルには収まっているようだ。

しかし、これだけの人を集められるイベントを企画したのは、いったいどんな集団なのだろうか。ふと、そんな事が気になった。資料には、東アジアの有名企業が協賛として名を連ねているが、こういうところは最後の最後に広告として名前を載せるだけだろう。

ぬるくなったビールに口をつけながら、ルーイはもう一度資料を読み返す。プラントから歌手を呼ぶにしても、それなりのパイプを有していなければ不可能だろう。いまだにプラントから地球に降りるには、ザフトの許可がなくてはならないのだ。

「まあ、書類手続きだけだとは言いがな・・・」

Nジャマーによる電波障害によって、無線によるマスメディアは退

潮し、代わりに有線によるメディアが台頭した。それは旧来のテレビ局のように巨大資本が一元的に発信する情報ではなく、個々人がパーソナルに情報を発信するという形のメディアであった。そしてネットワークがそのパーソナルな情報を繋ぎ、個人の限界を突破させる。

メディアは巨大資本による寡占から解放され、同時に孤立し遊離する個人の無責任な情報の発信は自律性を持つネットワークの中で抑制される。少なくともそれが理念であった。

しかし実際は、少数の匿名者が多数を装う無責任のネットワークが拡大し、巨大資本はその資金力によって常にネットメディアに情報を供給し続けた。

そんな歴史を勘案すれば、このイベントを企画したハーモナイズコミュニティなる集団も、どこぞのメディア企業が資金提供を行っている組織だと勘ぐられても当然だ。ルーイは自分の頭の中を探す。

その手の噂に心当たりがないのだ。ハーモナイズコミュニティはもともと、プラントの歌手を地球で紹介するための個人サイトが発祥だと言う話は聞いた事があるし、それ自体は裏付けもある。そしてこの企画の発端は、プラントの歌手を地球に呼んでライブを行うという、そのサイトの計画にあったという。

やがて、そのサイトを中心に様々なサブカルチャー集団が計画を持ち寄り、この企画が進んでいったというのが、もっぱらの噂だ。もし、どこかの企業が資金提供を行うという話があれば、当然その情報は噂レベルであっても流出するはずだ。

「・・・経済部の仕事だな」

ルーイはテレビを消し、部屋の明かりを落とす。彼の所属する文化部の仕事は、このイベントが現代文化に与える影響のあるなしを論じる事であって、この企画の収支報告書を分析する事ではない。

明日は、プラントから来たアイドルのライブを取材しなければならないのだ。人の数は今日よりも断然多くなるであろう。ゆっくり休んでおかなければ身が持たない。

アイドルのために最上層部の三フロアーが貸し切られたホテル。本当に必要なかどうか分からない関係者が、大きな顔をしてうろついている。ようやく任務から解放され、シャワーでも浴びようと思つたキリルに内線がかかつてきた。警備の責任者ではなく、ザフト外交部から来た責任者からの呼び出しである。

小さな会議室に集められた者は彼と同様に怪訝な顔を浮かべているが、全員が豪華客船からの派遣組である事が分かると、その表情が薄れる。アイドルの護衛という任務は何らかの目くらましだったのだろうか。

程なくして現れた責任者は、コピーしたてのまだ温かい紙を配る。簡単な資料であるが、会議後焼却処分の判が押されていた。席について一息入れると、口を開いた。

「君達にはトウキョウに向つてもらおう」

レコード会社の社員という肩書きでハーモナイズコミュニティに接触し、その実態を調査する事が任務の一つであった。今後のプラント・地球間の文化交流を促進させるため、その交渉相手としてこのイベントを企画した組織がどのようなものかを調査する事が目的とされている。

しかしそれだけが目的であれば、わざわざザフトの制服を着る彼らと呼ぶ必要は無い。彼らの本来の任務は、東アジア共和国日本自治区とトウキョウ特別行政区の動静を探る事にあつた。全員の顔が引き締まる。出席者の一人が質問をする。

「ザフトは戦略目標をどう定めているのでしょうか」

「新たな橋頭堡の確保。君達には、それが可能かどうかの調査を命じる」

現在、プラントが持つ連合とのパイプは細く、地球各地の情報を迅速に正確に収集できているとは言い難い。しかもそのパイプは大洋州のみに依存しているのが実態だ。ジブラルタルのあるユーラシア、大戦時から特殊な関係にあつたオーブ、その両国とも「戦略的パートナー」以上の関係ではない。得られる情報は限定的なものだ。

デュランダル政権下で、中央アジアから小アジアを経て中東までの地域に広がった親プラントの流れも、連合が主導しユーラシアが後押しする自治独立の動きの中で雲散霧消した。南米の親プラント勢力も、今や過激派としてその名残を残すのみである。

だからこそ、プラントは新たな足がかりを欲していた。プラントと連合の緊張緩和などは政治的駆け引きの結果であって、将来にわたる保証などないのだ。不測の事態を察知するためにも、またそれに備えるためにもザフトは地球に強固な拠点を必要とする。

「情勢は不透明だと聞きますが」
「それも調査の対象だ」

キリルの問いに、責任者は苦々しく答えた。まさに、手探り状態からのスタートと言う事になる。参加者の一人が、プラント外務省との連携について質問するが、それに対しても十分な回答がなかった。

肩こそすくめないが、全員が顔を見合わせる。どうやら、レコード会社社員という肩書きは、味方をも欺くためのものであるらしい。

プラントと東アジアとは、現在でも微妙な関係が続いている。その国内での諜報活動に、本国からどれほどのバックアップがあるのか。上の方の縄張り争いだけでも解決しておいてもらいたいものだった。

アイドルの護衛の方がマシな仕事かもしれない、キリルは手渡された鉄道の切符を眺めながらそんな事を思った。

車内アナウンスが流れた。アイマスクを外して窓の外を見ると、美しい独立峰が微かな煙を吐き出しながら悠然とそびえているのが見える。西暦からCEに切り替わる頃に、小規模な噴火を起こしたこの山は今も時折噴煙を上げるのだ。プラントでは決して見る事のできない風景の一つであろう。

オオサカを出て二時間あまり、キリルは腕時計を確認する。目的地であるトウキョウの二つ手前の駅で降りる事になっていた。彼らの活動拠点に立ち寄り、今後の方針を決めなくてはならない。

隣の席の同僚が車内販売のワゴンを止め、ビールとつまみを注文した。冷やかしの言葉を、きつちりと連合の公用語で切り返した社内販売員に感心しながら、キリルは同僚を注意する。

「固いなあ・・・これは勤務時間外だぜ」

缶のタブを引き上げながら、同僚は眉をひそめた。そしてスモークチーズの包みをキリルに差し出す。きっぱりとそれを断った彼に、同僚は大きなため息をつく。それではスパイは勤まらないぞという言葉が無視し、代わりにヘッドホンからの音漏れにも注意をしておいた。

しぶしぶとヘッドホンをしまう同僚に、キリルは聞こえないように舌打ちをする。自分よりもいくつか年上のはずだが、言動は全くと言っていいほど子供だ。酒を飲む分、たちが悪い。技術畑の人間で、アカデミーから軍需企業のキトラ社に就職した後にザフトに招聘されたという経歴の持ち主だった。有能ではあるのだろう、ただ自分とはウマの合うタイプではない、キリルはそう判断していた。

用意された指定席がたまたま隣り合う席だったというだけであるが、初っ端から余計なストレスを背負わされてしまった。キリルはアイマスクを降ろし、僅かな時間だけでも眠ろうとする。

「何でそんなに気張ってんだ」

そんな事を言う同僚には、逆の問いかけをしたい気分だった。何故、そんなに弛緩していられるのかと。

あと十年ちよつともすれば、CEは一世紀を迎えることになる。この百年の間に、人は種の限界を突破し、重力のくびきを脱し、その可能性を地球規模から宇宙規模へと広げたはずであった。そして優れた人間が計画し指導する社会で、人類はより力強く発展していくはずであった。

コーディネーターとは、まさにそのために生まれた種のはずだ。科学者の好奇心の結果でも、医学研究の延長線でもない、確固たる理想とともに生まれた種のはずだ。

しかし現実は違った。コーディネーターの存在は旧世紀同様の人種差別を引き起こし、プラントの存在は旧世紀同様の国家間対立を生

み出したに過ぎなかった。それも地球規模ではなく宇宙規模でだ。

プラントは旧世紀の遺物ともいえる議会制民主主義を導入し、大衆の無責任を政治的決定となすシステムに飲み込まれた。そして旧世紀同様のパワーポリティクスを巧みにこなす事こそが政治となり、社会の理念も国家のビジョンも「現実」という言葉の前に捨て去られる事となる。

そこにあるのは宇宙に浮かぶただの国であった。コーデイナーターであれば、そんな現状に忸怩たる思いを抱いて当然であろう。少なくとも、キリルはそう考えていた。アナウンスが、降りる駅名を告げる。

『恋より早く駆け出した 私の鼓動はもう止まらない

足踏みしている私の恋を 置き去りにして加速中

踏み出せ私の恋心 あのドキドキを捉まえて

飛び出せ私の恋心 あのトキメキを抱き締めて』

会場の熱気はまさに最高潮であった。観客の声援が空気をどこまでもどよめかせている。観客がアイドルともにジャンプした時には、間違いなく地面が揺れた。その喧騒は報道関係者の詰所にまで聞こえてくる。

もつともライブの最中にここに詰めているのは、機械関係の技術者を除けばルーイくらいなものである。もともとこの手に歌に興味はなかったし、あの観客に対して取材できる事などあるわけもなかった。

モニターに映るアイドルの映像を眺めながら、ルーイは紙コップを傾ける。ただのアイドルコンサートにしては、ずいぶんと大げさな舞台設定だと思った。この歌に、メインカルチャーを揺るがす力があるとも思えなかったし、そもそもメインカルチャーなるものがどんなものかもよく分からない。この企画の主催者には、そういった点を聞いてみたいところだった。

「すみませんね、一回モニター切りますよ」

工具を腰にぶら下げた初老の男性が、配電盤の裏に回りながら言う。ルーイは構わないと言って詰所を出ようとする。ふと見ると、テーブルの上の電話が鳴っている事に気付いた。ベルの音が小さくほとんど聞こえないのだ。

「もしもし」

「近畿3チャンネルの者です、お世話になっております」

共同取材を行っている現地のテレビ局からの電話だった。話を聞くと、どうやら用があるのは自分達らしい。ディレクターは会場に行っているのとおりあえず話を聞く。ユーラシアの本社からの電話が回された。彼の所属する文化部ではなく、政治部の部長からの電話だ。

部長はニュースにアクセスできるかどうかを聞いた。モニターが映るようになったので、会場の様子ではなく外部の放送を受信するようにチャンネルを代えた。昼間の情報番組の画面に速報のテロップが流れる。日本語のテロップなので、瞬時には内容を把握できない。部長が代わりに内容を伝えてくれる。

トウキョウでテロと見られる大規模な爆発事件が起こったのだ。そして部長は、その事件の取材を命じると言う。

「待って下さい、僕は・・・」

「文化部の方には了解を取ってある」

有無を言わせない調子には理由があった。日本自治区内の特別行政区であるトウキョウは、自治政府ではなく東アジア共和国の中央政府が直接行政官等を派遣して統治を行っている。そして、特別行政区内への外国人の立ち入りは厳しく制限されているのだ。ましてやテロの直後である、国外メディアによる報道や取材が簡単に許可されるわけがない。

しかしルーイ達は現在、報道の査証と在留資格を持っている。それがあれば、特別行政区にも入る事ができる。それを使わない手は無いと考えたのだ。ユーラシアの外務省にも既に連絡をつけているようだった。

もはや断れない状況になっている中、ちゃんと業務命令と言っておくだけでこの部長はマシなのかもしれない。文化部の部長なら、まず間違いなく本人の希望という形にするであろう。

詳しい話は、近畿3チャンネルに戻ってからと言う事になり、会場に出ているディレクターとカメラマンを早急に呼び戻すように言われた。受話器を置いたルーイは、ため息とともに立ち上がる。

現場には未だに關係車両が群がり、それを遠巻きにする野次馬を警備の警官が追い払っていた。この品川の現場の他に、御茶ノ水と代々木でもほぼ同時刻に爆発が起こっていた。後者の二ヶ所では、ここよりも大きな騒ぎになっているだろう。

だが現場検証を行うにつれて、この現場の方がより深刻な事態である事が判明してきた。既に軍關係の車両が入りだし、上空にはヘリコプターが旋回を始めている。

「ようやくか・・・捜査員を全員呼び戻せ、あとは交通課の仕事だ」
爆発事件の捜査を軍が引き継ぐと言う正式な命令が伝えられ、警察關係者は付近の交通整理を除いて撤収する。さらには捜査員の各員に緘口令が敷かれた。だが捜査員は、誰もがその命令を鼻で笑う。既に噂は広まっているだろう。最近、トウキョウでまことしやかに語られる「幽霊MS」の噂だ。

実弾もビームも通用せず、スラスターを使う事無く宙に浮く。一切の武装を持たないにもかかわらず、そのMSが手を振るだけで対峙した機体は潰されるという。

日本人特別居留区に侵攻する東アジア軍のMSは、このMSに遭遇してことごとく撃墜されているという。軍は必死になってその情報を隠蔽し、またその謎のMSの行方を追っているが、未だに足取りすらつかめないと言う。

この爆発事件も、そのMSによって起こされたのだと、野次馬が声を潜めるようにして話していた。

「それならいいんですがね」

軍の指揮車両の中にいたスーツの男が眼鏡を拭きながら言う。御茶ノ水と代々木の方の捜査はあらかた終了し、使用された爆弾の種類やその手口も過去の事件との一致点が見つかっている。

しかし品川の事件は、それらが異なっているのだ。同時間に起きたとはいえ、場所も離れており、別の事件と考えるのが妥当である。さらに問題なのは、使用された爆薬の種類である。

詳しい分析結果はまだ出ていないが、どうやら東アジア軍で使用されているものと同種であるらしい。それが事態を深刻なものとしていた。軍内部にテロリストと結託するものが存在する可能性が出てきたのだ。スーツの男が資料を手取る。

ただ気になる点としては、その爆薬が特殊部隊などが使用する類のものであつて、軍内でも普通に入手できるものではないということだ。

「まあ、それに関しては分析待ちですか」

トウキョウでの爆弾テロは、珍しい話ではない。過去にはもつと犠牲者を出した事件も起きている。ただ、ここ最近のトウキョウの様子は何かが異質だと、関係者は肌で感じている。

連合とプラントの緊張緩和、それはCEを長らく支配してきた大きな対立の構図が変化したという事である。大きな対立の沈静化が小さな対立の眼を覚ます、これは旧世紀でも起こっていた事だ。

今のトウキョウはまさに眼を覚まそうとしているのでは無いか、そんな事を誰もが無意識に感じていた。

日本自治区とトウキョウ特別行政区の西側の境は多摩川である。そのため現在、東海道新幹線、リニア中央新幹線ともに、品川まで行かない列車がほとんどである。直通は基本的に政府専用車だ。中央の線路を走り抜ける車両を横目に、ルーイはホームの階段を下りる。ルーイが勤めるユーラシアのテレビ局のBNNは、親会社に当たる

持ち株会社が新聞社も所有している。その新聞社は他の新聞社と共同して、ヨコハマに通信社を構えていた。彼のトウキョウ取材にはそのスタッフが協力してくれると言う。

改札口にいたのは、ルーイよりも若い感じの日本人の男性であった。目印に赤い風船を持っているという、一風変わった男である。

「ルーイ・キリロフさんですね。ヨシト・モリです、よろしく」

軽く握手を交わすと、とりあえず通信社に向かう事になった。しっかりと話は通っているようで、ルーイから説明をする必要は無かった。ただ、特別行政区内部まで入れる在留許可を持てるのは非常に幸運な事らしい。

ヨシトの持っている許可証では、ルーイの行動範囲に追いつかない場合があるかもしれない事を注意される。最悪の場合は一人で行動となるのだ。

「表向きの治安は悪くないですけどね・・・」

語尾を濁すのは、表向きでない部分の事を言っているのであろう。実際にトウキョウに入る前に、しっかりと状況を把握しておかなくてはならないようだ。ヨシトの運転する車は繁華街を抜けて港の近くまで進む。

雑居ビルのような小さな建物が通信社の社屋であった。こんな通信社でも、当局のマークは厳しいらしい。ルーイは窓から見える港の様子について尋ねた。何でも、大洋州の豪華客船が寄港しているそうだ。

グレートバリアリーフ号は、その優美な威容を誇るように停泊していた。艦長に到着の報告を行うため、キリルは船内を歩いている。着任時にはいたアイドル関係の乗客がいなかったため、静かな船内であった。

「苦勞だったな。キリロフ中尉、リブー中尉」

ザフト内部で進む軍制改革の一環で導入された階級で呼ばれる事に、違和感を覚えながら、キリルは敬礼する。同じ列車だったエリック・リブーは早々に敬礼の手を下ろしている。

彼らの到着が最も早かったようで、他のメンバーが集まってから今

後の方針について話し合う事になると、艦長の隣にいる男が言った。ただ、今後は二人一組での行動が基本となるため、今回の移動で同じ列車になった者同士がペアとなる事を付け加えた。

よろしくなと言うエリックに、キリルは苦々しく口の端を歪める。

第二話 トウキョウ特別行政区

薄暗い照明の下では、安物のドレスも華やかなものに見えるのであろうか。ボディラインと胸元を強調するデザインのドレスを着た女性達は、笑顔を浮かべながら指名のあつたソファに向う。そこで、かいがいしく酒を注ぎ、男の話を大げさに喜んで見せ、その視線と手の動きに耐える。

水商売の女性にヒエラルキーがあるのならば、彼女らは最下層では無いが下層の存在であろう。来る客の質が如実にそれを物語っていた。胸をまさぐっていた手から逃れるように体を翻した女性が、笑顔で次の席へと向った。

途中で尻を触ってくる手を払う事無く、指名された場所に向う。すっかり酔っ払っている事の分かる男が、さかんに手招きをしていた。

「今日はマリアちゃんを朝までご指名！」

上機嫌でそんな事を言う男に、マリアと呼ばれた女性は内心でほつと息をつく。もう少し飲ませれば、朝までぐっすりだろう。そうすれば今晚は男の相手をしなくても済む。しなを作りながら、水割りの濃さを調整した。

作り笑顔も媚びた嬌声も、いつの間にか板についてしまい、傍から見れば何らの不自然さもなく男の相手をしているように見えるであろう。ここに来る客にとつてはそれだけが重要であり、彼女らの仮面の裏側になど興味は無い。

それでもこの仕事は、彼女らのような女性がトウキョウで生活していくための確実な方法の一つである。水割りのグラスを煽る男に、女性は見え透いた感嘆の声を上げてみせた。

下手に酔い潰せば、彼女は別の男を相手にしなければならぬ。ギリギリの線を見計らって、男を促す。カードを受け取ると、体を支えるようにして店を出た。呼んでおいたタクシーに男を押し込み、自分も乗り込む。

「昨日はラッキーだったじゃん」

翌日、店の控え室で彼女はそんな事を言われる。それを軽く聞き流して、彼女は本を広げた。他にも、同じように本を広げている女性が多い。開店後も、客が来て指名があるまではそうしている。無駄に出来る時間は無いのだ。

店のマネージャーが、テロの影響で今日は客が少ないだろうと話していた。外出禁止令は出ていないが、一部区域ではそれに近い措置がとられている場所もある。そういえば、駅でそんな話をしていた人達がいいたのを思い出す。

その手の事件が報道されない事は常であり、むしろ報道されない事の方が普通だった。人々は地域コミュニティによる情報伝達を発展させて、そういった状況に対応しているのだが、そのような地域コミュニティを持たない彼女らのような人には、極端に情報が伝わらない。

マネージャーの話と、今日の電車の運休状況を重ね合わせて、大まかな推測を立てる。住んでいる場所からとりあえず離れていると判断できるので、それ以上は考えるのをやめておいた。考えてもどうしようもないのだから。

「はい、指名入りました」

その声に、女性たちは一斉に本を閉じる。手早く鏡をチェックして臨戦態勢を整えた。客が少なくとも、やる仕事は同じであり、その辛さに変わりはなかった。

先日のテロの影響か、電車の路線のいくつかは事件現場付近の駅を避けるように折り返し運転を行っていた。街に慣れていないものにとつて、指示された以外の路線を使って目的地にたどり着くのは至難の業だ。ましてやここは、世界有数の鉄道網を誇る巨大都市である。

路線図を前に腕を組んでいる男の後ろで、ペットボトルを傾けている男がうんざりした口調で言った。ジーンズに付けた鎖飾りをジャラジャラと鳴らす。

「だからタクろうぜ」

「黙っている」

「俺らは調査員だ、スパイじゃない……それにな、スパイだってタクシーは使う」

そしてスピード狂の運転手とともに悪の組織とカーチェイスをするのだと笑った。エリック・リブーは、ずっとこんな調子だ。キリルは極力彼を無視するように路線図を読み解こうとする。

彼らの任務の性質を考えれば、目立った行動は慎まなければならぬ。都市の大多数の人間として行動し、その人ごみの中に姿を隠さなければならぬ。タクシーのような、使用者の特定が簡単な方法は避けるべきなのだ。

ようやく乗り継ぎ方法を見つけて、その方向に足を向ける。エリックが付いてくるかどうかなど気にもしなかった。トウキョウのターミナルステーションは、歩けど歩けど駅である。

改札口を通るとブザーが鳴った。キリルが振り返ると、スーツの男が数名の駅員に取り囲まれている。身分証の提示と所持品検査が求められていた。

「ありや……兵士だな」

いつの間にか隣を歩いていたエリックが、視線を合わせる事無く雑踏に紛れるような声で言った。駅員の中の一人は、動きが非常によく訓練されていた。見るものが見れば一目で軍人だと分かるであろう。この駅には、そんな人間が多数配置されていると言う事だ。

キリルはポケットから自分の身分証を取り出した。超薄型コンピューターチップの内蔵されたそれは、このトウキョウを歩く時に欠くべからざるものなのだ。頭の後ろで腕を組んでいるエリックが、再び小声で言う。

「プラントの技術をなめんなって、完璧だよ」

身分証をしまいこんだキリルは小さく舌打ちする。端的に言えば、彼らの持つ身分証は偽造であった。少なくとも末端レベルでの照会で見破られることは無い。

現在のプラントと東アジアの関係を考えれば、例え純粋なビジネス

目的であってもトウキョウ特別行政区での身分証など発行されるわけが無い。その発行を求めて、東アジア当局と粘り強く交渉するなどという事を、ザフトがするわけもなかった。

今まで、幾度と無くくぐって来た改札を全てパスしているのである。その信頼性は折り紙つきであろう。キリルが考えるのは身分証の信頼性ではなく、そんなものを使用する自分達の信頼性の事であった。

多摩川を越えてすぐの駅で、乗客は全員が列車を降りる。線路自体は繋がっているのだが、これより先に向う電車は別のホームから出発するのだ。乗り換えホームに向う階段で、ルーイは鞆から在留許可証を取り出す。鞆の奥の方だと、通信用の電波が届かず改札口で引かかる可能性があると言うのだ。

「Nジヤマーの濃い日は、直接改札口に投入しなきゃならないんですよ」

自分より一つ下なだけなのに、多分にあどけなさを残したヨシト・モリという青年が笑う。彼はそのまま、ルーイの取材に協力してくれる事となったのだ。彼は自分の持っている身分証を見せる。

その違いを説明しながら、ルーイの許可証の方がトウキョウでの立ち入り範囲は広いだろうと言った。下手をすると、ルーイが単独で行動しなければならぬ場面も出てくるかもしれない。

外国の報道機関に、このレベルの在留許可証が交付されるのは奇跡に近いと、通信社の局長も言っていた。ルーイの勤め先がオオサカでの音楽イベントを取材するという計画を提出していただけたので、向こうにも油断があったのだろうと推測している。

だからこそ千載一遇のチャンスは逃すなど、はっぱをかけられた。ルーイは小さくため息をつく。

「やっぱ現場には直接行けないみたいですね・・・」

行けるところまで行ってから歩くか、それとも先に宿泊地まで行く

か、ヨシトは問いかけていた。

何かを撮って戻るのが最低条件である。ならば、先にそれを済ませておきたいとルーイは思う。立ち入りが規制されているのであれば、それを撮ればお終いであろう。それ以上は取材出来ないのだから。

ルーイは現場近くまで行くと告げる。ヨシトの後ろについて、目的のホームに向った。

駅の構内を歩く人達の姿に、別段の変わりはない。人種的な差異を除けば、ユーラシアの大都市と同じ光景があるだけだ。外国メディアを厳しく規制し、情報を当局が管理している閉鎖都市だというユーラシアでの噂が、どうにも信じられない。

そんな事をつぶやいたら、ヨシトはだんだんとそれが分かってくるだろうと言った。その顔に笑みは無く、努めて無表情でいるかのようだった。

東アジア共和国日本自治区とトウキョウ特別行政区。かつて日本と呼ばれていたこの地域は、再構築戦争における地域レベルでの再編が最も上手く行かなかった地域の一つであった。オーブの成立にも関わるこの地域の歴史的な問題が、そのままの形で現れているのだ。

オオサカから来る途中で読んだ資料にそんな事が書いてあった。ルーイは窓の外を見つめる。しかし彼が、トウキョウという街の現状に思いを馳せる事は無い。彼は、そんな生き方を厭う事を選んでいった。車内アナウンスが、列車運行の変更を告げている。

山を切り開いて住宅地が拡張されているとはいえ、トウキョウに比べればずっとぶんとどかに感じられる風景。街から見える山並みも、綺麗な緑色を見せている。例えその地下に、強力な防空陣地網が形成されていていようとも、一目見ただけではそうとは分からない。

しかし、海の方に目を転じると、そこに浮かぶのは大小さまざまな軍艦の威容である。MS専用の駐機場には、ウインダムIIばかりか、ダガーシリーズらしき機体の姿も見えた。ここに陸軍の部隊も展開

されている証拠である。

横須賀港はかつてより軍港であったが、再構築戦争後その横須賀を中心とし三浦半島全体が大西洋の基地となったのだ。厚木や座間の機能も集約され、今では大西洋の一大軍事拠点となっている。

「まったくもって忌々しい」

車の中から外の景色を見ていた男が、はつきりとした口調で言う。眼鏡を拭き直し、前を見据えた。かつてこの国は、自国領内に外国の軍隊を駐留させて平気でいられる精神を有していたのだ。さらには、その駐留軍に治外法権を与え、土地や生活インフラの使用料すら請求せず、逆に毎年多額の資金を駐留軍のために使っていたのだ。

世界的に見ても異常な状態が保たれ続けていた事が、再構築戦争での問題複雑化に拍車をかけた。極東における大西洋の軍事的プレゼンスを排除したい東アジア共和国と、西太平洋からインド洋に至る権益を擁護する最も安上がりな拠点を失いたくなかった大西洋は、日本列島の基地を巡って壮絶な外交的綱引きを続けていたのだ。

当時は、ユーラシアの前身が極東に進出を開始しており、北海道や中国東北部の一部が併合されるという事態まで招いていた。そのため、東アジアは大西洋と直接的な衝突を起こす事が出来なかった。結果として、東アジアはトウキョウの首筋に大西洋の軍事基地を認めざるを得なかったのだ。

「カテナとミサワは連合による共同管轄、取り返せたのはサセボとイワクニとヨコタ・・・この要塞群とは釣り合いが取れない」

男はそうつぶやいて、車を降りる。車は市庁舎の前で止まっていた。

プラントとの戦争中はこういった問題も目立たなかったが、それが無くなってしまった以上、再び連合内部の確執が表面化することになる。対コーデイネーターの強硬姿勢という点などで、戦争中の東アジアと大西洋は良好な関係を保っていた。だが、JOSH-Aの事件以降、それは表面的なものに留まる事となる。

大西洋が東アジアの国内問題に直接的な介入を行う可能性は、現実的に考えれば限りなくゼロに近いであろう。だが品川で起こった事

件の奇妙さは、その限りなくゼロに近い可能性にまで目を向けたくなくなるものであった。

軍内の調査と平行して、横須賀の動向も注視する必要が出てきていた。ヨコハマの後背地であり東京湾の出入り口という立地条件は、東アジアの政府としてみれば神経をすり減らさざるを得ないものだ。

「ヨコスカ市は積極的な情報公開を行っております」

市長と握手を交わしながら、ユ・ケデインは名刺を差し出す。今は軍関係の肩書きではなく、東アジアの国営通信社・報央社の記者という肩書きであった。

旧世紀には、サブカルチャーの一大集積地であり発信地であった街。特別行政区が発足してから、サブカルチャーの聖地としての意味合いは薄れてしまったが、電気街としては、今でも十分な存在感を保持していた。

大通りを少し奥に行けば、とたんにマニア以外には意味の分からない電子部品が無造作に並べられた店が立ち並んでいる。エリックが歓声を上げながら、店員と話しこんでいた。キリルはそんな彼を無視して指示された建物に向う。

雑居ビルの薄暗い階段を上って、表札の無いドアをノックする。中から聞こえてきた声に、指定された合言葉を言う。

「シーナちゃんの抱き枕が手に入ると聞いたのですが」

鍵が開けられる音が聞こえ、ドアの隙間から男が顔を覗かせた。何やら可愛い絵がプリントされたTシャツを着た、スキンヘッドの屈強な男がドアを開けてキリルを招き入れる。

部屋の真ん中にいた女が会釈だけをする。しかし一重まぶたの細いつり目は、キリルを注意深く見つめていた。女の妖しい雰囲気といい、男の筋肉質な体といい、この部屋の雰囲気とは似つかない。狭い部屋には、男の着ているTシャツと同じような絵のポスターが所狭しと張られていた。

キリルがここに来た目的は、特別行政区の調査のための現地協力者と接触するためである。彼の困惑は顔に出ているのだろう、女は席を勧めもう一人が来たら説明をしようと言った。そのエリックは30分も遅れて、到着した。紙袋一杯に部品を買い込んでいる。

「なかなか面白い街ですね・・・ここは」

椅子に座ったエリックがいきなり切り出す。女は口の端を引き上げて笑った。ジュンコ・ヤオイと名乗った女は、ザフトへの協力は上からの要請であると言う。キリルがその事について聞いただと、それに関する追求はするなど釘を刺された。

「上といっても組織的な上下関係じゃない・・・取引先であり、仕入先であり、スポンサーです。ビジネスの信用関係を保つための協力ですので、その点はご心配なく」

納得いかない顔をしているキリルとは対象的に、エリックは軽く頷いていた。今後、彼女らと定期的に接触する事、特別政府の動きに関する情報をレポートして週に一度のペースで送る事が決められる。

話を進めたのはエリックで、キリルは不審の眼差しを女に対して向けるだけであった。そんな彼の様子にエリックは、後でゆっくり説明してやるよと言う。差し当たり、先日のテロ事件に関するレポートが保存されたチップを手渡される。

用が済んだとばかりに立ち上がるキリルを見て、ジュンコが言う。「私達は、ザフトの値踏みをするようにと上から言われています。あなただけなら、私はザフトは協力の価値が無いと判断するでしょう」その場を取り繕うかのようなエリックの言葉を無視して、キリルの足はドアの方に向かった。今まで黙っていた男が突然彼の前に立ち塞がる。キリルが身構えた。男の腕が振り上げられる。

そして上の棚から大きな包みを取り出すと、それをキリルに渡した。透明の袋に入れられたそれは、男が着ているTシャツと同じ絵の描かれた抱き枕であった。後からエリックの笑い声が聞こえる。

その時、部屋の片隅のパソコンがアラームを鳴らした。ジュンコが場面に映し出される文字を読む。芝浦で爆発事件が発生したらしい。

品川の駅周辺は、周囲五百メートルに渡って交通規制がなされていた。兵士や警察官が、路地の一本に至るまで警戒の目を向けており、周辺の高い建物にまでパトロールの対象となっていた。緊張感も高く、下手にカメラを構えればその場で捕まってしまうような雰囲気であった。

ヨシトは規制線に沿って回ってみようという。無駄だとは思いつつ、最寄りの駅まで行くにしても同じコースを歩く事になるらしい。ルーイは彼の後をついて歩いた。それが幸運の選択だったのかどうかは分からない。品川駅の北側に出た時、爆発音が聞こえた。最初は何か分からなかったが、立ち上る煙でその音の正体を知ったのだ。

「水処理施設・・・いや、運河の方が。行ってみましょう」
「この線路渡れるのか？」

線路を渡れる場所まで走る。幅が100メートル以上ある線路の下を走り抜ける途中、何人もの逃げる人とすれ違った。道を抜けて煙の方へ足を向ける。ヨシトの足が予想以上に速く、ルーイは置いて行かれないように本気を出してしまう。

荒い息を吐きながら前を見ると、向こうの橋のたもとで車だったのであろう物が火を吹き上げていた。一瞬事故かと思うが、道路が深く挟んでいるらしいところを見るとそうではないのが分かる。

サイレンの音が近づいてくるのを聞き、ヨシトがコンパクトカメラを手早くしまいこんでいた。そして爆発現場が見渡せる場所を探す。ルーイが指差す場所を目指して再び走った。

ルーイは視界の隅をかすめた物に、反射的に身を屈めた。そしてヨシトの腰にしがみつくようにして、彼を道に伏せさせる。ガードレールの陰に身を寄せながら、慎重に下の様子を窺った。

彼らがいる場所も橋であり、運河の水面とその護岸は下になる。そこに人がいるように見えたのだ。それも普通の格好をした人ではない。そういう趣味を持った同好会でなければ、間違いなく軍やそれに類する者達であろう。

「しよぼい仕事だ。もつとパーツとしたのないわけ」

「また地下鉄の構内でドンパチしたいのか。今度はお前が死ぬぞ」

はつきりした内容が聞き取れたのはそれだけだった。ルーイは物音を立てないように、耳だけをそばだてる。下にいるのは最低でも五人、どう考えても今の爆発事件に関係のある人間だ。自分達の存在に気付かれれば命が無いのは、考えなくとも分かるシチュエーションである。

声が遠ざかっていくのを聞き、ルーイは静かに息を吐く。伏せていた体を起こそうと、頭だけを上げた時、彼は見た。

コンクリートの護岸を上るのではなく、運河に浮かぶ小さなボートから道路まで一飛びで飛び上がってくる人間。彼らは、出来の悪いワイヤーアクションのように、信じられない跳躍力で下から上ってくるのだ。着ている物はごく普通のものだが、間違いなく先ほどまで下にいた連中である。下で着替えていたのだ。

最後の男が飛び上がると、ボートは上手い具合に転覆して沈んで行く。着ていた服も水の底だろう。彼らは何食わぬ顔で、その場を立ち去って行った。

ヨシトに写真を撮ったかどうか尋ねる。彼はただ首を振るだけであつた。

パトカーと消防車、救急車が入り乱れる中に、深緑の軍用車両まで集まりだした。特殊な作業を行う事ができる消防車と救急車は、そのまま作業の継続が出来るが、パトカーはそうもいかない。感度の悪い無線で、怒声が飛び交う。

特別行政区の上層部は東アジアの中央から派遣された人間であるが、現場での実際の業務は従来の行政組織がそのまま引き継いでいる。警察機能は名前こそ保安局に改められたが、かつての警視庁が担う事となっていた。しかし最近では、駐留東アジア軍がテロ対策を名目に、しばしばその領域を侵すようになっていく。

「うちの明かない無線でのやり取りを後ろに聞きながら、くたびれたスーツを着た男はオレンジ色の服に話しかける。

「車の出火原因を調べてくれ」

「やっている、それが俺らの仕事だ」

消防庁の調査員はそう言うと言配せをした。車の炎上は火災であり、その調査は消防庁の人間でも可能なのだ。少なくとも法制上はそうなっている。ここに来る軍人は、警察以外の行動について厳しいマークは行っていない。火災調査の報告はその後警察にも回ってくるのだ。

その報告書に、テロリストが使用した火薬の分析や各種の手口が載せられていたとしても、その報告書をもとに捜査を行うのは警察が通常行すべき業務である。男は軽く手を挙げて自分の乗ってきたパトカーに戻る。軍との問答も切り上げ、周囲の交通整理の指示を出しておいた。

「サクラ警部、通信です」

上司からかと思つて嫌な顔をした男は、雑音の向こうから聞こえる声に表情を緩めた。

「シユウちゃん、いい報せと悪い報せが同時に来た」

「両方同時に教えろ」

保安局刑事部鑑識課科学分析室からの連絡は、以前旧墨田区で行われた作戦において確保した謎の襲撃者の分析結果であった。彼の指揮によつて被害の拡大は免れたのだが、両国駅に配置した部隊はほぼ全滅であった。しかし、撤退のために仕掛けたトラップによつて、襲撃者二名の殺害に成功していた。一名は完全に瓦礫の下敷きとなっていたが、もう一名は比較的良好な形で死体が残った。

保安局はその死体の存在を上には知らせず、密かに分析をしていたのだ。両国駅に配備した部隊の僅かな生き残りの証言から、その襲撃者が通常では考えられない動きをしていた事が分かつていた。

「ま、予想通りにコーディネーター。だけど第一世代だし、遺伝子型に珍しいのがチラホラ・・・詳しい分析はまだだけど、コーディネート方法の一部に非グレン型を使つてるね。しかも、それだけじゃない」

一般にコーデイネーターの遺伝子改変方法は、ジョージ・グレンが公表した方法で行われている。だが、それ以外にも様々遺伝子改変技術は存在し、それらは総称して非グレン型と呼ばれていた。それが一般化しないのは安全性や経済性の問題など様々であるが、少なくともそんな技術を有しかつ使用できる組織は限られてくるだろう。

さらに、その死体からは奇妙な化学物質が複数検出されていた。体内で代謝された結果生じる物質なので、元の薬品が何かはこれも詳しい分析待ちであった。しかしそれだけ分かれば、現場としては十分である。

特殊な遺伝子改変技術によって作られたコーデイネーターにドーピングを施した人間。訓練された特殊部隊員でも敵う相手ではなかったという事だ。

両国での襲撃事件で敵が使用していた銃弾、品川の事件で使われた爆弾、そして今回の爆発事件。おそらく、分析結果は一本に繋がるだろう。シユウは確信を持ってこう言った。

「このヤマは・・・デカいなんてもんじゃねえぞ」

少なくとも保安局全体の意思統一を行って対処しなければならぬ事態であろう。軍とのつまらない縄張り争いの延長線上にある事件などではない。

古くから港町として栄えていたこの街には、不思議な趣がある。トウキョウとも近く、また同じような大都市を形成しているように見えながら、決してトウキョウに飲み込まれること無く、一線を画した存在感を持っている。そのヨコハマの存在感は、トウキョウ特別行政府が発足して以来、さらに際立つ事になる。

高層ビルの立ち並ぶ駅周辺から少し離れた場所、古い街並みを残している界隈の一角が会合の場所であった。その街並みは、彼の住んでいる土地では、既に捨て去ってしまったであろう姿を保っていた。それを時代錯誤と捉えるのか、伝統の維持と捉えるのかは思想の違いで

ある。

そしておそらく、その思想の違いこそが、彼が今からやろうとしている仕事の判断基準となるのだろう。

「ミスター・カヲ。よくいらして下さった」

「はじめまして、リ先生」

時代がかつた服装の老人と握手を交わし、カヲ・ツオピンは勧められた席に着く。数ヶ月前に銀行の頭取を後任に譲り、定年前の最後の仕事としてヨコハマに赴いたのだ。この老人が代表者を務める会社は古くからの顧客であり、老人の個人資産の管理も行っていた縁もある。

だが、それだけであれば彼が出向く必要は無い。彼が出向かなくてはならないのは、それなりの理由がある。雑談の方向をゆつくりと本題に近づけていく。特別行政区でのテロの情報は当然老人の耳にも届いているようだ。

会話がよどみなく続くという事は、老人も本題を理解しているということであろう。カヲは息を継ぐように茶を口に含んだ。

「最近、事業拡大も積極的に行っているようですね」

「お恥ずかしい。この年になっても欲の皮が突っ張っております」

老人が代表を務める企業は、総合商社を中心に複数の企業を傘下に収めている持ち株会社であるが、傘下企業の子会社が特別行政区に設立されたのだ。現在の日本自治区とトウキョウ特別行政区の関係を見れば、それが極めて異例の事だというのが分かる。

再構築戦争によって成立した東アジア共和国の中でも、トウキョウの持つ政治的経済的影響力は非常に大きい。それ故に、東アジアの中央政府が直接統治するという形が取られているのだ。そして日本自治区との交流を制限し、かつ積極的な公共投資や優遇政策によって、トウキョウを文字通りの「特別」区へと変えていった。

その裏で何が行われていたのかは、墓の中まで持っていかれた話を掘り起こさねば分からないだろう。だがこの老人は、まだ墓の中に入っていない。

「我々としては、自由に商売が出来るに越した事は無いのですが、それ

もなかなか・・・」

一銀行マンとして、老人の愚痴には理解を示す事ができる。だが自由な経済を拡大するために権力を志向する事は、厳しく戒められなくてはならない。それが上海第七銀行の頭取となった時にカヲが幹部に伝えた事である。

ましてや、それを非合法的な手段を用いて行う事など、断じて許されない。それはビジネスに携わる者以前のモラルである。

ホテルに着いてからも、ヨシトは興奮気味であった。通信社の方には滞在延長の連絡をいれ、特別行政区内で活動している知り合いとも連絡をつけると言っていた。ルーイが軽い眩暈を覚えるようにベッドに座り込む。

何かとんでもない事に巻き込まれた、そんな気がするのだ。ただ目の前でテロ事件とテロリストを見たと言うのではない。これから、もっと大事に巻き込まれるのではないか、そんな事を漠然と感じるのだ。大して高くない天井を見つめながら、ルーイは舌打ちをする。

世界は平和に向っているはずではなかったのだろうか。連合とプラントは関係改善に向けて進み、コーディネーターとナチュラルの諍いは無くなっていくのではなかったのか。

『そんなに簡単なわけ無いでしょ』

不意にそんな声が聞こえたような気がして、彼は首を振った。今考えるべき事は、この事態をいかに乗り切り無事に帰るかだけである。しかし、一体何をどこまで取材すればOKが出るのだろうか。

とりあえず、ヨシトとはそのあたりから打ち合わせしておかなくてはいけないだろう。部屋に戻ってきた彼は軽食も持ってきてくれた。パックの牛乳にストローを差しながら、ルーイは聞く。

「どこまでって・・・特ダネをゲットするまでですよ」

「その特ダネってのは、何だよ」

ルーイの投げやりな口調に、ヨシトは驚いたような表情を見せた。

そして、文化部の人でしたもののねと言って、何か納得したような顔に変わる。そして再び真面目な顔に戻って言った。

報道機関に勤めると決めた時に何を思ったのかと。ジャーナリズムというものに関わろうと決めた時に何を思ったのかと。特ダネとはそう言うものだ。

「知り合いの紹介だよ・・・就職口が無くつてな」

飲み干した牛乳パックを無造作に捨て、ルーイはベッドに横たわった。ヨシトが黙って彼を見る。何を言われるにしても、それは慣れっこになっていた。そう思うルーイは、ただ明日の予定だけを告げて部屋を出て行った彼の背中を見る。

マスコミ関係者が全員高い志を持っているわけではない。そのほとんどは、ただの選択肢の一つとして、そこを選んだだけであろう。そこに夢や理想を抱く事を悪いとは言わないが、それを要求するのはやめてもらいたかった。

ルーイは寝返りを打つようにして毛布に包まる。何かを考えるのもバカらしく、ただ寝る事にした。どうせ明日も朝早いのだ。

川を上ってきた船が岸边に乗り上げるようにして止まる。隅田川の川辺に作られた親水公園であるため、積荷を降ろすための施設などは無い。船は、そういった場所でも荷物の積み下ろしが出来るように設計されたものであった。船腹に設けられた扉が開き、待機していたフォークリフトが船の中に入っていく。

粗末な木製パレットの上にビニールでぐるぐる巻きにされた積荷が、次々と降ろされていった。数名の人が、付けられた荷札を書類と付き合わせてチェックを行っている。遠巻きにそれを眺めるのは、特別行政局の職員と東アジア軍の係官である。

降ろされる荷物は、毛布や防水テント、食料品や医薬品、そして簡単な建設資材の類である。ここで仕分けされた物資は、隅田川を渡って対岸の区域に人道支援物資として送られるのだ。

こちら側の岸に一旦降ろすのは、その物資を検査するためである。建設資材、特に鉄筋・鉄骨関係は当局の目も厳しかった。

「アメリカさん、いつもありがとうございます」

フオークリフトから降りてきた男性がそう言って頭を下げる。がっしりした体つきの初老の男性で、ヘルメットを被っているがこの責任者であった。スーツを着込んだ係官には、この手の強面が効果的なのだ。

彼は、大洋州に本拠を置くボランティア団体の人間で、女性はその手伝いをしているのだ。親プラントの大洋州と東アジアとは関係が良好ではなく、政治的な色合いが無いはずのボランティア団体も、当局の監視対象であった。それでも厳しい監視を受けながら、このように活動を続けている。

だが本当は、トウキョウ特別行政区に人道支援が必要な区域が存在するという事、それ自体が大きな問題なのだ。そしてそのような状況こそが、このトウキョウを巨大な閉鎖都市にしている。

鉄パイプ類の輸送に待ったをかけようとしている職員に、男性が話を付けに行った。迫撃砲やロケット弾への転用が可能という理由である。もつとも、直径が大きな物はもともと差し押さえられる事を前提として持って来た。ここに来る職員もノルマがあるのだ。

しばらくして、小さな鉄パイプとメッシュ筋の輸送の許可が下りた。フオークリフトが、荷物をトラックへと積み替える。アメリカと呼ばれていた女性も、その作業のサポートに回った。

必要な物資も必要な場所に送られなくては意味が無い。ましてや限られた援助物資である、必要とする人の手に確実に届けなければ生命の危機にも直結する。

トラックの積荷と行き先の最終チェックを終え、女性は出発するトラックを見送る。しかしトウキョウでこのような活動を行うという事は、相応の覚悟が必要だった。特別な許可を得た外国人であればまだしも、この街で暮らしている者が海外のボランティア団体で活動するなど珍しいどころの話ではなかった。当局は、そういった人をも監視対象としているのだ。

だが彼女は、別段それを気にする様子も無い。ただ淡々とした表情で、家路に着くだけであつた。

第三話　モザイク

テロの起こった現場に向おうとするキリルをエリックが止めた。土地勘の無い場所であらうついて時間を浪費した挙句、現場周辺は完全に規制されて近づく事が出来ないに決まっている。至極もつともな意見に、キリルも従わざるを得なかった。

二人で抱き枕を抱えて、雑居ビルを後にした。途中でエリックがそれを現地の通貨に換金してくれる。意外な額になったと財布を見せる彼は、思った以上に目端が利くようだ。ますます好きになれそうな相手ではない。

駅の改札では、また身体検査を受けている人がいた。テロの影響だろう、緊張した雰囲気は嫌でも伝わってくる。改札を抜けようとするエリックは足を向ける方向を間違っている。キリルがそれを指摘すると、エリックはうんざりした声で言った。

「おい、時間を大幅にオーバーしてんだぜ。明日にしようや」

「それは貴様のせいだろう」

エリックが電気街で余計な買い物などしていたせいで、時間をロスしたのだ。今日中に回ると決めたところは回っておかなくてはならない。だったら別の駅まで歩いた方が楽だぞと言うエリックに、思わずキレそうになった。

彼にその駅の場所を聞いて、もと来た道を引き返す。不承不承ついてくる彼を無視して先に行きたいところだが、どうやら地図という点では彼の方が有能らしい。

路線図を覚えているのだろうかというキリルの疑問を感じたのか、電子回路の図面よりよっぽど楽だとエリックは言う。駅のアナウンスが、午後5時を告げる。そして注意を促す放送が流れた。

「本日は、午後6時よりゲートレベルの引き上げが行われます。利用路線の身分証レベルをもう一度ご確認下さい」

背後のエリックが立ち止まった。キリルは怒鳴りたい気分を抑えて振り返る。路線図の描かれたディスプレイが、その表示を変化させていた。エリックは身分証とそれを見比べている。そして、帰るしか

なくなつたぞと言う。

今もつている身分証では、港の最寄り駅まで戻れなくなるのだという。空いているホテルでも見つけられれば話は別だがと言って、エリックは付け加えた。

「ちなみに、ダブルの部屋はお断りだからな」

言いたいことがあるすぎて言葉にならない。しかし、ここで彼に怒鳴り散らしたところで、何がどうなるわけでもない。ともかくは戻らなくてはならないだろう。キリルは急ぐエリックの後について歩いた。

同じように帰路に着く人達はいたって普通の歩調である。周りの人を見る限り、このような事は日常茶飯事であり、慣れてしまえば別段の不便も無く過ごせるのかもしれない。しかし、そうではない者にとっては、相当なプレッシャーとなる。

明らかに周囲の人間と歩調の異なる二人は、マークの視線が増えている事を感じた。よそ者である事を示しながら歩いているようなものだからだ。それが更なるプレッシャーとなる。

上手く出来てるよこの街はさ、電車で滑り込んだエリックが吐き捨てるようにつぶやいた。自分達を尾行している人間が、二人は電車に乗り込んでいるようだ。

パンと卵とオレンジジュースという最低限の朝食を食堂で済ますと、ルーイ達はホテルを出る。ホテル八丁堀、錆の目立つ看板にはそう書いてあるらしかった。ホテルで配られていたゲート予定表を見ながら、ヨシトは回る先を考えている。

通勤時間とは少しずれた時間帯なのだろう、噂に聞いた通勤ラッシュというものを体験せずに済んだようだ。そんな話題を振ると、今は決まった時間に通勤ラッシュが起きるのではないと教えてくれた。昨日のような突発的な事態で急遽ゲートレベルが変更されると一部区間でラッシュになるが、それ以外ではラッシュにならないようゲートが調整されているのだという。

「僕のパスじや、京葉線をこつちからは通過できないかもしれないですね・・・半蔵門線もこの前ゴタついたらしいし」

少し乗換えが多くなるが、通過しやすいコースを選ぶ事になった。向う先は清澄庭園、そこでフリーランスのジャーナリストと接触する事になっていた。その庭園のある区域、旧江東区は現在特別政府の一角でありながら、オーブの租借地となっている。

大西洋岸ほどではなかったにせよ、ブレイク・ザ・ワールドによる津波は日本にも到達し、埋立地や低地では大きな被害が引き起こされた。連合もプラントも、その被害からの復旧・復興支援活動を行う事となる。

その中でオーブは、トウキョウ特別行政区の中でも特に被害の大きかった旧江東区の大部分を一時的に借り上げ、集中的な資金投入によって短期間での復旧・復興を行うと発表した。東アジアの中央政府は当然反対を表明したが、日本自治区はそれを歓迎、大西洋の後押しもあって、東アジア政府の意向を押し切り、旧江東区はオーブの租借地となったのだ。

当時、親大西洋であったオーブのセイラン政権が発案したその計画は、政権が変わってからも続けられていた。租借期限は一度延長されており、現在再度の期間延長を認めるか否かの交渉が続けられていた。

「・・・よく分からん話だな」

旧世紀の国家という枠組みと、再構築戦争によって生じた国家の枠組みとが、複雑に入り組んだ話なのだ。ルーイは窓に映る自分の顔をぼんやりと眺めた。それ以上深い話は考えないようにしている。

東アジア政府は、オーブの租借地であっても東アジア共和国領である事には変わりないとしている。往來の制限も厳しく、警察権その他も特別行政府が有していた。しかし実際にそうであるかどうかは別である。

電車の扉の前に改札口と同様の装置が設置されていた。身分証のレベルが合わなければ、電車から降りる事も出来ないのだ。

「でも、降りたら楽ですよ」

ヨシトはそう言つてルーイの横に並んだ。トウキョウ特別行政区・オーブ連合首長国租借地、通称タマユラ地区には、特別行政区が設置している身分証確認ゲートが存在しないのだ。地区内であれば、誰でも何処にでも行く事ができる。

駅を出た人達が、一様にホツとした顔をしているのはそのためだろうか。ルーイはヨシトの後をついて歩く。

トウキョウ特別行政区、西の境は多摩川であり北は圏央道が大体の境界線となっている。東は利根川を境とし房総半島一帯も特別行政区の区域であった。その利根川の東側、かつて万博も開かれた事のある都市は、今でも先端研究などが盛んに行われている学園都市であった。

その中心街から少し離れた場所、今では使われなくなった施設の跡地に数台の車が止められている。施設から出てくる者が、車の中に案内した。別段変わり映えのない建物の中に車は吸い込まれていく。「結局、用意できたのはアツザムだけか」

「それに随伴用MSが二機。大西洋製です」

地下に現れた巨大な格納庫には、直径にして三十メートルほどの栗に四本の足を取り付けたような奇妙な機体が鎮座していた。宇宙艦の大気圏内運用のために必要な浮遊システムのテストベッドとなっていた機体・アツザムだ。連装ビーム砲を四基と連装レールガンを四基も搭載し、移動トーチカとしての使用も可能という触れ込みであるが、説得力の無い見た目であった。

だがMS三機を格納できるスペースを有しており、限定的ながらミラージュコロイドの使用ができるとあれば、満足しなくてはならないだろう。今までのように列車やトレーラーによるMS運用には限界があった。

車から降りたのは、まだあどけなさが消えないような青年である。だが、周囲の人間に話しかける口調はぞんざいだった。彼はアツザムには興味を示さず、格納庫を見渡す。そして歩いてきた白衣の男性に

大声で呼びかける。

「俺のフリーダムは？ 今度こそ羽根、付けてくれたんだろ」

「アツザムに積んでいる」

白衣の男性はうんざりした調子で言う。嬉々としてアツザムに向う青年を無視するように、白衣の男性は周囲の人間に指示を出していった。そして近づいてきた数人の者を案内するように建物の入り口に向う。

彼らは日本自治区から派遣されてきた人間であった。そしてとりあえずの報告だけをしておいた。

「両国の一件以降、欠員は出ていません。今のような活動である限り、欠員の心配もないでしょう」

「我々としてもあまり派手に動くのは本意ではありません」

そしてMSの運用には細心の注意を払って欲しいと付け加えた。この施設を貸与しているのも、それらの存在を人目から遠ざけるためである。

旧世紀には粒子加速器が設置されていたこの施設も、その必要性が失われてからは放置されていたのだ。機器の撤去の後に残ったトンネルなどの構造物を、彼らが秘密拠点として再利用している。

その他に細かな打ち合わせをいくつか行い、日本自治区の人間は席を立つ。その中の一人が釘を刺すように言った

「チン博士、くれぐれもスタンドプレーだけはなさらぬよう」

それはMSのコクピットではしゃいでいるだろう人間に言ってくれ、チン・ヤンチャンはそう思った。

ホテルの一室から臨む東京港は、薄闇の中に幾多の光を明滅させている。視界をゆつくりと南の方に向けてると、日の出埠頭にはひときわ目立つ白亜の船が停泊していた。大洋州の豪華客船、グレートバリアリーフ号。船会社が、世界一周クルーズの売り込みを東アジアで行っており、その一環としてトウキョウにも寄港しているのだという。

予定ではかなり長期間、トウキョウに留まる事となっている。10

日に一度くらいのペースでクルーズの説明会を船上で行っており、つい先日も資産家などを対象にしたパーティが開催されていた。

富裕層に対する根本的なやつかみを除けば、別段変わった事はないようにも見える。しかし、この船がザフトの拠点となっている事を、東アジア軍の諜報機関は掴んでいた。

「確認まで掴むのがそちらの仕事だと思えますが」

双眼鏡から目を離れたユ・ケティンが背後の男に言う。トウキョウ特別行政区に駐留する東アジア軍の中で各種の諜報活動を統括する部局にいる彼は、中央から派遣されてきた諜報機関の男に冷たい視線を向けた。

だが、視線を向けられる方は平然としている。そして、そちらの縄張りを荒らさないための配慮だとうそぶいた。ケティンは、苛立ちに口の端を歪める。ザフトまでもが特別行政府に目を付け出したという事実の重大さを、理解していない相手への苛立ちだ。眼鏡を外して目を押さえる。

大西洋ですら南米を抑える事は容易ではなく、ユーラシアもヨーロッパ地区以外は広範な自治を認める方向に向っている。再構築戦争によって肥大化した国家が、元に戻ろうとしているかのようだ。それは東アジアでも同じ事であるが、その規模は比べ物にならないだろう。

大西洋やユーラシアのように歴史的・民族的・言語的・宗教的、その他諸々の「統合の基礎」となるべきものを東アジアは持っていないのだ。安定的な経済のみが東アジアの紐帯となりうるのであるが、それを確保するためには安定的な政治が必要である。

東アジア共和国でもっとも不安定なこのトウキョウを、大西洋やザフトにかき回されれば、それは特別行政区の混乱のみならず、東アジアの瓦解にすらつながりかねない。そこまで考えて自分の仕事を行うべきであろう。部局間の縄張り争いなど、言い訳にすらならない。

部屋にいた男を下がらせ、ケティンはネクタイを緩める。人員の配分を練り直す必要が出てくるかもしれない。彼はもう一度窓の外を見た。今日はグレートバリアリーフ号での催し物は無かったはずだ。

ならば今、真つ直ぐ船に向っている二人組は何者であろうか。この距離ではその姿を十分に確認する事が出来ない。まずは監視のため、場所を確保する事から始めなくてはならないだろう。

フリージャーナリストと聞いたので、もつと典型的な姿をしているのかと思っていたが、ごく普通に街に溶け込めるような中年の男性であった。腹回りも額も少し広がりだしたといった感じの男性で、穏やかな笑みを浮かべたまま何度もお辞儀をしていた。

庭園の中に少し入り、人通りの少ない場所を探す。聞かれてマズい話をするわけではないが、おおっぴらに話せる話題でもない。ベンチを見つけると、そこに腰をかけた。男性はさつそく分離壁の北側、旧墨田区での軍の動きについて分かっている事を教えてくれた。

行政府内で何件かのテロ事件が起こっているにもかかわらず、それに対する報復の軍事行動は抑制されているという。男性は声をひそめて言った。

「最近のテロは日本軍の仕業ではないと、行政府は踏んでいるのかもしれない」

タマユラ地区における保安局のパトロールが強化されたのも、別の勢力の介入を警戒しているからでは無いだろうかと言う。ただ、利根川対岸からのロケット弾攻撃が増えている事もあり、そちらへの対処に力を注いでいるだけかもしれないと付け加えた。

話を聞いていたルーイは説明を求める。通り一遍の資料では分からない事が多すぎるのだ。質問に答えようとするヨシトに男性が時間を聞く。

「・・・あ、帰りの時間」

ヨシトの持つ身分証では、タマユラ地区には午後7時までしかいられないのだ。しかも今はその時間が一時間繰り上げられている。それをオーバーすると、最悪の場合身分証の没収と特別行政区からの退去命令を出されるのだ。

電車も遠回りしなければならなかったため、早めに動かなくてはならな

い。そこで男性が提案した。ルーイの持つ身分証であれば、タマユラ地区での滞在も可能であるので、今日はヨシトだけホテルに戻ればいいと。男性の滞在している宿にはまだ空きがあったはずなので、宿泊にも問題は無いそうだ。

一晩あれば、色々な疑問への説明も可能だろう、男性はそう言う。ヨシトが賛成する以上、ルーイに反対する理由は無かった。「それじゃ、明日同じ場所で」

駅でヨシトを見送って、ルーイは改めて男性に挨拶をする。カズヤ・イシと改めて名乗った男性が、まずは食事しようと言う。駅の近くの居酒屋、なじみの店なのかカズヤが店員に声をかけると、奥の個室に通してくれた。

現地の言葉で書かれたメニューでは流石に注文できず、生魚以外なら食べられると告げて任せる事にした。冷えたビールでささやかに乾杯を交わす。しばらく雑談で過ごし、注文したものが一通り出揃ったところでカズヤが切り出す。

何から説明したら良いかとの問いに、ルーイは一瞬考える。そしてトウキョウ特別行政区を特徴付けるであろう、身分証確認ゲートについて聞いた。

トウキョウの環状鉄道である山手線の内側に入ると、とたんに移動が困難になる。それは歩道の各所に身分証を確認するためのゲートが設置されているからだ。それは駅の改札のような形で、Nジャマー濃度が低い時は身分証を服のポケットにでも入れておけば、無線通信で身分確認が出来るため普通に歩く分には支障が無い。

だが、レベルと呼ばれる身分証の種類によって通過できるゲートが限定されるため、それを把握していないと目的地にたどり着けないのだ。地図上では一直線の道でも迂回しなくてはならない事も多々ある。

鉄道は全ての路線で改札口がこのゲートの役割を果たしている。車道にはゲートはないが、道路に埋め込まれた装置によって全ての車

の位置は把握され、乗っている人の身分証のレベルによって通れる道が決められている。それに違反すると、すぐさまパトカーが現れる仕組みだ。

「軍人さんですか、こりやいいや」

タクシーの運転手が、そう言つて車を出す。タクシーには身分証を挿入する装置が設置されており、そこに客が身分証を入れる事によって通過可能な道がナビゲーションに表示される仕組みになっていた。なお運転手は、身分証のレベルと合わない地区では車から降りる事が許されていない。

東アジア軍の軍人は、通過可能な道が一般人に比べて格段に多く、運転手としても楽なのだ。運転手は、チラチラと後部座席に座る客を鏡越しに見ている。それに気付いた男がニツと笑った。

東アジアの軍人の身分証を持ちながら、こういう肌の色をした者は少ないだろう。日焼けではなく、もとの黒い肌を持っているその男は運転手の疑問に答える。

「雇われだよ、MSの操縦を買われてね」

幾分か納得した顔を見せる運転手に、男は再度笑つて見せた。その話自体は別に嘘ではないが、裏のある話であった。

装置から身分証を引き抜くと、自動的に料金の精算も行われる。電子マネー機能まで持たされた身分証なのだが、男はいつも思う。通信に使われる電波と暗号解読を組み合わせたら、街を歩くだけで人の電子マネーをスリ取る装置が作れるだろうと。一度で良いからそんな楽な仕事をしてみたいものだと思ふやき、彼はビルの中に入った。

最近進出してきた企業のビルだが、一体どういう仕事をしているのかはよく分からない。そもそも、自分がこうして足を運ぶのである、まともな会社だとも思えなかった。男は受付で要件を告げる。

通されたのは最上階、トウキョウが見渡せそうな展望の部屋だった。その内装は彼の知識でいえば、中華風といったところだろうか。茶を運んできた女性の青いチャイナドレスの深いスリットに思わず視線が釘付けになった。

「お待たせした、ジョセフ・ロギライ」

部屋に現れた老人が自分の本名を呼んだので、思わず嫌な顔をする。よく調べたものだと思心するが、それをひけらかすのは感心しなかった。

青と赤のチャイナドレスを着た美人にかしづかれながら、老人は正面のソファアームに座る。二人の女性がボディガードである事は、その動きから容易に見て取れる。おそらく目の色はカラーコンタクトではないだろう、二人ともコーデイネーターだ。

通り一遍の挨拶をしてから、軽く身構える。彼が上からの指示でこの老人、リ・ウエンと接触したのは、特別行政区内で自由に動ける者が自分を含めて数名しかいないからであるが、それだけに慎重にならなくてはならない。ただのメッセンジャーではなく、自分たちの組織の代表者である事が求められるのだ。

そんな彼の様子に、老人はただ愉快そうに笑う。そして時間があるのなら昔話に付き合って欲しいと言った。

「うわっ・・・ホントに壁なんだ」

見上げる先にあるのは巨大な壁である。夜の暗さを引き立てるように、のっぺりとした壁がそびえている。その壁は高速道路の高架下を完全に埋める形で作られていた。分離壁と呼ばれているそれは、首都高速7号小松川線を境にしてこの区域を南北を分断している。

これより南側がオーブの租借地であるタマユラ地区である。そしてこの分離壁の北側と荒川、隅田川に囲まれた区域が日本人特別居留区、通称・旧世界である。現在のトウキョウを象徴するものの一つであり、東アジア共和国の脆さを示すものであった。

カメラを探そうとする女性を促して男性が足を進める。二人は仕事でこの街に訪れ、その合間に街を見物していたのだ。機械メーカーに勤める彼らは、市場動向と使用実態の調査を目的にトウキョウに来ていた。

不意に遠くから聞こえた爆発音に、二人は身をすくませる。久々に聞く戦争の音、二人は苦い顔を見合わせた。慌てて、近くの人に聞く。

「あの、大丈夫なんですか？」

「ええ、壁の向こう側ですから」

壁と言ってもMSであれば簡単に跳び越せる高さであり、ビームライフルなら一発で撃ち抜ける。大丈夫という言葉が、あまりにも頼りない状況だ。だがその人々の様子は、そんな事態にすっかり慣れてしまっているという感じだった。きつと危なくなるか否かが、皮膚感覚として分かるのだろう。爆発音はすぐに聞こえなくなったが、二人はじつと壁を見つめていた。

トウキョウでは、未だに再構築戦争が終わらずにいるのだ。男性は、アタツシエケースから資料を取り出す。それは、東アジア共和国の成立に遡る話だ。

「この日本という国は、立ち位置が微妙でしてね」

すこし赤くなった顔でカズヤは話を続けた。串に刺された鶏肉のグリルをつまみながら、ルーイは視線を泳がせるようにして話を聞き続ける。

各種資源の枯渇や環境の限界が招いた構造的な不況が世界を覆い、各国はブロック経済圏を構築してそれをやり過ぎそうとしていた。それがそのまま再構築戦争の構図へと繋がるのだが、どの国がどの経済圏に組み込まれるかは、単に地理的要因で決定されるのではなかった。

その最たるものがこの日本であった。政治経済的に、現在の大西洋連邦と密接な関わりがあったため、現在の東アジア共和国の反対を押し切る形で大西洋連邦に組み込まれるという見方が当時は大勢であった。

だが両者が太平洋の両端にあるという地理的要因が問題であった。エネルギー価格の際限のない高騰に伴う物流コストを肥大化によって、例えば大西洋連邦に組み込まれたとしても、日本の経済的苦境は続く可能性が高いという見方もあったのだ。またワシントンも、物流コストの増加によって日本が経済的な脅威にならない事を見越して大西洋連邦に組み込む事を考えていたという。

そして日本では、大西洋連邦に参加するか東アジア共和国に参加す

るかで、国論を二分する事態となった。世界各地で紛争が頻発し始めたのもその頃である。

当初は、大西洋も東アジアも日本政府の決定を尊重するとの姿勢を示していた。自国領内でも問題を抱えている以上、他国への過度の介入は不可能だったのだ。しかし事態は意外な方向から暗転した。

当時まだユーラシア連邦は西側しか成立しておらず、のちにユーラシア連邦に組み込まれる国が、シベリアからの南下を画策したのだ。それは結果として、中国東北部や北海道の占領という事態を招いた。東アジア共和国が、強い危機感を持つのは当然である。

それでも旗幟を鮮明に出来ない日本政府に対して、東アジア共和国は強攻手段に打って出た。親東アジア勢力を支援してクーデターを起こさせたのだ。それによって日本という国は、東アジア共和国の日本自治区となった。

客船だと言われなければ、そこを高級ホテルか何かだと勘違いしても仕方ないであろう。ザフトとはいえ、所詮はしがない公務員である。このような場所で勤務する事が出来る者は数えるほども無いであろう。キリルは落ち着かない顔で自分の部屋を見ている。

彼に割り当てられたのは、三等船室というこの船の中では最もランクの低い部屋であるが、それでも今まで自分が暮らしてきた中で最も立派な部屋であった。三食ともに船の厨房で調理されたものが出されるのだが、それもプラントの独身寮の食堂とは比べ物にならないレベルだ。

「役得じゃねえの」

リビングでワイニンググラスを傾けているエリックがそう言った。ルーイは昼間の鬱憤を晴らすように怒鳴る。

「俺達は、豪華客船に宿泊するために地球に来たのではない！俺達は、プラントの安全保障に関わる重大な任務を帯びているんだ！それがザフトの使命であり、俺達の仕事だ！プラントの命綱を確保できるかどうかという任務なんだぞ!!」

これ見よがしに耳を塞いでいたエリックは、肩で息をするキリルを確認して手を下ろした。そして分かっていると言うと、椅子を勧めた。一緒に勧められたワインを断り、本題に入るように言う。

「気張ってる割には頭悪いよな・・・いや、固すぎるだけか」

その言葉を真正面から受け止めるような勢いのキリルの表情に、エリックは内心たじろぐ。そして咳払いをして話を始めた。日本自治区とオーブの関係である。

親東アジア勢力によるクーデターによって、日本は東アジア共和国に参加する事となったのだが、当然の事ながら反発は強かった。デモや暴動、そして軍部隊同士の戦闘などが各地で繰り広げられた。さらに国民の一部からは、東アジア共和国内に住む事をよしとせず、海外に脱出しようという動きが起こった。

旧世紀における地球温暖化で水没の危機にさらされたため住民全てが移住を余儀なくされ、そのまま無人島になってしまった南太平洋の島々に、新たな国家を作ったのだ。それがオーブである。

現在、特別行政府の一部がオーブの租借地になっているのも、そういった歴史的経緯が背景にあるのだ。さらに、別の繋がりも見えてきたとエリックは言う。

「アングラのネットワークだよ」

彼は、昼間買ってきた電子部品を取り出してテーブルに置く。そしてそれが、アストレイシリースの共有部品であると言った。キリルはその言葉の意味を理解するのに時間を有した。

路地に面した電気店にそんなものが置いているわけが無いという彼の反論に、エリックは機械屋の目にはリングとミカンの区別をつけるより簡単な事だという。そして自分くらいの機械屋でなければ、その区別はつかないと付け加える。

オーブが自国の外注戦力としてジャンク屋組合を設立したのは公然の秘密であり、それを通じて各国の軍事技術がモルゲンレーテに還流されたのもまた常識であった。世界各国の紛争地帯にMSなどの兵器を拡散させる要因にもなっていた事から、ジャンク屋組合はプラントと連合による共同作戦によって全ての金融資産を凍結されて機

能を停止し、実力部隊も大西洋によるギガフロート攻撃によって壊滅させられた。

だがもともとが個人事業主の集まりであったため、組織としての機能が失われたところで、個々の人間の活動は当然続いている。それらが仕事の便宜を図るために互いにネットワーク化を進めるのもまた当然であった。

そしてこのトウキョウは、そんなアングラネットワークの拠点の一つなのだ。オーブは、表裏の両面でトウキョウに食い込んでいる。

「川を越えて空爆すればいい」

怒りを抑えた口調でそう言った。もちろん彼にその権限はなく、あったとしてもそれは不可能であろう。利根川を越えた向こう側は日本自治区の領内であり、東アジア軍であっても行動には事前の許可が必要なのだ。例え、そこがロケット弾の発射場所であると分かったとしても、捜査などの権限は特別行政区には無い。

都心部で立て続けに起こった複数の爆破テロ事件。そこに人員を割かねばならないタイミングで、利根川越えのロケット弾である。最近はその数が減っていただけに、明らかに都心部の事件に呼応したものであろう。

放置すれば北側でも同様の事態が起きかねない。だが日本自治区は、テロリスト確保のための捜査を継続中であると、定型の文書を送ってくるだけであった。ユ・ケティンはその紙を破り捨てた。

東アジア共和国参加後も混乱する日本では、オオサカに置かれた自治政府がペキンの中央政府に対していくつもの要求を突きつけることになった。域内統合が他の国に比べて遅れている東アジアとしては、日本の混乱をこれ以上深刻化させる事はできなかつた。日本の経済力や技術力は東アジアにとっても欠くべからざるものであり、混乱による経済の疲弊やオーブへの人材流出は防がなくてはならなかつたのだ。

結果として、日本自治政府は広範な自治を手にする事となった。ト

ウキョウ特別行政府は、ペキンが勝ち取った数少ない権益なのだ。だがそれも今となって考えれば、自治政府によるトラップだったのではないかとさえ思う。

「解説してくれないか？」

「それはシュウちゃんの仕事でしょ」

保安局科学分析室で、分析官の女性がコーヒーをすすっていた。アイロンのかかっているワイシャツを着た男性が、渡された資料を睨むように読んでいる。芝浦の爆発事件で使用された爆薬の分析結果は、予想通りであった。

これで両国の事件と品川、芝浦での爆発事件は同一組織の犯行である可能性は強まり、同時にその組織が日本軍で無い事もほぼ確定された。この分析結果がきちんと採用されれば、しばらくは保安局も旧世界に出向かなくて済む。

禁煙よという声を無視して、タバコを取り出した。もはやこんなものを啜るのは絶滅危惧種であろう。

日本自治区からの数々の要求をほぼ丸呑みせざるを得なかった東アジア共和国も、日本経済の中核であるトウキョウを直接統治する方針だけは曲げなかった。逆を言うと、この方針を貫徹するために他の要求を全て譲歩するしかなかったとも言える。

ともかく、トウキョウを特別行政区として日本自治区から切り離し東アジア中央政府による直接統治を行う事になったのだが、反発は当然残った。それまではバラバラだった反東アジア活動は、特別行政区の発足に合わせるように一本化され、彼らは日本軍を名乗って武装闘争を開始した。

日本の独立を掲げる彼らにシンパが多いのは当然であり、その摘発に特別行政府は頭を悩ませる事となる。

その解決策として考えられたのが、身分証確認ゲートである。特別行政区住民を反東アジア共和国活動への関与度に従って細かく色分けし、それに応じた身分証を作る。そしてゲートを使って住民同士の接触を制限するのだ。

そして反東アジア共和国活動に直接的に関与していた者、それが濃

厚に疑われる者を隔離するために作られたのが、旧世界と呼ばれる日本人特別居留区である。かつて、日本自治区が成立した時に東アジア国籍を拒否した人とその子供や孫の世代が主な住民であった。

その後、テロ容疑者として逮捕されながら証拠不十分だった人達、無許可の集会やデモに参加した人など、身分証の再発行が許可されなかった人達が追放される形で、特別居留区に送り込まれる事になった。テロリストを一箇所に封じ込めることで、その活動を補足しやすくするという目的だったのだが、今では完全に日本軍の拠点と化している。

「彼らはテロリストと呼ぶが、独立闘争は正戦でしょう」

茶を口にしたリ・ウエンが息をつく。出来るだけリラックスして話を聞くよう心がけているのは、ボディガードの美女が殺気のこもった笑顔を向け続けているからだ。末端の人間にまであからさまな警戒を示すほどに、彼らは大西洋を信用していないのだ。

日本自治区が成立する時、大西洋連邦はそこに一切の介入をしなかった。存在したはずの安全保障条約は空証文となり、ヨコス力をはじめとする軍の権益だけを確保して日本を見捨てたのだ。

日本を捨てたオーブ、日本を見捨てた大西洋、彼らはどちらも信用していない。いや、それは敵視に近いのかもしれない。危険な相手である事だけは、報告に値する事実だろう。

「ヒュー！レペタ、大尉でしたかな。ともかくは心配無用とだけお伝え下さい」

老人は、彼の所属する部局のトップの名前を挙げてそう言った。軍内で複雑に出向や転籍を繰り返した上で、東アジア軍に潜り込んでいた彼の経歴を綺麗に洗ったという事だろう。その手の内を晒すような事を言うのは、それ以上の事が行えるという自信に他ならない。

ヒューは冷や汗で冷たくなったシャツの気持ち悪さとともに、部屋を後にする。美女の視線は、背中にまわりつくようだった。

第四話 めぐり逢い

浦賀水道を挟んで、対岸は三浦半島である。海岸沿いの崖に無理やり敷かれたような道が通るだけの土地であるが、房総半島もトウキョウ特別行政区の区域であった。三浦半島が大西洋の軍事基地となっている以上、東京湾への出入りを確保するためには房総半島側から浦賀水道を守らなくてはならない。

山肌に擬装されたトーチカや砲台が、日夜三浦半島を睨んでいる。プラントという仮想敵の存在が遠くなった今、ここは連合内部の争いの最前線なのだ。一度事が起これば、浦賀水道の上空は、行きかうビームと砲弾によって彩られるであろう。

山の頂上に設置された観測所からは、夜を照らす大西洋軍の基地の明かりとヨコスカへと向う軍艦の姿がはっきりと見える。

「距離、計測しておけよ」

屋上で望遠鏡を覗いている兵士に、上官が声を掛けた。浦賀水道はその幅の60%が東アジアの管轄となっている。大西洋の軍艦がそのラインを越えていないかどうか、チェックしているのだ。

レーザー測距儀を起動させようと視線を移したとき、兵士はまったく別の場所に光を見つけた。しばらくして音が聞こえる。異変を察知して屋上に上がってきた上官に、兵士は、望遠鏡を覗いたまま報告する。

「おそらく鋸山です！ 砲撃を受けている模様！」

「砲撃位置は?！」

「・・・山側? それも空中?！」

他の観測所からの通信も届いているが、どれも大西洋側からの砲撃は確認していない。上官が退避を命令する。観測所の兵士が慌しく動き出すと同時に、手前の尾根に砲弾が突き刺さった。

間違いなく海側からの砲撃では無い。では何者による攻撃なのか。その攻撃が、日本軍を名乗るテロリストによる手製のロケット弾などでは無い事は、山肌の袂れ方を見れば一目瞭然だ。特別行政区の領域内に侵入して、駐留軍の陣地に対して攻撃を仕掛ける事のできる戦力

など、聞いた事がない。三浦半島から大西洋軍の部隊が発進していない事は、彼ら観測要員が一番知っている。

キサラヅの港に配備されていた空母から発進したのであろうMSが、上空を飛び越えていく。まるでそれを待っていたかのように砲撃音が止んだ。

「ミラコロの限界時間まで何秒だ？」

「あと30秒です」

浮遊状態のアツザムがゆっくりと降下していく。一応民家は避け、山間に張り付くような畑を着陸地点に定めた。その上空には、音もなく浮かぶ一機のMSがいる。

それを確認した三機編隊のウインダムⅡは、警戒するように速度を緩めた。宙に浮いたMSが、ゆっくりとその腕を振るう。次の瞬間、先頭のウインダムⅡが、胴体を三分割されるような形で破壊された。

謎のMSがその背中の中の羽を広げる。スラスタの音も光も発する事無く飛ぶそのMSは、混乱した様子子のウインダムⅡに掌を接触させる。コクピット部を撃ち抜かれたような形で墜落していく僚機の姿に、残った一機が必死の反抗を試みる。

だが放たれたビームライフルはそのMSの眼前で上空に向けて弾き返され、振り下ろされたビームサーベルは情けない形に曲がってしまう。パイロットが事態の異常さに気付いた時、最後のウインダムⅡは背中をへし折られる形で地面に崩れ落ちた。

「29秒」

暗闇から湧き出すように姿を現したアツザムは、MS格納用のハンガーを降ろす。白を基調としたそのMSは、闇夜にぼんやりと浮かんでいるように見えた。

アルコールの残渣を頭の中に感じながら、ルイーは晴れた空を見上げる。飲みながら話を聞いたせい、後半部分の話はあまり記憶に残っていないかった。もう少し買っておくんだったボヤキながら、二本目のミネラルウォーターを飲み干す。ヨシトの声が、妙に頭に響い

た。

今日は、カズヤ・イシに紹介された人物に会いに行く事になっている。電車の経路については問題無いようだった。窓の外は、ビル街からこころなしか住宅街へと変わったような気がする。

都心部から少し離れると身分証確認ゲートも数が少なくなり、路地などを通れば迂回も出来るようになる。ヨシトは、地図と周りを見比べながら指定された住所を探していた。閑静な住宅街の一角、不意に林が現れる。

その林を一回りする形で、目的の家へとたどり着いた。周囲の家とは明らかに異質な雰囲気を持った邸宅だ。この国の建築様式などは知らないが、それが重苦しさを排除しながら何らかの重みを見る者に与える姿をしているのは、ルーイにも分かった。

立派な門構えに、どうやって中に入ればいいのか迷っていると、表にタクシーが止まった。そして門が開いて、中から白衣を来た人が出てくる。

「それでは、お大事に」

そう言つてタクシーに乗り込むのは医者だろう、家政婦らしき中年の女性が頭を下げている。医者の後ろについていたのは看護婦だろうか。タクシーに乗り込もうとする彼女と目が合った。瞬間、ルーイはその顔に見覚えがある事を思い出す。

彼女の方もそうなのだろう、タクシーに乗りかかったまま動きを止めている。車内からの声に返事をして、微笑だけを向けてくれた。走り去るタクシーを視線が追いかけていくが、それはヨシトの声に妨げられる。家政婦の女性が邸内に招き入れてくれた。

「往診の先生です。近くのヤクモ病院から、週に一度来てもらっているんですよ」

先ほどの帰った人の事を聞くと丁寧に教えてくれた。客間に通され、二人は居住まいを正す。目的の人物は、ここで古くから古物商をやっているという人だった。

「イシ君は元気かね？ たまには顔を見せろと言つてくれ」

いきなりそう言つて現れたのは、ブンジ・タチバナ。綺麗に禿げ上

がった頭と、顔に比べて少し小さい眼鏡、恰幅のよい体型にこの国の民族衣装がよく似合う老人だった。よく通る声で家政婦にこまごまと言いつけながら、二人と握手をする。

そしてこちらから何を切り出す間もなく話を始めた。現地の言葉なので、ルーイには聞き取るのがやつとだ。それに気付いたのかブンジが聞く。

「日本語、ダメかね」

「いえ、ヒアリングは出来るのですが」

公用語で話してヨシトに伝えてもらおうとする。ブンジがそれを制した。

「そのなまりだと、ドイツ語か」

「！」

ユーラシアでは公用語の他に地域言語が複数存在する。ルーイの母語はブンジの言う通りドイツ語であるが、それを公用語の僅かなまりで把握し、なおかつ完璧なドイツ語で話したブンジにルーイは驚きを隠せなかった。

結局、公用語で話す事に落ち着いたのだが、その一件だけでこの人物がただの古物商などではない事が分かる。カズヤ・イシが紹介しただけの事はある人物だ。彼からの紹介と聞いて、ブンジも用件の想像はつけていたのだろう。挨拶程度と考えていた彼らに、いきなり本題を振ってきた。

「何を調べたい、このトウキョウの」

「いえ・・・その・・・」

「まあ、このトウキョウも風通しが悪い。君らブンヤは息苦しくて仕方ないだろう」

そう言つてガハハと笑い、再び長い話が始まる。家政婦の女性がお茶のおかわりを持つて来たタイミングで、暇を請うた。まだ話し足りなさそうな顔をしている彼に、近いうちに協力をお願いすると頭を下げた。

帰り際に家政婦の女性に連絡方法を聞いて、邸宅を後にした。ヨシトが、一人でホテルまで帰れるか聞く。一旦、ヨコハマの通信社に戻

る用事があるのだという。路線図を持っているので大丈夫だろうと答え、ルーイはヨシトと分かれた。

腕時計を見るとまだ十分に時間はありそうだった。彼は駅に向う前に、別の場所に足を向けた。

特別行政区保安局本部庁舎は、青々とした森を目の前にひっそりとそびえている。かつては官庁街の一角を占め、国家中枢の一翼を担った建物であるが、今ではかつての面影を唯一留める建物となっている。

特別行政府が発足し、永田町と霞ヶ関はその役割を失った。特別行政府の本庁舎が新宿に置かれた事から、現在の政治中枢はそちらへと移っている。各官庁が引越しを行う中、警視庁だけはその位置を動かなかった。彼らはただの警察組織ではないが故に、桜田門と呼ばれるのだ。保安局と名前が変わった後も、彼らの役割は変わらない。

紫煙立ち込める喫煙ブースから、タバコをまとうように男が出てくる。立派な体格の壮年だ。妙に据わった目が、機嫌の悪い事を示している。

「今日は残業しないわよ。旦那とデートだから」
「分析室からも話を通すんじゃないのか!？」

狭い部屋に男の怒鳴り声が響いた。ここ最近頻発している爆弾テロ事件の捜査方針が決定されたのだが、日本人特別居留区に対する重点監視と日本軍及びその協力者への摘発強化という従来方針がそのまま続けられただけであった。保安局警備部特務課のシユウ・サクラにとって、その方針は見当違いもはなはだしいものだ。

使用された武器や爆発物の分析から、それが日本軍によるものではない事は明白である。そして両国で彼の指揮する部隊の一つを全滅させた連中と、同じ組織に属している可能性が濃厚なのだ。証拠も、その分析結果も出ているというのに、決定はそれを無視している。

両国の事件と他の爆発事件には、明確な関連性がないとして別件での捜査と決まったのも納得できない物であった。両国の事件への捜

査員の配分が極端に少なく抑えられているのだ。

「これ以上はシユウちゃんとの仕事じゃないでしょ。でしゃばると刑事部に嫌われるわよ」

「関係あるかー」

「あるわよ・・・警察官でしょ、シユウちゃんも」

そう言った女性が、コーヒーをサイホンから外した。シユウがブラックで飲むのを知った上で、砂糖とミルクを入れて差し出す。そして、総監よりも上で決まった事だと言った。それくらい分かるだろうと付け加えた女性に、シユウは顔をしかめて見せた。

特別行政府のトップ、そして東アジア軍が捜査方針に絡んできたのは間違いない。おそらく、何らかの目星をつけているのだろう。保安局に首を突っ込まれたくないものが何かを考えてみる。公表はされていないが、房総半島で戦闘行為らしきものが確認されている事にも関連するのかもしれない。

コーヒーカップを煽ったシユウに、女性が落ち着いたかと聞く。そして奇貨は置くべきだと言った。

「蛇の道は蛇、同じ穴の貉、テロリストを追えば出てくるのはテロリストよ」

トウキョウ特別行政区の成り立ち、東アジア共和国の成立に関する歴史。そういったものが関わっているとしても、市民を標的としたテロ行為は許されるものではない。同じ言葉を話す者として複雑な心情を持たざるを得ないが、日本軍はテロリストに他ならないのだ。

警察官としてその摘発は当然の仕事であり、その捜査線上に別のテロ組織が浮かび上がる可能性もある。彼はカップを置いて部屋を出て行く。

船を出る直前にレポートが届けられた。臨時と書かれたそれは、房総半島における東アジア軍襲撃事件に関する報告であった。

「流石だな、ジュンコ姐さんは」

エリックは報告書の写しを眺めながら呆れたように言う。日付は

今日であり、事件の起こった日は前日の夜であった。それほど早くこんな情報入手できる組織が、特別行政区の地下にうごめいているのだ。ゾクゾクするなとつぶやく彼に、キリルは渋い顔をした。

確かに、手探り状態での活動が続く彼らにとって、彼女らのルートは非常に有益ではある。だが相手は、それに見合うリターンを要求してくるはずだ。今のまま一方的に借りを作る事は、ザフトにとってのちのち不利益となるのではないか。

だからこそ、独自に情報入手できる体勢を作らねばならない。それは結局、自分の足に頼るしかないのだ。

「行くぞ」

それだけ言うと、キリルは食堂を後にする。今日はレコード会社の社員という肩書きで、放送局に挨拶回りをする事になっていた。グレートバリアリーフ号での任務は、基本的に地味な作業ばかりである。特別行政区と日本自治区で発行される全ての新聞で記事を分析をしたり、オピニオン誌を中心に世論の調査をしたり、テレビやラジオそしてネット上からの情報収集をしたりだ。

メディア関連を中心とした企業回りもその一環である。エリックはその中からアングラに繋がる人間を見つけたいと言っていた。特別行政区内の報道はかなりが規制されており、表向きの報道は当たり障りのないものばかりである。

だが、電気街の一角に平然とジャンク屋組合の残党が居座る都市である。放送局や通信会社などが、何らかのネットワークを作り上げている可能性は高いと踏んでいるのだ。

「そのためにもまずは顔を売って、信頼関係を構築する」

だからもつと愛想のいい顔をしろとエリックは笑う。眉間の皺は二枚目を台無しにすると茶化す彼をキリルは無視した。

最寄りの駅から電車に乗り込み、庭園の緑を視界の端に入れながらキリルは車内を見回す。夕方近くになって、少し人が増えてきたのだろうか。汐留の駅を降りた時、エリックが間違ったと額を叩いた。駅を挟んで反対側に出てしまったのだ。ため息をついてもう一度駅に戻ろうとした時、すぐ近くで爆発音が響いた。

ビルとビルの間から、丁度煙が上がっている場所が見える。キリルは反射的に走り出していった。周りの人間は、何が起こったか把握できていないような顔をしている。既に何件ものテロ事件が起きていながら、この人間は危機意識が向上していないようだ。二度目の爆発で、ようやく人々は同じ方向に向って走り出す。キリルはその人の波をただ一人逆走していた。

「フロッグマンか!？」

海の水を引き込んだる水路から、ダイビング用のスーツを着た人間があがって来るのが見えた。キリルは咄嗟に物陰に転がり込んで、投げつけられた音響照明弾をやり過ごす。

世界中で、その形には大きな違いは無いようだ。病院の位置はすぐに分かった。大きな病院というわけではないが、一通りの診療科のそろった総合病院である。待合室には何人も人が待っていた。

見渡したところで、都合よく相手が見つかるわけも無い。そもそもこんな訪問は仕事中の相手に失礼かもしれない。ルーイはしばしの逡巡を見せた後で受付に聞く。

「・・・ああ、カグタさんの事かな。待って下さい、まだ帰ってないと思いますよ」

受付の女性が後ろの人に何事かを聞いている。そして、待合室で待つように言われた。ルーイが空いている席を探そうとした時、目当ての人物が現れた。

この国の人では無いと分かる艶やかな浅黒い肌。僅かにウェーブのかかった髪は、無造作に束ねられているだけだが、それでいて何かが損なわれた感じはしない。控えめな服装の下であっても、その官能的でさえあるプロポーションは隠しようが無い。微かに差された淡いピンクの口紅が、はにかむように微笑んでいる。アメリカ・カグタが丁寧に挨拶をした。

ルーイは思わず居住まいを正してしまった。そしてぎこちなく自己紹介をする。オオサカの音楽イベントでたまたまインタビューを

行った女性に、まさかトウキョウで出会うとは思わなかった。

「仕事場まで押しかけて、すみません。あまりにも思いがけない偶然だったのだ」

「いえ、私も驚きました」

今から家に帰るところだという彼女と連れ立って病院を出た。会話の糸口を探ろうと、ルーイはオオサカのイベントの話題を振る。チケットは、ブンジ・タチバナからもらったもののだそうだ。彼はその手の流行にも詳しいらしく、かなり早い段階でチケットを入手していたのだという。

トウキョウには取材に来ているのかと聞かれたので、ルーイは一応そう答えておいた。だが、何をどのように取材するかも決められておらず、ただトウキョウに滞在可能なビザを持っている関係で送り込まれた事もちやんとおいた。

複雑な微笑みを浮かべたアメリカに、ルーイは出身地を聞いた。彼女はアフリカだと答えて遠い目をする。

「内戦はひとまず終わったのですけど・・・」

経済的な復興などいまだ始まってもないアフリカの現状では、医療従事者といえどもまともな職場は無く、彼女のように国外に職を求める者も多いのだという。彼女の送金が、アフリカにいる母親の生活を支えているのだそうだ。

母親と限定して言った彼女に、ルーイはそれ以上を聞かなかった。トウキョウに来てどれくらいかと尋ねると、もう5年になるという。彼女は、東アジア政府が行っている労働研修制度を利用して来た。アフリカに比べて格段に進んだ東アジアの技術を学びながら働けるという制度で、他にも技術者などによく利用されている制度だった。

渋谷駅の構内で二人は別れた。ルーイは宿泊先の電話番号を教えようとおこうとする。だがホテルの電話番号が書かれた紙を取り出した時、彼女の姿は既に雑踏の中に見えなくなってしまっていた。

夜はすっかり更けてしまっていた。月が頭の上から光を投げかけ、野良犬が寂しげに道を横切っている。キリルはあたりを見渡し、とりあえず明るい方に足を向けた。テロ現場で見つけた怪しげな集団を追いかけてきたはいいが、完全に見失った上に、自分が何処にいるかも分からなくなってしまった。

相手が車での逃走を図ったため、彼もタクシーを使ったのだが、キリルの身分証があまりにも特別行政区内をフリーに走れる事を怪しんで、運転手が途中で彼を降ろしてしまったのだ。キリルは恨めしげに身分証を見る。

エリックともはぐれてしまったが、彼に関しては気にする事もないとキリルは思う。そのくらいの有能さは認めていた。

「南千住・・・か」

黒々とした広大な貨物駅を背後にしたその駅だけが、明かりをともしていた。周囲に目立った建物は無く、駅周辺だけがこじんまりと明るい。

すぐ東を流れる隅田川を渡ればそこは日本人特別居留区であり、以前は隅田川貨物駅が東アジア軍の物資集積地に使われていたことから、特別行政区発足当時はテロの一番の標的とされた場所であった。そのため一般住民の多くは別の街に移り住み、今は一種スラムのようになっているのだ。

貨物駅は未だに軍も使用しているため、軍関連の人間を相手にする商店が駅前に集まっている。その多くは飲食店であり、またその半数はいかがわしい店であった。少なくともキリルにはそうとしか映らない。スーツを着た客引きの男を邪険に追い払う。

駅は既にシャツターを下ろしていた。明け方まで電車は無い。空腹を感じるが、適当な店で食事をしようという気にはなれなかった。コンビニエンスストアで軽食と飲み物を買って、駅前のベンチにたたずむ。

あちこちから酔客の大声が聞こえ、タクシー乗り場では女の腰を抱いた男がひっきりなしに降り降りしている。それに冷ややかな視線を向けながら、キリルはゴミ箱を探した。テロへの警戒という奴なの

かゴミ箱にはことごとく鍵がかかっており、彼はそれを買った店まで引き返す。

電車が動くまでの五時間半ほどを何処で過ごそうかと、キリルはコンビニエンスストアの明かりを背中に受けながら思う。当ては無いが、とりあえず歩き出した。

遠くで言い争いが聞こえる。一人は男の声だが、もう一人は女性のようだ。しばらく立ち止まっていたキリルは、その声の方向に走り出した。女の声が変化したのだ。耳を澄ませながら、その方向を探す。

「ダメー！ 止めてって言うてるでしょ！」

「客だぜ、俺はよー！」

路地とも言えないビルとビルの隙間、人かもみ合っているのが見える。いや男が女を壁に押し付けているのだ。キリルの拳は声よりも早く男の顔を捉えていた。

「クズが！ 恥を知れ!!」

「……てめえっ」

次の瞬間には、男は鳩尾への一撃で気を失ってしまう。赤ら顔の男が、奇妙な格好で地面に転がっていた。キリルは振り返って女を見る。

扇情的なドレスを着た女は、露わにされた肩を隠すように服を直す。そし気を失っている男を覗き込んだ。そしてキリルに非難めいた視線を向けた。その目に、キリルは戸惑う。

「いや……これは……」

「……構わないわ、別に悪気は無かったのでしょ」

「しかし、君は現に……」

「確かにね。でもそれは、こいつが同伴の金しか払っていなかつただけの事だから」

後から請求してもよかつたと言って、女は気絶した男を肩に担ぐ。手を貸そうとすると、店まで連れて行くだけだから構うなという。そして、悪いと思っっているなら店に顔を出してと、名刺らしきものを投げてよこした。

『キャバレー・ユンミン』とピンクの稚拙なデザインで書かれた店名

の下に、マリアと名前が書かれている。

連合とプラントとの戦争がもたらした、地球圏全域に及ぶ経済的疲弊は、再構築戦争によって形成された国家集団に対する再考を迫るものとなるだろう。現在存在する国家集団の内部のみでは、経済を立て直す事が不可能だという認識が育ちつつあるのだ。経済圏を拡大し、自由な交易によって偏った資源を効率的に配分する必要がある。

経済のブロック化と戦争遂行に必要な様々な国家統制も、戦争被害の復旧が終わった時点で不必要となった。逆にそれらの統制は、経済復興のために必要な自由貿易を阻害する要因にもなる。ましてや現在の国家体制は、内部にいくつもの不安定要因を抱え、統治するだけで多大なエネルギーを要するものとなっているのだ。

経済を完結できるだけの広大な領域を抱え込み、国家によって経済をコントロールするという再構築戦争後の国家モデルはもはや通用しない。国家そのものはダウンサイジングし、それらを自由貿易によってネットワーク化することによって、地球圏全体で経済を循環させるという旧世紀の国家モデルが目指されるはずである。

大西洋連邦は南米の直接統治政策を転換し、ユーラシア連邦は国内を複数の地域に分けて大規模な分権化を推し進めている。再・再構築と呼ばれるこの動きの中で、北海道の問題は生じていた。

「あそこはよい所です。日本である事を忘れるほどに広い」

はじめて見る地平線には感動を覚えますよと言って、老人は微笑んだ。ヨコハマの中華街、リ・ウエンが客を迎える時に使う店はその一角にある。日本自治政府の高官が円形テーブルに並んでいる。

料理を勧め、思い出話をとうとうと語る老人に、高官達は箸が進まなかった。彼らの懸案事項は北海道の帰属問題である。

現在ユーラシア領となっている中国東北地方と北海道の返還が、そのユーラシアから打診されているのだ。中央アジア地域での国境問題とセットになった交渉であるが、その北海道が日本自治区領となるのか否かが問題であった。

東アジアは、大西洋やユーラシアのような再・再構築の動きが活発ではないのだ。ブレイク・ザ・ワールドでペキンが大きな被害を受け、経済の中心はシャンハイに移ったのだが、それが東アジア中央政府の警戒心を強めた。シャンハイ閥の勢力拡大を恐れるペキンの中央政府は、世界の趨勢に抗うように中央集権の強化を進めている。そのため、ユーラシアが返還を打診する両地域ともに、中央政府が直接統治に乗り出す事は十分考えられた。

ユーラシアとしては、北海道に関しては返還を規定路線と考えており、東アジアの側で話がまとまれば、すぐにでも返還手続きが行われるとの事であった。だからこそ日本自治区としては、打てる手を全て打っておかなくてはならない。リ・ウエンとの接触は、もっとも重要なものの一つであった。

「我々としても側面支援は・・・」

「房総半島のアレですか？ やり方が愚かだ」

老人は目の笑みだけを消す。そして条件闘争などに興味は無いと言った。意図を見透かされたような言葉に、高官達は目配せを隠せない。

「ペキンは、我が祖先よりその国土を奪い、我が両親よりその郷里を奪った」

これはビジネスの話ではないと老人は言う。そしてあなた方もそうであろうと問うた。再構築戦争とは新たな国が生まれたのではなく、幾多の国が失われた戦争なのだ。それを取り戻したいのは同じだろうと、老人は穏やかに問うた。

これまで同様に互いの協力関係を継続する事は確認される。ただ、自分達を自治政府の駒だと考えているようなら、考えは改めた方がいいと老人ははつきり言った。トウキョウに対して行える事は、当然オサカに対しても行えるのだと。

残った料理を詰めた折り詰めを持たされ、高官達は帰路に着く。緊張の糸が切れたように息を吐いた一人が、忌々しげにつぶやいた。

「あの老人、台湾華僑だったな・・・」

「あれは例外だ。だが例外だからこそ、ああまでなれたのだろう」

単に日本で生まれ育ったという愛着だけではない。祖先から受け継いだ恨みもまた、あの老人の原動力なのだ。ビジネス上の損得勘定で動くのではないだけに、それを御する事は難しい。

キサラズの港の隅に、東アジア軍のMS空母が停泊している。大西洋軍の要塞が東京湾の入り口にあるため、東京湾の各港には常時軍艦が待機している。岸壁に横付けされたトレーラーの積荷がクレーンで引き上げられ、その幌が外される。

空母に搭載されているMSは全て移動され、MSデツキはその積荷を調べるための広いスペースとなっていた。運ばれてきたのは、先日の戦闘において撃墜された三機のMSである。どの機体も、一目で普通の壊れ方ではないのが見て取れた。

技師や作業員が、それぞれの機体に取り付き調査を開始した。コクピットから抜き出された戦闘データや画像、装甲の一部などのサンプルは先に専門機関のほうに送られており、その結果との照合も行われる。

「大佐、いらっしやるのであれば迎えを用意・・・」
「構わん、それより見せてもらえんな」

ユ・ケティンはヘルメットだけ受け取ると、調査用の資料に目を落としながら各機体を観察する。機体の破壊跡に、高熱による変性は確認されていない。戦闘データからも、ビームによる破壊ではない事が裏付けられている。

そして装甲断面の分析から、何らかの強い圧力によって機体が破壊されている可能性が示唆されていた。ケティンは技師の指差す部分を見上げる。コクピット部分に穴をあけられた機体である。

「例えて言うなら、杭打ち機で金属製の杭を打ち込まれたような傷です」

ただ、MSの装甲の中で最も堅牢に作られているコクピット前面装甲をこのように打ち抜くのは不可能に近いとも言える。戦闘データから飛行状態で撃墜された事は分かっているのだが、杭打ち機のような

武器を使用された場合、穴が開くよりも早く機体が吹き飛ばされるはずだ。

MSの装甲素材よりはるかに固い物質で作られた杭を、レールガン並みの速さで打ち込めば可能かもしれないが、破壊跡から推測される杭の大きさとその速度を計算すると必要となる電力はMSに積めるものでは無いという。

もう一機の機体は、実体剣のようなもので破壊されたようにも見える。これも技師の話では切り口が異なり、押し切ったというより引き千切られたような形状の破壊だという。最後の機体は、文字通り機体を強い力でへし折られていた。

「強い圧力による破壊・・・か」

それが何によるものかは全く分からないが、ビームライフルを弾きビームサーベルを捻じ曲げる現象と何らかの関わりがあるのでないかと、調査結果は結んである。ケデインは、たいして意味のないその報告に首を捻った。どちらの側面から調べを進めるべきかということだ。

敵がMSを運用している事は明らかであり、その線から相手の足取りを追う事は可能であろうし、定石のアプローチでもある。だが、この奇妙な機体の破壊のされ方に引っかかりを感じるのだ。以前、荒川上で接触したアンノウンも、ビームライフルを弾いたという報告を受けている。

確証は無いが、そのアンノウンと今回の敵MSが同一の機体である可能性は高いと彼は見ている。アンノウンの捜索には定石のアプローチを試みているが、今のところ進展はなかった。

何らかの特殊機構を備えたMSを開発できる組織、そういった観点から捜索を行うべきかもしれない。ケデインはもう一度報告書に目を通す。

第五話

SEED／エヴィデンス

広い窓から見える山々には少し霞がかかっているが、穏やかな日差しは建物の中にも届いている。白を基調としたシンプルな内装のカフェスペースには、昔の流行歌がBGMとして流されていた。青年が一人、それに合わせて微かにリズムを取っている。

あどけなさの残る顔だが、それ以外にはこれといった特徴の無い普通の顔。ただ、深く吸い込まれそうな目の色だけが印象的だ。

それを遠目に眺める男の顔はすぐれない。時々、道を間違えたのではないかと思ってしまう。少なくとも、今の研究課題は自分の理解の範疇を超えていると男は感じているのだ。

「チン博士、どうなさいました」

同じように白衣を着た若い男が快活な声を響かせる。ミツネ・ササ、現在行われているもう一つの研究の責任者だ。オーブから難民としてプラントへ行き、ザフトの開発部門に在籍していたが、クライン派失脚のあおりで地球に逃れてきたという話だった。軽食の乗せられたトレイをテーブルに置き、向かい側の椅子に座る。

二人の研究はともにSEEDに関連するものであった。その発現に関する研究と、発現によって生じる現象に関する研究である。後者の研究を行っているのがミツネであり、それは実用ともいえる段階に入っていた。滔々と自説を述べているのは、その自信からであろう。

だが実用といっても兵器への転用であり、その原理については未だに不明な点の方が多い。チン・ヤンチャンはそれを指摘しておいた。「もちろんです。ですが、使えたとアピールしなくては資金も何も手に入らない」

そしてミツネは、早く研究成果の開示を行えば良いとヤンチャンに勧めた。彼の研究も、既にある程度の結果は出ているのだ。それには返事をせずに、BGMに耳を済ませている青年へと視線を向ける。

SEED、「超進化的要素を定められた個体」。この概念が登場したのがいつごろであり、また何者が提唱したのかは諸説ある。もともとは、プラント系の新興宗教に関連する人間が言い出したという説が有

力であるが、少なくとも前大戦時には既に存在していた言葉である。ただ、もともとが学術用語で無いだけに、それについて研究を行う者は皆無であった。

そんな言葉がクローズアップされたのは、レクイエム戦役におけるフリーダムの異常な戦闘能力であった。機体性能をカタログ上で評価すれば、フリーダムとザフトの制式機であったザクとの性能差は、いかに核動力を用いていたとしても、1対0.1を下回るはずがないとされている。だが実際には、フリーダムはただの一機でザフトの宇宙要塞を破壊した。

戦後、ザフト、連合ともに、フリーダムの異常な性能を新兵器へとフィードバックさせるために研究を進める事となった。だがその研究は、フリーダムのパイロットがメンデルで作られた最高のコーディネーターである事が判明して以来、下火となる。あれを兵器として使用するには、コストもリスクも大きくなりすぎると判断である。

だが一部の研究者は、異常な性能を発揮したMSの中に、通常のコーディネーターやナチュラルが搭乗していたものがある事を突き止めていた。そこにSEEDという言葉が当てはめられる事となる。

現在その言葉は、「超進化的要素を定められた個体」という意味で使用される事は無い。特殊な条件下で人間の脳組織・神経組織が一時的に特異な活性化を見せる現象、といった程度の意味で用いられている。

チン・ヤンチャンは、SEEDを発現させるための条件らしきものを一つ発見していた。彼の視線の先で、青年はずっとBGMのリズムに乗っている。

役所の縄張り意識は、役所の内部に留まるものではない。その関連する業界も、役所の縄張りに従って、線が引かれてしまうのだ。その線を跨ぐとする者は、理屈よりも先に警戒されるのが常である。それを避けるためには、その線を跨がないように注意するか、常にその

線を無視して移動するかである。シユウ・サクラは、後者の人間であつた。

日本人特別居留区との境である国道14号線以北の隅田川と荒川の川沿いには、一般住民はほとんど住んでいない。だが決して寂れてはいないのだ。濁つたような賑わいがそこにはある。

「にいさん、勘弁してくれよ」

立ち飲み屋で隣り合った男にそう言われた。シユウは缶詰のサンマを口に運びながら、笑っていない目を男に向ける。カップ酒をもう一つ注文し、男に勧めた。渋々それを受け取った男が、周りを気にするように口を開く。

もともと彼のいる警備部は、一般的な捜査活動をする部署ではない。だが対テロ作戦の前線に立つ者としては、独自の情報を持っている方が安心できるのだ。彼が今いる浅草界限は、テロ支援組織の中核であつた。

テロ支援組織といつても、特別居留区に住んでいるのは日本人であり、日本軍とは無関係な一般住民も多い。特別行政区の政策によって、生活必需品の輸送まで厳しく制限されている特別居留区にとつて、これら支援組織が運び込む物資が生活を支えているのだ。

幅にして百メートルほどの川である。夜の闇に紛れて小さなボートで食べ物や衣類を運ぶのを全て摘発できるわけも無い。

「お仕事、ご苦労様です」

その声にシユウが振り返ると、立ち飲み屋には似合わないスーツの男が丁寧にお辞儀をしている。その温和な微笑みは、慇懃無礼という言葉がぴつたりだと思ふ。カップ酒をおごつた男はいつの間にか逃げていた。シユウは残つた酒をあおる。

「セレブに用はねえよ。それより親分に挨拶したいんだが」

「親父も忙しくてね。ま、立ち話も何です、別の店に行きましょう」
スーツの男は、表に止められていた車に乗り込む。取り巻きの連中
に促され、シユウも車に乗った。男は指定暴力団・菱丘組の最大会派
である凌雲会副会頭、コウキ・ヨシオカである。

テロ支援組織と言えば大事であるが、ようはマフィア組織が特別居

留区との密貿易を取り仕切っているのだ。特別行政区にも食い込む彼らの政治力が、それを可能としている。

「親父も耄碌してね。ヤクザが天下国家を語り出したら終わりだよ」
「語らんと、生きていけなくなるぞ」

コウキが嫌な顔をする。シユウは自分の持つ情報をいくつか提供した。どれも断片で、使い道の分からないものばかりなのだ。コウキが示した情報もまた、断片ばかりであった。南千住をうろつく見慣れないコーデイナーター二人組の話、タマユラ地区の警備保障会社にオーブの元公安警察官が着任したという噂、そして善隣幫の活動活性化。

二人はしばし顔を見合わせる。どうやら、トウキョウ特別行政区を舞台にしたゲームは、かなりの数のプレイヤーを抱えているらしい。

もとは高級住宅街だったそうだが、特別行政区の発足に伴って住民の数が増えているそうだ。身分証確認ゲートによる移動の不便さやテロ事件の発生を嫌って、都心部から引越してくる人が多いのだという。そのせいか、住民同士の交流が減って防犯にも悪影響があると家政婦の女性はこぼしていた。

ルイーはブンジ・タチバナの邸宅に足しげく通っていた。老人のどこまで本当か分からない武勇伝を聞きとめ、骨董品の自慢に耳を傾ける。取材自体が目的で通っているわけでは無いので、それで十分だった。

タチバナ邸にはいつも来客があった。ルイーより先に来ている客がいないことが無く、ルイーより後に来る客が絶える日は無い。そしてどの客も、ルイーよりはるかに身なりのいい人達である。

「長生きすると人付き合ひも増えてな・・・ヨシエさんや、昨日先生が持ってきてくれたお菓子、アレ出さない」

応接間に現れたブンジが、家政婦の女性にそう言いつけて向かいの椅子に座る。手にしていた掛け軸の説明を始めたブンジの話を聞く振りをしながら、庭の緑を眺めていた。だから話題が変わったことに

気付けなかったのだ。

普通なら、そういう話題になりそうな時は、機先を制して別の話題に持っていくのだが、骨董自慢からユーラシアの政治情勢に話が変わるとは予想外だったのだ。ルーイは時間を稼ぐように出された菓子に手を付ける。

「いや、彼女の政策は間違っておらんよ。確かに現実主義が過ぎるくらいはあるが、極めて真つ当だ。そして周りの国が嫌がる事をよく分かっている」

現在ユーラシア連邦の首相を務めるのは、ルーイの母親であった。もつとも、実の親ではなく養母である。おおつぴらに言いふらしているわけではないが、隠していた訳でもない。どこからかそういった話を聞いて話題にしたのだろう、ルーイは曖昧に笑っておく。

尊敬もしているし、愛してもいる。だが、それでもなお複雑な感情を抱かざるを得ない親なのだ。自分の出自や養子という事とは無関係に、彼女らの生き方に、疑念のようなものを感じている。

だからブンジが言った、いつか政界への転身を考えているのかという問いには、即座に否定を返しておいた。ユーラシアの政治事情や外交的思惑など、ルーイには無関係な話であるし、そういう話題を求められても困るだけですと言う。

ブンジは気に留めた風も無く、話題を変えた。次に彼が取り出したのはサイン付きの音楽ディスク。オオサカで行われた、ポップスハーモナイズサマーライブの限定ディスクであった。彼は掛け軸の時よりも熱心に、その限定ディスクの素晴らしさを力説する。

日本人特別居留区への物資は正規の配給品か人道援助物資でない限り、マフィアによるものである。そしてそれは生活関連物資ばかりではない。流石に火薬や武器などをそのままの形で流す事は少ないが、日本軍の活動資源となっている事は確かである。

特別居留区の人々は、日本自治区の各地に散らばっている親類縁者からの送金やシンパによる寄付金などを原資として物資の購入資金

としている。そして、日本軍の資金源は覚醒剤であった。

特別行政区側から原料を仕入れ、それを化学処理して覚醒剤にするのだ。現在主流となっていて覚醒剤は、特殊な薬品を使用するものの化学処理工程そのものは簡便なため、特別居留地内部でも作成が可能なのだ。それらは再びマフィアの手によって、東アジア各地へと流通させられる。

「そんなもんを首都のど真ん中に存在させ続けてるってのがね・・・」
エリックはパック牛乳のストローを啜えながら言った。実際、テロ組織と言っても大戦中はほとんど活動実態が無く、特別行政区としてもマフィアの一組織程度の認識しかなかったというのが実情らしい。それだけに、爆破事件をはじめとするテロ活動を活発化させている近年の状況に、神経を尖らせているのだ。

確かに、このような東アジアの内部情勢は調査すべきものであるし、マフィアなどそのままアングラの組織である。こういった連中の根っこがアキキバラのジャンク屋残党に繋がっている可能性はあった。

だがザフトの提携相手としてマフィアやテロ組織が相応しいかどうかは別の話だ。リスクは大きく見返りは少ないのでは無いだろうか。だが、キリルはやけに熱心に調査を進めていた。

広大な貨物駅を横目に見ながら駅前へと足を進める。先を歩くキリルの背中を見ながら、堅物の彼にしては珍しい事だとエリックは思う。

「何だ？」

その視線に気付いたようにキリルが振り向いた。エリックは何も答えずに、帰りの時間を確認しておく。夕闇が迫り、駅前はようやく賑やかになりだした。飲食店と風俗店でほとんどを占める駅前である。昼間に空いている店などほとんど無い。

客は東アジア軍の人間が多いようなのだが、いわゆる将校の姿はほとんど無く、下士官以下の者で占められている。あとは、この近辺を根城にしているマフィア組織の人間とその取り巻きといったところだろう。ガラの悪さで言えば、甲乙付けがたい連中であった。

ナチュラル相手に喧嘩で負けるつもりは無いが、そういう事の苦手なエリックとしては面倒に巻き込まれない事を願うだけだ。もつとも、キリルが同じ思いかどうかは知らない。きつと、真っ先に行くべきは彼が酔客を叩きのめす前にそれを止めることだろう。

早くも路上に客引きが立ち始めている。だがキリルに対して、「たまにはおネエちゃんと一緒に飲まねえ？」と言ってみようとは思わなかった。

出張というのが嘘だというのは、宿泊場所に指定されたのがホテルではなく短期入所者用のマンションだった時点で分かっていた。だが、それも悪くないと思い始めたのは、ここにいる限り残業やのべつまくなしにかかってくる取り引き先からの電話から逃れられるからだ。

創業者である社長に誘われ夫婦そろって入社したはいいが、ろくに新婚気分すら味わえない生活が続き、幾度かその結婚生活に危機も訪れていた。だから、このトウキョウ出張は渡りに船のようなタイミングだった。1LDKの部屋に、夕飯の支度をする音が響く。

「お帰り、ダーリン」

「ただいま」

フライパンを握る妻と軽くキスを交わし、夫はシャワールームに向う。妻の方は用件が先に済んだために、一足早く戻ってきて食事の支度をしていたのだ。まだ日の沈まないうちにシャワーを浴び、妻の手料理をつまみにビールを飲む。夫の目頭には熱いものがこみ上げる。

これが人間らしい生活というものだろう。夫婦はともにコーデイナーであるが、この出張中に子供が出来ても何ら不思議は無いと思っていた。

「あ、社長からファックス。報告書遅いつて」

「この前のじゃダメってか・・・」

食事をしながらお互いの仕事の経過を報告しあう。何はともあれ、彼らは社会人なのだ。地球における自社製品の販路拡大が今回の出

張の目的であるが、単なるセールスで地球に降りてきたのではない。他社製品の調査や地球の情勢分析、市場のリサーチなどやる事は多岐に及んでいる。

MS技術の遅れていた東アジアが、MS技術から転用した作業用汎用機械の有望な市場だという事に間違いはない。しかし、問題は政治であった。経済の中心となつているシヤンハイや、マストライバーの本格始動に向けて動いているカオシユンなど、南の方は安定しているのだが、北の方はゴタついている印象だ。

日本自治区もその影響を受けている。ペキンの中央政府が統括するトウキョウ特別行政区とシヤンハイとの繋がりが強い日本自治政府の間には、隙間風のようなものが吹いていた。

それが何をもたらすのかは、誰にも分からない。だが、その隙間風は突如突風になるかもしれないのだ。

「オーブも政府としてはこの地区をいつまでも租借地とし続けるつもりは無いでしょう。ですが、ここに出資しているのは政府だけではない」

今日会った警備保障会社の人がそう話していたのを思い出す。単に東アジア内部に留まる話では無いようなのだ。民生品の売り込みは、日本自治区情勢が沈静化してからでなくては不可能との報告が必要かもしれない。

プロモーション用に本社から回されて来た機械がコウベに到着したという報告があった。日本自治政府へのPR活動は、オオサカに滞在している社員がやる事になつているので、特に関係はなさそうだ。グラスに残ったビールを喉に流し込む。後片付けは夫が引き受ける事になった。

特別行政区に駐留する東アジア軍の増派が決定された。既に先遣部隊がヨコタに到着し、東シナ海方面に配備されていたMS空母も二隻、東京湾に向っている。房総半島の一件は衝撃だったのだろう。ヨコスカの大西洋軍を刺激する事になるだろうが、致し方ない。

問題は、自分の部署が要請しておいた増員の要求が不十分にしか通らなかった事である。軍のプレゼンスだけで事態が好転するとも思っているのだろうか。

そもそも房総半島の事件は、東アジア軍の存在そのものが、治安に對して張子の虎以下の効果しか持っていないから起きたのである。数を増やしたところでそれが改善するはずも無い。ましてや、下手なデモンストレーションは敵を無用に刺激し事態を悪化させかねない。

書いても無駄と分かりつつ書かずにはいられない報告書を送信し、ユ・ケデインは眼鏡を拭いた。報告書の文面を整えると、今日の論説記事としてデスクに提出する。どうせこっちもボツだ。

久しぶりに顔を出した報央社のトウキョウ支社にもめぼしい情報は入っておらず、無駄な一仕事をさせられただけであつた。報央社は世界各地に支社を持つ東アジアの報道機関であるが、それが軍諜報機関の隠れ蓑だというのは、その筋では公然の秘密のようなものだ。ケデインは部下と連絡を取り社を出る。

彼は自分のポジションに限界を感じていた。他にも複数の諜報機関が活動しているのだが、他のセクションとは情報共有すらまともに出来ていない。事態はそんな縄張り争いを許すほど余裕があるわけではないにも関わらずだ。

謎のMSに関して、いくつか有力な手がかりらしきものを見つけてはいるのだが、その繋がっている先は、軍の諜報機関が単独で動けるようなものではない。東アジアにかつて存在した特殊部隊や、アングラの団体、そして海外の企業の影すらチラつく。ミラージュコロイド搭載の空中砲台まで運用するとなると、根拠地は特別行政区の外側だろう。

「この上、まだ悪い報せか？」

落ち合った先で部下に愚痴る。恐縮しながら簡単なレポートを差し出した部下に、ケデインはため息しかつかなかつた。日本人特別居留区に對する、大掛かりな軍事行動が計画されているようだ。以前、アンノウンの介入で失敗したテロリスト掃討作戦よりも徹底的な作戦である。

空爆ではなく明確な対地攻撃と20機以上のMSによる降下作戦。テロリストと一般市民の区別を付ける気は全く無くなっている。単に、特別居留区の日本軍を壊滅させるだけではなく、特別行政区いや日本自治区の全ての市民に対する示威行動と言えるだろう。さらにそれは、ユーラシアや大西洋同様に、再・再構築を検討しだしたシャーンハイに対するペキンの回答だといえた。

反発も覚悟の上ではない。反発すれば同様に軍の標的にするぞという脅しなのだ。下手な事この上ないデモンストレーションだった。

諜報部局には、作戦と同時に特別行政区内の反東アジア活動家の拘束が命じられる事になっているようだ。報央社には、作戦に関する全ての報道の統制が命じられるはずだ。ケティンはコーヒーでなく紅茶を頼めばよかつたと思う。イラつく頭にコーヒーは逆効果だ。

東アジアを分割させない。その最終的な目的は正しいが、そのための手段が下手すぎる。だが、走り出した軍が作戦を変更する事は無い。ならばその下手なやり方をどこまで誤魔化せるかだ。ケティンはメガネをはずして鼻筋を押さえた。

朝早くから、都会は人が動き回っている。身分証確認ゲートが、通勤ラッシュ緩和のためのモードに切り替わる前に移動したいと考える人も多いそうだ。時差出勤を強制する仕組みがある事で、人々の動きは自然とそれに対応したものになっていくようだ。

ルーイ達の今日の取材先は大洋州に本拠を置く慈善団体だった。場所が荒川の東側なので、行くのに不便な場所であった。朝早くに出たのはそのためである。

日本人特別居留区を横切る形で通っている路線は全て封鎖されているため、かなり遠回りをしないと目的地に到着しないのだ。つくづく不便な都市であった。そこまでするまでもなお、固執するだけの意味があるのだろうか。窓から延々と都市の見える風景を見つめた。

「ようこそいらつしやいました」

町中の平屋の建物がその団体のトウキョウ支部であった。立派な

NGO団体を予想していたルーイとしては、拍子抜けする感じである。だがその団体の代表者は、予想通りの人物であった。大洋州の本部はスタッフに任せ、ここで陣頭指揮を取っているのだそうだ。

凜とした姿勢の女性は、優雅な物腰で椅子を勧めると自らティーカップを取り出し紅茶を淹れる。たくさん職員を雇う余裕はありませんからと笑って、カップを配った。

この団体を取材の対象に選んだのは、特別居留区への人道援助を継続的に行っているほぼ唯一の組織だったからだ。人道援助とはいえ、特別居留区への援助は簡単なことではないはずだ。そう問いかけるヨシトに代表の女性は、だから職員を雇う余裕が無いと言って笑った。

「ありていに言えば、金ですか？」

「大きな声では言えないですけど」

特別行政区のトップが気に留めない規模の援助を、現地の行政関係者に便宜を図ってもらおうという形で行っているのだ。限りなく黒に近い合法だと女性は言う。行政だけではなく、様々な関係者がそこに介在しているので、困難も多いようだ。

特別居留区との間で密輸まがいの事を行っているマフィアとの折衝なども、この女性が行っているであろうか。清楚だが地味なたたずまいからは、少し想像し難いような気がした。だが彼女を呼びに来た男性の姿に、少し納得を覚える。

スーツの上にエプロンという妙な格好をした男性だが、屈強な体つきと精悍な顔つきはマフィア相手でも大丈夫だと思わせる。

御覧になつていきますかと、女性は施設を案内してくれる。建物は孤児院なのだ。裏には小さいながら、芝生の院庭があり、子供たちがめいめいに遊んでいた。その相手をしているのが、これまた屈強な男達であった。子供達が代表の女性を見つけて駆け寄ってくる。

「お嬢！ ああのね・・・」

「こら坊主、お嬢じゃない。ちゃんと院長先生と呼ばねえか」

「あなた達が私の事をいつまでもそう呼ぶから、子供達が真似するのです」

「ですが、お嬢・・・いや、院長・・・」

女性は子供達の話の全てに耳を傾け、言葉を掛けていく。その様子を見ればこの団体が、少なくとも子供達にとってはまともな団体だろうという事が感じられた。

軍の攻撃で親を失った特別居留区の子供や、テロで被害を受けた家庭の子供などを、現時点で14名受け入れているという。代表の女性は、施設規模などを考えるとそれが限界である言った上で、何人受け入れようと焼け石に水だと言った。熱心にメモを取っているヨシトの横で、ルーイは別の方向を見つめている。

建物の中で、女の子達に囲まれてピアノを弾いている女性。美しい褐色の横顔に、ルーイは見とれるように視線を注いでいた。開け放たれた窓から聞こえるのは、彼女の国の言葉なのだろうか、歌詞は分からないが少し物悲しいピアノの旋律と歌声だった。

彼の視線に気付いたのか、横にいた子供が教えてくれる。院長先生のお手伝いに来てくれるアメリカ先生だと。

噂という物は、正確な情報がなければそれだけ手に負えなくなるものである。だが情報を持つ物は、それが分かかっていてなお正確な情報を出したがる。特別行政区駐留の東アジア軍内はまさにそういった状態であった。兵士達の間で飛び交う二つの噂、幽霊MSと怪物兵士の話はもはや尾ひれが付き過ぎて訳が分からなくなっている。

房総半島で起こった襲撃事件は、厳しい緘口令が敷かれたにもかかわらず、謎のMSの存在が知れ渡っていた。これに加えて、爆弾テロの犯人を追跡していた特殊部隊が返り討ちに遭ったという話も広まっていた。

どちらも人知を超えた力を使い、遭遇した者は誰一人生きて帰っていないという事になっている。ヒューはその噂に苦笑した。掘切でアンノウンに遭遇した彼は、こうして生きているのだ。

だが、人知を超えた力というのはあながち間違っていないと思う。少なくとも、あのMSが使用した兵器は未だに分かっていない。

「映像データだけじゃ、なんとも言えんわな・・・」

ヒューがもたらした戦闘記録のコピーは、ヨコスカから大西洋の本国に送られているはずだが、どのような分析結果が出たかは伝えられていない。彼としても、他に色々な案件を抱えてしまい、その事だけに関わっている余裕も無かった。

もともとMSの運用に関するノウハウが不足している東アジア軍は、その技術を持った人間を積極的に登用している。ヒューもそれを利用して、大西洋軍所属という経歴を偽って潜入していた。相変わらずな仕事をしている自分に、暗澹たる思いを抱く事もあるが、どうしようもなかった。

当初は東アジア軍のMS運用能力に関する情報の収集が目的だったのだが、トウキョウ特別行政区に関わる情勢が変化した事に伴い、それに関する広範な情報収集に任務が変化していた。駐留東アジア軍の増派に関する情報は既に伝えてあるが、肝心の本国の方針が定まっていない。

再・再構築が検討され、地球連合という枠組みが変化していく可能性を秘めた中、東アジアの島国にどのような政治・経済・軍事における価値が存在するのか。それが見極められないといった所であろう。ユーラシアが北海道の返還に動いている事も、この列島に関する国際的な意味合いが変わりつつあることの証明である。

現場でそれを考えても意味は無いが、ともかく上がしっかりしてくれなければ現場で危ない橋を渡っている方が困ってしまう。

「ジョン・マグナルド大尉、司令がお呼びです」

食堂の椅子から立ち上がったヒューは大きく背伸びをする。軍内で外人部隊と呼ばれる外国から登用されたMSパイロットで、謎のMSに対応する部隊を創設する話が出ていた。今日はそのための準備会合である。あんな化け物をまた対峙しなければならぬということに、うんざりとしたため息をついた。

そして、その手の化け物にどうやら縁のあるような自分の運命を呪った。彼はあのMSをフリーダムと勝手に命名している。

アツザムの鎮座する地下施設は、MSの整備も行われていた。だがカスタマイズされた二機のウインダムⅡは、簡単な検査が行われているだけである。随伴機として用意されたのだが、今のところ使う場面が無かった。

整備を受けているのは、俗にガンダム顔と呼ばれている頭部をしたMS。ここではエヴィデンスと呼ばれているMSだ。作業着の整備員に混じって白衣姿の人間がいるのは、このMSが極めて実験的な装備を搭載しているからである。研究途上の装備であるが、その成果は順調に出ている。

油で汚れた白衣をゴミ箱に捨て、ミツネ・ササは施設内部に戻った。あとは部下に任せても構わない部分だ。

「お疲れ様です、チン博士」

MS整備の様子を見ていたのであろうチン・ヤンチャンの姿を認めて、彼はそう声を掛けた。ヤンチャンは黙って会釈だけをする。そんな彼の姿を、ミツネは不思議なものだと思った。

科学者らしくないというか、何か屈折したものを抱えている感じなのだ。ヤンチャンの業績は、確かに一般の学術論文としては発表しにくいものが多いが、どれも一流のものばかりである。おそらくプラントであっても、彼ほど総合的に人間の能力に関する知識を有している者はいないのでは無いだろうか。

前大戦時から蓄積された豊富なデータは、人としての限界がどこにあるのかを知らしめようとしている。コーディネーターが目指す新たな人類を定義できるのは、きっと彼に違いない。

だがヤンチャンはそんな自分の業績を誇る事をしない。むしろ自分の研究に恐怖のようなものを感じているのではないかと思わせる節があった。

「博士は、エヴィデンスについてどう思われますか？」

「成果は、順調に・・・」

「いえ、あのクジラの事です」

ジョージ・グレンが木星圏から持ち帰ったといわれる、宇宙生物の

化石。未だにその真偽が議論されたりもするが、そのエヴィデンス01と呼ばれる物がかつて宇宙に存在した事は疑うべくも無いというのが通説であった。

その姿から羽クジラなどと呼ばれたりするその存在について、唐突に問われた事をヤンチャンはいぶかしむ。

「宇宙空間で羽やヒレに意味はありません。ですが、あれがコンバーターと同様のものであれば・・・」

ミツネは言う。自分が手に入れようとしている技術とは、人がそのフロンティアをさらに広げていくためのものではないのかと。そしてヤンチャンの研究とは、全ての人間がその技術にアクセスするためのもので無いかと。

力強くそう言うミツネにヤンチャンは曖昧な笑みを返した。確かにここには潤沢な資金と十分な施設があるだろう。だが、そんな環境を渡り歩いてきたヤンチャンに、ミツネの力強さは無かった。

ただミツネのような意欲と能力が、こんな場所でくすぶる事は不幸だとヤンチャンは思う。

第六話 測れぬ距離

目印は人気の同人ソフトのキャラクターが描かれた紙袋。問題は、この界限ではそういう格好をした人間が多数であり、それではたいした目印にならないという事だ。その分野に詳しくない限り、描かれたキャラクターの区別をつける事は困難である。

しかし、街に溶け込んでいない印象を与える人間というのはよく目立つ。そういった人間同士で、おずおずとお互いの名前を聞き合いなから集まっていく。傍から見れば、それはパソコンで知り合った者同士のオフ会のような集まりに見えるだろう。

「時間は厳守でお願いしたいものです」

「ならば、もう少しマシな集合方法を提示してもらいたかったものですな」

ジュンコ・ヤオイの言葉に、参加者の一人が言い返した。秋葉原の裏通りにある雑居ビルの一室に、数名の人間が集まっている。もちろんオフ会などではなく、ジャンク屋組合の残党などによる、アングラのネットワークの会合であった。お互いに摘発された場合の事を考え、集まっているメンバーは全て初対面である。

ジュンコの所属する組合は秋葉原で一番大きな組織であるが、それでも傘下業者は七社の個人商店のみである。他の参加者も、同様に小さな組合か、大きな個人商店といったものであった。全面戦争の終結に、軍需関連物資の取引規制や軍事費の削減などが続けば、この業界も身の丈に合わせて小さくなっていく。

しかしこのトウキョウ特別行政区は、彼女らのようなアングラ組織の最後の聖域とあって良かった。MS運用ノウハウや開発技術が他の連合主要国と比べて劣る東アジア軍は、彼女らのような非合法活動がある程度黙認してでも、それらの技術を取り入れたいと考えている。そのため軍需関連物資の取引規制は弱く、軍そのものがジャンク屋の取引先となっている事さえあるのだ。

それに加えて特別行政区内の複雑な政治事情が、摘発の緩さや取引のし易さをもたらしている。今やトウキョウは、MSの一大裏市場と

なっているのだ。彼女らはそこを取り仕切る元締めであった。

「いよいよ日本軍も得意先か・・・」

「納入済みが二機、受注残も五機。金の出所はオーブの支援団体か？」
製品の売れ行きに喜ぶだけでは元締めは務まらない。元の組合は政治に関与しすぎ、オーブの傭兵として使い捨てられたのだ。彼らが目指すべきは、トウキョウという聖域を維持する事である。最近の日本軍の動きは、それを揺るがしかねない。

ジュンコはプリントアウトした資料に目を落とした。日本軍の資金の出所についてはある程度調べを進めている。特別居留区に向けられた小口での送金が、急激に増えていた。参加者の一人が、説明を求めた。

彼女は顎に手を当てて、細い目をさらに細める。そして言葉を選びながら言った。

「おそらく、中華街でしょう」

「幫か!？」

「待て、それじゃ・・・いやありうるが、それだところらとしてはどうする」

会合は夜遅くまで続けられた。参加者の誰もが、自分たちの売上高の上昇が近いうちに何をもたらすかを知っているのだ。彼女らは兵器を扱っていても死の商人ではない。戦争は、いつも彼女らの目の前で起こるのだから。

日付が変わった頃、ようやく会合は終わる。参加者はぐったりした顔で、雑居ビルを出て行った。目印にした紙袋の中には、流行のアニメキャラクターの等身大水着姿がプリントされたシートを入れられている。

取材が思いのほか長引き、既に日が傾きだしていた。今からだと、ヨシトの身分証ではゲートをくぐれなくなる場面が出てくる可能性がある。そのため二人は、NGO団体の代表でこの孤児院の院長でもあるナタリア・フアリロスからの申し出に甘え、今晚は孤児院に泊め

てもらおう事にした。

子供達はめいめいにエプロンをつけ、台所へと向う。食事の支度を手伝うのだ。厨房に立つのは、みなスーツにエプロン姿の屈強な男達だ。子供達も、慣れた手つきで自分出来る事を手伝っている。

「お客人、こちらへ」

ダルと呼ばれている男性が、そう言って二人を案内した。柔らかい物腰とは正反対だが、とても礼儀正しい人物のようだ。言葉遣いは少々乱暴に聞こえるが、子供に対しても節度と威厳を持って接していた。

だが、孤児院というイメージとはかけ離れた人物である事には間違いない、そんな男性ばかりがこの職員として勤めている。ヨシトはその事を聞いてみた。

「我々は、昔からお嬢とフアリロスの家に住んでいます」

答えになっていない返事だが、ヨシトは彼らの間に他人が介在できないような信頼関係があるのだろうと納得した、案内された部屋でベッドに腰をかけ、取材メモを整理しておく。特別行政区の情勢については、いくつか面白い情報が手に入っていた。

隅田川と荒川を使って人道物資を特別居留区へと運ぶ活動も行っているこの団体は、特別居留区との間で武器や薬物の取引を行っているマフィアの動向について詳しかった。どうやら最近になって、それらの摘発が強化された事と、その摘発に何らかの意図があるのでないかということだった。

もう一つは、現地の行政職員の「独り言」として入手したという話であるが、支援物資でも特に医薬品は今から十分に備蓄しておくべきだという話だった。

「摘発された組の名前、社の方で調べてもらったら何か分かるかもしれないですね。後の方の話は・・・」

ルイーに意見を求めようと思ったが、彼の姿は向かいのベッドには無かった。彼は厨房を覗いている。ナタリアの隣で野菜を刻んでいる女性の後姿を見ていた。

あれからもタチバナ邸を尋ねたついでという名目で、病院に顔を出

している。だが勤務時間中であつたり帰つた後であつたりと、あれ以降彼女には会えていない。だからこそ、この偶然に驚き以上のものを感じてしまうのだ。ロマンチストではなくとも、異国の地でそんなときめきを感じる事はあろう。アメリカ・カクタが時計を見上げる。

冷蔵庫の上のラジオが六時の時報を告げた。アメリカは手にしていた包丁を洗い、そしてエプロンを外す。子供達も分かっているのだらう、めいめいに彼女に挨拶をしていった。厨房から出る彼女に、ルイーが声を掛けた。

「その・・・お久しぶりです」

アメリカは微笑みを返す。だが、その笑みは残念そうな表情を隠せないでいた。夜勤があるので、今から帰らないといけないというのだ。ここには、時々手伝いに来ているので、今度会えたらゆっくり話しましょうと言つてくれる。

孤児院の玄関まで出て彼女を見送るルイーは、小走りに駅へと向う彼女の後姿を見つめ続けていた。

店内の猥雑なざわめきが不意に落ち着いた。伴奏のピアノは下手だが、その横から聞こえる静かな歌声は、場末のキャバレーからは遠く隔たった印象を与える。日本の言葉でもなければ、連合の公用語でもない、外国の歌。だが、その旋律に潜む哀しさは、聴いている者にも届いているだろう。

だが、ここにいるのは他人の哀しみに耳を傾ける事の出来る人間ばかりではない。いや、そんな人間の方が少数なのだ。酔客の一人がマイクを持って、歌を歌う女性の横に歩み寄り、下手な歌をがなり始めた。

女性の腰に手を回し、おぼつかないろれつで歌っている男を、女性は担ぐようにして席に着かせる。さらにデュエットを要求する男に、女性は指名料を求める仕草を見せた。

「律儀ね、わざわざ来てくれるなんて」

カラオケ男を軽くあしらつた女性は、そう言つて別の男の横に座

る。キリルが視線の置き場を探すように、テーブルの上のグラスを見つめている。

「君がマリアちゃん？　ごめんね、こいつこういう店初めてみたくてさ。色々リードしてやってよ」

しな垂れかかる女性をあやすようにしながら、エリックがそんな事を言う。睨みつけるキリルの視線も、ここでは滑稽以外の何物でもない。景気良くボトルを注文し、さらに別の女性を指名した。

プラントにこの手の店は無いと言っても過言では無い。十歳で博士号を取るような女性は水商売を選択しないのだ。それに、基本的に人口の少ないプラントでは、可能な限り多くの人間が生産活動に従事しなければならぬ。男に酌をするだけの女など、プラントでは無益どころか有害なのだ。女に注いでもらう酒が無ければ仕事の出来ない男の居場所はプラントに無く、男に酒を注ぐ時間があれば太陽電池パネルの一枚でも磨いていた方が有益なのだから。

もちろん、一般人の知らないところでこういう店が存在するとう噂はあるが、それが都市伝説の域を出る事は無い。

だからザフトの男は、地球に降りてからこういう遊びを覚えるのだ。エリックもその一人だった。もちろんキリルのような真面目な男がいる事も分かるが、それはとても損な事だと思った。安い化粧と香水の匂いの奥に隠れている女の体臭は、それだけで男を奮い立たせてくれるでは無いかと。

両脇の女性の柔らかなボディラインを確かめように手を動かしながら、エリックはじつとテーブルを見つめたまま水割りを飲んでいるキリルを横目で見る。横に座ったマリアという女性は、何かと話し掛けようとしているようだが、キリルはまるでダメだった。この店に入ろうと言ったのは彼であるにも関わらずだ。

キリルがどういう経緯で彼女の名刺を手に入れたかは知らないが、どうやら彼が南千住周辺を熱心に調査していたのは、ひとえに彼女の存在があったからだろう。この堅物にもそんなロマンスめいた事があるのかと微笑ましく思った。

人の恋路に首を突っ込むほど野暮ではない。もつとも、これでは恋

に発展する前に終わるなとも思う。マリアを指名した客がいたようだ、彼女は申し訳なさそうにキリルに微笑み、薄暗い店内に溶け込むように去っていった。

瓦礫を撤去しただけのような空き地の上にテントが立ち並ぶ。食べ物や服などが無造作に並べられているそこは、市場であった。夜のうちに荒川を渡ってきた物資が、朝にはこうやって並ぶのだ。ダンボールの切れ端にマジックで書かれた値札には法外な桁が示されているが、これが日本人特別居留区の生活を支えている。

セメントとブロックだけで作られたような家から出てきた人が、市場に集まり始める。喧騒と怒号が渦巻く朝の風景であった。

「川一本を隔てたら、ああですよ」

朝靄が晴れてくると、隅田川の向こう側の摩天楼群が姿を現す。ここはトウキョウ特別行政区内に現出する壮絶な格差の現場であり、東アジア共和国の国内統治手段を如実に示すものであった。それは再構築戦争がもたらした歪みの一端であり、旧世紀から変わらぬ歪みの一端である。

周りの人間とは明らかに服の汚れ方が違う数人が、軍服のようなものを着た男に先導され、遠くの摩天楼と目の前の廃墟を見比べるように歩いていた。東アジア軍による空爆や侵攻によって、めぼしい建物は全て破壊されている。そんな中、つぎはぎのような修復がなされたビルが、現在の日本軍の司令部となっていた。

司令部といっても、中枢は別の場所に分散して潜伏しており、ここは前線司令部のようなものである。中にいた男達が敬礼で出迎える中、案内されてきた数人は少し居心地の悪さを覚える。

彼らはオーブに拠点を置く亡命日本人組織の人間で、特別居留区と日本軍に対する支援助物資とともにここを訪れたのだ。その事については、篤いお礼が述べられた。旧式のM1とはいえ、三機のMSを無償供与したのが利いているようだ。

「オーブ政府も動いているのですな」

「いえ、アスハ大統領は他国の内政への干渉はしないと明言しています」

司令官を名乗る人物の問いにそう答えた。オーブの資源衛星が反ザフト組織の支援を受けて独立を画策したペディオニーテ動乱は、オーブと連合、ザフトによる共同作戦で鎮圧されていた。それ以降、連合加盟各国もプラントも、それぞれの国の内部における分離独立の動きに干渉しないという暗黙の了解が出来ていた。

再・再構築は、あくまでも現在の中央政府が主導する形で、平和裏にかつ経済的権益を損なわない形で行われなくてはならない。外国勢力と結びついた急進的な独立は、ただ現在の枠組みを破壊するだけで構築はしないのだ。

もちろん、ユーラシアのように自国の再・再構築の動きを利用して、他国の分離独立運動を刺激しようと画策するところもある。だが、軍事力による干渉などはどの国も考えていない。正確には、国家財政にそんな事を考える余裕が無いのだ。

オーブ政府が考えている再・再構築は、タマユラ地区の租借権の放棄である。もはやトウキョウの一角にオーブの権益があったところで、そこから得られる収益はそれを維持するための支出を上回らなくなっていた。租借権の延長交渉をしてはいるが、あくまでもポーズであり、最終的には延長しないという形で決着するはずである。

亡命日本人組織としては、そういったオーブ政府の動きに危機感を覚え、日本軍と接触したのだ。だが、日々空爆に怯えて暮らす特別居留区の組織と、オーブで平和に暮らす組織の間には、埋めがたい溝がある事もまた事実である。

テロの未遂事件が相次いでいるのは、警備体制が強化された事によると考えられている。だが手口に稚拙なものが多く、押収された爆発物の分析結果も、まちまちであった。日本軍には分派も多く、またマフィアの抗争でも仕掛け爆弾は使われている事から、取り締まりの成果というより、模倣犯が増加していると考えた方がいいだろう。

利根川を越えてのロケット弾攻撃は散発的ながら続いており、特別行政区の治安情勢は芳しくなかった。特に東アジア軍の増派が決まってから、何かか軋むようにあちこちで動きが出始めている。警察官としての第六感がそう告げていた。

芸術的なまでに書類が積み上げられている机で、シユウ・サクラはタバコをふかす。警備部特務課第一係のオフィスは、保安局庁舎で唯一喫煙可能な場所であった。

日本人特別居留区への物資密輸の頻度が上がっている事や、タマユラ地区の港にヨコハマからの貨物船が幾度か入港している事など、日本軍の監視を行っている隊からは気になる情報が上がってきている。東アジア軍に何らかの動きがあるため、それに対応しているのではないかとも思うが、軍の情報はまったく入ってこない。火を着けたばかりのタバコを空き缶の口に押し当てて、次のタバコに火を付けようとする。

「アラーム!? 緊急か!!」

オフィスに響いた内線のコールは通常のものとは異なっていた。受話器を取ったシユウは特別強襲部隊の出動命令を受ける。彼らの本職であるが、同時にそれは最も危険な仕事である。

全隊員に召集の連絡が回され、庁舎内の人間から順に装備を整えていく。防弾・防刃繊維で織り込まれた濃紺のボディスーツに、同色の超軽量セラミック製ボディーマー。アーマーと同じ素材のヘルメットに、発泡金属製の小型の盾。機関拳銃を持つ突撃要員とアサルトライフルを装備した支援要員が、防弾・防爆装備の専用車両に分乗して、桜田門の庁舎を出て行く。

マフィアの事務所を立て籠もり事件が発生したとの情報であったが、受話器の向こうの警備部長の言葉は、何かを含むような言い方だった。感度の悪い無線で前後の車と連絡を取りながら、シユウは頭を巡らせる。

「川が流れてたな・・・渋谷川か」

現場は明治通りを越えてすぐの場所にある小さなビルであった。所有者がマフィアの幹部であり、ビル全部がその事務所として使われ

ていた。シユウは、付近の様子が普段と違う事に愕然とした。

普通、自分達が現場に着く頃には交通課などが付近を封鎖し、近隣住民の避難などを終えているはずだ。だがここには近くの交番から来たらしいパトカーが一台、ようやく止まっているだけだ。

そして現場のはずのビルは、あまりにも静かだった。パトカーの中で書類を書いていた警官に、シユウは声を掛けた。完全防備のその姿に、二人の警官は驚いた顔をしている。

「いえ、組事務所から大きな音が聞こえるって通報があつたんで来てみたんですが」

本庁に一報を入れてから現場に来てみれば、今のように静かだったので誤報か何かだと思っていたところだという。

突然、乗用車がビルの前に止まった。中から出てきたスーツの男は、特別強襲部隊の車両を一瞥するとビルに入ろうとする。隊員がそれを押し留めた。

「保安局の者です。申し訳ないが、身分証を」

「申し訳ないのはこちらです。この現場は東アジア軍が管轄しますので、お引取りを」

そう言つてビルに向うユ・ケデインをシユウが引き止めた。冷たい言葉で押し問答が続く。二人とも下がる気は無い。シユウがケデインの服装を注意して言った。

「ビルの安全が確保されるまで、下がっていてもらえますか。そのスーツは防弾では無いでしょう」

「心配は無用です」

「いえ、後五秒で突入なんですよ」

ニヤツと歪んだシユウの口元に、ケデインが怒りと驚きを同時に表す。押し問答しながらも、シユウは隊員の一部に突入の指示を出していたのだ。ガラスの割れる音と、閃光手榴弾の音が同時に響いた。

しばらくは隊員の怒声が聞こえていたが、それもやがて聞こえなくなる。その一種異様な雰囲気、シユウは正面に待機していた隊員にも突入を命じた。ケデインも後ろからついてくるようだが構つてはいられなかった。両国の事件を繰り返すわけにはいかないのだ。

だが既に手遅れであった。ただ、被害者が自分の部下ではなかったというだけだ。ビルは死体で埋め尽くされている。

「ここからは警察の仕事で、いいですか」

スーツやアロハシャツの死体はマフィアでいいだろう。その周りに転がっている死体は、東アジア軍の軍服を着ている。それも完全武装の姿だ。マフィアが握っている拳銃で何とかなる相手ではない。

流石に色を失っているケデインを押しつけるようにシユウは隊員に指示を出していく。東アジア軍が特別行政区のトップに圧力をかけ、その命令が保安局に回ってくるまでに、調べられる事は全て調べておきたい。ここに東アジア軍の人間がいる理由は後から考える事だ。

装備を見れば普通の部隊で無い事は分かる。壁に残った銃弾を確保させ、本庁へと回す。分析すれば部隊の素性も分かるはずだ。

隊員の一人がビル外壁に付着したゴミを見つめる。予想通り川を使ってここまで侵入してきたのだろう。品川や芝浦の爆弾テロも、フログマンによる侵入工作の公算が高いとの調査結果であった。

「さて・・・何がどうなっているのやら」

無性にタバコが欲しくなる。シユウは鉄錆の匂いが充満する空気を吸って、それを我慢するしかなかった。

頻繁に川の兩岸を行き来しているため、その違いをいつまでも認識する事ができる。タマユラ地区と特別行政区の間は身分証確認ゲートの数も多く、またそのレベルも一日の内に何度も変更されるため、往来が不便なのだ。そのため、普通の人であればめったに川の向こう側に渡る事は無い。

特別行政区で暮らしていれば、身分証確認ゲートの存在にも慣れてくる。タマユラ地区にはゲートが無く、いつでもどこにでも移動できるという事を知らない人すらいるであろう。カズヤ・イシは、この仕組みの巧妙さのため息をつく。

とにかく、ゲートの存在と仕組みに慣れなければ円滑に生活できな

い。そして慣れてしまえば、その存在を気にも留めなくなる。だが特別行政区は、ゲートのレベルを操作する事によって、人々の意識すら操作するのだ。

特別行政区にとって不都合な場所に行く事は出来ず、人々は見ても構わないものしか見ない生活をする。報道は規制され、表現物は検閲されている。ネットでさえ、高度な知識と専用の機械がなければ、特別行政区にフィルタリングされた情報にしかアクセスできない。

犯罪を助長する表現から青少年を保護する、繁華街への夜間外出は青少年の健全な育成を阻害する。理由は何とでも付けられるが、やっている事は人間の全ての行動を把握し統制しようという試みだ。それも強制力をもって行うのではなく、無意識のレベルからそれを行おうとしている。

特別行政府としては、独立運動の摘発や過激派の取り締まりといった、実利的な側面を求めているのであろう。だがそれは、旧世紀に描かれた全体主義ディストピアの出現では無いのか。

「オーウエルでしたか、読んだ覚えがあります」

相手に口を挟まれて、カズヤ・イシは自分がしゃべりすぎた事に気付く。テーブルの上の茶に口をつけて、ヒートアップした頭を落ち着ける。今日はそういう話をしに来たのではない。

窓の外に視線を送っていた男性がカズヤに向き直る。落ち着いた雰囲気は壮年だが、かつてはオーブの公安関係者であったらしい。ここはタマユラ地区に本社を持つ警備保障会社である。

オーブの租借地とはいえ警察権は特別行政区が持っている。この警備保障会社は、タマユラ地区そのものを警備するための会社だというのが、周囲の一致した意見であろう。本国から救援の部隊が到着するまでの間、東アジア軍の侵攻に耐えうるだけの装備を有しているとまことしやかに語られているのだ。

カズヤの語る噂話に、特別顧問という肩書きを持った男性は笑う。そして噂であればそれに越した事は無いと真顔でいう。

「なにせ、ここも割れていますから」

本国の方針に従って撤収の準備を始めている者、あくまでもオーブ

租借地という權益の維持を目指すもの、そして日本軍のシンパだ。兵器など持っていれば、何が起こるか分かったものではないと言った。

そこに冗談のような雰囲気を感じなかった事に、カズヤはぞっとする。彼はタマユラ地区から日本人特別居留区への支援の実態について取材に来ていたのだ。通常の人道支援ではなく、分離壁と呼ばれる壁を越えて日本軍に武器弾薬などを供給している団体がタマユラ地区に存在するのは、公然の秘密である。

だが、オーブ政府も出資している警備保障会社の一部にも日本軍のシンパがいるとは予想外だった。現地の宗教を取り入れるなど脱日本化を進めたとはいえ、オーブの対日本感情にはまだまだ複雑なものがあるようだ。

「何か対策でも？」

カズヤの問いに、顧問は武器の密輸なら取り締まりようもあると言う。だが既得權益を擁護しようとするグループは対処も難しいといった。オーブ政府としては収支が釣りあわずとも、個々の企業や団体をみれば潤っている部分もある。

そして、オーブ政府がタマユラ地区へ関与せざるを得ない状況を作り出すために、その二つのグループが結託するのが一番厄介だろうと言った。カズヤは、さらに質問を続けていく。

ハルサ・ニビというこの男性は、顧問という肩書きの割には会社の内部事情からオーブの政治事情まで突っ込んだ話をしてくれる。この人物も、何か複雑な思いをオーブに抱いているのかもしれない、そんな事を思った。

飲み代の請求は半分しか通らなかつた。残りは給料から天引きされるという事で、しばらくは夜の情報収集はお預けだろう。エリックはコンピューターの画面を眺めながら、ボールペンを指先で回している。

夜になるとゲートのチェックも厳しくなり、自分の持つ偽造の身分証もいつバレるか分からない。結構な無理をしていただけに、いい休

止期間なのかもしれない。ただ、ようやく掴みかけてきた情報がある。それについてはもう少し深い調査をしてみたいと思ってる。

グレートバリアリーフ号では、今日もパーティが開かれていた。特別行政区の要人や財界関係者を招いてのもので、主催は船会社だが大洋州の政府も一枚噛んでいるという話だ。大洋州も、プラント一辺倒の外交だけでやっていけるとは考えていないのだろう。ザフトの諜報員を間借りさせている船で、東アジア政府向けのレセプションを行っている。

「たいした面の皮・・・じゃなくて、それが政治か」

結局、プラントが目指すべき方向とは、そういった政治なのだ。自分達はその最前線に立っている。二度も大きな戦争を招いてしまったのは、プラントも連合もそういった政治技術を忘れ、原理主義に傾斜したからだ。

国家とは原理原則によって作られるのではなく、国家が原理原則を作るのだ。いざという場合、変えるべきは原理原則であって国家ではない。それが出来なければ、かつてのユーラシアのように、自国を焼き払うという愚挙に出るだろう。

プラントにもその危険性がある、いやコーディネーターによって作られた国だからこそ、その危険性は高い。キリルを見てみるとそれが良く分かる。

「生まれや育ちに影響されるってのは、普通の人間って事なのにな・・・」

報告書の作成スキルや情報の分析能力、課題設定の巧みさや疑問点を洗い出しの上手さ、さらには頑健な体力に裏打ちされた脚力まで、彼がその能力を見込まれてここに配属された理由は分かる。だが、彼の原理主義的傾向は、それを損なってしまっていると思う。

コーディネーターとしてあるべき姿、プラントの進むべき方向、そういうものに理想を持ちすぎているのだ。優良な人間だからこそ人類全体に対して責任を持ち、幾多の戦争を引き起こしてきた旧世紀の政治システムから決別するために、プラントは率先して行動しなけ

ればならない。彼はそんな事を考えている。

およそスパイには向かない考えである。一世代上の人には多い考えかもしれないが、それがあの大战を引き起こした事も事実だ。エリックは、この前読んだ資料を思い出した。身内を調べるような事なので気は進まなかったが、キリルの経歴を見せてもらったのだ。

彼の母親は、前大戦時にバイコヌールから脱出したザフトの将兵だけでなく、一緒に脱出したナチュラルの軍隊とともに、中立プラントへの亡命を画策した人物であった。戦後、弱体化した宗主国からの独立を目指す中立プラントの政庁と結託し、敗色濃厚であったザフトを見限ったのだ。

ヤキン・ドゥーエ宙域戦前後に起こったプラントでの政変に乗じて、その企ては成功するかに見えた。しかしジェネシスによる連合軍の壊滅で、プラントの敗戦ではなく連合との休戦という形で戦争が突如終結してしまい、計画は未遂に終わり彼の母親もプラントに戻ってくる事となった。

ザラ派、クライン派、ブルーコスモス、三つの原理主義者が果てしない殲滅戦を繰り返す中で、彼の母親は政治的に立ち回っていたと言える。プラントもコーディネーターも関係なく、より有利に生き残れる状況を求めて活動していたのだ。

キリルの考え方は、そんな母親の生き方とは正反対なのだろう。今はアカデミーの事務局長をやっている母親に、彼はどんな思いを抱いているのか。

エリックはコーヒーを注ぎに席を立った。彼としてはそんな彼の生い立ちより、今の彼の様子を聞きたいと思っている。あのキャバレーの女性からは電話番号をもらっていたはずだ。

彼にとって、その研究は既に完成されたものでありこれ以上の発展性もないと考えているものである。事後的な遺伝子改変技術という分野には、多少の余地もあると考えられるが、出生前にそれを行えばいいだけの話である。トレーニングルームにいる数名の兵士を見な

がら、チン・ヤンチャンは深く息をつく。

研究員が持つて来たデータに目を通すがそれだけであり、指示するような事も特に無かった。ここにいるパオペイレンと呼ばれる強化兵士は、経口による投薬以外は完全にメンテナンスフリーであり、その投薬も睡眠前の一回で済む。

これまでに実戦投入されたパオペイレン、それに大西洋やユーラシアのブルークコスモスが使用していたという強化兵士のデータと比較してもその能力に遜色はなく、記憶の操作や意識の改変を伴わないため精神面の安定性に置いては群を抜いていた。製造コストを除けば、完全に実用段階に入っているといえる。

「それでも二流のコーディネーターに過ぎない」

いかに強化されようと、彼らは人間だとヤンチャンは認識している。だがコーディネーターには、その認識が持てなかった。そんな怪物を作り出した科学者と、結局には人間をいじる事しかできない自分の差に、ただ愕然とするだけだ。

だから本格的にコーディネーター研究をするために彼はオーブに渡った。そこで少しの間研究に携わったのち、斡旋を受けてここに来た。

日本軍の武装闘争を支援している組織だという事は、着任後に知った事だ。さらにその裏には日本自治政府が関わっていた。どの程度、自治政府が関与しているかは定かでは無い。だがこの施設の設備を見ればそれなりの資金は出しているのだろう。

彼はパオペイレンの製造と管理を受け持っている。しかしその運用に関しては全くタッチしておらず、その作戦行動について文句を言う立場でもなければ注文をつける立場でもなかった。その事を訪ねてきた人間に言う。

「部隊の運用についてはその責任者に言っていたらきたい」

「ですが彼は・・・」

「私の研究の被験者ですが、それだけです」

パオペイレンを使った都心部での破壊工作、そしてMSを使った東アジア軍に対する襲撃。それらの指揮を取っているのは、MS・エ

ヴイデンスのパイロットであるハニス・アマカシである。

彼が現在行っているS E E Dに関する研究の被験者であり、同時にミツネ・ササの研究の被験者でもあった。まだ二十歳にもならない少年であるが、指揮官としての能力もパイロットとしての能力も非常に高いものである。ただ、自身の能力をひけらかすようなところがあ
り、作戦がだんだんと大胆になっている。

東アジア軍に対する挑発が、相手の軍事行動を誘発しては意味が無い。自治政府としても看過できず、作戦の見直しと自制を求めて人によこしたのだ。ナチュラルの感覚であれば、二十歳前の人間に何らかの権限があるとは考えずチンチャンのもとを訪ねてきたのだろう。

先日は都心部のビルで、東アジア軍の特殊部隊とパオペイレンが交戦し敵を全滅させている。事前に東アジア軍の情報を掴んでいたらしいが、その情報源はハニス以外は知らないものであった。

昨夜は彼自身がエヴイデンスで出撃し、東京湾上で戦闘機二機を撃墜していた。彼に言わせれば、それは十二分の自制なのかもしれない。少なくともミツネは、エヴイデンスにそれ相応の能力を持たせていると言っている。

「コンバーターに関しては、オリジナルの機体であるストライクフリーダム以上です」

パイロットが普通のコーディネーターである以上、機体がいかに強化されようとレクイエム戦役のような異常事態が起こることは無いだろう。だがエヴイデンスに搭載された機能は、そもそもが異常な機能なのだ。

それが何かを引き起こす前に、ちゃんと鈴をつけておくべきだろうと言って、ヤンチャンはその場を辞した。施設内に静かに流れるBGMはプラントで昔流行った歌であり、ヤンチャンが選曲したものである。

第七話 老人

邸宅自体はそれほど大きなものではない。だが控えめながら確かな価値を持った調度品や、整えられた庭を見れば、ここがそれ相応の人物の住む家だというのが分かる。だが今日の前にいる人物は、それを全く感じさせない。その事こそが、この人物の本質なのだろう。

無知や無教養とは対極にある、本物に触れ続ける事によって自然と磨かれた眼力が、この人物には備わっているのだ。おそらく本人は全くそれを意識してはいない、だからこそその本物なのだ。

こういう人物は、下手な主義主張を持たない。ただその心の琴線に触れうるか否かが、判断の基準なのだ。リ・ウエンは二人の美女に席を外すよう言った。

「ははは、若い娘さんの前で緊張する年ではありませんよ。ここ最近では姥桜しか見ていませんがな」

「旦那様」

住み込みの家政婦が茶碗を置きながら言う。そしてウエンのポディーガードを隣の部屋に案内した。居住まいを正すウエンに、邸宅の主人は世間話を始めた。その声を聞きながら、ウエンは注意深く相手を観察する。ブンジ・タチバナは日本自治区、そしてトウキョウ特別行政区の設立に深く関わる人物であった。

再構築戦争によって成立した枠組みは、コズミック・イラが制定された後も安定したものではなかった。各国とも、十年から二十年を掛けてその枠組みを固めていったのだ。主権国家の消滅がそう簡単に容認されるはずも無い。

日本においてもそれは同様で、大小様々な反対運動や行政機関同士の対立、中央政府と自治政府の軋轢などが長く続いた。その時、様々な利害関係者をときに匿いときに引き合わせなどしていたのが、ブンジ・タチバナであった。

若くして親から引き継いだ資産の大半をそういった事に使い、今ではこの邸宅しか財産が残っていないとも言われている。

だが彼の持つ人脈は底が知れない。設立当時の日本自治政府や特

別行政区の幹部は当然の事ながら、オーブ建国に携わった日本人、反東アジア共和国活動家、アングラ勢力の有力者、財界の重鎮、はては大西洋やユーラシアのスパイに至るまで、彼の人脈は続いている。ジャーナリストは言うに及ばず、文筆家や芸術家などの文化人、各種学会の著名人に至るまで、彼から恩を受けたという人物は広がっている。

「あの時代はみんな金が無かったでしたからな。出世払いができた者は少しでしたが」

愉快そうに笑うブンジに、ウエンは得体の知れないものを感じた。

分裂していた武装集団が日本軍という統一の団体になったのは、各派の指導者が一堂に会する会合を、彼が設定したからである。その一方で、サボタージユやストライキなどで抵抗していた特別行政区の職員組合を説得し、行政活動を再開させたのも彼であった。そこにウエンの考えるような敵味方の論理は無い。

年齢は自分と同じくらいだろう。だが、その中身は全くと言っていいほど違うようだ。ウエンは自分の用件を切り出す。そしてブンジに促されるように、自分の話をした。

「日本人以上に日本人ですな」

「当然です」

「・・・これは失礼な事を。申し訳ない」

最初の感嘆は慣れた物だ。だが、それに対して即座に謝罪を口にしたのはブンジだけだ。座ったままであるが深く頭を下げる彼に、ウエンは彼の秘密の一端を垣間見たような気がする。

「お話は分かりました。親分には私から話を付けておきましょう」

その言葉に、ウエンは少しだけ肩の力を抜いた。ブンジは一言断つて、ラジオのスイッチを入れる。ネットラジオと呼ばれるものだ。聞こえてきたのは邸宅の雰囲気にはそぐわない若い流行歌だった。

ハーモナイズコミュニティという団体が紹介しているプラントの歌だという話だが、ウエンにはその良さが分からなかった。だがブンジは、その歌の良さを力説している。

今でこそ、スーツにネクタイのインテリヤクザなどをやってはいるが、中学を出る前から鉄火場を渡り歩いてきた身である。腕っ節がよかつたわけでもない自分がここまで昇つてこられたのは、弱い相手に取りこぼしをせず、強い相手には戦う前に引き分けへと持ち込む術を学んできたからだ。

弱い者から取り上げ、強い者の弱みを握つた上で尻尾を振る。それが彼がヤクザのあり方であり、任侠など糞の役にも立たない、それが彼の持論であつた。

だから目の前の相手ほど御し難いものは無かつた。地味なスーツを着た三十前後の女に、初老だが立派な体格ゆえに十は若く見える男。日本人特別居留区への人道援助を行っている団体、フアリロス・ファミリアの代表者と幹部である。恫喝に屈しないだけの自衛能力を持ち、国外に本拠地があるため弱みも握れない。情ではなく理と利を持つて話さなくてはならない相手は、どうしようもないのだ。ヤクザには理も利もないのだから。

「お嬢さん、こつちも遊びでやってるんじゃない」

コウキ・ヨシオカは声を低めていった。

「もちろんです。我々は旧世界の生命線だと自負していますから」

ナタリア・フアリロスは冷たく返答を返した。日本人特別居留区への物資輸送についての会談であつた。コウキが副会頭を務める凌雲会は、特別居留区への物資密輸が主な資金源となつていた。人道支援助物資という無料の物資は、最悪の競争相手なのだ。

正面から潰せる相手でも、搦め手から足を掬える相手でもないことは、今まででの事からよく分かつていた。何も言わずにナタリアの後ろに立つダルウイーシユ・ダルのように屈強な男達が、軍隊顔負けの装備で抵抗すれば、コウキの部下などその場で土下座をするだろう。だからこそこうして話し合いの場を持つて、今までは輸送する物資の種類や量を取り決めてきた。

それが今回こじれているのは、特別居留区との間で物資の購入代金をやり取りしていた凌雲会傘下の組織が、何者かの襲撃によつて壊滅

させられたからだ。交通や通信が事実上遮断されている特別行政区との間での資金のやり取りは特殊な方法で行われており、その組織が突如潰れた事で密輸品の代金が受け取れなくなったのだ。

代金が受け取れないからといって密輸を止めれば、今まで凌雲会が運んでいた物資までフアリロス・ファミリアが無料で配る事となる。そうなれば完全に彼らの商売は不可能になってしまう。コウキとしては譲れない一線なのだ。

話は平行線のまま、日を改める事になった。ナタリアは、睨みつけるようなコウキの視線を受け止めて尋ねた。

「トウキョウ、これからどうなると思いますか？」

「知らんね」

迎えの車に乗り込んだナタリアはダルに言う。コウキの話の裏を出来るだけ取るようにと。ただのマフィア間の抗争とは思えなかったのだ。現在のトウキョウのマフィアは、ほぼ全てを菱丘組が抑えている。傘下組織が襲撃されたにもかかわらず、凌雲会が動いていないという事は、マフィアではない外部勢力の動きである可能性があるのだ。

おそらくコウキも、それは考慮しているのであろう。だが彼の持論は、ヤクザは自分のシノギを全うすればいいのであって、それ以外の事を考える必要は無いというものだ。相手が同じヤクザでないのなら、それはもうヤクザのシノギでは無い。

それでは、これからのトウキョウを知る事はできないだろうと、ナタリアは言った。それを掴まなければ何が起こった時になす術がない。何かが起こる事は確実、いや既に始まっているのかもしれないのだから。

こちらから出向く事は多いが、人を迎える事は極端に少ない。そのため、来客をどこに通すべきか迷ってしまう。とりあえず会議室に通して自分でコーヒーを作る。本国から遠く離れているため、諜報活動の報告のために帰国する者はあっても、出先にやってくる人はいない

のだ。

豪華客船であるにもかかわらず殺風景な会議室であるが、コーヒーの香りは高級なものであった。末端の人間が飲むものであっても、はるかに上質なものが備えられているのだろう。プラントに戻ったらコーヒーが飲めなくなりそうです、そう言っただけでエリックは笑った。

「もう一人の方・・・ローレンスさんは？」

「彼の人生における重大任務の遂行中です」

エリックの答えが何らかの笑いの要素を含んでいるだろう事は分かっていたが、その意味が分からないのをいい事に聞き流した。ジュンコ・ヤオイはコーヒーカップを置く。彼女がザフトに接触したのは、ハーモナイズコミュニティとのパイプを求めてであった。

その単語にエリックは口の端を歪める。流石に自分だけが気付いている情報ではなかった。彼女は、その組織がプラントに端を発する組織である事から、ザフトへの接触を図ったのだろう。エリックは自分の情報を吟味する。

表向きは、ファンサイトに端を発するサブカルチャーのコミュニティだという事になっていた。だがその根は予想外に深く、そしてありえぬ方向へと繋がっていた。クライン派、ターミナル、そういった類の関係者がコミュニティの先に見え隠れするのだ。ジュンコはそれを知って、繋がりを求めてきたのだろう。

ターミナルと呼ばれていた経済シンジケートは、テロ支援などで一時はオーブやプラントの政権を掌握するに至った。だが大戦中の混乱における金融市場の急激な変動、戦後に連合主導で行われた大規模な預金封鎖などによって、組織は失われていた。しかし、ジャンク屋組合同様に、構成員がいなくなったわけではない。

ターミナルの中でも、特に思想的な繋がりを持っていた者達は、組織が解体した後もアングラでの活動を続けていたのだ。彼らは、経済や軍事力によって融和と共存を達成するのではなく、別の方法によってそれを達成しようと模索していた。

「ターミナル残党がハーモナイズコミュニティと繋がるのはある種の必然です」

「問題は、それによってサブカルコミュに質的な変化が生じた事でしょう」

ジュンコはエリックがどこまで知っているかを探るように言う。単にサブカルチャーを紹介するだけの組織なら彼女が気に留める事は無い。その組織は、世界各地のアンングラ活動をネットワーク化しようとしているのだ。

それはオタクという新時代のコスモポリタンが、サブカルチャーをカウンターとして対立と闘争のカルチャーを超越する融和と共存のカルチャーを打ち立てるなどというお題目とは全く異なる。極めて現実的、政治的な活動なのだ。

ハーモナイズコミュニティのどの程度までが政治的な意志と目的を有しているのか、それがトウキョウ内にとどの程度の網を広げ、それが共闘可能な相手なのかどうか、早急に結論付けなくてはならない。現状の枠組みが崩れたときに、保険として活用できる程度の相手であれば好都合なのだ。

「善隣幫の代わりになるような組織では無いと思いますよ」

エリックは空になったコーヒーカップを指先で弄りながら言う。確かにジュンコの言うように、単なるサブカル集団ではなくなった側面はある。だがかつてのターミナルのように経済的利益や政治目的のために動くような組織では無いはずだ。少なくとも、彼の調査する中ではそういう情報はあがってきていない。

視線を上げたエリックはジュンコの表情に、自分がしゃべりすぎた事を悟った。少し、手の内をさらしすぎたようだ。言いつくろ事も出来ず視線を落とした彼に、彼女は提案を持ちかけた。

日勤の日の勤務は5時までのはずだ。ルイーは病院の裏手で夕焼けを眺めていた。ブレイク・ザ・ワールドによって巻き上げられた粉塵は微細なものが未だに大気中を漂っており、夕焼けはそれ以前よりもはるかに赤く見えるのだ。

あの日以降も、彼は精力的に取材を続けていた。行く先は、タチバ

ナ邸か孤児院・フアリロス・ファミリアのどちらかであるが。

もともと、この仕事自体が乗り気のものではなかった。外国メディアが規制されているトウキョウで長期に渡って滞在する事自体が一種の取材であり、そういう意味ではちゃんと仕事をしている。ルーイはそう思う事にしていた。もともとこの勤め先自体、知り合いに紹介されただけのものである。

「マシだろ、こっちの方が・・・」

「何が、ですか？」

その声で物思いから解放される。アメリカ・カグタが、微笑んでいた。ルーイは慌てて立ち上がる。その様子に、アメリカは笑い、ルーイもつられた。取材の帰りですかという彼女の問いに、そうだと答えておく。

オオサカの音楽イベントでたまたまインタビューした相手、その人にトウキョウで出会った。その偶然が、彼女に惹かれる理由では無いだろう。あのインタビューの声や言葉も、いまだはつきりと覚えているのだから。褐色の肌に映える歯の白さが、今もその声と言葉を紡いでいる。

彼女は駅の構内の書店に立ち寄った。手にしたのは日本語のテキストだった。

「こちらで長く暮らそうと思うと、色々あるんです」

彼女はそう言って笑う。少なくとも、日常で会話する分には何も困らないほど流暢にしゃべっているはずだ。彼女の勤め先でも飛び交うのは日本語であり、地区別行政区内でも連合公用語は辛うじて通じる程度である。

ルーイは駅の電光掲示板を読んでもらう。テロ未遂事件があったらしく、いくつかのゲートで封鎖やレベルの変更が行われているらしい。アメリカは、日本語で書かれたそれを苦も無く読んでいる。

「キリロフさんのパスなら大丈夫ですよ」

だが彼女の持つ身分証では代官山・渋谷間が通過できないらしい。二子玉川から別の線で渋谷に向かうといった。ルーイはそれに付いて行こうと思うのだが、それではヨシトとの待ち合わせ時間に間に合

わなくなる。すつぽかそうと思うのだが、彼の表情の変化を読んだのか、アメリカは彼を向かいのホームに向わせる。

名残惜しそうに振り向く彼に、彼女は鞆の中から何かを取り出した。ブンジからもらったチケットだという。音楽イベントなので取材になるだろうという。二枚差し出したのは、同僚と行けという事だろうか。ルイーはそのチケットに視線を落とす。

「私、仕事ですから」

「三日ともですか？」

チケットは三日通しのものであった。ルイーはアメリカとの約束を取り付ける。三日目に当たる日は、彼女も休みの日だったのだ。彼は彼女に手を振って別れ、足取りも軽く階段を上っていった。

イベントは、オオサカにきたあのアイドルが再び地球に降りてコンサートを開くというものだった。主催は同じハーモナイズコミュニティ、緊急来日と銘打たれていた。

高い天井をコンクリートむき出しの柱が無造作に支えている空間。幾多のライトに照らされるそこは、何か荘厳な神殿のようであった。ならば、そこを運ばれていくものは、神をかたどった彫刻であろうか。少なくとも、これが運ばれる先の者達にとっては、神の様に待ち焦がれた存在かもしれない。

数台の台車の乗せられた部品が、作業用の機械に牽引されてゆっくりと進んでいく。遠くから見れば、その部品が腕の一部であったり足の一部であったりすることが分かるだろう。運ばれているのはMSであった。

道路も鉄道も封鎖され、物資は小さなボートを使って川を渡している特別居留区へ、MSを運びこむ事は極めて困難であった。MSは分解するにしても限界があり、装甲板のような一体性が求められる部分はどうしても大きくなる。タマユラ地区から伸ばされている地下トンネルも、人が通れる程度の大きさしかない。

「よし、吊り上げてくれ！」

有線の電話にヘルメットの男が怒鳴った。MSの運搬に使用しているのは、旧墨田区と旧江東区にまたがる巨大な地下調整池であった。

ブレイク・ザ・ワールドに伴う津波で被害を受けた事から、大規模水害に耐えうるようタマユラ地区の地下に建設された調整池は、分離壁の越える形で特別居留区の地下にまで広がっている。雨水排水の経路などから当然の事なのであるが、それが大型物資の輸送に使える事もまた事実であった。

地下50メートルの場所に深さ20メートルの水槽を設置している形なので、通常の物資輸送には使いにくく、普段は全く使われていない。はるか高さから下ろされたワイヤーがMSの装甲板を吊り上げていく姿は、どこまでも頼りなかった。

こうして引き上げられた部品は、別のルートで運び込まれた部品などとともに組み上げられMSとなる。爆弾テロや手製のロケット弾による攻撃から脱却し、東アジア軍への本格的な攻撃も可能となる。「ツクバからの支援も合わせれば、打って出る事も可能だ」

引き上げられた部品を見ながら日本軍の司令官は言う。カヲ・ツオピンは曖昧に頷いておいた。そういう甘い見立てで希望をつながなくては、テロ組織など維持できないのであろう。

真つ暗な特別居留区の空のすぐ向こう側には、摩天楼街の煌々とした明かりが見えている。これほどまでに特別行政区の傍に位置しながら、ここはトウキョウ情勢のはるか辺境であった。

カヲはオオサカ、ヨコハマ、ヨコスカ、トウキョウを行き来しながら、情報を集めていた。上海第七銀行としてどの勢力に投資を行うべきかについては、だいたいの見極めをつけていた。あとはその裏付けをとるだけだ。

だが彼は、その前にトウキョウで大きな動きが生じるだろう事も予測していた。東アジア共和国の枠組みに一定の変化をもたらすであろうそれは、すでにあちこちでその萌芽を見せている。東アジア中央政府が維持してきたトウキョウ特別行政区の現在の枠組みを侵食する形で、幾多の利害関係者が蠢き出している。

そんな中、日本軍を名乗る彼らだけが、その外側にいた。従来の枠組みでのみトウキョウを見、従来の枠組みに基づいて行動する。それは中央政府と同じ思考だと言えた。カヲは、何か言っている司令官を無視し、摩天楼の虚ろな輝きを眺め続ける。

鉄格子の嵌められた小さな窓に、頑丈そうな扉。部屋にはテーブルと一对の椅子、そして壁際に机と椅子が一組置いてあるだけである。大して明るくない蛍光灯が、ペンキを塗られただけの冷え冷えとした壁を照らしている。

取調室で出される食べ物は自費だという話を聞いたことがあった。だとするといくらになるのだろうか、五食目を食べ終えて思った。扉が乱暴に開いてタバコそのものが入ってきたように部屋がヤニ臭くなる。ユ・ケデインは分かるように顔をしかめた。

「なあ、そろそろ何か話そうや」

「弁護士を通して下さい」

少々疲れは見えるが、冷ややかな視線を向ける余裕は十二分に残っている。シユウ・サクラは聞こえるように舌打ちをした。

マフィアの事務所東アジア軍の兵士が死んでいた事件、ケデインを参考人として本庁に連れて来たまでではないが、そろそろ時間だった。任意同行には応じないだろうと、公務執行妨害の現行犯で逮捕しておいたのだが、彼が勤めているという通信社から正式な手続きを踏んで弁護士が派遣されてくるという。そうなれば釈放するしかない。

シユウとしては、軍の横槍が入ると考えていた。そうすれば上司連中を問い詰める理由になるかと思っていたのだが、その当ても外れてしまった。

「あんたはあそこで東アジア軍だと名乗ったよな」

「厳しい取調べのせいでしょうか、数日分の記憶だけがなくなっています」

「・・・弁護士が来るまでの間、その厳しい取調べって奴に変えてもいいんだがな」

「それがトウキョウの警察ですか」

「いや、ペキンの直伝さ」

トウキョウの複雑な事情という奴は、嫌でも理解しなくてはならない。だからといって自分達の国で行う自分達の仕事を、他所の国の軍隊に邪魔されて黙っていられるほどお人好しではない。マフィアとはいえ、トウキョウの市民を標的にして軍が何を企んでいるのか。

「他にもいくつかの組事務所が襲撃されていてね・・・マル暴はヤーさんの抗争だと言い張ってたが」

現場から採取された銃弾や薬莖を分析すれば、それが普通の銃器で無い事は一発で分かる。そして襲撃されたマフィアを調べていけば、そこに襲撃者の意図を読み取る事も簡単であった。

トウキョウ最大のマフィアである菱丘組は、マフィア組織のトップによって構成されている。つまり一つのマフィア組織ではなく、複数のマフィアの連合体なのだ。当然、その中には派閥があり対立がある。襲撃されたマフィアは、反東アジア色の強い右翼系の団体であった。

襲撃者の正体が不明のままであれば、その事件は菱丘組の内部抗争に発展しただろう。そうなっていないのは、襲撃事件に東アジア軍が関与している可能性がマフィアにも伝わっているからだ。

「同胞から金を巻き上げている凌雲会なんざ、真っ先に狙われるだろうな」

経済活動の円滑化のためであれば、行政府だろうと東アジア軍だろうと手を組むコウキ・ヨシオカのやり方に反発する者は、菱丘組の中にも少なくないのだ。

「問題は、何で軍隊様がヤーさんなんぞを狙うのかだ・・・」

「警部、弁護士の方が見えました」

シユウはため息をついて顔を上げた。そして弁護士が取調室に姿を現すよりも早く、ケティンを部屋から追い出す。すれ違い様に見た彼の顔に、シユウは相手がプロである事を確信した。

原理が不明であっても、使用の出来るものというのはい多い。いや、そういったものがほとんどなのだ。科学とは「こうすればこうなる」と記述する事であり、「こうだからこうなる」と記述する事ではない。そして何をどうすればどうなるのかが分かれば、それを使う事はたやすい。

コーデイネーターの作り方というのは、今でもネットワークを検索すれば簡単に出てくる。だがそれで、コーデイネーターの全てが分かっていると考えるのは愚かな事であろう。個々の遺伝子の改変が、人間をいかに変化させるかは、未だに研究の途上なのだ。

「それは合法的な人体実験である」

論文に書かれた無駄な一文を消去した。チン・ヤンチャンは画面の文章を保存して、椅子の背もたれに体重を預ける。別のコンピューターの画面には、ハニス・アマカシに関する比較データが映し出されていた。彼が行っているのは、SEED発現に関する研究である。

SEED発現の直前に、身体にどのような外的影響が与えられていたのかについての詳細なデータが集められており、少なくともハニスに関してはほぼ100%任意でのSEED発現が可能であった。彼曰く「コツを掴めば簡単だ」そうだが、それによって生じる身体能力の向上は、ヤンチャンが長年行ってきたパオペイレンへの強化施術を上回るものだ。

特に脳や神経の活性化は顕著であり、コーデイネーターの身体能力はSEED発現によって初めてフル活用されると言っても過言ではなかった。逆にナチュラルでは、活性化した脳や神経の機能に感覚や筋肉がついていけないという事態を招く事もあった。

そしてそのSEEDをどのように発現させるかが、ヤンチャンの研究課題であった。彼はコンピューターを操作して音楽を流す。昔のプラントの流行歌だ。

彼がオーブに移った頃、ある噂がネット上の話題になっていた。ミリア・キャンベルと言う名の、ラクス・クラインの偽者の話であった。整形手術によって顔をかえて、ラクス・クラインに成りすましていたという他愛の無い話で、丁寧に整形前の顔写真まで出回っていた

のだ。

ヤンチャンはその話の出来の悪さに引っかけかりを覚えた。ラクス・クラインの容姿など、彼女が作られた当時のカタログを見れば、品番付きで見つけることが出来るであろう。少なくとも外見に関するコーデイナーは、費用さえ掛ければ解決できるレベルになっている。つまり、整形などではなくラクス・クラインと同じ品番のコーデイナーを受けた人間を探せば、全く同じ容姿の人間を見つける事は難しい事ではないのだ。

だが整形前という顔写真はラクス・クラインとは似ても似つかぬ顔であった。ゴシップを彩るためとしても不自然極まりない。そしてミア・キャンベルを偽者に仕立て上げたのは、ギルバート・デュランダル元最高評議会議長だという。

全人類の遺伝情報をデータベース化し、社会におけるもつとも適切な人的資源配分を市場ではなく科学の力によって行おうとした人物だ。そんな人間が、何故整形などというアナクロな技術で偽者を作り出そうとしたのか。

「18番染色体、第225遺伝子、GGA変異型」

それが、ラクス・クラインとミア・キャンベルの共通点であった。二人とも、コーデイナーの対象とはならない役割の良く分かっている遺伝子部位が、同様の小さな変異を起こしていたのだ。ギルバート・デュランダルは、それを知っていたが故に、整形などという手段で偽者を仕立て上げたのではないか。それがヤンチャンの見立てであった。ネットに流れていたのはゴシップではなく真実だろう。

この変異型遺伝子は存在するだけで何の役割も果たさないと考えられている。だがカヲは、その変異型遺伝子をもたらす影響を突き止めていた。その遺伝子変異を持つ人間の声は、高低両方の非可聴領域に特殊な波長の音波を持つのだ。

非可聴音と言っても、それは耳で聞こえないだけであって、音としては認識しなくとも空気の振動そのものは全身で感じている。ハニスはその非可聴音によって、SEEDの発現に成功したのだ。正確には、その非可聴音を感覚する事で大脳辺縁系の一部が急激に活性化

し、SEED発現の前段階状態が出現する。ここに外的なストレスを加えるとSEEDが発現するのだ。

幾度かのSEED発現を体験すると、前段階状態にさえあれば外からストレスを加えずともSEEDを発現できるようになるようだ。

「デュランダルも、ここまででは知っていたのだろうか・・・」

ラクス・クラインの声がSEED発現に何らかの影響を与えている事を知っていたからこそ、同じ姿ではなく同じ声を持つ人間を整形して偽者に仕立てたのだ。ミーア・キャンベルの歌は政治的プロパガンダなどではなく、全人類にSEEDという能力を発揮させるための手段だったのだ。

ヤンチャンの研究課題は、その音が果たして全ての人間に等しくSEEDを発現させるのかどうかという事である。だが現時点で、SEED発現に成功している者は被験者の三割以下に過ぎなかった。

この施設のBGMで使用されている曲は全てラクス・クラインの曲であり、非可聴音をカットしない特殊な記録媒体とスピーカーを使用している。

大型輸送機から吐き出されるのは、トウキョウ特別行政区に増派される軍部隊の先遣隊のMSであった。連合軍での一般配備が始まったウエルガーに加え、東アジアの独自開発機体もある。もともと、ウエルガーに関しては正式に連合軍が組織されなくては使用できない決まりになっている。連合によるお墨付きを得る準備をしているというパフォーマンスだろう。

昔乗った機体の方が乗り慣れていると思うのだが、今回は東アジア製のMSに乗る事になるのだろう。ヒューは派手なトリコロールのカラーリングが施された機体を見上げる。かつて採用されていた換装式ではなく、統合兵装。バックパックを搭載したシャンディアンと呼ばれる機体。頭部のデザインは、ダガーやウインダムに近いものであった。

これのプレゼンテーションもかねて作戦が行われるのであろう、

ヒューは整備員からマニュアルを受け取って目を通しておく。問題の作戦は、未だに日程が決まっていない。

特別行政区内部での大規模な軍事行動であるため、その決定過程は紆余曲折しているはずだ。そしておそらく、作戦自体が軍上層部の先走りだったのだろう。末端の兵士は全く知らない様子であるし、ヒューら一部パイロットに対する緘口令も解かれていない。

「こっちはたまったもんじゃないぜ・・・」

その眩きが聞こえたのか、近くにいた同僚が不思議そうな顔をする。ヒューはニカツと笑って誤魔化すと、マニュアルを読む振りをした。

東アジア軍に義理は無いし、特別居留区の人達に恨みは無い。だが、作戦がそのまま中止になるという可能性がゼロである以上、早い事決まってくれた方が心の準備も出来るという物だ。

少なくともこんな機体で、彼が勝手にフリーダムと呼ぶあの謎のMSに対抗できるとは思えない。何としても生き残る覚悟を決めるにしても、作戦は早く決まってもらうに越した事は無い。

それに決定が遅れば遅れるほど、情報は漏洩し敵に対策を取る時間を与える事になる。自分達が完全に情報を統制しているなどという驕りを持っているから、ヒューのような人間が軍内に潜り込んでいる事に気付けないでいる。だからこそ、軍も知らない自分の正体を知っていた、リ・ウエンという老人は不気味なのだ。

本国の調査によれば、日本自治区の中でも指折りの反東アジア共和国派であり、善隣幫と呼ばれる華僑ネットワークの総帥だという話だった。善隣幫は、東アジアのみならず大洋州や大西洋にもつながりを持つネットワークで、表向きは華僑の相互扶助組織でありながら、裏では様々な反東アジア活動を行っているらしい。

MSなどでは手に負えない手段で何かをやろうとしているのではないか、ヒューはそんな事を思った。マニュアルを閉じて滑走路を眺める。

特別行政区駐留軍の中心拠点であるヨコタは、薄暮に沈み行く風景の中、煌々とライトを照らしせわしなく動き続けていた。この様子を

眺めているだけで、東アジア軍の思惑など透けて見えてしまうのではないか、そう思わせるほどに、基地は威容を周囲に誇示している。

店の常連になるには、そこに通わなくてはならない。さらに自分をアピールすれば、店の者に顔を覚えてもらいやすくなる。意図してそれが出来る者もいれば、意図せずしてそれを行ってしまう者もいる。キリルは後者であった。

軍施設と貧民街が広がっている現在の南千住にある飲食店など、ろくな客が来ない。都心部で飲むような金を持たない末端の兵士に、マフィアの下級構成員、こういった連中が主な客だ。

しかしその客層は、トウキョウの隠しえない側面である。身分証確認ゲートによって統制され普通の都市を装うとも、トウキョウは軍の抑圧と裏社会の暗躍が支配する街なのだ。それは十分に調査するに値する、キリルはそう思っていた。

「あら、ローレンスさん、いらつしやい。マリアちゃん、ご指名よ」
ドアをくぐると、たまたまそこにいたママがキリルの顔を見て愛想よく言った。マナーが悪くトラブルはしょっちゅうであり、ケチな上に支払い滞る。そんな街において、キリルは上客中の上客であった。きちんと酒を注文し、酔って周りに迷惑を掛ける事無く、きちんと支払いをする客には、最大限のサービスを行うのが経営というものだ。

案内されたソファに腰掛けると、シングルの水割りがグラスの中で回っていた。差し出されたそれを手にすると、その向こう側にマリアの微笑みがある。彼女もグラスを手にし、促すように小さな乾杯をした。

キリルは視線を落とす。胸元の大きく開いたドレスはスカートも短く、視線のやり場に困るのだ。そういった過剰な露出は、むしろ彼女の美しさを損なっているのではないだろうか。その均整の取れた女性の曲線は、強調しすぎるとただ欲情しか刺激しない。

「今日は・・・歌わないのか？」

「お客さん、今日は多いから。聞きたい？」

「・・・綺麗な、声だから」

彼女のような女性が、どうしてこんな仕事をしているのか、キリルには理解の出来ない事だった。言葉を交わせば、彼女がちゃんとした教養や知性を兼ね備えた女性だという事が分かる。

そんな彼女が、酔客にその体を触らせるような職業についている事が信じられず、また堪えられなかった。グラスを持つ手が、震える。「どうか、した？」

彼女は静かな問い掛けとともに、震えるキリルの手にそつと手を添えた。彼の心臓は早鐘を打っている。慌ててグラスを煽るが、酒の味などもはや分からなくなっていた。

空になったグラスにウイスキーを注ぎ水割りを作る彼女を見つめる。少し前屈みになった姿勢から、彼女の谷間がはつきりと目に映る。しかし、もう目を逸らす事ができなかった。

水割りを作った彼女が、その視線に気付いたように、そつと胸元を隠す仕草をする。彼は顔を赤くしてうつむいた。

ビジネスマンにとって、時間は厳守である。約束の時間に遅れるという事は、信頼を失う事と同義であり、決してしてはならない事の一つなのだ。約束の時間から30分遅れて、彼らは到着した。

二人で深く頭を下げ平謝りするが、先方は別段気に留める様子もなかった。逆に、よく30分の遅れで済んだものだと感心さえしていた。そして立ったままの二人に席を勧める。タルハ・アンワール・ガニーと、ユンディ・ミナカミの二人は、恐縮しながら席に着いた。シユバルベ工業の作業用汎用機械のセールスに、特別行政区の都市整備部局を訪問しているのだ。

「テロだの何だので、軍がピリピリしていましたね」

身分証確認ゲートのレベル変更が頻繁に行われているのだと言う。最近では慣れた人間でも、乗り継ぎや道順に迷う事もあると言う。ましてや商用のビザでは、さらに使用可能なルートが限定される。タマ

ユラ地区から特別行政区本庁舎のある新宿まで、大変だっただろうとねぎらつてくれた。

出されたお茶を口にしてようやく落ち着いた二人は、言い訳じみていると思いなながらも自分達がどのように道に迷ったかを説明した。都市整備部の担当者は、うなづきながら聞いてくれた。

その不便さは、外国企業に対する一種の障壁であった。トウキョウで自由に企業活動が出来るのは、東アジアの企業の中でもペキンの中央政府に近い企業ばかりである。苦勞してトウキョウに進出しても、なかなか上手く行かないのが実情のようだ。

「我々としても迷惑しています」

担当者は苦笑いとともに言った。ペキンの中央政府が直接統治するといつても、高級幹部がペキンから派遣されてくるだけであつて、実際の行政事務を行うのは彼らのような人である。特別行政区の幹部に対して忠誠心を持っているわけでも、駐留する東アジア軍を歓迎しているわけでもない。

メンタリテイとしては日本自治政府と同様に、中央政府による直接統治という方法に反発心を抱いているだろう。

「今日、提案させていただくのは・・・」

タルハがパンフレットを開いて商品の説明を開始する。従来の建設重機には無い汎用性を有した多脚多腕型作業機械。専用のオペレーションシステムを搭載し、作業に応じてインストールされているアプリケーションソフトを選択するだけで、様々な用途に使用が出来る。作業用の腕部の取替えも、機械自身のマニピレーターによつて可能であるため、大幅な省力化がなされていた。

東アジアの中央政府とは何の関連もない会社だからこそ、商品の魅力を丁寧に説明すれば好印象を与えられるはず。日本自治区では既に自治政府による認証を得るための段階に入っており、その辺りの実績もしっかりとPRしておいた。

第八話 すべき事

公民館の貸会議室。長机とパイプ椅子が並べられたそこに、人が集まり始めていた。ドアの前には、模造紙にマジックで書いただけの案内が張られている。経営研修会と書かれているが、中に集まっている人は普通のサラリーマンにしか見えなかった。

入り口で出席の確認をしていた男性が、中の人に合図を出す。そろそろ時間であった。男性の胸に付けてある小さなバッチは、特別行政府の職員である事を示している。司会者がマイクの調整をし、声を出す。

「お忙しい中お集まりいただき、ご苦勞様です。早速ではございますが、活動報告からお願いします」

参加者が手元のレジユメに目を落とす。そこに書かれた順番に沿って、報告が行われるのだ。彼らは府内各企業の労働組合の職員であった。これは、それら組合の集まりである労働組合連合会の会合である。

もともとこの国の労働組合は形骸であり、東アジアによる直接統治が始まると、それらは中央政府の肝入りで一本化がなされ、単なる政府の一部局へと成り下がった。そんな中で、東アジアの中央政府に擦り寄ってのし上がる者もいれば、逆に本来の組合活動を模索する者も出始めた。

だが労働者の権利を擁護するための活動は、当然行政府から有形無形の圧力を受ける。その結果、労働組合活動は行政府への抵抗を主目的とし始めた。それが合法非合法を問わず、反東アジア活動家や日本独立派を引き寄せるのは当然の帰結である。当面の敵は同じなことから。

労働者を死ぬまで働かせる事のみが経営であったこの国で、労働組合が形骸であったのはある種の矛盾である。だがその矛盾を招いたのは、当の労働組合が過激な反体制活動にのめりこんだという歴史があった。組合を追い詰める行政側も、追い詰められる組合側も、その歴史を全く学んではない。

「ありがとうございます。では最後に、トウキョウ行政職員組合のハタナカさん」

「ご紹介にあがりましたハタナカです。勤務先は行政府の都市整備部です。まずは組合員の勧誘活動についてですが・・・」

法的には、こういった組合活動は合法である。しかしそういった活動を行う者には、昇進や給与の面で報復が行われるのは旧世紀から変わっておらず、活動内容を隠さなければ公民館すら借りられないのが実態なのだ。それでも、ここにいる者達は地道な活動を続けている。

表では、不当な解雇や昇進面の差別的運用などの訴訟を支援したり、ベースアップを始めとする賃金確保のための交渉を会社側と行ったりしている。そこまでは旧世紀の組合活動と同じだ。だがトウキョウ特別行政区という特殊な政治状況が生じている現在では、活動はそれに留まらない。

「旧世界への隅田川渡河による物資搬送実績は前年比で若干下回りました。しかしその分は荒川渡河によるもので埋め合せています。また海外の慈善団体との提携で、より円滑な物資搬送も可能となっております」

彼らは、日本人特別居留区への物資供給や、日本軍工作員の受け入れ・逃走の幫助といった非合法活動まで行っていた。もちろん、当局に発覚すれば逮捕は免れない活動であるが、取締まる側の行政府内部にも組合があり、取締りスケジュールその他の情報も各組合が共有している。

しかし東アジア軍が直接動いているという情報があり、今後は活動を縮小し様子を見るべきだという意見が出るようになっていく。会合ではその意見が採用され、非合法活動への関与を少なくする事が取り決められた。

また各組合に対して個別に接触を図っている団体がいるため、その団体との窓口を組合連合会に一本化する事も決まった。ハタナカが組合連合会の代表として、その団体のトップと面会する事となる。ヨコハマまでの旅費を組合連合会の経費として出す事も決められた。

久々に隊員総出の仕事であった。グレートバリアリーフ号にいるザフトの隊員は、全員が制服を取り出して準備をしている。目的はトウキョウで緊急特別ライブを行う事に決まったアイドルの受け入れだ。

船にザフトがいる事は秘密であるため、彼らは密かに船を離れ東アジア軍の識別圏外の海上まで移動、そこでカーペンタリアから回されてきた飛行機に乗り込んでナリタに降りる事になっていた。グレートバリアリーフ号が試乗会を開催するのに合わせて、彼らも動く事になっていた。キリルが制服に腕を通す。

「やべ、首周り太ったかも」

エリックの緊張感の無い言葉に、キリルは鋭い視線を向ける。前回のよう楽な仕事ではないのだ。

東アジアの中央政府が直接統治するトウキョウ特別行政区。そこでプラントの歌手がライブを開くなど、並みの政治力ではないはずだ。プラントとの緊張緩和を模索する東アジア内部の勢力とコンタクトを取っているのだろうが、それはプラント外務省に匹敵するコネクションと交渉力を持っているということをも示している。

ハーモナイズコミュニティは、ただの民間団体では無いということであろう。プラント当局も十分に正体を掴みきれていないのは、その拠点が地球圏の各地に分散しているからであった。

「東アジアにも拠点を作ったのかもな・・・」

首周りを気にしながらエリックが言った。彼はサブカルチャーコミュニティが本来の形である以上、アキハバラのどこかにその拠点があると思っていた。だがジュンコ・ヤオイはそれを完全に否定している。彼女はイケブクロなど複数の候補地を絞っているようだが、いまだ確証のようなものは無いらしい。

エリック自身も、サブカルチャー関連の複数のサイトに接触してはいるのだが、コミュニティの主要メンバーとの接触は出来ないままであった。それなりに常連だったサイトもあるんだけど、などとぼやいているが、キリルが見る限り日がな一日パソコン相手に遊んでいる

ようにしか見えない。

キリルにとつては、そんないかがわしい集団がプラントを拠点に活動している事自体を信じたくない気分なのだ。融和と共存という理念自体、彼には疑わしく感じるものなのだが、それ以上に、そんな理念を掲げながら軽薄な歌しか歌えないアイドルを熱狂的に支持するだけなど、とてもコーディネーターとは思えない行動だった。

そんな集団がザフトを上回る政治力で東アジアと接触しているなど、もはや理解の範疇を超えるものであった。

「そうか？ ラクス・クラインしかり、ミア・キャンベルしかりさ」
エリックがキリルの憤りをいなすように言う。彼はもう一度エリックにきつい視線を送った。彼らは、そのどちらもよく知らない世代であり、当時の熱狂がどういったものかも、伝え聞く事しかない。

だが彼女らが、当時のプラント政府を超える政治力を有していたのは紛れも無い事実である。しかしキリルが、もしかしたらそれこそがプラントの実態なのではないかというエリックの意見に与する事は絶対でない。

コーディネーターの理念を忘れたかのような先人の愚かな行いこそが、長きに渡る地球圏の混乱を生み出したのだ。その愚かさを正し、コーディネーターの理念を実現するのが今の自分達の世代に課せられた使命であるはずだ。

連絡場所はタマユラ地区の出版社である。ルーイは週に一度ここに来て、本社からの連絡を受ける事になっていた。トウキョウの通信は全てが傍受されている可能性もある。タマユラ地区にはオーブから直接伸びている海底ケーブルがあり、ここなら通信内容が外部に漏れる可能性は無いのだ。

最近になって、行政府がトウキョウの警戒を強めているらしく、ヨシトがヨコハマの通信社からこちらに来る回数も減っていた。そのため、取材活動はルーイ一人で行う事が多くなっている。

一週間分のレポートを本社に送信すると、彼は出版社の建物を出て

駅に向う。まっすぐホテルには戻らず、遠回りをして帰るつもりだった。足を向ける先は、あの孤児院である。

地下鉄で荒川、中川、江戸川を渡り、電車を乗り換える。再び江戸川と中川を渡つてようやく目的地に着く。トウキョウの路線も、よく使う線であればだいたい頭に入ってきていた。

「どうも、キリロフさん」

宅配業者の応対をしていた職員が、頭を下げる。スーツにエプロンという姿も、いい加減見慣れてきた。子供達が静かになっているので、多分歌の時間だろうと言ってくれた。ルイーは院庭に向わず、建屋の方に足を向ける。

遊戯室では、子供たちがピアノを囲んで歌を歌っていた。そして、その歌詞は日本語ではなかった。きつと聞いたままを覚えて声になっているのだろう。ピアノを弾くアメリカがいつも歌っている歌なのだ。「どの子も、歌の時間だけはおとなしくなるんです」

遠くからその様子を眺めていたルイーに、孤児院の院長がそう言った。児童教育については専門家では無いので良く分からないが、子供達の情操教育という面では効果があるのだろうと言う。精神的に不安定な子供も少なくないのだが、そういった子を落ち着かせるのにも効果があるようだ。

ルイーはその歌に耳を傾ける。子供達の声の中に、彼女の声を見つけ耳を澄ませる。そんな彼を見つけたのか、彼女は視線を合わせると微笑んだ。

「さあ、お昼寝の時間ですよ」

歌が終わったタイミングを見計らって院長が言う。スーツにエプロンをつけた男達が毛布を配り、子供達は素直にそれに包まっていた。アメリカがいけない時は、寝かしつけるのも大変なのだそうだ。

子供達を起こさないようにそつとその場を離れるアメリカが、丁寧な挨拶をする。ルイーは、彼女のその態度を好ましく思うのと同時に、もっとフランクに接して欲しいとも思う。

子供達が寝ている間、院長らスタッフには事務仕事があるがボラnteティアで来ているアメリカは手が空く。気を利かせた院長は、二人にお

茶を勧めてくれた。紅茶の香りが満ちる小さな応接室に、二人だけが残される。

まだ宵も口だが、人通りは少ない。飲食店の赤提灯が、歩道を寂しく照らしている。ゲートチェックが厳しくなった影響は、こういったところに如実に現れるのだ。ガラガラと入り口を開けると、店主の疲れたような顔が覗く。カウンターにテーブルが二つほどの小さなおでん屋。男が名前を告げると、女将が奥の座敷に通してくれた。

一見冴えない見た目だが、渋い趣味を持っているのが分かる気もする。シユウ・サクラは上着を丸めて座敷の隅に転がし、座敷で待つていた男を見た。運ばれてきたビールを手酌で飲み、相手が口を開くのを待つ。ジャーナリストとの接触など、彼も初めての体験だ。カズヤ・イシがシユウの箸先を見て言う。

「ご出身も、こちらですか」

「どうして？」

「いえ、ちくわぶを食べていらっしやるので。私はどうもね・・・」

関西出身だと名乗ったカズヤが笑う。シユウも口の端を緩める。しばらくは二人でおでん談義に花を咲かせた。一本目のビールが空になり、熱燗と焼酎の湯割が運ばれてきた頃、ようやくカズヤが本題に入る。

タマユラ地区を中心に活動しているフリーランスのライターだというが、こうして都心に信頼の置ける飲食店を確保しているのだ、やり手の記者だろう。彼はタマユラ地区におけるオーブ関連の動きについて、捜査当局がどの程度を把握しているかを知りたがっているようだ。

オーブ政府が一步も二歩も引いたスタンスであるのは知っているが、それが一枚岩でないのも事実だ。モルゲンレーテを始めとしてタマユラ地区に利権を持っている企業もあれば、オーブ国内に亡命日本人組織があったりもする。それらが何を画策しているか、シユウの知るところではなかった。

分離壁の下をくぐる地下トンネルを使って日本軍を支援する組織や、特別居留区へ物資を密輸しているグループが存在すると言う話は

聞いている。だがオーブの租借地であるタマユラ地区の扱いは、大西洋の基地になつている三浦半島などと同じく東アジアの中央政府が管轄しているのだ。建前上は保安局に警察権があるのだが、実際には何も出来ていない。

「あそこは治外法権がありますから」

保安局の仕事はせいぜい、川を渡つて不法に入区しようとする人間を取り締まるくらいだ。タマユラ地区の内部の情報なら、こちらが聞きたいと言つておいた。カズヤは肩をすくめるが、記者の勘と断りを入れてから言つた。

「呼応してますよ・・・トウキョウの内部と。つないでいるのは、おそらくジャンク屋」

ただ、ジャンク屋も最近は色々と保険を掛け出しているようだとも言ふ。シユウは気になる話題を思い出した。最近、菱丘組のトップと善隣幫のトップが会談を行ったという話だ。

コウキ・ヨシオカがいきり立っていたため詳しい話まで聞けなかったが、どうやら彼の嫌う政治の話のようだった。

華僑系のマフィアも傘下に持つ善隣幫と菱丘組の関係はもともと良好ではなかった。ただ、特別行政区が発足し東アジア系企業が大量して進出してくるようになると同時にやって来た東アジア系のマフィア組織が共通の敵であったため、深刻な対立には至っていなかっただけだ。

それこそ旧世紀からアングラの縄張りを争ってきた二つのマフィアがいきなりのトップ会談である。嫌な感じを受けざるを得ない。東アジア軍の特殊部隊がマフィアの事務所を襲撃していた事件といひ、確かにトウキョウは動いている。タマユラ地区における策動もその一つであろう。

しかし、それらが共通の思惑を有していないであろう事も確実だ。それがどこにどのような形で収斂するのか。シユウは刑事の勘だと断つて言つた。

「戦争・・・ですね」

マフィアの抗争の事をそう呼んだりもする。だが彼は、本当に戦争

が起こるのではないかと感じていた。

「途中で圏央道に流れるかもな・・・手前の鶴ヶ島で張るか」
「いいんですか、高速道の破壊はダメって言われてんでしょ」
「アツザムを使わなければいい」

拡大や縮小を繰り返しながら、地図が画面に映し出される。先日新潟に上陸した東アジア軍部隊の一陣が、イルマとヨコタに向けて移動を開始するとの情報が入ったのだ。ハニス・アマカシは、それを受けて襲撃計画を立てている。

今彼らがいる施設を貸している組織は、あくまでも東アジア軍に対する揺さぶりだけを求めているのだが、彼はそんな生易しい戦闘に飽きてきたところだ。せつかくの力を持ち腐れさせても意味は無い。エヴィデンスによる攻撃に、パオペイレンによる襲撃を組み合わせ、部隊を殲滅する計画だ。

パオペイレンの連中にしても、ちんけな爆破テロばかりでは不満もあろう。この間の東アジアの特殊部隊を全滅させた戦闘からかえって来た時は、本当に生き生きとした顔をしていたものだ。

「ミラコロの時間ギリギリまで使えば、ジャンクシヨンの内側で待てるだろ」

関越道と圏央道が交差する地点が襲撃場所であった。航空写真を使いながら襲撃の時間や手順が決められていく。その計画の立案に積極的に関わるパオペイレンの姿は、もはや生体CPUなどと呼ばれていた強化兵士とは一線を画するものだ。その技術は、強化兵士の製造技術ではなく、兵士の強化施術というレベルにまで高められている。

技術責任者としてオブザーバー参加していたチン・ヤンチャンは、その場を離れた。自分が座っている必要はどこにも無い。

初めてコーデイネーターを作った科学者は、ジョージ・グレンを見て何を思ったのだろう。自らの居場所が無くなった事を悟り、名前すら残さず歴史の闇に消えたのだろうか。それとも墓石の下で、自らの

成果を今も誇っているのだろうか。自分のように所詮は人しか作れなかった人間と違い、彼らは間違いなく人間では無いものを作り出したのだから。

「博士、論文に目を通してもらえますか」

「私は物理畑ではない」

廊下の窓から特徴的なフェイスデザインのMSを眺めていたヤンチャンは、ミツネ・ササが差し出した紙の束をそうやってつき返す。彼が研究しているのは、未だその現象が観測されるだけのものであり、理論は一から仮説を組んでいる状態だ。門外漢が首を突っ込めるレベルではなかった。

不満そうな彼にせめてもの微笑みを向けて、ヤンチャンはその場を立ち去る。自分にも彼のような時代があったのが嘘のように、全身がけだるい。

カフェテリアから流れてきたのは、いつもかかっているラクス・クラインの曲ではなかった。よくは分からないがチープな曲調と声、プラントで流行っている曲だとハニスが言っていたような気がする。不意に、どうして彼がそんな曲を知っているのだろうかという疑問と、どのように彼が東アジア軍の動向を掴んだのだろうかという疑問が繋がる。彼はこの曲を、とある音楽サイトから引っ張ってきたと言っていたのだ。

アングラと一括りに出来るほど、その世界は狭くない。マフィアにはマフィアの、テロリストにはテロリストの、スパイにはスパイの世界があつて、その境目を越える事は容易な事ではないのだ。下手にそこを越えようとすれば、手痛いしっぺ返しを食うのが世の常だ。

マフィアの事務所を襲撃したのは東アジア軍の特殊部隊だが、それはユ・ケティンの頭越しに行われたものであつた。彼の所属する諜報機関とは別ルートでマフィアの動向を察知して動いたのであるが、あのような事態を招くとは予想外だったはずだ。

それ以上に痛手を受けたのはケティンの方である。彼はマフィア

の一部と手を組んで、反東アジア活動の摘発を行おうと交渉していた。東アジア系のマフィアが持っているマーケットの割譲を条件とすれば、交渉自体は難しいものではないと考えていた。その努力を、特殊部隊による強攻策がふいにしたのだ。

「身から出た錆ってやつだよ、ミスター・ユ」

目の前の男がぞんざいな口調で言う。ブランド物のスーツに身を固めているが、趣味の悪さを隠しようの無い男だ。それでも、利に敏く目端が利き、相手の力量に対する本能的な嗅覚のような物を持っているその男は、容易に隙を見せない。コウキ・ヨシオカの暗い視線をいなすように、ケデインはメガネを拭いた。

トウキョウ最大のマフィア組織である菱丘組の中でも最大の勢力を持つ凌雲会の実質的なトップである彼が、ケデインの交渉相手であった。ビジネスとして話ができる最適の相手だと踏んだからだ。

実際、特殊部隊が動くまで交渉はスムーズに進んでいた。彼としてもメリツトの多い話だったはずなのだ。コウキは足を組み替え、ソファに深く身を沈めた。メガネを掛け直したケデインに、条件の上積みを要求する。

「こっちは一方的な被害者だ」

特別居留区との資金のやり取りを行っていた地下銀行を管轄する組を潰され、凌雲会は大きな痛手を負っていた。特に薬物の流通量が減った事により、従来のマーケットを東アジア系マフィアに侵食されているのだ。

それに加え、いくつかの組が襲撃されたことに危機感を覚えた菱丘組は、ヨコハマを拠点とする華僑マフィアの善隣幫との提携に乗り出した。それもビジネスの面ではなく、反行政活動の面で一致した行動を取る事が決定したのだ。

もともと菱丘組は本拠地である関西から進出するに当たって、トウキョウのマフィアを吸収合併しながら大きくなっていった。それも従来のマフィアとは一線を画していた民族系・右翼系の団体を積極的に併呑して規模を拡大していったのだ。そのため、菱丘組の内部における東アジアへの反発は、単に縄張り争いの相手というだけではない

ものを抱えていた。

これらが日本軍と連携すれば、軍の想像をはるかに超える事態となるだろう事は明白だ。それを阻止するためであれば、多少の条件上積みくらいは飲めるはずだとコウキは迫る。

「そういったイデオロギー集団を組から排除できれば、凌雲会の立場はより一層強まりますしね」

ケデインは核心だけを言った。この男にはトウキョウの明日も、東アジアの政治も無関係だ。ただ自分の利益を最大化することだけが目的のシンプルな相手なのだ。それでも、彼の言った事は間違いでは無い。

今までのようなテロリスト封じ込めを目指す方法で、この事態を乗り切る事は不可能だろう。下手をすれば、トウキョウそのものが敵に回る。そんな事態を、目の前の男が何とかできるはずも無かった。ケデインはため息だけを残して立ち上がる。

埠頭に浮かべば、その姿は摩天楼にも匹敵する巨体だ。だがこうして大海原に出てしまえば、豪華客船といえども木の葉のような頼りなさにしか見えない。グレートバリアリーフ号は、一泊二日の体験遊覧航海として外洋に出ている。キリル達は、日本へと戻っていくその姿を小型艇の上から眺めていた。

洋上で小型艇に乗り換えた彼らは、ここでカーペンタリアからの潜水空母と合流し次の任務に備える。青空の一角で白い煙が弾けた。信号弾が打ち上げられた方向に、小型艇が向っていく。

「困難な任務に良く耐えてくれた。今後とも、君達の活躍に期待したい」

潜水空母にはザフトの将官が直接乗り込んでおり、キリル達に激励の声を掛けてくれる。見えないように肩をすくめるエリックを睨み、キリルは次の任務の概要に耳を傾けた。

グレートバリアリーフ号に戻り従来任務を続ける班、カーペンタリアに向いアイドルの関係者としてトウキョウに乗り込む班、カーペン

タリアに留まり情報の分析を行う班など、いくつかのグループに分けられる事となった。しかし、キリルとエリックはどの班にも属さず、別任務が与えられる。

別室に呼ばれた二人は、少し緊張した面持ちで話を待った。将官が示した資料は、幽霊MSの噂が書かれている。

「君達の調査報告書にも時折出てきた話だ。ローレンス少尉は目撃情報も収集していたな」

「はい。堀切で東アジア軍のMSと交戦したMSについて、いくつか話を聞きました」

キリルが足しげく通っていた南千住は謎のMSが出現した堀切にも近く、特別居留区に出入りしている人間も多いため、その手の噂はよく流れていたのだ。軍関係の者には緘口令が敷かれているようだが、それでも酔客の話として漏れ伝わる話は多かった。

二人には、このMSについての情報を収集するよう命じられた。その件に関しては、ザフトも複数の情報筋から話を集めているようだ。エリックが真剣な顔つきで、その理由を質問した。確かに情報としては集めたが、確定的な情報は少なく信憑性に欠ける物も少なくないと思わせる内容が多い。

音も無く空を飛び、ビームを捻じ曲げ、触れる事無くMSを破壊する。そんな都市伝説めいた話ばかりなのだ。ザフトが仮にも食いつく話だとは思えない。

「君らはメサイアを知らんからな・・・無理も無い」

将官はそう言って遠い目をした。そんな都市伝説めいた事が実際に戦場で起こっていた、彼はその現場を見ているのだ。

超人的な、そんな言葉が無意味に思えるような出来事が繰り返り広げられていた。だが、それが実際に起こっていた以上、そこにあるのはオカルトや超常現象の類ではなく、確固とした技術的な裏付けのある何かだったのだ。

実際にそれを目の当たりにした者のトラウマとして、その恩恵を受けた者のタブーとして、その何かは長らく存在自体をなかつた事にされていた。それが不意にトウキョウに現れた。トラウマを払拭し、タ

ブーを乗り越えるためにも、それが何なのかを調べてみる価値はある、そう判断されたのだ。

二人は日本自治区の地方空港から、陸路でトウキョウに戻る事となった。

開放感の空の青さまで変えるのだろうか。タマユラ地区ではそんな事さえ感じてしまう。ブレイク・ザ・ワールドによって被害を受けた旧江東区は、オーブの重点的な復興支援とともにタマユラ地区という租借地となった。そのため都市計画も、都心部の計画とは一線を画したものとなっている。

広がりよりの無い狭い空間から押し出されるよう、上へ上へと無計画に伸びていく都心の摩天楼を尻目に、タマユラ地区は景観にも配慮した都市計画となっていた。見上げる空は、ビルとビルとに区切られた狭いものではなく、本来の広い青空である。

身分証を確認される事も無く、自由に歩きまわれる街。そんな普通の事に喜びを感じてしまうほどに、トウキョウは息苦しい街になっているのだ。

「確認終わりました。ナット一つ間違いなく、納品書通り」

アキバのジャンク屋はレベルが違うと笑いながら、男は受領書にサインをする。ジュンコ・ヤオイは、それを確認して請求書を手渡した。商品は、MSの操縦サポート用AIと各種付属部品。モルゲンレーテの純正ではないが、それに限りなく近いと言われているコピー品であった。

ビルの外に止めてある引越し会社のロゴが入ったトラックに、商品は積みかえられている。今朝、港に届いたものを納品に来たのだ。額が大きいので、彼女自ら動いていた。半金として用意されたトランクを開け、中の金塊を確認する。

この部品はこれから分離壁の地下に掘られたトンネルを通過して、日本人特別居留区へと送られる。持って来たAIと同じ数のMSを日本軍は用意していると言う事だろう。目の前の金塊といい、たいした

資金力である。

「よいパトロンをお持ちのようですね」

「いや、お宅と同じですよ」

皮肉のつもりで彼女は言ったのだが、相手は理解しなかったようである。だがその答えから、彼らに資金提供を行っているのが善隣幫だという事は分かった。ジャンク屋組合は、善隣幫から資金を得ているわけではないが、大型部品の輸送などはヨコハマに拠点を持つ善隣幫の協力なしには難しくなるだろう。

ジユニコを通してザフトと接触を図ろうとしていた事や、最近聞いたマフィアとの提携、善隣幫の動きは目に見えて活発になっていた。特別行政府や東アジア軍も動いているらしいが、そういったアングラの動きは十分に把握できていないようだ。

おそらくはタマユラ地区の企業や、日本軍や特別居留区への支援を行っている団体にも善隣幫は手を伸ばしているだろう。オーブ政府がタマユラ地区の維持に乗り気でない以上、タマユラ地区の確保を目指す連中は、善隣幫との提携に傾く。じわじわと、特別行政区への包囲網は完成に近づいているのかもしれない。

「いや、そうでもないみたいですよ」

紅茶のおかわりを勧めながら目の前の男が言った。作業着姿の似合う普通の中年だが、職業柄情報には精通しているようだ。

そもそも特別居留区とタマユラ地区の関係はビジネスライクなものが大半で、日本軍のシンパは限られた者だけだという。日本軍とタマユラ地区の企業では、その目指す方向が全く違うのだ。

それは、今トウキョウに関わる全ての組織にも言える事だが、どこも完全に同床異夢なのだ。それ故に、互いの組織が牽制しあって表面的には動きが無いように見える。善隣幫は、それを巧みに渡り歩いているだけであった。

しかし、だからこそ何かを仕掛けるのは間違いなく善隣幫のり・ウエンであろうと言う。

「こっちはプロが来たせいで、色々動きにくいんですよ」

タマユラ地区の警備保障会社の顧問にオーブの公安OBが来て以

来、権限の範囲内であるが過激派の取締りなどが行われ、日本軍との取引もやりにくくなっていると言う。ジュンコは、息を継ぐように窓の外を見た。状況の変化は激しく、理解どころか把握すら難しいと感じる。

特別行政府や軍の情報だけでは、今のトウキョウの状況は捉えられないのだ。情報網の再構築などしている時間があるのかどうか、彼女は窓の外の動くものに目をとめた。

再開発工事を行っている更地で、小型のロボットが作業を行っているのだ。MSの半分以下の大きさで、複数の手足を持つ不恰な機械が、基礎のコンクリートを打設する準備をしていた。その見かけによらない器用な動きに感心する。シユバルベ工業が売り込みを掛けている汎用作業機械であった。作業しているのは、プロモーション用に特別価格でリースされたものである。

都心部に直接乗り入れる電車はゲート管理が厳しくなり、特段の事情を認められでもない限り一般人では多摩川を越えられなくなっていた。もつとも、日本自治区とトウキョウ特別行政区を行き来する人はそれほど多くなかったので、不便になったとの声はあまり聞かれない。

だがそれほど多くなかった内に入っている者としては、不便な事この上なかった。ヨシト・モリは電車に揺られている。横須賀線から南武線へと乗り換え、稲田堤で京王相模原線に乗り換えて特別行政区に入るのだ。二子玉川どころか和泉多摩川ですら、ヨシトの身分証では通過できなくなっている。

「ゲートレベルの上があった日を追っていけば見えてくる物も・・・」

民家と畑が混在する車窓からの眺めにも飽きて、ヨシトはメモに視線を落とした。不慣れた思いをしながら特別行政区に入るのは、ルイーの取材に進展らしきものが見えないからだ。ヨシトのいる通信社に加盟する報道各社は、トウキョウの動向に神経を尖らせ、特別行政区内のフリージャーナリストや情報提供者との接触を密にしていた。

それらの話を総合すると、トウキョウにおける反東アジア運動の気運は、水面下で形になりつつあるようだ。利根川を越境するロケット弾攻撃も増加傾向にあり、日本軍も活発に動いている。

当然、東アジアの中央政府は何らかのリアクションを取っているはずだ。再構築戦争によって生み出された歪な国家のあり方が問い直されつつある現在、東アジアとしてどう動くのかは、国際的な影響をも与えるだろう。身分証確認ゲートと統制された情報によって制御された、管理都市トウキョウ。その綻びが、そこかしこに見えるのだ。

だからそこ、ジャーナリストとして見るべきもの聞くべきものは多いはずだ。トウキョウで外国人ジャーナリストが長期滞在できるなど、奇跡的な幸運である。ならば、その奇跡は十二分に活用すべきであろう。

ルーイ・キリロフは、一体何をしているのだろうか。

「それじゃ、気をつけて」

ルーイは大げさなほどに手を振った。そんな彼の様子に、アメリカが恥ずかしそうに手を振り返す。彼は軽くステップを踏むように地下鉄へと足を向けた。今日は彼女にトウキョウ案内をもらったのだ。

かつては観光名所だったという上野は、今では静かな森のたたずまいを見せるだけであった。特別行政区の発足で観光客が激減した事と、道路を隔てた東側一帯が浅草を中心としたマフィアの縄張りである事が原因だと言う。それでも、博物館や美術館が立ち並ぶそこは、格好のデートスポットであった。

地下鉄の窓に自分の顔が映る。ルーイはその微笑に微笑み返した。自分でも不思議なくらいに浮かれている。どれもこれも、初めての事ではないというのに。

穏やかで控えめで暖かな、そんな彼女の一挙手一投足が彼を捉えて離さない。そんな自分の気持ちだが、嬉しくてたまらない。どれもこれも、初めての事であった。

彼はにやける頬を直すように、火照った顔に手を当てた。

窓から見えるのは朝日が空を照らし始める様子。部屋の中はまだ暗く、ドアを開けた一瞬だけ、部屋に太陽の光が差し込む。重いドアが疲れた音を立てて閉じた。上着を脱ぎ捨てて、シャワーに向う。

何かが張り付いたように重い体を引きずってベッドまでたどり着いた。気力を振り絞るように髪だけは乾かしておく。二日酔い予防の薬を飲み、買い置きのパンを口に詰め込んで仮眠を取る。動き出した電車の音は、彼女がまどろみよりも深い場所に行く事を許さない。

内容の思い出せない夢が途切れ、目覚まし時計が鳴っていることに気付く。頭を持ち上げて顔を洗いに行った。冷水程度では一向にスッキリしない頭を押さえ、部屋着に着替える。仕事先で洗濯が出来る事はあるが、掃除はこまめにやらないと。乱雑な部屋と、芳香剤の切れた台所が、とても寂しく虚しい。

「次の日本語を聞いて、以下の設問に答えなさい」

スイッチを入れたプレーヤーから、リスニングの問題文が聞こえてくる。問題集とノートを開いて耳を澄ませた。試験の時期が迫っているのだ。一時間といえどもおろそかにはできない。

日常生活においては何らの支障も感じないほどに、この国の言葉には慣れた。だがそれと試験とはまったく別なのだ。スピーカーから流れてくる発音を、漢字で書き取っていく。無数の同音異義語を暗記し、文脈の中から最も適切なものを選択して書き取る。ここまでは出来るのだ。だが、格助詞との組合せのみの場合は、それを判断する事が至難の技となる。

国語だけでは無い。数学も理科も社会も、全ての問題文は日本語であり、辞書等の持ち込みは禁止とされていた。電子音声の言葉は、まるで聞いている者をバカにしているかのように、淡々と明るい声を続けていた。

鉛筆を動かしながら、これは徒労なのではないかと思う。この国についてから毎年のように受けている試験。なかなか合格出来ない事で弱気になっているのでは無く、本当に徒労なのではないかと思うのだ。

だが、この国に留まり続けるためには、避けることのできない物であり、自分の仕送りだけが祖国にいる家族の生活を支えているのだ。たとえ徒労であろうとも、それを続ける以外の選択肢は存在しない。後はもう何も考えず、自動筆記機のように鉛筆だけを動かし続ける。

窓の外が暗くなり、彼女は手を止めた。部屋の明かりを付けて、再びノートに向う。だが自分の手元はもう見えなくなっていた。零れる涙がノートを濡らさないように、ただ上を向いてそれに耐える。

第九話 秘密

高速道路情報を伝えるラジオは、道路に埋め込まれた装置からNJでは障害され難い周波数帯を使って発信されるので、極めて感度が良い。キリルはナビゲーションを操作して、道路情報を照合する。関越道に交通規制が掛けられているのだ。

その規制区間は時間ごとに更新されており、工事にしては少し妙なものであった。エリックは走行車線に車を戻して言った。

「どつかで下道に下りるか」

「いや・・・規制区間に追いつけるか？」

キリルの言葉に、エリックはニヤツと笑う。規制理由が予想通りなら、追いついても面白いかもしれない。彼がアクセルを踏みなおすと、車は驚いたように加速する。アスラーダを舐めんなよ、と振り切れそうなメーターに怒鳴るエリックに、キリルはため息をついた。高速道路にも法定速度は定められているが、この車を捕まえる事は出来ないであろう。

そんなものを置いていたレンタカーの店をエリックが面白がって、電車で戻る予定を車に変えたのだ。だが、彼の気まぐれが役に立つ事もある。

先の道路が規制されている事を知っている他の車は、次々と高速道を降りていく。そのため、二人の乗る車は遠慮なくスピードを上げる事が出来た。ようやく西の空に傾きはじめて太陽の光は、まだ明るい。

「あれは、立体映像か何かか？」

軍用トレーラーの車列が、高速道の規制区間を南下している。先頭車両の運転手は、バックミラー越しに見えた物の事を聞いた。助手席の男が後続の車両に確認を求める。よく知っている道であるが、あんなものがジャンクションに飾っているのを今まで見たことが無い。悪趣味な紫色をした四本足の栗に、棘が生えているような姿だ。毒々しい夕日に照らされ、その姿が揺らめきながら現れたり消えたりしている。

次の瞬間、棘の一つが火を吹いたのが見えた。加速粒子の閃光は後続のトレーラーの列をかすめ、その上に掛かっているカバーを発火させた。樹脂の焼ける臭いと黒い煙の下、荷台に寝かされていたMSがその姿を現した。

急停車する車列の前に、一機のMSが姿を見せる。六対のスタビライザーを羽のように広げているMSが、音もなく路面に降り立ったかに見えた。だが一番先頭のトレーラーを運転している者は、その機体が足を路面に接触していない様子を目撃していた。文字通り、浮いているのだ。

随伴していた車両から自動小銃を構えた兵士が降り立ち、一斉に発砲を始める。寂しい音を立てて装甲に当たる銃弾は、ゆっくりとその数を減らしていった。一人、また一人と兵士が倒れていくのだ。

自分達が狙撃の的になっている事に気付いた兵士達は、慌てて遮蔽物を探す。だが、運良く遮蔽物を見つけた者は、逆にその遮蔽物の裏で殺された。不気味で一方的な戦闘が終わった事に気付いたのは、ただ一人生き残っていた兵士であった。

恐慌を起こしそうになった彼を救ったのは、ようやく動き始めた味方のMSの姿であった。トレーラーの荷台から起き上がったMSは五機。安堵の息をついてその場にへたり込んだ兵士は、そのまま何かに押しつぶされるような形になって死んだ。

「これは、はめられたんじゃないか!？」

「マグナルド大尉、援護を!!」

そのまま引き返そうとしていたヒューは舌打ちをした。ニイガタからヨコタに向っていた増派部隊の一陣が、謎のMSに襲撃されたとの情報にスクランブルが掛かったのだ。三機のウインダムIIを率いて駆けつけたのだが、すでに友軍機が五機、破壊された姿で高速道路を塞いでいた。

そして謎のMSに突っ込んでいったウインダムも、一撃で破壊された。まるで刃物で切ったように綺麗な真つ二つであった。ヒューは

ビームライフルを乱射して残った二機を散開させる。

「シャンディエン・・・あれが隊長機だな」

東アジア製の新型というライブラリーの照合結果に、ハニス・アマカシはエヴィデンスのコクピットの中で舌なめずりをした。腰の引けている二機のウインダムと違い、隊長機は確実に後退できるチャンスを探すような動きだ。久々にまともなパイロットに出会った気がする。

どこまでも深く澄んだ紫の瞳が、モニターの中のMSに狙いを定めた。エヴィデンスは背中の中翼を羽ばたかせる。次の瞬間、旋回中のウインダムの真正面にエヴィデンスが現れていた。近接防御がオートで作動し、ウインダムの頭部の機関砲が発射される。

しかしその機関砲弾は、エヴィデンスの眼前で次々と押しつぶされ下に落ちていく。まるで透明の壁がそこにあるように、砲弾が空中で止められるのだ。パイロットの悲鳴とともに、ウインダムの手が振り払われる。

だがシールドを持った手がエヴィデンスに当たる事は無い。コンクリートの壁を思い切り殴ったような衝撃とともに、ウインダムは弾き飛ばされる。追い討ちを掛ける素振りを見せたエヴィデンスの目の前を、ビームが遮った。高速道路に降り立ったシャンディエンが、ビームライフルを構えている。

当たるコースではなく目の前にビームを撃つセンスに、ハニスは感心した。直撃コースであれば弾けば済む。だが目の前をビームが過ぎれば、反射的に動きを止めてしまうものだ。

「ありえない光景に順応するのが早いパイロットだ・・・」

ハニスは笑ってレバーを引く。エヴィデンスの腕が振るわれ、道路上のトレーラーが次々と引き千切られるように切断されていった。高速道路の遮音壁が根こそぎ吹き飛ばされるが、シャンディエンはその攻撃をかわしていた。

それでも左足の足首から先が消えてなくなっている。ヒューは苛立たしく舌打ちをした。攻撃方法も防御方法も全くもって不明だ。戦場はいくつも見ているが、オカルトの類を見たのは初めてだった。

「たっ！ 助けっ・・・！」

雑音の奥から一瞬だけ悲鳴が聞こえた。ヒューがモニターを見回すと、上空のウインダムが全身から煙を上げている。既にスラスターは機能を停止しているのだろう、噴流炎も見えなくなっている。

にもかかわらず、ウインダムは上空で静止していた。機体が奇妙な形に歪んでいく。まるで周囲全体から圧力を掛けられるように、手足は捻じ曲がり頭部は押しつぶされる。無線から聞こえるのは、コクピットの内壁が徐々に狭まっていく様子にパニックを起こした兵士の絶叫だった。

パイロットもろとも押しつぶされたウインダムが空中で爆発する。ヒューは、無表情のはずのMSが真っ赤な光の中で笑っているのを見た。

電気がスパークを起こす音に、高熱に焼けた樹脂がくすぶる音。燃えた機械油の臭いに、水素吸着素材独特の臭い。宇宙では静謐さすら漂う戦闘後の空間は、地上ではその行為の醜悪さを示すような感覚で満たされている。

路上には乾いた血溜りが無数に広がり。目を閉じる暇もなく死んだ兵士達が、そのままの姿で転がっていた。エリックは大仰な仕事で肩をすくめて、キリルのもとに近づく。生存者を見つける事は出来なかった。

「どうやら、あなただけのようだ。生き残ったのは」

キリルは横たわったままのパイロットスーツの男に、そう告げた。黒い肌に映える白い歯を見せて、男は顔をしかめるように笑う。応急処置は施しており、傷も命に別状の無いレベルだった。機体の特攻させるで見せかけて自爆させ、自分はその直前にコクピットから脱出したのだ。

それでも、骨の二三箇所は間違いなく折れていると確信できる。応急パックの鎮痛剤が切れる前に救助されたものだ、ヒューは言った。そもそもあの怪物相手に、よく生き残れたものだ。何度か怪物じ

みた相手は目撃した事もあるが、あれは全く別次元の何かであった。速いとか強いとか、そういった物理的な力ではない。もつとオカルトめいたものを感じるのだ。それに比べたら、交通規制区間に入り込んだ二人組みの男など、不思議でも何でもない。

「・・・君らは、ザフトか何かか？」

その身のこなしをみれば、コーディネーターかナチュラルかの見分けくらいはつけられる。ティーンエイジャーであろう顔立ちに、不相应な態度と言葉遣い。それらを勘案すれば、彼らがザフトの諜報員の類だという事は、同業者として感覚的に分かる事だ。

何もいわずにその場を離れていく二人の姿は、その感覚が正しい事を示しているのだろう。特徴的なフォルムの車が、静かなモーター音とともに遠ざかっていく。

「あのオッサン、すげえな」

「それよりもあのMSだ」

二人が再びトウキョウに派遣されたのは、謎のMSについての情報を集めるためだった。その戦闘を間近で見られるなど、願ったり叶つたりの事態であった。だがあの光景は、それが見られた事を幸運だとは思えないものであった。安物のバラエティ番組に出てくる超能力者のように、あのMSは手を触れる事無くMSを破壊する。

その調査を命じたという事は、ザフトはあのMSについて何かを知っているかもしれないということなのではないか。あのデザインは、まさしくザフト製である。

「・・・フリーダムって知ってるか」

エリックがつぶやくように言う。その単語はザフトでは一種のタブーとなっている言葉であった。毀誉褒貶の激しい機体であるが、それが圧倒的な戦闘能力を有していた事を認めていないのは公式発表だけである。

エリックはさらに続けた。あの機体に搭載されていた特殊装置について知っているかと。今や公然の存在であるNJCではなく、未だにその正体すら不明確な装置が積み込まれていたと言うのだ。

奥歯に物の挟まったような言い方をするエリックに、キリルは焦れ

たように話を促す。

「SEEDコンバーター、そう呼ばれていた装置が存在したそうだ」

それはもともとエヴィデンス01に関する研究の過程で、偶然に見されたものであった。その生物らしきものが、いったい何であるのか。化石から得られた情報をもとに、様々な研究が行われていた。その研究の一つに、構成組織に関する研究があった。

宇宙空間において生命活動、またはそれに類する物理化学現象を生かせるためには、どのような物質で構成される必要があるのか。化石の分析からそれを説明しようというアプローチとは逆に、様々な金属や高分子から宇宙空間における生命活動を可能とする物質を見つけ出そうという研究も行われていた。

その研究の途上で、特殊な無機超高分子が発見された。木星の強い重力を再現する事によって作られるその高分子は、時折謎の物理現象を引き起こすのだ。

「それはあたかも、万有引力に対する斥力とも呼べるもの。全てのものが引き合う力ではなく、全てのものを拒絶する力」

ミツネ・ササの論文は、抑えられない興奮に、時折表現が小説のようになる。チン・ヤンチャンは、若い彼の情熱をもはや微笑をもって眺める事しか出来ない。

その現象が測定ミスなどによるものではないという事が判明した頃には、既にナチュラルとコーディネーターの対立は抜き差しならぬものとなっており、連合各国とプラントとの共同研究であったエヴィデンス01に関する研究も、中断を余儀なくされた。一部研究者は、中立だったオーブへと降りて研究を続ける事になる。

そしてオーブにおいて、その無機超高分子がSEED現象の発現に呼応して、謎の物理現象を発生させる事が判明したのだ。

それをもとに作られたのが、SEEDコンバーターと呼ばれる斥力発生装置である。この装置は、初期のGAT-Xシリーズの一機に極秘搭載され、至近距離でのMSの自爆からパイロットを守るといふ奇

跡的な成果を生み出した。

この装置はその後モルゲンレーテとターミナルで共同研究が続けられ、かのフリーダムにも搭載される事となった。しかも緊急時のパイロット保護機能だけでなく、高機動時に発生する慣性重力の制御、機体そのものを保護するバリア、斥力を利用した推進システム、そして機体各部の駆動系に至るまでSEEDコンバーターは使用されることとなる。

「未だ、斥力を生み出すという現象しか知られていないにもかかわらず、その装置は使用され続けている。だが科学者が追うべきは、その使い方ではなく、ただその『理由』だ」

ミツネはその斥力の発生について、大胆な仮説を提示していた。超高分子の構造が、量子論的不確定性をマクロレベルで生じさせるのではないかと。それによつて、現在我々の存在する時空とは異なる時空が転移し現出する。

さらにその時空がこちらの時空とは逆に、負の質量を生み出す『反』ヒッグス粒子によつて満たされているため、現出した時空が斥力を生じさせるのではないかと。おそらく、あちらの時空にはこちら側の時空に満ちるヒッグス粒子が質量と重力を生じさせているのであろう。なお、現出した空間が有している斥力が吐き出されてしまうと、その空間は安定的に存在できずに消滅する。

SEEDコンバーターが発生させる斥力が、距離の二乗に反比例する事は測定されており、それがこの仮説を強力に裏付けるものだとしていた。

さらに、その無機超高分子の構造をフラクタル幾何の一種を使つて解析すると、その結果は人間の脳神経系の解析結果と近似する。これは、SEED現象と斥力発生に因果関係が存在する事の何らかの理由となりうるだろうと仮説されている。

ミツネの仮説はさらに大胆に飛躍する。

この無機超高分子はエヴィデンス01も有していたのではないか。別次元から膨大な斥力を取り出すこのシステムは、宇宙空間を移動する際に唯一とっていい推進システムとなる。必要なエネルギーは、

コンバーターを起動させるための何らかの脳神経活動だけなのだ。

あの鯨は人間の脳神経系と同様の組織を有し、その力で無機超高分子による斥力の発生を行っていた。それによって宇宙空間を自由に航行し、かつ人間と同レベルの精神活動も行っていたのではないか。「SEED現象、及びSEEDコンバーターの研究は、人類が無限の宇宙に乗り出すために必要不可欠となる技術である」

分野の違うヤンチャンにとって、この仮説がどの程度まで研究の価値があり、どの程度まで荒唐無稽なのかは分からない。だが、これを書いた人間が研究において優秀であり、学問に対して誠実なのは知っていた。

だからこそ、この論文の意義を正確に理解し支援してくれる人間が出てくれる事を願って止まない。ツクバは、かつての学園都市では無いのだ。ここはトウキョウ特別行政区を望む日本自治区の最前線であり、特別行政区内への様々な工作を行う拠点である。

エヴィデンスと称されるMSは、自治政府による対特別行政区工作の一環として運用されている兵器に過ぎなかった。

フリーダムに搭載されていたSEEDコンバーターは起動も出力も不安定で、あくまでもサブシステムとして搭載されていたに過ぎない。パイロットも自らのSEED発現を完全に任意で行うレベルには至っておらず、コンバーターの機能を十分に発揮できる状態ではなかったのだ。

しかしエヴィデンスは、SEEDコンバーターをメインのシステムに採用している。通常のバッテリーはコクピットやセンサーを動かすためのものであり、機体そのものはコンバーターが生み出す斥力を利用して動くのだ。

武装もなければ、装甲は発泡金属すら使用していない。それでも、あの異常な性能を見せることが可能なのだ。

「そんな成果、何の役にも立ちはしない・・・」

軍事研究の場で純粋な学問的成果が現れる事は珍しい事ではない。だがそれが、不幸な事である事に違いは無いはずだ。ヤンチャンは、論文の束を静かに机に置いて嘆息を漏らす。

川を一本、壁一枚を隔てただけで、ここまで違う光景が広がる。旧世界などと呼ばれる日本人特別居留区は、トウキョウの中に存在する異世界のようだ。違うのは、ここに住んでいる人達はみな実体があるという事だった。

再構築戦争と日本自治区、トウキョウ特別行政区の成立。その狭間に生まれたのが、日本人特別居留区である。ここが旧世界と呼ばれるのは、まさにここにだけ旧世紀の枠組みが残っているからだ。この住民は、全員が東アジア共和国の国籍を有していない。すなわち「日本人」なのだ。

大西洋連邦の基幹となった国はもともとが移民の国であり、国家と民族や人種をイコールで結ぶ考えを持っていなかった。ユーラシア連邦の主要構成国は、一世紀以上の時間をかけて国民国家を解体し、ヨーロッパ市民という概念に基づく国家を作り出した。だが、東アジアは違った。

一部の人々の中では、国民というイデオロギーは強固に残り、国民国家という十九世紀の概念を墨守し続けた。東アジアには、ここ以外にも再構築戦争前の国民の名を冠する特別居留区が複数存在する。

そのどれもが、同じような姿をしていた。ヨシトは、カズヤの後についてトンネルから顔を上げた。

埃色の空気の中に、瓦礫で覆われた地面が見える。建物はどれも壊れた外壁が残るばかりである。辛うじて建物の形をしている物は、どれもコンクリートブロックを積み上げてセメントで塗り固められただけであった。

廃材とビニールシートだけで作られたようなテントや、瓦礫を組んでセメントで固めただけの家、錆でボロボロになったコンテナハウスや、プレハブの仮設住宅が無造作に立ち並ぶ街。それは人の生活が存在する証拠であり、最底辺の生活を余儀なくされている事の証拠であった。

道路は陥没と爆撃跡でその用を果たさず、瓦礫の山を上り下りしな

がら前に進むしかない。昨晚も小さな空爆があり、何発かの爆弾が投下されていた。

タマユラ地区から分離壁下のトンネルを通って、ヨシトとカズヤが特別居留区にやって来たのは、日本軍に対する取材が目的である。危ない橋である事は確かだが、安全な報道などこのトウキョウで行う理由は無。

「司令官にお会いしたい、アポイントを取っているはずだ」

カズヤが両手を上げて言った。銃を構えた男達が、慎重のその囲みを縮めていった。執拗に繰り返されるボディチェックを経て、二人は司令部と呼ばれる建物に案内される。元は駅ビルだったのだろうその建物は、地上部分は崩れているが地下部分は比較的綺麗に残っていた。

この特別居留区の生活を支えているのは日本軍であり、彼らは東アジアが断じるような単純なテロリストではない。物資の配給に病院の設営、学校の建設に至るまで、日本軍とそれに関連する団体が行っている。支援組織は、日本自治区のうちここにあり、資金や物資はそこからの寄付という形で送られてくるのだ。

様々な反東アジア組織が結集して組織された日本軍に、明確な指揮命令系統が存在するのだろうか、それすらよく分かっていない。空爆のたびに指導者の殺害に成功したという発表は行われるが、組織が壊滅したという話は一切聞かない。目の前にいる禿頭の男が、どのようなレベルの司令官なのかを知る術は無なのだ。

疑わしげな目を向けるヨシトをよそに、カズヤは愛想よく司令官と握手をした。そして、彼らの主義主張を熱心に聞き流す。

彼らが訴えるのは日本独立の一点である。細部は派閥ごとに異なるとはいえ、その部分に関しては一貫している。だからこそ、日本軍という統一組織が存在できているのだ。だから今さらそんな主張を聞く必要性は無。

二人がここまで足を伸ばしたのは、トウキョウ特別行政区の動きに、彼らがどこまで関与しているかを知るためであった。

「・・・MS、ですね？」

「それに関しては肯定も否定も控えさせてもらおう」

ヨシトの問いに、司令官は自信たっぷりと言った。日本軍が、武装の強化を推し進めている事は間違いないようだ。だがそれを、彼らが戦略性を持って主体的に行っているかは別の話だった。今までどうしても手に入れる事のできなかったMSが、何故今になって入手できたのか。それが彼らの努力の成果とは思えなかった。

たいした情報もなく、二人は司令部を後にした。表に出ると子供達が瓦礫を遊び場にしていた。戦争ゴッコに興じている彼らは、五年もすれば日本軍の兵士として実際の戦争をするようになると思うと切なくてならない。

足のがたつく折りたたみ式長机を押さえながら、発表内容がメモさされていく。小さな会議室は人で一杯であった。スグル・ハタナカは、ペットボトルのお茶に口をつけると一息つく。

「以上が、ヨコハマにおけるリ氏との会談内容です」

トウキョウの労働組合を統括する連合会の幹部会が、浅草の雑居ビルで行われていた。内容は、リ・ウエンとの会談の検討と今後の活動方針であった。リの経営する会社は、何社かがトウキョウに進出しており、その会社の労働組合を通して、多額の活動資金を援助すると申し出てきたのだ。

まずはその事が紛糾の種であった。会社の経営陣に対して、社員の権利拡充を要求する労働組合が、事もあろうにその経営者から資金をもらうなどもつての他という筋論である。それは組合を弱体化させるための罠ではないのかというのは、もっともな見方であろう。

しかし、それ以上に問題となっているのが、そもそも何故そのような申し出を行ってきたのかという事である。別の者が、調査結果を述べる。

「調査は続行中である事を念頭に置いて置いてください」

リ・ウエンに関する調査の中間報告であるのだが、その内容は非常に曖昧なものであった。ヨコハマに拠点を置いて多数の企業を傘下

に治める持ち株会社の代表であり、同時に善隣幫と呼ばれる華僑マフィアのボスである人物。そして根っからの反東アジア主義者であった。

最近では、自分達以外にも様々な組織との接触が繰り返されているようであった。つまり、今回の資金提供の申し出も、他の組織との接触と同じ目的を持ってなされているという事である。

「独立・・・か」

参加者の一人が聞こえるようにつぶやいた。接触を凶っている組織や、リ・ウエンの思想信条などを勘案すれば、彼の目的がそこにある事は明白であろう。だとすれば問題は、自分達も同じ目的を持つ団体であると思われる事である。

確かに、反東アジア活動家への支援なども行っていたりするが、それは決して主要な目的ではないはずだ。あくまでも各業種各企業における労働者の権利を擁護するのが、労働組合の目的であった。

現在の特別行政府による統治体制に不満がないわけでは無い。だが、それを一足飛びに独立要求とするかは、全くの別問題である。ましてや、マフィアやテロリストと提携して、何らかの行動を起こそうなどとは考えていない。

活動資金は欲しいが、それによって何らかの無理な要求がなされるのであれば、申し出を断るべきであろう。スグルは、会議の方向性を頭の中で組み立てる。

労働組合といっても、その色合いは様々であり、リ・ウエンの考えに賛同を示す組合も一定数は存在する。行政府や東アジア中央政府に対して強硬な姿勢を示す組合は、少なくないのだ。

そういった組織に会議の主導権を握らせないためにも、先手を打って軽い妥協案とパッケージになった先送り案を提示する。こういう手法は組合であろうと、勤め先であろうと有効なのだ。

「では、リ氏に関しての詳細な調査結果を待った上で、資金提供の申し出を検討する会議を設置するという事でよろしいでしょうか」

積極的な賛同も反対も無い。それを消極的な賛同として処理するのが、会議のまとめ方である。スグルは検討会議の準備メンバーに、

穏健な組織の代表者を数名指名する。これでとりあえずは、何かが決まった事になる。

バラバラと出席者が帰っていく会議室で、彼は独自の情報収集の必要性を感じていた。

再構築戦争後、地球連合の発足に伴い地球圏の公用語が定められた。さらに各国ではその国の公用語が定められ、少なくとも中央政府ではその言葉を話す事が推奨されるようになった。

だが各地域の言葉が消える事はなく、コズミック・イラでは母語としての地域公用語と中央の公用語、最低でも二つの言葉が話せるバイリンガルである事が普通であった。今の子供であれば、これに連合の公用語を加えたトライリンガルである事も珍しくはない。

現在、日本自治区の地域公用語は日本語であるが、イントネーションに少し変化が生じていた。

トウキョウが中央政府の直接統治であるため、自治政府の首都はオサカに置かれているのだが、その影響で従来オオサカの方言であったものが公用語に混ざりつつあるのだ。

「ありえへ．．．ありえない事です」

資料を手にした男性がそう言いなおして椅子に座る。自治政府行政府の院長官房室に、数名の自治政府高官が集まっていた。ツクバから送られてきた報告書に関する検討会議である。東アジア軍のMSを9機撃墜したという情報は、房総半島における砲撃事件以上の衝撃であった。

彼らに要請したのは、あくまでも東アジア軍に対する揺さぶりであり、トウキョウの情勢を適度に不安定化させる事であった。自治政府も日本軍に対する支援を行っているが、それも同じ理由で行われている。

だが今回の事件は揺さぶりどころの話ではない、完全な挑発である。人選に問題があったと考えるしかない。

「誰やね．．．誰なんだ、あんな連中を連れてきたのは」

「オーブであれば、タマユラ地区に対するパイプも期待できると選んだのでしよう」

「責任とか今はとりあえずどうでもええねん。既に状況はこっちの手の上にはない、ほなそれをどうするかや・・・奇貨おくべし言うやろ」
大げさな方言で場の空気が一変する。行政院院長が、腕組みをしなから天井を見上げていた。ツクバの連中にせよ、ヨコハマの老人にせよ、自分達の都合を持った者を相手にしているのだ。こちらの都合だけで物事が運ぶはずも無い。

こちらの都合を相手に合わせる必要は無いが、相手の都合を無視して何かが出来るはずも無い。ならば相手の都合を利用して、現実を自分の都合のいい状況に誘導できるかである。

ペキンの中央政府に対する心情は、どちらも同じなのだ。問題は、ペキンに対してどのようなスタンスを持つのかではなく、その先にとどのようなビジョンを描いているかである。研究結果のデモンストラーション程度の考えしか持っていないであろうツクバの連中はともかくとして、リ・ウエンのビジョンと自治政府のビジョンは明らかに異なる方向を向いている。

だからこそ、あの老人は積極的に動いて状況を作り出そうとしているのだ。それをいかに利用するか。失敗すれば、日本自治区そのものがペキンによる直接統治を受け入れなくてはならない事態になりかねないのだ。自治政府が守ってきた「日本」を手放さないためにも、すべき事は数多くあった。院長は、いくつかの指示を出す。

出勤時間なのだろう、車の数が増えてきた。近くに小学校があるらしく、子供達の登校する姿も見える。街全体が眼を覚ましたように、明るい空の下を朝の活気が満たしていた。

人の家を訪ねるにはまだ少し時間が早いだろう。ルーイはいつものように、病院の裏口近くの木陰にたたずんでいる。ブンジ・タチバナの邸宅に行く前に、彼女の顔を見ておきたいのだ。病院に出勤してくる人が、次々と裏口に入っていく。交代制勤務なので、夜勤の人達

はこれから帰宅するはずだった。

「違うさ・・・全然」

ルーイは眩きを漏らす。ここで彼女を待つ事は多いが、そんな時に思い出すのは決まって両親、いや母親の事であった。母親との距離感を掴めなくなったのは、いつ頃からだったであろうか。

ユーラシア連邦で現在二度目の内閣を率いているメイファン・キリロフが、彼の母親である。聞かないようにしていても、彼女の噂は耳に入る。肯定的な物も否定的な物もあるが、客観的に判断すれば彼女の政治姿勢はおおむね好意的に捉えられているようであった。

今の政治情勢でユーラシアの舵取りをするなど、想像もつかない困難さがあるであろう。それに取り組んでいる母親の姿は、十分に尊敬できるものだと思う。戦災孤児となった自分を引き取って育ててくれた彼女の愛を疑いはしない。それでも、彼は母親との距離を感じざるを得ない。

自分から、彼女と距離を置くようになったのだから。

自立とか、そういった類の話ではない。母親の生き方に、疑問のようなものを感じているのだ。それは一体、何なのであろうか。

「あ、キリロフさん？ おはようございます」

自分を呼ぶ声に我に返った。視線を向けると、顔見知りの看護婦が裏口から出てきたところであった。私服という事は、今から帰るのであろう。ルーイは微笑んで挨拶を返した。

その女性は彼の近くによって来て、何をしているのか聞く。彼は少し言いにくそうにアメリを待っていると答えた。彼女は残念そうな顔で言った。

「アメリカちゃん、今日は休みの日よ」

「え・・・夜勤だったんじゃない」

自分の聞き違いだったのだろうかと言うルーイに、女性は怪訝な顔をする。アメリは夜勤に入れないのだという。彼女がこの国に来ていた技術研修制度では、夜勤や残業といった働き方は禁止されているのだそうだ。

「腕はいいし、患者さんの受けもいいし、夜にも入ってくればいいん

「だけど・・・」

女性はため息混じりに言った。もともと出身の国では正規の看護婦として働いていたので、腕に関しては申し分ないという。日本語も完璧なので公用語の苦手な老人にもきちんに対応できるのだそう。そういう人材には、ちゃんとした給料を払ってちゃんと働いてもらった方がいいと言った。

この研修制度では、域内の労働法制の例外として、通常よりも安い賃金で働かせる事ができるのだという。そのため昼間の看護婦の多くは、彼女同様に外国から来た人が大半を占めているのだそう。

確かにそれでも出身国で働くより高い賃金であるのだが、トウキョウで暮らしながら母国へ仕送りもしてでは生活も大変だろうという。女性は同情をこめてそう言っていた。

腕時計を見て慌てて駅へと向った女性に視線を向けながら、ルーイは別の事を考える。今聞いた話は、何一つ知らなかった事だ。

足しげく通っていた身としては、一週間に満たない日数とはいえ、ずいぶんと長い間来ていなかったような気がする。酔っ払いや客引きのかわし方も手馴れたものとなり、キリルはいつもの店の前に来ていた。

しかし、日が暮れてずいぶん経つというのに、店の前は静かだった。いつもであれば、もっとうるさいはずだ。そっとドアを開くと、店の中は明かりが着いているものの、物音一つしないほどの静かさである。中を見回すと、年配の黒服の一人と眼が合った。

顔を覚えていてくれたのだろう、その場で待つように手振りで示される。少しすると、チーママが奥から姿を現した。

「ローレンスさん、ごめんなさい。今日はママの大事なお客さんが来ててね。店の子はみんなそのお相手なの・・・」

「そうですか。それでは」

「マリアちゃんよね。一人くらいなら大丈夫だと思うから、同伴してきなさいな」

そう言つて彼女は再び店の奥に消えていった。黒服が気を利かせて出してくれたグラスが空になる頃、マリアが姿を見せる。

いつものようなきわどいドレスではなく、落ち着いた感じの洋服であった。はにかむように視線を逸らした彼女の横顔に、彼の視線は吸い寄せられた。どうしていいか分からずに立ち尽くす彼を、黒服が送り出してくれる。

ドアの閉まる音が聞こえ、二人で並んで立っていることに気付く。渴く口から発せられる言葉は、どこか震えている。

「そ、その……この辺りはまだ不慣れで、どういうところに行けばいいのか……」

彼女がリクエストを聞いてくれ、案内をしてくれる。こうやって店の女性を連れて歩く客を相手にした店も数多くあるのだ。二人は、小洒落たダイニングバーに腰を据えた。キリルは解けきらない緊張を宥めすかせて、メニューを手に取る。

そんな彼の様子に、マリアが手を口に当てて笑った。少しムツとした顔を見せる彼に、彼女は素直に謝る。そして肩の力を抜けといつた。

「女の子のエスコートくらい、した事ないの？」

子供の遊びの延長のようなデートしかした事がない。こういうのに、慣れていないのは確かだった。彼女は、だったら女性にリードさせる事も覚えた方が良いと言う。ウェイターにメニューを返した彼女は、手を組んで彼を見つめていた。テーブルの上のキャンドルが、その瞳の中で揺らめいている。

そのまま、彼女を見つめるだけで時を過ごしてしまいそうだ。それが気恥ずかしくて、キリルは話題を探した。気の利いた言葉など思いつきもしないというのに。案の定、どうでもいい話を口にしていた。今日、店に来ていた客の事だ。

もともと不法滞在者であったあの店のママは、善隣幫と呼ばれる相互扶助組織から資金援助を受けて今の店を開いたのだという。今日来ていたのは、その時に資金援助をしてくれた人なのだそうだ。

キリルの表情が一瞬変わったことに気付いたのだろう、彼女はどう

かしたのかと聞く。なんでもないと答え、彼は運ばれてきたグラスを手に取った。二つのグラスが、澄んだ音を立てた。

第十話 街の深層

カーテンの向こう側が少し明るくなっているのが分かる。視線だけをめぐらせると、時計はまだ起きるには早すぎる時間を指していた。今日のアポイントは午後からのものばかりであるので、早起きの必要も無い。

昨夜の愛の心地よいけだるさを味わいながら、腕の上で寝息を立てる柔らかなものを掻き抱く。妻の温もりと匂いの中でまどろむ事ができる、それだけで結婚のメリツトの大半は占められてしまうだろう。彼女の形を確かめるように、その素肌をなぞっていく。足を絡み合わせ、そのまま眠りに沈む事にした。

『起きたら……もっぱつ……』

そんな淡い桃色の夢を無残に引き裂くように電話が鳴った。電話機ごと床に叩き付けたい衝動を抑え、腕を伸ばす。胸の上では、イヤをするように妻が顔をこすり付けていた。

「もしもし……」

「おー、タルハ。元気にやってるか」

「社長……こつちの時間、分かってます？」

電話の主は、アジズ・ハミード。彼ら夫婦の勤めるシユバルベ工業の、創業者にして社長だ。電話口の不機嫌な声などお構いなしに、彼は話を続けた。大口の受注を取り付けたことに関する労いの言葉のようだ。

タルハは興奮気味のアジズの言葉に疑問を投げかける。確かに、こちらで営業活動も行っているが、受注などは今のところ受けていない。今回の長期出張はあくまでも、市場の調査と挨拶回りが主目的だ。一体どこからの受注がどこにあったのかを聞いてみた。アジズが不思議そうに答える。

「ワルシャワの支社にだが……コウベの会社って言ってたぞ。日本自治区だよな」

「俺らがいるのはトウキョウです。コウベなら自治政府を担当してる人の案件でしょう」

悪びれた様子もなく謝るアジズの言葉を聞き流す。とんだ間違い電話に、幸せな夫婦生活の邪魔をされてしまった。ウンデイは既にベッドから降りてシャワーを浴びている。その大口の受注がどんなものか聞いておいた。

受話器を置いたタルハは、ウンデイと入れ違いにシャワーを浴びる。だが、シャワールームを出ても部屋の中は薄暗いままだった。ウンデイは何も着ずにベッドの中にいるようだ。

「今日はゆっくり寝られるはずでしょ・・・」

ベッドに潜り込んだタルハに抱きつくようにしてウンデイが言う。そうもいかないかもしれないと、彼は電話の内容を伝えた。

シユバルベ工業の開発した多脚多腕型汎用作業機械を、一度に三十台も発注した会社があったのだ。ユーラシアにある支社の在庫だけでは足りず、資源衛星・カレーニナにある本社から足りない台数を送る事になったそうだ。営業用のサンプルとして送られた物を含めると、日本自治区に四十台強の機械が存在する事になる。

自社製品が売れている事についてとやかく言いたくはないが、少しおかしいと感じるべきであろう。それだけの重機需要がどこに存在するのだろうか。あるとすれば、それは壁の向こうであるが、瓦礫に覆われた日本人特別居留区で誰が何を建設するというのか。

調べた方がいいわね、ウンデイはそう言って起き上がろうとする。そんな彼女の腰を掴んで抱き寄せた。まだ、起きるには早い時間だ。

低層の住宅が立ち並ぶ町。比較的新しい家が多いのは、ここがテロの標的となっていた時期があったからだ。日本軍が結成された当初、隅田川を越えての迫撃砲やロケット弾による攻撃が頻発し、対岸に当たる浅草から上野辺りまでがその着弾点となっていたのだ。

技術的には、行政府のある新宿や渋谷にまで砲弾を飛ばすことは容易なのだが、皇居の上空を飛び越えての攻撃は行われなかった。それを日本軍のアナクロニズムと解する者もいれば、行政府との裏取引があったと見る者もいる。真相を知る者はおらず、真相が知れたところ

で何も変わりはない。

そのテロ攻撃に対して、東アジア軍は当然報復を行い。それによって隅田川を越えてのロケット弾攻撃はなくなったと言われている。だが実際は、日本人特別居留区への物資輸送の見返りに一般住宅街に対する無差別攻撃の停止を呼びかけた者がいるのだ。

「先生には、こちらから出向くべきところを申し訳ありません」

「いやいや、うちに閉じこもっていてもいい事はありません」

上機嫌のブンジ・タチバナが、手土産を差し出す。周りにいた黒スーツの男達が、彼を丁重に迎え入れ、同行していた家政婦の女性を別室に通す。広い邸宅の一番奥まった客間にブンジは通される。男が改まって頭を下げた。

男は菱丘組の組長である、ユウゾウ・カトウ。トウキョウのマフィアのトップにいる男だ。自ら銚子をとって、ブンジに酒を注ぐ。

がっしりした体つきは年齢を若く見せるが、既に老境に入っている年である。それでも組の実権を掌握し続けているのは、その経歴から来るカリスマであった。

発足時の特別行政府は、潜在的な反体制分子であるマフィアに対して陽に陰に弾圧を行っていた。それに対してユウゾウは、徹底的な反抗を見せた。それもただ対立するのではない、テロ被害者や軍による報復行動の巻き添えになった市民への援助を行ったり、日本軍へ住宅地を標的としたテロの停止を呼びかけたりと、市民の支持を取り付ける形での抵抗を行ったのだ。

東アジアの中央政府が直接統治するという形のトウキョウ特別行政区の中で、菱丘組の活動が市民の隠れた喝采を受けるのは当然の成り行きであった。この国は、昔からそうだった『理想のアウトロー』像を持つ国なのだ。

「やっている事は、お天道様に顔向け出来ない事ばかりですのにな」

だが所詮はマフィアであり、活動実態は非合法的資金獲得でしかない。何の遠慮もなく言うブンジに、ユウゾウが苦笑いをする。それが出来るのも、ブンジには返しきれないほどの貸しがあるからだ。今回も貸しの一つについて礼を述べるためにブンジを招いていた。

善隣幫との提携についてである。ユウゾウが改まって言った。

「先生の言う通り、私らはヤクザです。ですがね先生、ヤクザだって日本人だ。私自身東京で生まれ育った人間だ。トウキョウなんざ、糞食らえだ」

「リ先生もそう言っておられたでしょう」

「ええ。横浜の華僑の御仁ですら、この日本に涙していたんです。どうして日本人が黙っていられます」

興奮気味のユウゾウに、ブンジが酒を勧めた。トウキョウがざわめいている事を感じる。

当初は日本武道館の使用を打診してきたという相手に、東京武道館の使用許可を出すというのは、ある種の嫌がらせであろう。確かに都心のご真ん中で、プラントの歌手のコンサートをを行うのは、警備その他の問題が多数生じるだろう。だからといって、もともと音楽と関係のない施設の使用許可を出すのは別の問題だ。

多くの機材が運び込まれようとしている会場の前で、シユウ・サクらは煙草をもみ消す。保安局も警備担当の人員を派遣しているのだ。表向きは会場を標的としたテロへの警戒であるが、実際はその逆にこの機材や人員の中にテロリストが紛れ込んでいないかの監視である。

「それだけじゃ、ないよな」

わざわざ彼の乗る指揮車両に横付けされた黒塗りの車。おそらく、保安局のどの車よりも頑丈な作りの車だろう。スモークガラスの向こう側にいるのは、コウキ・ヨシオカだ。この手の興行に一枚噛むのが、この国のマフィアの商売だった。

シユウが車を降りると、黒塗りの車もドアが開いた。どんなブランド物を着ても柄が悪く見えるのは、ある種の才能だろうと彼は思う。護衛の男に囲まれるようにして、コウキがシユウに近づいてきた。

定型句で挨拶をしておいたが、コウキの方は口も開かない。煙草を吸いたくなる相手だ。

「忙しそうだね。副会頭つてのは、こうして現場の見回りもするのかい？」

「軍の動きはどうなってる」

シユウはたまらずに煙草を取り出した。焦りを表に出すようになれば、この男も後がない。コウキとてただのチンピラではないが、いかんせん今の状況は彼にとって有利とは言えないようだ。平時に有能な人間が、有事も有能であるとは限らない。

東アジア軍や、その下部組織が活発に動き出したのは確かである。圏央道で起こった戦闘が軍を刺激したのだろう。だが、その動きは浮き足立っており空回りしているという印象だ。

それはシユウ自身を感じる事でもあった。トウキョウを巡る情勢は、見えないところで動いている。しかし、軍も保安局も「動いている」という感覚は持つていながら、何が何処で如何に動いているかは捉えられていない。

「うちも、上が揉めててね。よそ様の事に構ってる暇はないんだわ」
お互いそうだろうと言うと、コウキの不機嫌さが加速するのが見えた。どうやら、菱丘組の反東アジア闘争路線は確定のようだ。コウキのいる凌雲会のような、特別行政府との強い繋がりを持つ一部組織は、色々とやりにくくなっているのだろう。

しかも傘下の組織に対して軍の特殊部隊を投入されたりもしている。コウキにしてみれば、両者から切り捨てられたという疑念を拭うことが出来ないであろう。だから大局を見失うのだ、とは言わなかった。

今のトウキョウの動きは、そういった今までの感覚では捉えられないものなのだ。

『ハーモナイズコミュニケーション！ 心を繋げて銀河をつかめ！！』

そんな下手なキャッチコピーの書かれた看板が運び込まれていく。シユウはそれを指差した。あれはきつと、今のトウキョウと無関係の事象ではない。テロとか軍とか反東アジア活動とか、そういった概念で捉えられない何かが、動いているのだ。

シユウは、当日の人出予想をコウキに聞いた。吐き捨てるようなコウキの答えに、うんざりとため息をついた。余分な事を考えられるほど、暇ではなさそうだ。

まるでハイスクールの学生のようだ、彼はそんな事を思った。いやハイスクールの学生の時ですら、こんな感覚を味わった事はなかっただろう。整えたばかりの髪を気にするように、軽く手を添えた。

休日という事もあり、道行く人達にスーツ姿の人は少ない。代わりにカップルや家族連れが目立つようだ。駅の警備員の制服を着た人間が、定期的にゴミ箱を調べて回っているのが無粋だが、それを除けばどこにもある都会の風景が広がっている。待ち合わせによく使われる場所らしく、人は多かった。

腕時計と周囲を交互に見比べる。少し早くに来てしまった自分が悪いのだが、この待ち遠しさはどうにもしようがなかった。だから、はるか遠くにいる彼女の姿に、ずっと手を振り続けてしまう。コーデイネーターである事も、たまには役に立つ。

「ごめんなさい、待たせてしまいました?」

「僕が早く来ただけだから」

ルイーは、少し肩で息をしているアメリを可愛らしく思う。ちよつと一服しようと、近くのコーヒースタンドに入った。泡立てられた牛乳が鼻の頭に付き、アメリは笑ってそれを指摘する。ルイーも笑った。

トウキョウで彼女に出会ってから、幾度かこうしたデートめいた事をしている。彼女は忙しい合間をぬって、時間を作ってくれていた。病院での勤務が無い日は、アルバイトもしているのだそうだ。夜間のバイトなので時給がいいなどと笑っていたが、きっと大変なのだろう。

それでもお金に関する話題など、彼女は決して自分から口にはしなかった。だから彼も、困った事があれば相談するようには言えないが、生活費を世話しようなどという話は出来なかった。

むしろ、カードでたいていの支払いが出来る自分の事を恥ずかしく感じる。朝も夜も必死に働いている彼女と比べて、自分はどのようなのだろうか。

「そろそろ、行こうか」

ルイーは立ち上がった。アメリの足音を後に感じながら店を出る。これから二人はコンサートに行くのだ。オオサカで初めて出会った時に来ていたプラントの歌手、その人がトウキョウで緊急公演を行う。これも何かの運命なのかもしれない。

自然と手を組んでいる彼女に、ルイーは微笑を向けた。彼女の楽しそうな声を聞いていると、余計な事を考える必要を感じない。こうして、二人で一緒に歩いているだけで、幸福だと思えるのだから。

今日は都電の日暮里舎人線を川を渡れるようなので、そちらを使う。この路線は、日本人特別居留区との境になっている路線なので、しばしば止まるのだ。同じ目的地に向かうらしい人達で、駅のホームは一杯だった。

ルイーは、アメリとはぐれないようにその手をしっかりと握った。

東武大師線は延伸され、日暮里舎人線の江北駅に繋がっている。そこから東武伊勢崎線の小菅駅まで行く。この駅は元の位置から北に100mほど移動し、国鉄常磐線、営団地下鉄千代田線、筑波急行線と連絡している。どちらも、日本人特別居留区の発足に伴って、分断された鉄道路線をつなげるための措置であった。

綾瀬駅で降りて北に少し歩くと、今回の会場である東京武道館に着する。付近は既に集まった人で一杯であった。予想外の人出である。

主にインターネットを利用した配信で活動しているプラントの歌手であり、それほどの知名度を持っていないわけではない。オオサカでのイベントのように、他に様々な団体を交えてのイベントでもない。

だが、今日の前に集まっている人ばかりは、そういう説明が無意味なほどの数だった。会場に入りきれぬのかどうか心配になるほどだ。

そもそも、この場所自体が人を集めて音楽をやるための場所ではない。

「すごいね・・・」

アメリカの感嘆の声にルーイも同意する。そろいのシャツを着たスタッフが駆けずり回って客を捌こうとしている。

客層は自分達のような若い者ばかりではなく、子供を連れだした夫婦や年配の人の姿もちらほら見えた。並んで待ちながらその人達の話や聞くとはなしに聞いていたが、どの人も、よく知っているふうだった。

「政治性のなさか・・・規制されなかったのは」

トウキョウにおいて、インターネットも規制対象であるのは公然の秘密であり国外の情報は当局によって厳しく制限されている。プラントの歌手の活動をこれだけ多くの人が知っているという事は、当局が規制の必要が無い活動だと判断したからだろう。

逆を言えば、他の情報が規制や制限を受けているため、この歌手の活動に人々のアクセスが集中していたと見る事も出来る。

東アジア国内にも普通にポップカルチャーは存在するし、それらの質がプラントのそれと比べて別段劣っているわけでは無いだろう。当局による規制を免れたという「付加価値」が、この人気を支えているのかもしれない。

のろのろとした列の動きに揺られて、ようやく二人は会場に入った。判然としないざわめきが会場を満たし、熱気は既にはちきれそうであった。一応座席は設置されているのだが、座っている人など誰一人いない。場内アナウンスはほとんど聞き取れず、隣にいるアメリカの声さえ耳を近づけなければ聞こえない。

だが、この大勢の人の中で、互いの顔を寄せ合って言葉を交わしあう事も、また楽しかった。彼女の吐息にすらうつとりしてしまいうだ。

「大変長らくお待たせいたしました。まもなく・・・」

それより後のアナウンスは聞こえない。会場のライトが一段落とされ、曲の前奏部分が始まる。会場全体が息を飲み、そして弾けた。花火とともに飛び出した歌手がカクテル光線の中に浮かび上がる。

同時に投影されるホログラフィーは天井にまで届いた。激しいロック調のナンバーは、否応無しに体を揺さぶる。フィニッシュのジャンプは、会場全体に地響きを響かせた。

立て続けの二曲目、客席のあちこちに分散して配置されていたファンクラブのメンバーらしき集団が、合いの手の掛け声とそのタイミングを教えてくれた。ラストのサビ部分で、完璧な合いの手が入れられる。凝縮された一体感が、割れんばかりの歓声と拍手の嵐を生む。

「みんなく！　ありがとう〜！」

観客を煽るような独特の声で挨拶が響き、息と楽器を調えるように軽いしゃべりが入る。

「こっちは万端、準備OK！　みんなの準備は!?!」

「オツケー!!!」

ステージの中央で歌手が一回転する。着ていた衣装が広がってそのまま周囲に飛び散る。次の衣装に早変わりし、観客の感嘆の声とともに次の曲に突入する。突き上げられる拳の群れ、振り上げられるマイクに観客が競い合うように声を入れる。

ライトが会場を舞い踊り、火花がステージを照らし出す。興奮の坩堝となったようなその場が、不意に水を打った様に静かになる。

『静かな夜に』のカバーソングが会場に染み渡っていく。サイリウムが闇の中で揺らめき、曲の心が会場内をたゆたう。静かな感動がうねるような拍手に変わる。

「カバー連発、ゴメンね！　でもこれだけは歌わせて！　『静かな夜に& Quiet Night C. E. 73』！」

会場がアップテンポなリズムに一転する。観客もそれに負けじとリズムに乗る。ステージを駆け回る歌手の動きに合わせて、会場のポルテージも左右に動く。ヒートアップした会場の視線は、その中心に向けられた。

深くお辞儀をしていた歌手が、勢い良く顔を上げる。

「小さい時、お父さんが持っていたこの曲を聴いて、私はアイドルを目指しました。いつか、こんな歌を歌う人になりたいと、思ってきました。今、その夢が叶っています！　だから・・・『夢はまだまだ終わら

ない』よ!!」

彼女のデビュー曲のコールとともに、会場は再びうねり始める。ポップな曲調に合わせた、パステルカラーの衣装。着替えるのではなく、立体映像を体の動きに合わせる最新の装置だ。動きと曲に合わせて七色に変化するドレスが、ステージの中央で揺らめいている。

息つく暇もないほどに曲が続く。だが興奮に満たされた体は、疲労どころが時間すら感じない。最後の曲が終わってもなお、その感覚を認識できない。

会場の熱気がゆっくりと冷めていくのが分かる。同時に体の中から湧き上がってくるものがあつた。それはアンコールの呼びかけとして結実し、やがて会場がその声で一杯になる。

どよめきのような歓声とともに、再びステージに立った歌手が感謝の声を発した。そしてリリース直前の新曲を披露する。会場は再度、興奮の渦に巻き込まれた。その渦の中心が舞台から下がり、会場は心地良い虚脱感に満たされた。

全体の照明が戻り、上気した顔の観客たちは安堵と満足の笑みを浮かべる。館内にアナウンスが流れた。三日公演の予定を延長するとアナウンスである。観客が足を止めたのは、アナウンスをしているのがその本人だったからだ。

「延長公演は当日券のみです。でもゴメンなさい、少しでもたくさんの人に私の歌を聞いて欲しいから、今日までの三日間来てくれた人は、どうか明日からは他の人に譲ってあげて下さい。たくさんの人に歌を聴いてもらえるチャンスを私に下さい」

観客は自然と拍手していた。それは、この興奮と感動を多くの人と共有したいという想いだろう。ルーイとアメリも手を叩いている。

会場を出ると、外は暗くなりはじめていた。駅に向って歩く人達が皆早足なのは、身分証確認ゲートの時間を気にしているのだろうか。せつかくの感動に水を差されるような気分だった。

「・・・楽しかった、ですね」

「うん、こういうの初めてだったけど・・・良かった」

ルーイはそう答えて腕時計を見る。時間さえ良ければ、食事をして

いかないかと誘った。アメリは一瞬、逡巡するかに見えたが、家の近くであれば構わないと答える。そして彼の腕を取り自分の腕と絡める。

それはあまりにも自然な流れだと思ふ。彼女の部屋に通された時、いやそれよりずっと前から、こうなる事はきつと決まっていたのだ。絡み合っていた唇が離れる。灯りの落とされた室内で、薄闇を通すように彼女を見つめた。ルーイは再び、アメリの唇を求めた。

窓の外から聞こえてくる電車の音。あれがおそらく最終の電車だ。そんな事はどうでも良いと感じるほどに、彼の肌は彼女の肌を感じていた。そこには一切の拒絶を感じず、愛撫する手が逆に包み込まれていくようだ。ベッドのスプリングが微かに軋んだ。

口の数が足りないと思う。キスをした場所が多すぎる。触れていた唇をほんの少し離すだけで切なくなる。

そのまま唇で彼女の体をなぞっていく。その形を忘れないように、一所も余す事無くなぞっていく。温もりと匂いに包まれた陶然とした頭が、彼女の胸の谷間を彷徨っていく。

アメリの褐色の肌が喉の奥の声とともに震える。彼女の胸の二つの頂きは、ルーイの唾液を十分に含み、湿った光を帯びていた。彼の息も荒くなっている。

「・・・初めてだ、こんなの」

それは男が口にすることでは無いかもしれない。だが彼はそう言わずにいられなかった。今までと何が違うのか分からない、だがこれが「初めて」だという事は分かる。今まで知っていたものは、きつとまがい物か何かだったのだ。

張り詰めたような美しさを見せる褐色の肌に包まれた、肉感的な肢体。だがそれが刺激するものは「男」ではない。もっと遠くにある「何か」だ。

そこに純粹なものなど何も無く、興奮も快感も喜びも不安も恐怖も

安らぎも喪失感も、何もかもが同時にあった。怯えるように彼女に魅せられ、期待に震えながら彼女に迫った。

彼自身の事が強く意識される。その頂点が暖かな湿り気に触れると、ささやか抵抗を宥めるように、彼は愛をささやいた。彼女が柔らかに微笑む。

許しを得たように抱き締められる彼自身を感じ、彼は思考を失った。今、自分と溶け合うように抱き合っている女への感情だけが、頭の中を満たしていた。思考の無いそれは純粋な感情であり、その表現は言葉ではなされない。

「ああっ……ルーイ……」

愛しい声が、彼の心を打つ。彼の想いは激しさを増し、こみ上げてくるものは押さえようがない。彼は低く呻いた。

吐き出したものは、快感でも欲情でもない。それは紛れも無い愛だと思つた。

それを肯定してくれるように、アメリカがルーイの頭を搔き抱く。繋がったままの二人が、再び愛を営むまでの僅かな時間。互いの荒い吐息だけが愛をささやきあっていた。

個室が割り当てられているのは、ヒューのようなパイロットがそれなりの待遇を持って迎え入れられているという事だろう。MSの運用ノウハウというのは、一朝一夕に獲得できるものではなく、経験者が一つ一つ積み重ねて形成していくものなのだ。

まして東アジアは、前大戦で前線に立っていた大西洋やユーラシアとは違い、軍としてのMS実戦経験が乏しい。その遅れを挽回するためにも、ベテランパイロットは重要なのだ。

部屋のテレビの芸能ニュースで、プラントから来た歌手の追加公演決定が報じられていた。もともとの計画を伏せ、先にあえて三日間と公表した上でのサプライズ演出とも考えられるが、手の込んだやり方だと思つた。そもそも、よくトウキョウでライブなど可能になったも

のだ。

「どうやら、シャンハイとのコネクションを持っているようだ」

ノックもせずに部屋に入ってきたスーツの男が言う。そしてハーモナイズコミュニティという団体に各国が興味を示し始めた、と付け加えた。ヒューはナースコールを押そうとする。

男は慌てて名乗る。ヨコスカから派遣された連絡員であった。ヒューの怪我の状態と部隊への復帰の目途を聞く。だが、わざわざそんな事を聞くために人をよこしたのでは無いだろう。ヒュー本題に入るように促した。

男は名簿と地図を差し出す。トウキョウ在住の大西洋邦人のリストとその住所が示されているという。ヒューの視線に、男は話を続けた。

「トウキョウで非常事態が発生した場合、ヨコスカは邦人救出のための部隊を派遣する」

その時、ヒューが現場の指揮を取る事に決定したのだ。流石のヒューも目を丸くした。

大西洋としても、東アジアと事を構えるつもりはさらさら無く、目立つ事は避けたいのが本音だ。だが有事にヨコスカが何も動かなければ、国内政策重視の今の政治状況では間違いなく海外基地維持の必要性が問われるだろう。大西洋連邦の極東における拠点であるヨコスカ基地を確保するためには、それが役に立つ存在である事を大西洋国内に向けてアピールしなくてはならない。

そのための邦人救出だと男は言う。東アジアを刺激しないよう、MSの使用は可能な限り控え、最小の人員で作戦を行わなくてはならない。現在、ヒューの他にもトウキョウで活動しているエージェントは数名おり、彼らにも同様の指令が下されていると言う。

ヒューは重要な疑問を一つ尋ねた。

「非常事態は、いつ発生する?」

「それは我々が関与できる事ではない」

決定的な証拠に基づき確信ではなく、状況証拠の積み重ねによる非常に高い可能性への備えだというが、邦人救出作戦が必要な事態が発

生するという事をヨコスカは読んでいるのだ。しかし、いつどのよう
な形でそれが起こるかは分かっていないのだろう。現場としてはき
つい条件だ。

何かあれば追って連絡すると言って、男は病室を立ち去る。入れ違
いに入ってきた看護婦が、面会時間はまだなのにと文句を言ってい
た。ヒューは仕方なく笑っておく。

作戦中は無線が封鎖されるため、状況確認は時折指揮車両にやつて
くる伝令の兵士が伝える物だけが頼りである。運送用トラックに擬
装した車は既に配置についており、突入の合図を待っているはずだ。

指揮車両がヘッドライトを二度パッシングする。撤収の合図で
あった。車内の重苦しい沈黙の中、舌打ちが響く。ユ・ケティンは、唇
を噛んだ。

今回の作戦のターゲットは、ブンジ・タチバナ。目黒の私邸を急襲
する計画であった。撤収したのは、周囲に保安局の特殊部隊の姿を確
認したからだ。軍から兵士を借り受けての作戦であったが、都心で軍
と保安局との衝突など起こすわけにはいかない。

「次は、無いというのに・・・」

呻くようにつぶやくケティンは、情報がどこから流出したかを考え
る。

特別行政区駐留の東アジア軍は、日本人特別居留区攻撃のために準
備を整えてはいる。ただ、関係各所との調整が難航しているらしく、
計画は遅れ気味であった。東アジア共和国全体に与える影響も大き
く、連合各国からの反応にも対応しなくてはならないため、致し方な
い面もあるが、計画の遅れはそのまま情報管理の困難さを増加させ
る。

車が大通りに出た。深夜の時間帯であるため車は少ないが、灯りの
点いている建物も多かった。それは大都市の普通の光景である。完
全武装の兵士を満載したトラックが走るには似つかわしくない光景
だ。

ケティンにはそれが解せなかった。

軍は特別居留区とそこを拠点にテロを行う日本軍を掃討する事が、トウキョウの治安情勢を解決させる唯一の道だと信じているようだが彼には、そこに齟齬を感じる。

確かに日本軍のテロはトウキョウの治安に悪影響を与えている。だがこの街の情景からは、それが読み取れない。道行く人の表情に、悪化する治安に対する懸念を読み取れないのだ。

情報統制によってテロの情報は制限され、身分証確認ゲートによって人々はテロの現場から隔離される。被害者の話題は雑踏の中に消え、遺族の声は噂の中に溶け込んでいく。

「・・・治安の悪化など、目には映らない街だ」

だがそれは、トウキョウが安定している事を意味しない。目に映らなくとも、この街の空気は明らかに不穏さを増している。日々街を出歩き、通信社の記事の一本も書いている彼は、その目に見えない不穏さを感じるのだ。このトウキョウという街に対する、人々の鬱屈。

それはきつと、日本軍などよりもずっと深刻な問題を引き起こす。だからこそ、対処すべきは目に見えるテロリストではなく、トウキョウの市民に潜み紛れている者達だとケティンは考えていた。

とりあえず今は、計画の練り直しをしなくてはならない。

家電量販店には、いつものように人だかりが出来ている。歩行者天国ではパフォーマーらしき一団が何かをしており、人々はそれを眺めるとも無しに歩いている。中国茶を飲ませるチェーン店の二階席から、彼女はそんな街の様子を見つめていた。

遠くから見れば、ありふれた東アジア的な街なのかもしれない。生活物資に困窮する人もおらず、市民生活は平穏さを保っているようにも見える。しばしば起こるテロ事件も、もはや日常の中に溶け込んでしまっているのかもしれない。トウキョウとはそんな街だった。

「お久しぶりです」

「時間通りですね、エリック・リブー」

ジュンコ・ヤオイが、サングラスのまま視線を向けた。愛想の良い顔をした男が、点心の載せられたトレイをテーブルに置く。彼女は、彼のトレイ載っている胡麻饅頭をつまむ手で、コンピューターのメモリーチップを載せた。紙おしぼりで手を拭く振りをしながら、彼がそれを袖口にしまいこんだ。

彼がトウキョウを離れている間の報告であり、同時に彼女の所属する組織からの調査依頼でもあった。店内のざわめきと、少し音量の大きいBGMは、二人の会話をかき消している。

ジュンコは、タマユラ地区の港に入港した貨物船の積荷を調べて欲しいと言う。アキハバラのジャンク屋組合もオーブ租借地にまでは手が伸びていない。取引先はいくつか有しているが、情報源の構築は出来ていなかった。

「あそこはオーブの企業が仕切ってるので、私達でも手が出しにくい」「じゃ、俺らもですよ」

それは過大な期待だというエリックに、積荷はプラントも関係している可能性が高いという。エリックの視線がこちらを向いたのを確認するように、ジュンコは傭兵という単語を口にした。

ジャンク屋組合に対する部品の問い合わせも、その可能性を強く疑わせる内容のものがあると言う。エリックは頭を巡らせた。

CEの混乱を長期化させている大きな要因の一つである傭兵は、幾度かの取締り強化によって大半は姿を消し、一部は正規軍の一セクションへと姿を変えた。中でも地球を本拠とする傭兵は、軍の投入などもあつてほぼ壊滅したといつてよかつた。

だが宇宙では、連合宇宙軍の極端な弱体化と復興を最優先とするプラント政府の政策で、そういった私設武装組織の残党が根強く残っていた。それらが、密かにトウキョウに來ているというのだろうか。

「雇い主は？」

「雇いたいところはたくさんありますね・・・」

つまりは、ジュンコにも分からないという事だ。だが、宇宙を本拠とする傭兵であれば、パイプを持つところは限られてくるだろう、調べられない事では無いかもしれない。そこまで考えたところで、次の

疑問が持ち上がる。

トウキョウの情勢はそこまで悪化しているのかと。彼女のじつと見つめるような視線は肯定なのだろう。エリックは窓の外を見つめた。家族連れが歩行者天国を歩きかい、ハッピを着た店員が製品ののぼりを持って声を張り上げている。この光景のどこに、傭兵などが入り込む余地があるのだろうか。

ジュンコは親指で胸を指差す。特別行政府によって、情報を操作され行動を規制される生活。この光景の内側に、何が蠢いているのか。エリックはもう一度街を見つめなおした。

第十一話 生の情報

玄関先の掃き掃除を終えて、空を見上げる。日が傾き始めるほんの少し前の曖昧な青空。ダルウィーシュ・ダルは、箒の握りを変える。このところ、孤児院の周辺を怪しげな連中がうろついているのだ。

日本人特別居留区への人道支援などを行っている以上、当局から監視される事は仕方のない事である。だが、法手続きに間違いが無い以上、それ以上の干渉を受けるいわれは無い。ダルの殺気に気付いたのだろう、背後の気配が消えた。慎重に後ろを振り向くと、見慣れない男が立っている。

「会場は、もう一つ向こうの駅ですよ」

東京武道館で行われているコンサートに向う人が、時々道を尋ねてくる事があった。この男はそうでは無いだろうと思いつつ、ダルはそう言った。男はにこやかに礼を返す。そして、ここは幼稚園か何かかと聞いてきた。

ダルの返答に、中を見せてもらいたいと男が申し出る。警戒心を隠さない彼に、男は歌声の主を知りたいと言う。そしてダルの答えも聞かずに、男は孤児院の敷地に足を踏み入れた。

「これでも音楽は少しかじっています。その歌が本物かまがい物かは分かるんですよ」

建物の中では、アメリカがピアノを弾いていた。周りの子供達と一緒に歌を歌っている。どこの国の歌ですかという問いにダルは答えないうが、男がその歌を熱心に聴いているのだけは分かった。

子供達は、アメリカの歌を耳から聞こえるままに声にしている。歌詞が持つ意味より前に、そこには音楽があった。男が手を叩き、視線が集まる。いつもの客とは違う男の姿に、子供達は不思議そうな顔をしていた。

アメリカは目を合わせてきた男に軽く会釈をした。彼女は、子供達を園庭へと連れ出す。

「・・・素晴らしい歌だ」

「自分は音楽に詳しくないもので」

「響くんですよ。こここの・・・ずっと奥にね」

男は自分の額を指先で叩くようにして言う。その歪んだ口元に、ダルは男を明確に危険と判断した。それも、当局の監視などとは全く異なる危険だ。

どうやって男をこの場から遠ざけようかと考えていると、男の方から頭を下げてきた。そして仕事の邪魔をした事を詫びて、玄関の方へと足を向ける。しかし、そんな男の後姿にも、ダルは拍子抜けした感じを受けない。

あの男は再び現れるだろう。それも、ここではなくアメリの前に。ダルは玄関先まで出るが、男は既に駅に向う道の角を曲がる所であつた。

一瞬だけ孤児院の方に視線を向けた男、ハニス・アマカシはダルの勘の鋭さに苦笑する。あの手のナチュラルは、並みのコーデイネーターより厄介だろう。

しかし、とんだ拾い物であつた。メンバーとの接触のためにコンサート会場に向う途中で、あの歌声に出会えたのだから。彼女が何者かを調べさせなくてはならない。あの歌声は、あんな子供達だけに聞かせるにはもつたない声なのだから。

「ようやく、本物の歌が聴ける」

ハニスは一人笑つた。その瞳の鮮やかさは、どこまでも深く美しく、そして不気味であつた。

女の出した紙コップのコーヒーを飲み干す。女は、彼がブラックしか飲まない事を知っていて、わざと砂糖とミルクを入れている。それをいちいち気にするほど、彼らも短い付き合いではなかった。

彼のオフィス同様に散らかつた女のオフィスには、書類に埋もれて遭難者のようになっていた課員が二名ほどいる。忙しさはどこも同じようだ。

「シユウちゃんくらいよ、鑑識に来る警備部の人なんて」

「それより頼んでたものは？」

シユウ・サクラは手短に言う。女はそつと小指でコーヒーカップを指差した。底にメモリーチップが貼り付けられている。

トウキョウ特別行政区の発足に伴い、トウキョウにおける刑事事件はその種類を増した。各国の諜報員やテロリストのメンバー、区内の活動家やマフィア、アングラ勢力などが入り乱れている。しかし警察は、保安局と名称が変わっただけで、その組織にほとんど変化がなかった。

そのため、様々な部課が横の連携の薄いまま活動を続けている。シユウの所属する警備部は日本軍の動向には詳しいのだが、それ以外の情報については蚊帳の外なのだ。だから彼自身が、独自に情報を集めている。

コウキ・ヨシオカとの関係もその一つであるし、ここに顔を出すのもそうだ。鑑識と科学捜査研究所は刑事部内のセクションであるが、ここにだけは各部の情報が集まる。テロリストの使用する爆弾の種類の特定も、スパイが使用する暗号の解読も、マフィアの売買する薬物の検査も、ここで行うのだ。

だからこうして甘いコーヒーを飲みに来る。今日取りに来たのは、ブンジ・タチバナについての情報であった。

コウキからのリークで、軍が動く事を事前に察知したシユウは特務課を派遣してそれに備えていた。結局、不審な車両はいたものの何も起こらなかったのだが、何故その人物が狙われるのかがよく分からないのだ。

「その筋じゃ、超有名らしいわ・・・」

女の勧めるコーヒーを断って、シユウはカップを返した。礼も言わずに立ち去る彼に、女は昼食くらい奢れと声をかける。そして、椅子の背もたれに体重を預けた。

特別行政区の発足に伴う混乱の中、その稀有な人脈で多くの人間を結び付けてきた人物。それがブンジ・タチバナだった。その人物が再び脚光を浴びだしたという事は、すなわちトウキョウが再び混乱するという事ではないのだろうか。

彼のコネクションが特別行政区や日本自治区を安定させたと評価

するものもいれば、まったく逆の評価をする者もいる。果たして、今度ほどのような評価を下されるのであろうか。

窓の外は良い天気であり、天井の照明はどこか滑稽だった。それなのに、何故か明るさを感じない。悪い予感というほどはつきりはしていないが故に、より不安が掻き立てられる、そんな雰囲気だった。

リクエストされた曲は彼も知っている物だった。オオサカの音楽イベントで流れていた曲。今は東京武道館でライブを行っているアイドルの歌である。ピアノ用にアレンジされたものがあるのか、彼女はためらいもなくそれを弾き、伸びやかに歌った。彼女が歌を歌う時だけは、場末のキャバレーがその趣きを変えた。

歌が終わり、まばらな拍手が消えると、店内は再び猥雑なノイズに満ちる。融けた氷を飲もうとするキリルの手を押し留め、ピアノの前から戻ってきたマリアがボトルを手にする。彼女はグラスの中の水を飲み、手早く水割りを作り直した。

手渡されたグラスには、うつすらとルージュが残っている。その淡い形は艶かしく、キリルはそのグラスをテーブルに戻した。不思議そうな顔のマリアに、不機嫌な横顔を見せてしまう。

自分はどうかしていると思った。

彼女の仕草に覚えるときめきは、そのまま苦い嫉妬になってしまふ。ここがそういう店である事は分かっているはずなのに、彼女が別の男にも同じ仕草を見せている事に苛立ちを覚える。彼女の手に触れると、その手を握り返してくれた。だが、それが自分だけのものではない事が、苦しくてならない。

「どうか、した?」

彼女の声に我に返った。内心の焦りを取り繕うように、キリルは試験の話をする。彼女が受けると言っていた在留資格更新試験だ。特別行政府で正規の労働者として働くためには、合格しなければならぬ試験なのだという。

「合格したら、ここで働く事も無くなるから、会えなくなっちゃうわ

ね」

「そんな事、どうでもいい。君は、こんなところで働くべきじゃ……」
彼女の手を握る力が強くなっている。困ったような彼女の顔をキリルは正視できない。チーママがマリアを呼び、彼女が席を離れる。代わりに、ママがキリルの横に座った。店の経営者である彼女が直接相手をする客は少なく、キリルはその数少ない上客の一人なのだ。

キリルの肩の力が抜けるのを見て、ママは含み笑いを漏らした。基本的に若い女の子目当ての客ばかりが来る店で、そうではないママとの会話を楽しみにしている男はいない。キリルが話を切り出そうとした時、ママがそれを制するように言った。

「幫の事に首を突っ込むのは止めておきなさい」

それはこの街で十年過ごせた人間だけが触れられる話題だという。彼女は、それ以外の話であれば、今まで通り報酬次第で話せる事もあると付け加えた。キリルはグラスの水割りを口にした。そして話題を変える。

「マリアを、その……貸していただけじゃないか？」

ママは大げさな表情で驚いてみせた。同伴させても食事だけで女を帰す男にしては意外な申し出だと言わんばかりだ。そして、それはマリアに直接聞くべき事だろうと行って、席を外した。

戻ってきたマリアが悪戯っぽく微笑みながら聞く。

「それは客として？ それとも、男性としてのお誘い？」

ボディーガードの二人の女性を下がらせ、リ・ウエンは夜のトウキョウを眺める。計画は、いくつかの不確定要因を抱えながらも、概ね順調に推移していた。東アジア軍による日本人特別居留区への攻撃も、一週間以内には最終決定がなされるであろう。こちらは予想以上にシャンハイが粘ってくれたようだ。

東アジア中央政府は、ペキン派とシャンハイ派が激しい権力闘争を繰り広げている。トウキョウ特別行政区と日本自治区の関係も、この二つの派閥の代理紛争と見る事も可能だ。

だがそのような権力争いに、ウエンは何らの興味も持っていないかった。

「ここは東京であり、日本なのだ・・・」

「トウキョウではなく、日本自治区でもない」と

ウエンの振り返る先には、スーツの男が座っている。上海第七銀行のカヲ・ツオピン、ウエンが代表を務める会社への融資話を持ってきている男だ。シャンハイの財界では名の通った男が、トウキョウにまでわざわざ出向いている。しかも、トウキョウをこまめに歩き回っているという情報も上げられていた。

無色透明のビジネスマンであり、職業倫理には忠実な男だという話なので、警戒するには当たらない。だがウエンは、カヲがトウキョウをどのようなに見ているかについて興味があつた。それは、自分の計画の今後を占うものかもしれない。

彼は問う。トウキョウは融資に値する街か否かを。

「トウキョウへの融資は検討に値します。ですが、東京に関してはリスクが大きすぎる」

そう言つて立ち上がる男を引きとめる事はしない。銀行屋としては、それでいいのだろう。だがウエンは事業を自ら行つてきた人間である。自らの才覚でリスクを請け負い、そのリターンを手にする。ハイルスクに見合うハイリターンがあれば、それを追い求める。そうやって、今までビジネスの世界を渡り、そして成功を収めてきた。

だから、ビジネス以外の世界であっても、同様に振舞うのだ。

故郷を奪われた彼らの父祖は、民族の血を絶やす事無くこの地に根付き、この地の人々ともに生きてきた。だが彼らは、第二の故郷ともなったこの地を、再び奪われる事となつたのだ。再構築戦争の終結がもたらしたものは、東アジア共和国の成立ではなく、日本の消滅だったのだから。

だから彼は、彼らから二度までも故郷を奪つた者達に向けるための牙を研ぎ続けていた。後は、それを敵の首筋に突き立てるだけだ。ペキンの喉笛を食いちぎり、東アジア共和国の首を落とすのだ。

「日本独立」

その狼煙は、この東京で上がる。そしてそれは、日本だけに留まらない。東アジア共和国全体に、独立の火の手は広がっていく。それはやがて、彼の父祖の土地をも解放する炎となるだろう。

消える事の無い街の明かりを見下ろしながらウエンは思う。日本が存在していた最後の年に生まれた自分が手がけるべき最後の事業として、これほどふさわしいものがあるだろうか。

旧世紀、個人用の携帯型無線端末は全世界で使用されるツールとなっていた。その技術進歩は目覚しく、名刺サイズのコンピュータとして使用できるまでになった。しかし、Nジャマーの撒布とその副次効果である電磁波障害は、携帯電話と呼ばれた無線端末に致命的なダメージを与える事になる。

現在では、特にインフラの整った大都市で赤外線を使用した無線端末が使用できる程度である。ヨシト・モリは、インタビュ相手の携帯電話を見せてもらった。

映っているのは、先日追加日程を終えたプラントのアイドル歌手のライブ映像だ。主催者であるハーモナイズコミュニティは、ライブ映像をそうそうにネット上で公開しているのだ。

「これは生？」

「当然じゃん、冷凍なんて見てる奴いないぜ」

インタビュ相手の若者は、少しだけ声をひそめてそう言った。ヨシトは礼を言つてその場を後にした。どうやら、特別政府の情報統制には大きな綻びがあるらしい。プラントの歌手があれだけの観客を動員できたのも、その辺りに理由がありそうだ。

近くのコーヒースタンドに腰を据えて、メモをまとめる。赤外線無線を完備しているのが売りのチェーン店だけに、客の多くは携帯電話を弄っていた。

特別行政区は、インターネットに流れる情報についても監視の目を光らせ、公序良俗に違反するとされた情報はアクセスが出来なくなる。もちろんそれは建前であり、反政府活動やテロリストの情報など

公安上問題のあるものを取り締まっているのだ。そうやって、当局によって規制を受けた状態の情報は、俗に冷凍物と呼ばれていた。

それに対して、当局の規制を受けていない情報が生と呼ばれているのだが、それを入手するためには、専用のソフトや設定が必要となる。先ほどの若者も、それによってライブ映像を入手していたのだ。

もともとあの歌手は当局の規制の枠外にあるのだが、歌詞や衣装などが細かく規制され、ライブ映像も当局が加工したものが出回っているという噂であった。その噂がどこまで本当かは分からないし、特別行政府もそこまで暇では無いだろうとは思う。

しかし重要なのは、トウキョウ特別行政府がそのような規制を行っている、市民に思われているという現実である。生情報を入手するためのソフトは違法であり、所有者には実刑もありうるのだが、おそらくトウキョウにいる人間の大多数が、生情報に触れているのだろう。

ヨシトはメモを閉じコーヒーのカップを手にする。今朝もテロ未遂が一件見つかかり、鉄道の運行も色々影響を受けていた。だが、店の窓から見えるトウキョウの姿は、日本自治区にあるヨコハマの姿と変わる所が無い。視界の隅に見える身分証確認ゲートだけが、二つの街を分けている物だった。

だが、そこそが決定的な違いなのだ。あのゲートは不自由の象徴であり、違法ソフトを用いて得られるライブ映像は自由の象徴なのだ。

港に停泊する船の数を数える。MSが隠されているとすれば貨物船以外は考えにくい。

ある程度の部品に解体すればコンテナでも運べるだろう。ソフトウェアや電子部品関係はトウキョウでも調達できる。パイロットだけを上陸させ、MSは各種のルートを使って部品を運んで組み上げる事も可能だ。アキハバラのジャンク屋組合はその可能性の方が高いと判断しており、部品の売り先に目を光らせているようだ。

だからこそ、裏をかいてMSを丸ごと運んでいる可能性がある。エリック・リブーは双眼鏡をキリルに手渡して、そう言った。

地球圏全体での取締りが強化された事から、かつては世界中で紛争を受け持っていた傭兵も今では宇宙にいくつかの組織を残すのみである。それだけに、タマユラ地区に傭兵が上陸したという情報は、その真偽を確かめる必要があった。地球にいた傭兵が、連合各国と密接な関係にあつたのと同様、宇宙に本拠を置く傭兵はプラントが関与している組織だからだ。

「・・・敵も味方も分かりやしねえ」

エリックはガムの包みを開けながら、そう吐き捨てた。彼らがカーペンタリアからトウキョウに派遣されたのは、プラントの地球拠点としてトウキョウが使えるか否かの調査のためである。だが傭兵を送り込んだ人間は、もっと直接的かつ早急な関与を望むものであろう。どの程度まで関わるつもりかは分からないが、上が分裂しているだろうという状況は、現場にとっては面白くない事だ。キリルが立ち上がって、行くぞと言う。

この情報の調査を要請してきたアキハバラのジャンク屋組合も、大口のクライアントだった善隣幫のここ最近の動きに警戒を強めている。敵味方が分からなくなっているのは自分達だけでは無いのだから。

一隻の船が接岸して、何かを降ろし始めていた。二人は小走りにそちらへ向う。船の中から出てくるものはMSのような形をしていたのだ。

「こんな目立つ事するか？」

「まて・・・サイズが、違う？」

近づくとそのMSの三分の一ほどの大きさの作業機械であった。複数の手足を持った姿は、見れば見るほどMSとはかけ離れた姿をしている。その車体に塗られたペンキは新しく、全体がワックスでピカピカに光っていた。

船から降ろされたそれは、トレーラーに載せられていく。どこかの工事現場にでも運ぶのだろう。

「すみません、関係者以外は・・・」

スーツにヘルメットだけを被った女性がそう言って近づいてきた。

エリックは機先を制するように名刺を差し出す。複数用意されたもののうち、彼が選んだのは経済誌の記者を騙るものであった。

女性は納得したのか自分の名刺を差し出す。シユバルベ工業技術主任、ユンデイ・ミナカミ、それが彼女の名前だった。

カフェコーナーの窓から見える景色は雨模様であった。天気予報は何と言っていたであろうかと、どうでもいい事を思う。ミルクだけを入れたコーヒーが苦い。チン・ヤンチャンはカップを置く。

ツクバには最近、日本自治区のエージェントに代わって、日本軍の関係者が顔を出すようになっていた。詳しい事は彼の耳に入る事ではないが、その両者が異なる利害をもってツクバに接触を行っている事は分かる。エヴィデンスの戦果は、いよいよ無視できない物になってきたのだ。

ヤンチャンは実験結果の書かれたノートを開く。SEED現象の発現に関する実験は、それなりの進展を見せ始めていた。特殊な非可聴領域音波が人間の脳神経系に何らかの作用をもたらし、それがSEED現象発現のきっかけとなっている事は、ある程度まで実証できていた。

だがサンプル数が絶対的に少なく、個人差や別の要因の存在を完全に否定できるものではなかった。これに関しては、大規模な実験を地道に行っていくしかないのであるが、今のツクバの状況はそれを許さないだろう。

「先生の研究は世界規模で行ってこそ意味があるものでしょう」

その声にヤンチャンは首を横に向け、目だけを後に向ける。ハニス・アマカシが笑いながら近づいてくる。かつてプラントが行っていたような地球規模の実験。あれを再現してこそ意味のある研究だと、彼は言った。

ギルバート・デュランダルであればあるいは、そういった意図があったのかもしれない。だが、彼もそこまでの確信があったわけでは無いだろう。プラントが行っていたのは、あくまでもプロパガンダの

一つに過ぎない。ミア・キャンベルにせよ、ラクス・クラインにせよ、その歌はザフトの宣伝でしかなかったのだ。

「だったら、先生が始めにやればいい。その価値のある事です」

人類の中に眠るSEED因子。それをあまねく発現させたとき、人は新たな種へと羽ばたく。その時、調整者としてのコーディネーターという、ジョージ・グレンの予言は現実のものとなるだろう。

種を芽吹かせる歌声を世界中の人々に届ける。それはもはや科学の枠に留まらない、人類史の偉大なる一歩であろう。ハニスは笑みを浮かべ、真剣にそう語っていた。ヤンチャンはカップのコーヒーに口をつける。

考えておいて下さい、ハニスはそう言ってカフェコーナーを後にする。ヤンチャンは、雨粒の滴る軒先を見つめていた。

彼はハニスに、ハーモナイズコミュニティなる組織との接触を勧められていた。そこであれば、兵器開発の片手間としての研究ではなく、純粹に科学としての研究が可能となるだろうと。

「科学……か」

少なくとも、今のハニスが語った事は科学では無い。それは宗教の最も危険な側面に肉薄するものだ。しかし同時に、軍事的な成果を求められない研究活動というものに、心を動かされた事も確かだった。

いずれにせよ、もう少し彼の素性を確かめてからでなければ、判断のしようが無い。カウンターに奥にあるテレビが、天気は西から回復してくると伝えていた。

雨上がりの空に、ようやく薄日が差してきた。本社への報告を終えたルーイは、腕時計を見る。今から孤児院に顔を出す時間はあるだろうか。列車の時刻表がないので、はつきりした事が分からない。とりあえず駅まで行ってみようと思ったところで、ヨシトに出会った。

日本自治区からトウキョウ特別行政区への入区審査が厳しくなっているから、なかなか顔を合わせる機会がなかったのだ。一応、取材成果は送っているのだが、そのやりとりも頻繁にはいかなかった。

そのせいか、ヨシトはまくし立てるようにしゃべる。

「聞いているんですか、キリロフさん!？」

ルーイは慌ててヨシトの顔を見るが、話は全く聞いていなかった。ただ、自分の仕事ぶりについて、文句を言っているだろう事は分かった。自分で言うのもなんだが、最近はろくに取材をしていない。だが、仕事に追われるよりずっと充実した日々を送っていると思っていた。彼はもう一度腕時計を見る。

ヨシトはそれを見咎めた。ルーイのそういう態度が、どこまでも不真面目なものに見えるのだ。最近、彼に交際相手が出来たらしいという事は知っている。

その事自体に文句を言いたいわけではない。だが、ルーイが自分の置かれている状況を全く理解できていない事に腹が立つのだ。彼の持っている報道ビザは、トウキョウで遊ぶために発行されたものではない。

そもそもユーラシアのテレビ局のスタッフに、特別行政区内部でも通用する報道ビザが発行されたこと自体、奇跡のようなものである。日本自治区で報道に携わっているヨシトですら、特別行政区に入る事は困難となっているのが現状なのだから。ならば、その奇跡はより有効に活用されてしかるべきである。

トウキョウは今、その水面下が激しく動いている。当局の追跡を受けながらも取材活動をしている独立系ジャーナリストも、特別行政区内の不穏な動きを刻々と伝えているのだ。

「それなのにあなたは・・・!」

思わず荒げてしまった声に、ヨシトは口をつぐんだ。周りを見渡すと、付近の通行人が怪訝な顔をして二人を見ている。その中で一人だけ、足を止めて視線を向けている女性がいた。

ルーイが気付くより早く、ヨシトが声を上げる。先ほどまでの声とは全く違う、トーンの上がった興奮気味の声だ。ピンクのヘアバンドの女性が、その声に苦笑していた。彼は声の様子そのままに女性へと駆け寄り、再び通行人の視線を集めてしまうような声で女性に話しかける。

「エルフリーデ・シーハンさんですよね!? 著書は読ませて頂きました!」

握手を求めるヨシトに応じながら、彼女は視線をルーイへと向け続けている。しかし彼は、その視線をそらしたままだった。

ヨコタを始めとした、トウキョウ特別行政区各地にある東アジア軍駐留基地は、その動きが活発化していた。日本人特別居留区に潜伏するテロリストを掃討するための作戦日時がようやく決定され、そのための準備に追われているのだ。

日本人特別居留区は都心部に隣接する区域であり、簡単なロケット弾であっても容易に人口密集地を攻撃できる。作戦にあたっては、都市住民の避難誘導なども迅速かつ的確に行なわなくてはならない。身分証確認ゲートや各種交通機関の運行状況管理など、様々なシミュレーションが繰り返されている。

東アジア政府は分離主義を認めないという断固たる姿勢を示すためには、是が否でも成功させなくてはならない作戦である。メガネを掛け直した男がそう言った。

「ペキンによる中央集権体制は断固維持する、だろ」

東アジアの軍内では目立つ、真っ黒の肌をした男がはつきりと言った。ギブスが取れたばかりの腕をさすりながら、出されたコーヒーに手を伸ばす。

「ジョン・マグナルド・・・いや、ヒュー・レペタ。そう固くなることは無い」

ユ・ケデインがメガネの奥の瞳を光らせた。そして、ヒューとの接触は自分の独断であり、情報部とは無関係だと言う。音を立ててコーヒーをすすするヒューは、その言葉を聞き流すような表情をしているのだが、ケデインが持ちかける話には耳を傾けざるを得なかった。

彼が欲しがっているのは、今回の作戦に際してヨコスカの大西洋軍がどのような動きを見せるのか、その一点であった。軍上層部は動くはずが無いとたかをくくっているが、彼はその点を危惧していた。ヨ

コスカが動きを見せれば、カデナやミサワの連合軍共同管轄地区に駐留している部隊も呼応するだろう。

そうなれば、全面衝突はないにせよ、連合内部での深刻な対立を内外に示す事になる。大西洋とユーラシアが北極海で睨み合うなど、最近連合加盟国内部の軋轢は増えていた。それは対プラントを考える上では、極めて拙い事態なのだ。

「考えるべき国益の範囲は広い」

ケデインはヒューに、ヨコスカの情報と引き換えに、作戦時における特別行政区内部の規制地図を示すという。ヒューの背中に冷たい汗が流れた。彼は、ヒューがヨコスカの司令部から下された指示を把握しているのだ。

東アジア軍の足元での活動である。自分達の情報を完璧に隠せているとは考えていなかったが、よもやそこまでとは予想外であった。同時に、そこまでの情報を掴んできおきながら、なおヨコスカの真意を測りかねているという事だろう。

「まあ、信用できるような国では無いがな」

再構築戦争のおり、安全保障の条約を反故にして日本の東アジア共和国併合を容認しながら、自分達の権益である基地と極東における軍の駐留だけは手放さなかった国である。特別行政区の混乱に乗じて、何かを仕掛けてくると考えるのも当然だろう。

ヒューは申し出を受けた。ケデインを安心させるくらいの情報なら、自分でも引き出せる。差し出されたケデインの手を握り返し、ヒューは気になっている事を聞いた。日本軍の掃討で、事態は一段落するのだろうか。

ケデインの無言は否定であった。おそらく、軍が想定している事態とは全く異なる事が起こる。トウキョウを舞台に諜報活動をしている者の皮膚感覚のようなものであった。

ヒューは、うんざりとしたため息をついた。

かすかなモーター音とともに門扉が開く。インターホンから聞こ

えてきた声の主が、頭を下げながら出迎えてくれる。割烹着が良く似合う老婦人で、ここで住み込みの家政婦をしている人だという。

その女性の柔らかな対応がなければ、きつと気後れしてしまうだろう。ブンジ・タチバナの邸宅には、堂々たる風格を感じた。労働組合の先輩のツテを頼って訪ねてきたのだが、聞いていた以上の人物であるようだ。

床の間に通されて少し、邸宅の主が現れる。立って挨拶をしようとする彼を制し、ブンジは彼の持つて来た土産を手に上機嫌に言った。

「あの子も、わしが医者に色々止められてるのを知ってるようだ」

スグル・ハタナカは、そんなブンジの様子に啞然とする。大先輩をあの子扱いするのもさる事ながら、自分のような若造に対して威圧感を全く見せないのだ。手土産の濡れ煎餅をつまみながら、お茶を持つて来た家政婦に隣の部屋にも分けてやるようにいる。

「これだけ広いお屋敷ですと、やっぱりたくさんの人が」

「じいさんの一人暮らしに人はいらんよ。ただ最近は物騒なんで、知り合いが用心棒を貸してくれていてね」

その用心棒はコーディネーターで、剣の達人だという。そして刀とドスの違いに関する講釈と、最近手に入れたという日本刀の自慢話を聞かされ、ようやくスグルは本題に入ることが出来た。

彼のいる労働組合の連合会は、リ・ウエンから提案された資金援助を、検討中という名目で先延ばしにしていた。リ・ウエンの背後関係が不明確で、判断の材料が乏しかったのが主な原因である。

だが、リ・ウエンは彼の所有する企業と傘下のグループにあるそれぞれの労働組合を通して、連合会に所属する個別の労働組合との接触を続けていた。連合会は切り崩しを受けたような状態となり、各組合への統制力が弱くなっている。

そして、それらの労働組合が統一してある行動を行う準備をしているのだという。

「ゼネスト……ですか」

ブンジの感心したような声に、スグルは深く頷いた。特別行政区の労働者が一斉にストライキを起こそうというのだ。そういった活動

を取り締まる軍の部局の動きも現在は何故か鈍く、流れは止まりそうにないという。

しかし、そのような大規模な行動が軍を刺激すれば、不測の事態が起きかねない。言いよどむスグルに代わってブンジが言った。

「日本人相手なら、平気で引き金を引くでしょうな」

スグルは、各労働組合が過激な行動を取らないように説得を続けるとは言う。だが方が一ゼネストが実行されるような事態になれば、状況がどう推移するか予測できない。そこでブンジの知恵を借りたいという。

頭を下げるスグルにブンジは困った表情を見せた。リ・ウエンとの会談を取り持っても、事態は動かないであろう。そういう相手だというのがブンジの見立てだ。かといって、トウキョウの市民が危険に晒される可能性を放っておくことも出来ない。彼は、慎重に言う。

「おそらく、普通の発想ではリ先生の思惑通りにしかならない」

彼の考えている事の良し悪しはともかく、何も知らない市民にまでリスクを負わせるのは筋が違うだろう。だからその思惑を超える発想が必要になる。ブンジはスグルに、ハーモナイズコミュニケーション事務局への連絡方法を教えた。

第十二話 船上パーティー

口からでまかせの肩書きで、よくも会話を続けられるものだと思う。技術系の仕事をしていたというのが信じられない。エリックの言葉を聞きながら、キリルは呆れていた。同時に、このような才能の方が求められるようになったプラントの現状を深く憂う。

話の相手は港で出会った女性と、その夫であった。二人とも同じ職場に勤めており、トウキョウには長期の出張だという事だった。

「パラジウム合金並の効率ですね・・・カーボンナノチューブと発泡金属の組合せですか？」

「良くご存知だ。でもこれ以上は」

「失礼、企業秘密ですね」

二人の勤めるシュバルベ工業の商品である多脚多腕型汎用作業機械は、MSと同じ動力を使用している。カタログのスペックを見ただけで、企業秘密に触れる情報まで読み通したのは、エリックが技術畑の人間だからだろう。

そういった専門的なやり取りだからこそ、相手に警戒をされていないのかもしれない。オペレーションシステムの内容ともなると、キリルにはついていけない話であった。テーブルの上の名刺に視線を落とす。

店員に水のおかわりを頼んだ時、名刺の名前を聞いた事があると思い出した。アカデミー時代に耳にした事のある噂で、赤服授与者でありながらザフトではなく連合の部隊に配属されたという人達がいたというのだ。

そのうちの一人はアカデミー初の整備課程での赤服で、プラントの各開発局が学生時代からスカウト合戦を繰り広げるほどの才能だったという。だが連合の部隊から戻った後、その人物は辺境の資源衛星にある名も無き民間企業に就職したという話であった。

就職活動の季節になると流れる噂らしいのだが、連合に加わった者がいたなどという話はキリルにとって愉快なものではなかった。その連合部隊は、現在存在しないという。

「連合軍緊急即応部隊……」

何の気無しにつぶやいた言葉に、二人の注意が向けられた。キリルは何かまずい事を言ったのだろうかと思う。

「……君達は、ザフトか」

キリルとエリックは表情を固めた。その反応を笑ったウンディ・ミナカミが説明する。自分達の経歴は、別段隠蔽されている物でもないが、おおっぴらに公表されている物でもない。プラントの一般市民でその話を知っているのは、ほとんどいないはずだという。だから、ザフトではないかと思っただのだと

エリックの恨みがましい目に、キリルは視線を落とした。そんな様子を再び笑われる。

「まあ、未だゴタゴタしたご時勢だ」

タルハ・アンワール・ガニーがそう言っただけで紅茶を飲み干す。そして、どういうわけで自分達と接触したのかと聞く。今後の営業活動を円滑にするためにもぜひ聞かせてもらいたいと言った。

キリルとエリックは目配せをする。タマユラ地区における情報源は少なく、この二人との繋がりには保っておいた方がいいかもしれない。

都心の一等地に、マフィアが堂々と事務所を構えている。ダミー会社を仕立てるでもなく、その名前を堂々と晒すことができるのは、世界中でもここだけだろう。暴力団と呼ばれる日本のマフィアは、他国のマフィアとは少々異なる存在だと言われたりする。

その文化史を紐解けば、それなりに面白い読み物を書けるかもしれないが、あいにくとカズヤ・イシは、その方面に興味を持っていなかった。彼が追っているのは、今のトウキョウの水面下に蠢くものの正体である。

大企業の応接室のような品のいい部屋に通された彼は、取材相手があるのを待つ。

「タチバナ先生からの紹介で……」

「聞いている。座りたまえ」

現れたのは和服姿の老人、菱丘組の組長であるユウゾウ・カトウだ。トウキョウのアングラの最低でも半分は彼が掌握していると言われている。いかにもといった感じの男達がその背後をがっちり固め、カズヤに対しても警戒心を解こうとしない。

以前、軍の特殊部隊による襲撃が何件かあったという噂は本当なのだろう。当たり障りの無い自己紹介をして、本題へと入る。『トウキョウと東京』そんなタイトルの記事という事で、取材の申し入れをしていたのだ。

いくつかの段階を経てトウキョウ特別行政区は発足しているため、どの時点をもって成立とするかは識者によっていくつかの説がある。実質的にはもっと早くに成立したという説が主流だが、東アジア共和国の公式発表に基づくと来年で丁度50年であった。記念式典その他の話は今のところ聞かないが、それはトウキョウに対する人々の意識を反映しているのかもしれない。

市民の大半は「トウキョウ」しか知らない世代である。しかしその意識の深層には間違いなく「東京」が存在する。「東京」を知っているユウゾウらの年代であれば、それはより顕著であろう。

「・・・なるほど。やはり根っここの部分では日本軍とも相通ずる部分がある」と

「同じ日本人も標的にする点において、連中はヤクザ以下の外道だ。だが日本の独立を目指すという点では大いに共感すべき部分がある」

カズヤはメモを取る手を止める事無く、それを書きとめた。だが独立というキーワードは、かなり重大な意味を持つだろう。彼らマフィアが、反東アジア活動を行っていた事は確かだ。だがそれを、明確な政治目標として掲げて行動した事は無い。あくまでも、自分達の経済活動の妨げとなる東アジアの動きに対抗しようというものに過ぎなかったのだ。

それが今、日本独立を目指すと言う。マフィアの明確な方針転換である。当然、裏には利害得失その他の関係が控えているであろう。しかし、その看板を掲げたという事実は大きい。

やはり、トウキョウで何か大きな動きがあるとすれば、それは日本軍の動向とは全く異なる部分で動くのであろう。日本独立、その言葉をマフィアのトップから聞けただけで、今回の取材には意義があったとカズヤは考えた。

近々、歴史的建造物の認定がなされるという話のサンシャイン60ビルを真正面に見る建物の一角に、ハーモナイズコミュニティの事務所が置かれていた。スグル・ハタナカは、何の変哲も無い事務所の隅の、パーテーションで囲まれただけの応接スペースで出されたコーヒーを居心地悪くすすっていた。

応対するのは自分よりずっと若い男性で、おそらくコーディネーターだろうという感じの髪の色だった。だが、国外からの入区の難しいトウキョウで、小さいとはいえ事務所を構えている組織だ、侮つてはいけないと肝に銘じる。

「ゼネスト・・・ね。で、どんな事するの?」

この口の利き方は間違いなくプラント出身だ。スグルは心を落ち着かせるように息を吸い込み、ゆっくりと吐き出しながらしゃべる。実際にゼネストを実行するかどうかはまだ決まっておらず、そうならないために努力を続けている最中であつた。

ただ、もし仮にゼネストが実行されるのであれば、それはただ仕事を放棄するだけでは留まらないだろう。おそらく、デモ行進などが企画されるはずである。スグルの言葉に、男性は薄笑いを浮かべて腕を組んだ。

「古いなあ・・・それ時代劇じゃん」

「だから、それは仮の話であつて・・・」

「違うんだよね。用は行政府に対して自由を要求するんだろ。あの不便なゲートを無くして、生の情報に触れさせろって言いたいわけだね」

その直接的な言い方に、スグルは思わず周囲を見回した。男性は笑つて、盗聴対策は万全を期していると言つた。

彼は、デモ行進などで表現できる事は僅かしかないと言い、もつと異なった表現を探るべきだと付け加えた。スグルは、その表現という単語を聞き返した。どこか微妙に話が食い違っているような感じだ。

だが男性は、何の疑問も無く表現という言葉を使う。

「主義主張、要求要望、とにかく自分がこうしたいこうして欲しいって思いは、最終的に表現されなきゃ伝わらないだろ。言葉だって表現だし、まあデモ行進も表現だよ。でもその表現はもう古くて効果が無いって事は、過去の歴史が証明してるじゃん」

それは自分の思いを表現するだけだったからだと男性は言った。今求められているのは、自分の思いだけではなく他人の思いをも表現する事だと。他人が未だ気付かず、表現に至る事の無い思いを、自らの表現を持って引き出し、他人を表現の世界へと導いていく事だと。「表現つてのはさ、結局最後は他人を巻き込んでいくものだよ。ムーブメントを起こして、既存を乗り越えていく事が、表現の一番大事な役割なんだ」

特別行政府という枠組みを超越するムーブメントを起こす表現、その一翼をハーモナイズコミュニティに担わせてもらいたい。男性はそう言つて握手を求めてきた。スグルはその手を握り返すべきか否かを迷う。

この男性、そしてハーモナイズコミュニティなる組織が何をしようとしているかが全く見えないのだ。彼らの言葉は、スグル達のいる世界とは全く異なる次元にあるかのようだ。

ブンジ・タチバナは、普通ではないアプローチが必要だと言つたが、これはそんなレベルでは済まないかもしれない。とりあえず、今後も接触を続ける事だけ取り決めて、スグルはイケブクロの地を後にした。

女性が一息入れるようにコーヒークップに口をつけた。興奮した様子で話し続けていたヨシトは、今しがた仕事の都合でその店を後にしている。心底、名残惜しそうな様子の彼に、女性は苦笑していた。

自分はそれほど有名人だったのかと。

問いかけるようなその言葉を、ルーイは聞こえない振りをした。その女性、エルフリーデ・シーハンは両親の友人であり、フリーのルポライターをしている人だ。前大戦時、ユーラシア中央部の都市を拠点に行われていた大規模な人身売買組織に関する著作は、ユーラシアのみならず大西洋やプラントでも静かな反響を生んでいた。

アフリカや南アメリカなどの紛争地における少年兵問題に関するルポルタージュは、連合の人道支援に関する部局が本格的な調査に乗り出すきっかけにもなっている。一般的な有名人とは違うが、その筋の人であれば最低でも名前は知っているはずの人物であった。

ルーイにとっては、母同様に苦手な人だ。

「ルーイ君は仕事？」

「うん。エル姉も？」

他の取材と平行しながらであるが、彼女はずっとある組織の事を追っていた。東アジアで様々な人体実験を行っていたとされる研究機関、新京新医学学術院。その関係者らしき人物がオーブから日本自治区に渡ったという。その情報を追って、タマユラ地区まで足を伸ばしていた。

日本人特別居留区に関する取材もやっておきたいのだが、ツテがないという。エルフリーデは、ルーイにその辺りの情報に詳しい人を知らないかと聞く。彼は答えなかった。彼女は、取り立ててその事を追及するでもなく、ただ穏やかにカップを傾けていた。自分を責める事すらしない彼女の視線は、彼を貫き続ける。

彼がテレビ局に勤め出したのは、彼女の夫の新聞記者の紹介だった。学生を終えても進路の決まっていなかった彼は、特に考える事も無くそこに就職した。今思えば、それは間違いだったのかもしれない。母の仕事も、エルフリーデの活動も、嫌でも耳に入ってくる職場だ。

だが、比較されるのが嫌なわけではない。うだつの上がない自分に嫌気が差すわけでもない。何かに突き動かされるように仕事をしている彼女らの様子が、とても痛々しく感じられるのが嫌なのだ。

コーヒーカップとソーサーが触れる音が、微かに聞こえた。

「ルーイ君は、何を追っているの？」

「・・・東アジアのサブカル」

もともと日本自治区に来たのはそのためだったので、そう答えておく。

満足そうに頷く彼女に、ルーイはやりきれない気持ちを募らせた。小さい頃、熱を出して寝込んでいた時、一睡もせずに看病していた母が、眼を覚ました自分に微笑みかけた時のような、いたたまれなさ。ルーイはそつと唇を噛む。

エルフリーデは店内の時計を見上げた。宿泊先の電話番号を書いたメモをルーイに手渡すと、伝票を手にして席を立つ。彼は、その後姿を追いかける事をしなかった。

豪華なシャンデリアのぶら下げられた広いホール。正装をまとった男女が、グラスを手に談笑している。白い服のシェフ達は、運び込まれてくる料理をパフォーマンスを交えながら取り分けていた。

イベントの成功を祝うパーティーだが、それはライブスタッフの打ち上げとは全く異なったものである。プラントの歌手をトウキョウ特別行政区で歌わせる、そんな無茶な企画に尽力した人を招いてのパーティーである。招待客は、行政区の高官や東アジア共和国の政治家、そして財界の有名人などである。

「良く、ご存知ですね」

居並ぶ面々の名前をそらんじているエリック・リブーに、ジュンコ・ヤオイは低い声で話しかける。ここは、グレート・バリアリーフ号の船内のホールであった。エリック達プラントの情報部員も、招待客に紛れてパーティーに参加している。

グラスを煽ったエリックにウェイターが近づき、新しい酒を手渡す。手際の上さは、最高級のホテルと同じだ。どれほどの金がかかっているのか、容易には想像できない額だろう。ハーモナイズコミュニティなる組織が、サブカルネットワークなどであるはずかない。

エリックはジュンコをエスコートするように、ホールを離れる。そして彼女に、この組織についての情報を質す。

「ネットワークの奥の方に、ターミナル残党がいるのは確か。ただし、思想的にはかなりの急進派」

ハーモナイズコミュニティのトウキョウでの拠点がいけブクロにある事までは調べがかったそうだが、それ以上の具体的な話はなかった。かつてのような、軍事力によるレジームチェンジを目論む過激派である可能性を危惧するエリックに、ジュンコは過激ではなく思想的にラジカルなのだと言った。

また、招待客にはそれぞれの思惑があるだろうが、ハーモナイズコミュニティのシンパはいないだろうという事だった。プラントとのパイプを求めていたり、事業的な提携関係があるなど、どれも実利の関係ばかりなのだ。連合、プラントの双方で、ターミナル系の議員や官僚は徹底的なパージを受けている。

「謎の組織の手先はいないって事か・・・」

「そちらはどうです。傭兵の件」

タマユラ地区で情報源になりそうな人物との接触を持てた事を伝える。近いうちに、何らかの情報が入手できるだろう。そう言ったエリックは、ジュンコの視線が別の方に向いている事に気付く。

視線の先には、女性をエスコートして歩くキリルの姿があった。そんな彼に、ジュンコは心底驚いた表情をしている。

「あの女性は？」

「南千住の飲み屋のねえちゃん」

パーティーは婦人の同伴が必要なのだ。エリック達情報部員も、パートナー探しには難儀していた。実際、パートナーの見つからなかった数名は、ウェイターやコックとして会場に入っている。

「俺ももう少し熱心に夜遊びしとけば良かったですよ。そしたら姐さんを連れなくて済んだ」

ジュンコはその言葉を聞き流す。彼女としても、このような場に出席できる事は大きなチャンスである。男の軽口など、いくら聞こうとお釣りが出るほどリターンは大きい。ジャンク屋という商売を続け

ていくためには、一にも二にも情報なのだ。

煌びやかな衣装が舞っている。ホールではダンスが催されていた。ただでさえ、こういった浮ついた雰囲気は苦手だというのに、さらにダンスである。キリルの気持ちを察したのか、マリアはそつとホールを出るように促す。

キャバレーの安っぽい煽情的なだけの服ではない、きちんとしたドレスを身につけた彼女は、ただ美しかった。結い上げられた髪から視線を落とすと、うなじから背中にかけての艶かしいラインが眼に入る。照明に映える肌は艶めき、淡い色の口紅とともに魅惑的な表情を作っていた。

任務は、今後の活動に備えて、パーティー出席者との接触を持つ事である。だが、彼女とこうして腕を組んで歩いているだけで、そんな事は忘れてしまいそうになる。

「会場は、ここだけじゃないのね」

マリアの声に、キリルは我に返る。ダンスの始まったホールだけではなく、他の小ホールもパーティー会場だった。そちらに足を向けるのは、キリル同様にそういった社交事に慣れていない人達である。

愛想笑いの仮面をつけ、定型の美辞麗句だけを並べる会話劇を政治というのであれば、そんなものはプラントに不要である。連合との国際政治を通じて地球圏の安定をもたらすなど、この茶番によって成し遂げられる事ではない。コーディネーターの能力は、そんな事のためにあるのでは無いはずだ。キリルの表情は固くなる。

「不機嫌になるのはお腹が減った証拠よ」

小ホールでも食べ物が供されており、マリアはキリルの分を皿に盛って差し出してくれた。ローストされた牛肉を口に運びながら、彼女の微笑みを見つめる。きっと、この場にいる女性の誰よりも美しく、誰よりも聡明な女性だ。

小ホールにも人はけっこういるのだが、向こうのように大声でしゃべったり笑ったりしている人はいない。アイドルが人の間を縫うよ

うに移動し、挨拶を繰り返すわけでもない。多くはパートナーと壁際に設えられた椅子に座るなどして、静かに話しているだけだ。

キリルはマリアの手を取って、空いている椅子を探す。ホールの隅のピアノの陰に、場所を見つけた。手にしたグラスを触れ合わせ、そつと口を付ける。シャンペンの泡が、香りとともに弾けている。

一応はアイドルのコンサートに関わった人達への謝恩パーティーであるため、BGMにはそのアイドルの曲が使われていた。丁度、曲の継ぎ目なのだろう、BGMが途絶えて、ホールが少しだけ静かになった。

「君の歌の方が・・・素敵なのに」

そんなキリルのつぶやきが聞こえたのだろう、マリアはホールの責任者らしき者に声をかけた。そして、ピアノの前に座る。静かな音がホールに染み渡っていった。

人々の視線がその音に集まり、その耳が歌へと傾けられていくのが分かる。

マリアが故郷の歌だと言っていた曲。言葉は分からないが、その声は胸の奥に沈みこむように伝わってくる。キリルは目を閉じ、彼女の歌に心を委ねた。

最後の音がホールの空気に溶け込むと、人々は自然に手を叩いていた。歌と同じように、静かに染み入るように拍手が響いている。少し恥ずかしそうに一礼するマリアに手を差し伸べるキリルは、何故か誇らしい気持ちで一杯だった。

拍手の音で、曲が終わった事に気付く。もう少し長く、その余韻に浸っていたいと思っただけだが、芸術を遺伝子の奥底で感じる事の出来ない人間にとっては、音の終了が音楽の終了なのだろう。

連れの男に手を引かれるようにしてピアノの前から立ち去った女を、ハニス・アマカシはじつと見つめている。僥倖とは、こういう事を言うのだろうか。額を指で叩きながら、今にも弾けそうな自分を落ち着かせる。

「ハーモナイズコミュニティ・・・」

彼は組織の名に込められた意味を反芻する。

彼はもともと、オーブにあったターミナルの研究施設で育ったコーデイナーターである。武装闘争路線をひた走る主流派とは距離を置いていた研究機関であったため、ターミナルが壊滅した後も細々と研究が続けられていた。ツクバに来たのは、SEEDコンバーターやSEED因子に関する研究の実証データを入手しつつ、研究資金などの提供を受けるためである。

今のところは、大きな問題も無いようだが、今後のトウキョウ情勢の如何によつては、どうなるか分からない。研究者達も、現在の研究環境が失われた時にどう行動するかの算段は、今のうちから考えているのだろう。

しかし彼は、そのような事に興味は無かった。研究者は詳細なデータや客観的な証拠が必要なかもしれないが、ハニス個人にとってSEEDの発現は紛れも無い事実であり、ラクス・クラインやミーア・キャンベルの声が、その発動条件となっている事も事実である。彼自身にとっては、それで十分なのだ。

「その声は・・・世界にあまねく響くもの」

平和の歌を歌う事をやめ、剥き出しの力に魅入られた者達は、結局ナチュラルの猿真似の政治の世界に沈み、愚かな失敗を犯した。ターミナルは、ただの陰謀組織と成り果て、より強大な力にねじ伏せられるだけであった。

自らの想いをかなぐり捨て、力のみで世界に対峙した者の当然の結末であり、ハニスはただ冷たい失笑しかない。

「こんな歌ですら、世界を揺さぶれるんだ」

船内のBGMとして流れるアイドルの歌に、ハニスは愉快そうな表情を見せる。最近のものは、組織が提供し歌詞も曲も綿密に設計されたものであるが、ハニスの頭には何ら響かないものである。ツクバが開発した、非可聴領域まで再現できるスピーカーを使用しても同じである。生の歌を聴いた時もそうであったのだから。

だが、この歌がトウキョウで静かに鳴動している事は確かである。

人々の心に確実にハーモナイズコミュニティの想いを伝えているのだ。

もしこれが彼女の声であれば、ハニスはその夢想する。

人々の心の奥底に、まだ眠る人としての可能性。それを目覚めさせる歌。その時、人は本当の意味での進化の時を迎え、コーディネーターはジョージ・グレンが語ったように「調整者」となるであろう。ウェイターが差し出すグラスを受け取った。一瞬、そのウェイターと目が合う。相手は、何かにたじろいだように体を震わせ、それを誤魔化すような丁寧なお辞儀をして離れて行った。

ハニスの瞳は、底を失ったように深く深く光っている。

このパーティーの会場にグレートバリアリーフ号が選ばれたのは、船自体の宣伝も兼ねられているからである。汽笛が二度鳴らされ、船が岸壁を離れる事が伝えられた。海上からトウキョウの夜景を眺めるのだという。招待客の多くはそのまま船に一泊する予定であり、豪華客船の乗り心地を堪能できるといふ触れ込みだった。

ザフトの調べでは、船会社にも大洋州にもターミナルの影は確認されず、正規の契約によって船を借り上げたようだ。資金の出所が問題だというエリックのつぶやきに、それを調べるのはあまり意味が無いと男が答えた。

特徴の無い外見だが、財界では知らない者がいないと言われる、上海第七銀行の元頭取であるカヲ・ツオピン。ジャンク屋に対する極秘融資の案件について、ジュンコと話していた人物だ。

「ターミナル系の資金ルートは、連合とプラントの金融当局が既に洗った後です」

その後と同様の資金ルートを構築しようにも、市場には監視の目が張られているという。おそらく、全く異なる資金の集め方、動かし方をしているのだろうか。

「ネットのコミュニティを利用した小口の募金や協賛金、そういったものを無数のサイトで少しずつ集める・・・とか」

かつてのように、核搭載MSを不法に運用するような集団とは、全く異なるのがこの組織だ。その資金も、組織形態に合わせたものとなるだろう。クレジットカードと連動したワンクリック募金のような形で集められる資金をいちいち把握し、その一つずつを抑えたり止めたりする事は不可能である。

エリックはつまらなそうな顔で、グラスを煽った。ハーモナイズコミュニティなる組織が、敵性の組織であるかどうかも現時点では不明確であるが、不気味さだけは増した感じだ。

カヲが時計を見上げて立ち上がる。宿泊をしない一部の招待客は、船が動き出す前に降りなくてはならないのだ。ジユンコとエリックも立ち上がった。

「降りるのか？」

「姐さん、泊まりじゃないんだよ。流石に送ってかにやるまい」

キリルに聞かれたエリックがそう言う。そして、そのまま外泊するから一晩部屋を使ってもいいぞと付け加えた。

「!? 何にだ！」

「何って・・・ナニだよ」

ここまで来て立ち止まる必要がどこにあると言って、エリックはキリルの肩を叩いた。そしてニヤツと笑うと、待っているジユンコのところの小走りで行っていった。取り残されたように立ち尽くすキリルは、後から掛けられた声に肩を震わせた。

マリアが不思議そうな顔で見つめてくる。彼は思わず視線をそらせた。

「夜景・・・見ていかないのか？」

部屋ならある、それを言うのに、どれほどの勇気を振り絞っただろう。そのかすれた声を、彼女はちゃんと聞き取ってくれた。

東京港の日の出桟橋が見渡せるビルの一部では、東アジア軍諜報機関がグレートバリアリーフ号を監視していた。船会社のピーアールのために、長期の停泊を行っているという話であり、現に富裕層向け

の広報宣伝活動を行っていた。今回のパーティーも、その一環という事だろう。

だが、その船を隠れ蓑にザフトの諜報機関がトウキョウで何らかの活動を行っている事はほぼ確実であり、パーティーの主催者はハーモナイズコミュニティという半分はアングラのような組織である。監視の目を厳しくするのは当然であろう。

「嫌な感じだ・・・嫌な」

ユ・ケデインは、報央社の記者としての記事を書きながら、グレートバリアリーフ号を眺めていた。トウキョウでのライブを成功させたプラントの歌手が、東アジアの政財界関係者を招いてのパーティーを開いたという、どうでもいいベタ記事であった。社として招待されていれば良かったのだが、あいにくとライブに協力的ではなかったのだ。

書き上がった原稿を電送すると、双眼鏡を覗く。パーティーから帰る客達を乗せたタクシーが長い行列を作っており、船は丁度岸壁を離れたところだった。メガネを外して目頭を強く押す。

軍による特別居留区攻撃は間近に迫っている。上層部は、それによつて事態を一挙に好転させるつもりでいるようだが、ケデインにはそこに引つかかりを覚えるのだ。

確かに、都心部での爆弾テロや利根川を越えてのロケット弾攻撃など、特別行政区の治安情勢には日本軍やその協力者が大きく関わっている。だからこそ軍は、その排除を目指している。

だがケデインが調べれば調べるほど、その調査内容から日本軍の姿が消えていくのだ。それが、引つかかりを覚えさせる。

善隣幫、菱丘組、ハーモナイズコミュニティ、さらにはツクバを通じた日本自治政府の動きに、区内各企業の労働組合、そしてタマユラ地区。軍が目を向けられないそういった要因が、ケデインの調査の中には現れていた。

それらは、明確な繋がりを持つわけではなく、淡い糸のようなもので緩く繋がっている。だから糸を手繰って調査を進める事が困難なのだ。手繰ればすぐに切れてしまう。

しかし、それらは決してバラバラに存在しているわけではない。トウキョウの奥底に流れる「何か」によつて、間違いなく繋がっている。その決定的な「何か」が見えてこないのだ。トウキョウの街は、今日も平穏な様子を保ったままだった。

「東京……」

ケデインはパソコンを弄り、雑誌の記事を検索した。月刊のオピニオン誌の次号予告の中に『トウキョウと東京』というタイトルの記事を見つけた。タマユラ地区の小さな出版社が出している雑誌であるが、そのタイトルの意味は深い。

トウキョウ特別行政区において、「東京」という日本語での発音は一切認められていない。それは検閲の対象であり、テレビやラジオでも徹底して行われている事だ。だが簡体字ではない漢字で「東京」と表記されるものは、日本語で発音するものと考えるのが、トウキョウに住む人間の感覚であった。

ケデインは「何か」に触れたような感覚を覚える。

客室のランクとしては一番格下の船室であるが、下手なホテルよりずっといい部屋である。小さいながらもシャワーが設置されており、照明を少し落とした部屋には、その音が響いているのだろう。キリルはカランを捻った。

静かになったシャワールームは、それだけで緊張感を際立たせる。鏡に映る金髪の男は、熱いシャワーを浴びたにも関わらず、青い顔をしていた。拭き終えてしまった体を持って余すように、バスローブを羽織った。

シャワールームのドアを開けて視線を巡らせる。ベッドには同じバスローブを羽織ったマリアが腰掛けていた。彼女は彼を安心させるかのように、微笑んでいた。

ぎこちない自分を省みる余裕すらない。せり上がって来そうな心臓を飲み込むように、テーブルのコップを掴むと、中の水を飲み干す。

「その……」

沈黙を嫌うように声を出したキリルを咎めるように、マリアはバスローブを床に落として立ち上がる。何も身に着けていない美しい裸身が、彼の目の前に現れる。彼女は彼の目の前に立ち、すっと手を伸ばした。

両手を首の後ろに回すような仕草で、彼のバスローブに手をかけ、それを床に落とす。そして、そっと彼を抱き締めた。

その優しく柔らかい行いに、彼は自身の中に湧き上がってくる熱い愛を自覚する。彼女を強く抱き締め、その唇を吸う。彼女をベッドへと横たえ、その香りと味を確かめるよう、全身を愛撫する。

柔らかな胸の固い頂きへの口付けを止める事が出来ない。彼女の口から漏れる吐息が、彼の胸を震わせた。

その滑らかな肌に手を滑らせると、その終着点には淡い茂みと熱い潤みがある。彼女の微かな動きに促され、そこに触れ奥を目指す。薄く目を開いた彼女と、視線が絡まる。何かを訴えるようなその視線に、彼は彼女の足を押し開いた。

痛みとともにその存在を誇示するような自分自身を、彼女は拒む事無く導いてくれる。熱く抱き締められた彼自身は喜びに打ち震え、更なる喜びを彼に要求する。激しくなる動きに、彼女の吐息が喘ぎ声に変わった。

彼女の手足が彼に絡みつき、喘ぎ声の中で彼女は彼の名を呼んだ。その声は彼の心を打ち、駆け上がってくる感覚が弾け飛んだのを感じた。繋がったまま溶け合う体を感じながら、キリルはマリアの顔を見つめた。

上気したまま微笑む彼女に、彼は込みあがってくるものを抑えられない。カーテンの隙間から見える外は、まだ夜景の瞬く夜である。

第十三話 強奪

新中川と旧江戸川の合流地点にかかる橋の上に乗車を止め、窓の隙間から双眼鏡を突き出す。朝焼けの空は美しいものではない。まだ早い時間なので車も少なく、路肩に止まっている車を怪しむ者もないだろう。コーヒーを頼む相手を間違えたと、水筒の中の甘すぎるコーヒーを胃に流し込む。

タマユラ地区と日本人特別居留区を間に挟んでいるため、距離以上に都心とは離れた感覚のある場所だ。身分証確認ゲートも駅と荒川にかかる橋にしかなく、車道に監視システムが設置されているとはいえ、都心部に比べて往来も楽である。

「当局の締め付けが緩い……と」

水筒の蓋を閉めて、シユウ・サクラはもう一度外を眺めた。そろそろ、仕事に戻らなくてはならない時間だ。

軍の方で何らかの動きがあるらしく、都心部の警備には軍が管轄する武装警察が入りだした。シユウのいる警備部は、お払い箱よろしく旧江戸川区における日本軍シンパへの警戒活動をとるように命じられているのだ。シユウはその合間を見つけては、街を眺めて回っていた。自分の感じている違和感の正体を探しているのだ。

都心部に武装警察が入りだしたからといって、市民生活に大きな影響があるわけではない。駅などを中心に巡回を行っているが、ニュースでも軽く触れる程度でありこれといった混乱は生じていない。

だが「雰囲気」が悪くなった事は確かである。街に流れる空気に、冷やかな嫌悪感が充満しているように感じるのだ。

それは、こちらに来てから、より一層感じるようになった。正確に言えば、都心部には巧妙に隠されている物が、ここでははつきりと顔を見せる事があるのだ。タマユラ地区から違法に伸ばした通信用ケーブルで、特別行政区による監視を外れている情報に接する事の出来る地下ネットカエが複数確認されているなど、当局への反発が目に見える形を取っている事がある。

それは、トウキョウの通底音として響いているものではないだろう

か。自分は、それに違和感を覚えるのだろうか。

「・・・違うな」

彼の感じる違和感は、その通底音に自分自身が共鳴している事なのだ。トウキョウの治安を守る立場にある自分が、トウキョウの不穏な通底音を共に奏でているという事に違和感を覚えるのだ。

自分らしくも無い考えをため息で吹き消し、シユウは煙草を取り出す。一服したら仕事に戻ろうと思う。彼はもう一度、双眼鏡を覗きこんだ。ダイヤルを回して倍率を最大に上げる。

一キロほど南を流れる、旧江戸川と荒川を結ぶ新川を、何かが移動しているのだ。荒川側から移動してきたそれは、旧江戸川に入ると、そのまま川を下っていった。水の中を動いていたのだ、船などではあるまい。

車の無線機を弄ってみるが、今日はNジャマーの濃度が高いようだ。普段は雑音を我慢すれば使えるレベルの周波数帯も、全く音が聞こえない状態だった。彼は、車のモーターを始動させる。

目覚めると、腕の上に彼女はいなかった。だが。微かに残る腕の痺れは、彼女がつい先ほどまでそこで眠っていた事を教えてくれる。椅子にはバックが置いたままであった。キリルが服を着て部屋を出ると船内はまだ静かで、窓から見える薄明かりだけが夜明けの時間を告げている。

昨夜、部屋に行く前に夜景を眺めた船のデッキに足を向ける。マリアは、微かな潮風に髪を揺らしていた。昨夜のドレスではなく、彼女が着て来た地味な洋服姿。それでも、その後姿に昨日の感覚が生々しく蘇り、彼は言葉を飲み込んでしまう。

急に立ち止まったキリルが立てた音に気付き、彼女がゆつくりと振り向く。待っていたかのような微笑みで、おはようの挨拶をした。

挨拶を返すしか出来ない彼は、彼女の隣に立ち遠くを見つめる。朝日に照らされた都心のビル街が、靄の向こう側で幻のように立っている。船が波を切る音しか聞こえず、彼女の視線も遠くを向いたま

まだだった。キリルは聞いた。

「その・・・聞かないのか？」

彼は、彼女に何も説明していない。自分の正体も、このパーティーに出席した理由も、全て曖昧に伏せたままだった。その事が、あまりにも不誠実だと思ったのだ。

「男の人には、色々とあるのでしょ」

それは、どんな意味で言った言葉なのだろうか。ただキリルが感じた事は、彼女が「経験者」だという事だ。その瞳は、一体何人の男を見てきたのだろうか。彼は、彼女を抱き締めていた。

愛おしくて切なかった。この美しい人が、ただ美しいままでいられなかった事が悲しかった。そして、自分では手出しの出来ない彼女の過去が辛かった。彼女の声が、彼の名を呼ぶ。だが、口付けは許されなかった。

「何だっ!？」

海面から何かが飛び出た音と降り注ぐ海水の向こう側に、巨大な影が見える。マリアを庇うキリルは、自分達を見下ろすMSのカメラを睨みつける。

白を基調としたトリコロールに、広げられた六対の羽根。ガンダムと呼称される独特の頭部デザインを有したそのMSは、キリルも知っている物であった。東アジア軍部隊にゲリラ攻撃を仕掛けている、謎の動力源を有する正体不明機(アンノウン)。そのコクピット内で、ハニス・アマカシは涼しげに笑う。

エヴィデンスを持ち出した方がいいが、肝心のターゲットをどう探すうかと考えていたのだ。客船を解体しながらだと面倒だと思っていたが、まさかデツキに姿を現してくれるとは。幸運が重なるのは、日頃の行いの賜物だとうそぶく。

一緒にいた男が、女を守るような体勢で船内に逃げ込もうとする。ハニスは、エヴィデンスの指を弾いた。空気が音を立てる。

「キリル!!」

マリアの声で、辛うじて気を失わずに済んだ。突然の突風、いや空間全体が押し迫ってくるような力に吹き飛ばされて、デツキの手すり

に全身を打ちつけたのだ。立ち上がるキリルの前で、アンノウンはマリアをその手に掴んでいた。

大切なものをそっと手で包み込むような仕草でマリアを手の中に収めると、アンノウンは音も無く飛び去っていく。

キリルは吼え、そして駆け出していた。

失意、そんな単語が浮かんでルーイは苦笑する。大げさ過ぎるその単語が、見事に彼の思いを表現していたからだ。昨日、アメリカの勤める病院に顔を出したところ、午後から休暇を取ったというのだ。ただ一日会えなかったというだけで、気の落ち込みようが尋常ではなかった。

昨日は、さらにそれがはつきりと顔に出ていたのだろう。顔見知りになった看護婦にもその事を指摘された。

『休みの理由をはつきり言わなかったから、てつきり君とデートの約束でもしているのかと思っただけだ』

今まで、休みを取ること自体なかったそうで、しきりにその理由を気にしていた。そして試験に向けての準備でもあるのだろうかと言う。ルーイは、試験の事について聞いてみた。彼女に聞いても、あまり詳しい事は教えてくれないのだ。

経済のブロック化の名残で、現在でも国家間の労働者の移動には様々な制約がある。そこで、アメリカが使った研修生制度を利用すると、東アジアへの入国手続きが簡略化されるのだ。しかし正式な労働者として東アジア共和国で働くためには、その後に実施される試験に合格しなくてはならない。

それに合格しない限り、研修生待遇として東アジア共和国の労働規制の枠外扱いされるのだ。深夜業や残業が禁止される代わりに賃金は安く、また休日も少なく設定され社会保障制度の利用も出来ない。さらに解雇権も幅広く設定されているため、事実上の使い捨て労働力として利用されていた。

そのため、可能な限り試験合格者を減らすため、試験は非常に難易

度が高く設定されている。過去の問題は公表されるがその答えは公開されず、合否のみの発表で自分の得点すら公表されないのだ。

噂では、東アジア人であっても50点を取れない試験だというのに、合格ラインは85点以上なのだ。さらに、年に一度しかないその試験を受けなければ、不法滞在として強制送還される。そこでは病气や怪我といった事情は、一切考慮されないという。

『あんなに真面目で良い子、ちゃんとお給料払って働いてもらうべきよ』

その看護婦はそう憤る。そして、ユーラシアのテレビでそういうのを取り上げてもらえないかと言っていた。

ルーイはため息をついて電車に乗り込む。エルフリーデであれば、間違いなく食いつく話題であろう。だから、その事を話すのは止めにしておいた。

アメリカが今年の試験に臨むのであれば、それを見守っていよう。もしダメであれば、その時は自分が手を差し伸べよう。ユーラシアにも働き口はあるし、夫婦になれば入国も容易になるはずだ。

そんな考えに頬が緩むのを感じるが、朝早くの電車には人も少ない。営団地下鉄東西線の列車は荒川の鉄橋を渡っていた。窓を通る朝日が眩しい。

パイロットスーツも着ずにコクピットに乗り込む。シートとベルトを調整して、機体を始動させる。メインモニターが明るくなるまでの一瞬を、異常なほどに長く感じる。久しぶりのMS、しかもいきなりの実戦であるが、不安のようなものは全く感じない。そんな意識が入り込む隙間は全く無かった。

「ローレンス中尉、もう一度確認する。東アジア軍の動きがあれば、直ちに撤退だ」

「了解」

キリルは短く言って通信を切った。横たえられたMSはそのままの姿勢で、ハンガーごと横にスライドしていく。注水が開始され、各

部の自動チェックが始まった。グレートバリアリーフ号の側面、その海面下の一部が解放され、海中にMSを乗せた台がせり出していく。バラストタンクの一部を改造し、ザフトは密かにMSを運び込んでいたのだ。万が一の事態に備えたものであるが、まさか本当に使う事になるとはと、艦長はぼやいている。

だが、トウキョウで確認されている謎のMSはザフトも関心を寄せているものであり、その詳細なデータを回収できる千載一遇のチャンスなのだ。トウキョウは現在、広範囲にわたってNジャマーが濃く、東アジア軍もヨコスカの大西洋軍も探査能力が極限まで低下している。

目視情報から軍部隊の出動までの時間にアンノウンと接触できれば、その交戦データを入手できるだろう。ブリッジからサインが出され、キリルは発進を告げる

「キリル・ローレンス、ガルバルディ出る!!」

圧搾空気を使って海面から飛び出した濃い緑色のMSは、飛行用バックパックの翼を展開してスラスタを吹かせた。予想以上の加速に、キリルは気合を入れ直す。

現在のザフトの制式MSであるグレブは、ジン・シグー・ゲイツといったMMI系統の機体である。一つ前の制式機であったゲルググは、ザクに始まるニューミレニアムシリーズの機体であり、今キリルが乗っているガルバルディもその系統に属する。実質的な制式機のコンペティションであったペディオニーテ動乱時に、ガルバルディはロールアウトが間に合わず、そのまま採用に漏れるという結果になっていた。

バッテリー出力に対して機体重量が軽いという特徴から、コンペティション用に生産された機体は、地上基地で配備運用される事になっていた。グフ用の飛行パックを流用しても、空戦用MSに匹敵する能力を発揮できるのだ。

最大望遠のモニターがアンノウンを捉えた。手に人を乗せているからであろう、非常にゆっくりした速度で海面近くを飛んでいた。スラスタ飛行ではすぐに推進剤を失ってしまうような飛び方だ。キ

リルはペダルを踏み込む。

「追って来たか」

ハニスは熱紋センサーの音に、後方のモニターを見上げる。見慣れない機体だが、モノアイならばザフトのものであろう。ならば、あの船から追ってきたということだ。お姫様を攫った者として、追われるのは当然の義務だろうと思うが、状況はそれほどん気に構えていられるものではない。敵機の航続距離がザフトMSの平均値ならば、ツクバまで追ってくる可能性もある。

エヴィデンスの動力は、パイロットの精神活動が大きく関わるシテムであるため、コクピットにパイロット以外の人間を乗せられないのだ。彼女が、あの声の持ち主であっても、それは変わらない。

一旦、彼女を安全な場所に降ろしてから追っ手を撃墜して、戻りしかなさそうだ。地図を呼び出して鉄橋を見つけた。せつかくのお姫様に逃げられては、元も子もないのだから。

「すぐ、戻るからね」

スピーカーをオンして、ハニスはそう言った。鉄橋のトラスの上部、点検用のキャットウォークのようなものが近くにあるが、走って逃げられる場所ではない。ふわりと浮いたまま、エヴィデンスは向きを変える。

腕を振るったエヴィデンスの一撃を、敵MSは完全にかわした。ハニスは緩んでいた表情を引き締める。多少なりともこちらの事を知っている相手なのだろう。彼女がトラスの縁をしつかりと掴んだまま動かないのを確認して、ハニスは機体をあおった。

「はあっ!!」

キリルの気迫と共に、ビームサーベルが振り降ろされる。アンノウンがマリアを降ろした事は確認している。次にすべき事は、この鉄橋から敵を引き離す事だ。空を斬った勢いを無理やりに殺して、ガルバルデイの進行方向を曲げる。至近距離からシールドを構えての体当たりだったが、手ごたえを感じない。

だが、敵の機体に接触してはいえないとはいえ、押し返す事は出来ている。アンノウンの発生させた斥力より、ガルバルデイのスラスタ―推

力が勝つたのだ。キリルはシールドを傾けさせて、次の一撃を受け流す体勢を取る。案の定、強い斥力が襲ってきた。

押し付けてくるような力の流れにシールドを乗せるようにして機体を撥ね上げさせ、敵機の直上でビームライフルを構えた。だが、三連射したビームはどれもアンノウンを避けるような軌道で捻じ曲がり、川へと着弾する。キリルの目が鉄橋へと向いた。

十分に距離を保っている、そう思った瞬間にはシールドが引き裂かれていた。PS素材で出来た盾だが、まったく無関係のようだ。紙のように引き裂かれたシールドの断面に、キリルは冷たい汗を感じる。「流石はコーディネーター、つてところか・・・」

ハニスは、自分の苛立ちを宥めるようにそう言った。東アジアの雑魚ばかりを相手にしていたので、少々調子に乗っていたのかもしれない。ビームライフルとビームサーベルを構える敵の姿を、じつと見据えた。このまま推進剤が切れるまで睨み合おうなどとは考えない。

両手を交差に構え、背中の羽根を最大限に広げる。敵が先に動いた。その動きを見定めながら、次々と斥力を放っていく。狭い範囲に集中された力は、当たるだけでMSをへし折る力を持つ。ただ、どうにも射程距離が短いのだ。エヴィデンスを操り、距離を保って攻撃を仕掛けていく。

敵の反撃は全て弾けばいい、ハニスは意識を攻撃に集中させた。わざと敵機をサーベルの間合いにまで誘い込み、放った斥力でその腕をもぎ取る。怯む素振りを見せない敵は、そのままの距離でビームライフルを連射した。

「無駄だあ!!」

機体周囲に張り巡らせた斥力の壁は、ビームのエネルギーでは突破の出来ない値に設定してある。そして別次元から引き出されるその力に、エネルギー切れは存在しない。苦し紛れに投げつけられた半壊したシールドを、空中で空き缶のように圧縮して潰して見せる。

一枚の羽根から放たれた斥力が敵の脚を引き千切った。ハニスは勝利を確信してエヴィデンスの手を突き出させる。

「!?」

アンノウンの挙動に、キリルは死を予感した。モニターに映る周囲の様子がやけにゆっくり見える。しかし彼は、マリアの顔を思い出す時間がある事に気づき、まだ死んでいない事を確認する。圧倒的だったはずの敵に、動揺が見えた。左の手足を失い、バランスの極端に悪くなった機体を制御してビームライフルを撃つ。

やはり攻撃は当たらないが、敵が反撃に移らない。それも、こちらを誘っての動きではない。キリルは猛然と仕掛ける。パツクに残ったエネルギーの全てをつぎ込んでビームライフルを叩き込み、情けない形に曲がってしまうビームサーベルで何度も切りつける。

ハンドグレネードの黒煙が、アンノウンを包み込む。それでもなお、敵は動きを見せなかった。そのコクピットの中で、ハニスがパネルを殴りつけている。

「どういう事だ!?!」

突如としてSEEDコンバーターの出力が不安定になったのだ。機体の制御や防御を優先しているが、攻撃への転用が出来ないでいる。防衛用斥力も時折弱くなり、ビームで撃ち抜かれる可能性も出てきた。

何より、このままでは機体を空中に留めて置く事が出来ない。SEEDコンバーターによる機動のみであるため、それが使えなくなれば墜落するのだ。ハニスはモニターを睨む。鉄橋はいつの間にか遠くなくなってしまった。

砕けんばかり力で奥歯を噛み締め、女を諦める。SEEDコンバーターの力を全て推力に振り分けると、エヴィデンスは一気に上空高く飛び上がっていった。ツクバで原因の究明を図らなくてはならない。

突然の事態に、キリルは全身の力が抜けていくのを感じる。バツテリーも推進剤もギリギリであり、全てのアラームが悲鳴を上げている。だが、アラームの一つは次の敵の接近を告げるものであった。

「東アジア軍か・・・」

モニターが捉えたのは、ジェットストライカーをつけたダガータイプが三機。ここまでだった。

キリルはコクピットの中でマリアの名を叫ぶ。

ガルバルデイの頭部のときか状のユニットから、熱紋センサー阻害効果を持つ特殊な煙幕が噴射された。同じ煙幕を張るロケット弾も発射され、江戸川の空の一角は黒い煙に覆われる。

報告者を下がらせて、ブラインドを上げる。朝のシブヤはもう動いていた。普段通りのトウキョウが、今日も始まる。その様子は、旧世紀の東京と何ら変わるところがないように見える。だがそれこそが欺瞞なのだ。

東アジア共和国という幻想の中に、あやふやに存在する日本自治区。その中心に穿たれた閉鎖都市トウキョウ。そこは、日本人特別居留区というゲットーを抱え、オーブ租借地という租界を寄生させ、身分証確認ゲートと各種の監視システムで分断されている醜悪な街である。そしてそれを隠蔽するために、全ての情報は当局によつて脚色されているのだ。

しかし、それももはや限界である。戦争という外の出来事が消えた今、人々の目は確実に内へと向けられている。そして、この街の醜さに気付いた人々は「東京」を再発見するのだ。

「それは日本を再び見つけることでもある」

トウキョウを見下ろすリ・ウエンはそうつぶやく。既に、東アジア軍の動きは日本軍へと伝えてある。日本独立に向けた第一幕を上げるのは、ペキンの傲慢さである。旧世紀から変わらない自己を中心にする物事を考える事しか出来ない思想は、ここから崩れていくのだ。

秘書兼ボディーガードの女性が差し出した茶を口に含み、ウエンはゆっくりとソファに腰を下ろした。チャイナドレスのスリットから見える白い脚に、小さな赤い斑点がいくつか付いている。それを指摘すると、女性は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

おそらく、昨夜の立ち回りで付いた返り血であろう。

結び上げられた髪を乱す事無く侵入者を撃退する彼女らにとって、返り血が付くなどという事は恥以外の何物でもない。

だが、確かに自分を標的とした襲撃が、増えている事は感じる。たいていは事前に情報を掴んでそれを避けるのであるが、たまに彼女らが直接手を下さなくてはならない事も生じる。襲撃者は、善隣幫と敵対する幫であったり、菱丘組の中にいる提携に不満を持つ者達であったり、東アジア軍であったりだ。

特に、軍の動きには注視していた。自分に目をつけて直接的な行動を行うなど、なかなかの慧眼の持ち主がいるものである。幫の幹部は、シブヤではなく本拠地であるヨコハマで指示を行えば済むと言う者が多くいるが、それではトウキョウの空気を感じられない。

今回の計画は、その空気を直接感じ、その空気により、そしてその空気を導いていく事が何よりも重要な事なのだ。だから彼は、ハーモナイズコミュニケーションの動きが気がかりであった。

彼らもまた、空気の流れを作り出そうとしている。いや、プラントから来たというアイドルは、確実に空気の流れを作り出したのでは無いただろうか。今のところ、その流れは自分の計画を阻害するものではない。だが彼らの目的は、どうにも不明確なのだ。

彼らの情報力は侮れず、今は是々非々の協力関係をとっているが、それもいつまで続くかというところであろう。

「タチバナ先生は、学園祭と評していたが・・・」

彼らは、際立った政治的意図を持つのではなく、不明確な「何か」のために明確な行動が取れてしまう集団だと言っていた。昨夜のパティーに出席した者からの報告も上がってきてはいるが、めぼしい情報は見当たらなかった。

電車は妙典の駅で止まった。車内アナウンスは要領を得ないが、周囲から聞こえる話によれば、テロか何かだろうという。乗客は、その駅で有無を言わずに降ろされた。ルーイは改札を出て、路線図を見上げる。

とりあえず西船に行くには、南を走る京葉線に乗った方がいいのだが、最寄りの市川塩浜まで行く方法が分からない。まだバスには慣れ

ていなかった。その上、京葉線も電車を止めているかもしれない。

「南行徳から一之江まで、直通の臨時バスを運行します」

スピーカーを持った駅員が大声で言っている。西船に行かずとも、都営新宿線で京成八幡まで行けば同じ事だ。都営新宿線は動いているらしい。問題は、営団地下鉄東西線が南行徳での折り返し運転になったため、妙典から南行徳までは結局、電車以外の方法で行かなくてはならないのだ。

人の流れに乗るようにしてルイーも動く。どの道、自分と同じような人達であろう。バス停らしき場所が長蛇の列だったので、彼は少し外れてコンビニエンスストアを探す。買った缶コーヒーを傾けながら、時計を見た。早くに出て正解だったと思う。

店先のゴミ箱に空き缶を捨て、バス停の方に戻ろうとする。ルイは思いがけない人に、声をかける。

「アメリカ？ どうしたの？」

声を掛けられた彼女も驚いた顔をしていた。いつものように控えめな服装だが、髪は大きく乱れ、両手の平を真つ黒に汚していた。そして何より、疲れきったような顔をしている。

彼女は辛うじてといった感じの微笑みを見せると、コンビニのトイレに入った。少し落ち着いた顔をして出てきた彼女は、大きく息をついた。そして、ルイに身分証と小銭を貸して欲しいと言う。

財布でも落としたのかと聞くと、マリアは苦笑した。そしてコンビニの脇に置いてある電話ボックスに向う。公衆電話を使用するにも、身分証が必要なのだ。彼女はルイに何度も礼を言う。

「お財布を忘れた場所に電話したら、届けてくれるって。身分証が無いと、動けないから」

ルイは彼女と一緒に待つと言った。仕事ではないのかと聞くマリアから、少し視線を逸らした。彼は、彼女に会うために孤児院に向っていたのだ。彼女に会えた以上、急ぐ理由は何もない。

二人は、コンビニの休憩スペースに腰を据える。昼近くになってようやく、彼女のバッグが届けられた。社用車らしい地味な車から降りてきたスーツの男が、丁寧な仕草でマリアにバッグを手渡すのを、コ

ンビニの窓越しに見つめる。

昨日は、こちらで知り合った女性の友人と都心のホテルでディナーと一泊だったそうだ。ルーイは、その言葉に心底安心していた。

プラントから来たアイドルとやらは、思いがけない収益を生んでくれた。東アジア軍による傘下組織への襲撃以来、資金獲得に大きな支障をきたしていた凌雲会としては、コンサートさまさまであった。こういった興行事に、警備スタッフや設営スタッフの派遣、それらスタッフへの仕出し業務など、様々な関係者を割り込ませるのは、マフィアの古典的なやり口であった。

そういった古いやり方は好きではないのだが、えり好みをしていられる余裕も無かった。現にその収益が無ければ、このチャンス逃してしまふところであった。コウキ・ヨシオカは、収益の報告書をテーブルに投げ出し、次の指示を出す。

このところ日本人特別居留区の動きが活発であり、特に日本軍の関する物資が大量に発注されているのだ。利幅の大きな銃器、弾丸類の注文も多く、その手配に多くの人員を割いていた。

「デカイテロでもおっぱじめる気が、連中・・・」

葉巻に火をつけて煙をくゆらせる。味など分からないが、こういう小道具こそ、ハツタリとして効果的である事は、よく知っていた。

浅草寺の傍に立つビルの最上階。凌雲会の本部事務所のオフィスから、隅田川の方に視線を向けた。直線距離にして500mほどで日本人特別居留区である。少し目を凝らせば、瓦礫とバラックの立ち並び荒れ果てた街並みが見えるのだ。だが、感じるものは特に無い。

東アジア軍の武装警察が入ってきてから、隅田川と荒川の境界線警備は厳しくなった。物資も支払い代金もその輸送は渡河が主であるため、仕事はやりにくい。タマユラ地区との境にある分離壁の下を通じるトンネルの利用も考慮には入っているのだが、民間のトンネルはその使用料がネックであった。

結局は警備の目を掻い潜るしかないのだが、予想外に摘発件数が少

ないのは、保安局が都心の警備から外された影響であろう。東アジア軍ではアングラの情報も入手困難なのだ。

「あとは、サクラの旦那の頼み事か・・・」

コウキは腕を組んで、天井を見る。刑事部や暴対でもないのに、何かと情報収集をしているシユウ・サクラから、人の確認を頼まれていた。ブンジ・タチバナの邸宅を訪れた人間の隠し撮り写真を手に取る。

その人物は、極星会の会長で間違いが無かった。菱丘組の関連団体の一つであるが、普通のマフィアとは少し系統の異なる組織である。「的屋のジジイが、何だって・・・それも親父を通さずにと来たもんだ」複数のマフィア組織の連合体である菱丘組では、各組織のトップの動向を組長であるユウゾウ・カトウに報告する事となっている。だが写真の日時に、極星会の会長がタチバナ邸を訪れたという報告は上がっていないはずだ。要人との面会は、もつとも重要な報告事項のはずだ。

シユウには、聞かれた事だけ回答しておく事にした。この情報がどのような意味をもち、どのような展開を導くのか。この情報にいち早くアクセスできたアドバンテージは、生かさなくてはならない。

体のあちこちが痛いのは、小さなソファで寝たからだ。せつかく借りたフォーマルも皺だらけになっている。エリックはアキハバラの雑居ビルで眼を覚ましていた。コーヒーを出してくれたのは、事務所に出勤してきた無口な男だった。ジユンコはもう少ししたら出てくるとだけ言った。

昨夜、彼女を家まで送った後、彼女の部屋に上げてもらう事は許さず、この事務所で一晚を明かしたのだ。コーヒーは苦く、朝日は眩しかった。

「よく眠れた?」

「・・・それを今聞きますか?」

事務所のドアが開き、ジユンコが入ってくる。普段通りの彼女に、

恨みがましい視線を向けた。嫁入り前の女は、自分の部屋に男を入れないがこの国のルールだとうそぶいた彼女は、デスクのパソコンをつける。都内交通機関の運行情報が映し出された。

江戸川の河口近くで何かがあったらしく、電車が止まっていた。何があつたかは公式発表されないうだ。ジュンコは別の画面を開いた。ネットの掲示板のような画面には、次々と情報が書き込まれている。

江戸川上空でMS戦が行われたようだ。ブレまくりであるが、一部には画像も貼り付けられている。ジュンコはエリックの表情に、思い当たる節があるのだろうと推測する。彼はつぶやくように聞く。

「これは、生って奴ですか？」

ジュンコは頷き、別の画面を写す。オーブ政府の公式ホームページであつた。普通、トウキョウではアクセスできないものだ。彼女が投げてよこしたメモリーチップには、当局による情報のブロックを回避するためのプログラムが収められている。

グレートバリアリーフ号にはレーザー通信衛星との回線があるが、天候によっては使い物にならず、このプログラムはありがたかつた。だがエリックの言う生という言葉を、ジュンコは笑う。

「その情報が正しいという事は、誰が判断するの？」

そもそも生だの冷凍だの言うのは隠語であり、当局の検閲を通じていないかいるかの違いでしかない。その言葉が情報の『正しさ』を保障するものでは無いのだ。彼女は、画面を指差し、この情報は冷凍ではないが加工品だといった。

このプログラムが作られた場所はイケブクロである。ハーモナイズコミュニティのトウキョウでの活動拠点がある場所だ。アキハバラの関係者にとって、このプログラムの胡散臭さは当初からささやかれていたと言う。それがトウキョウ中に知れ渡らないのは、ひとえにオタクネットワークの狭さであろう。

特別行政府が、自分達にとって都合の悪い情報を削除して流通させるように、ハーモナイズコミュニティは自分達にとって都合の良い情報を選別して流通させる。エリックが手にしているのは、そのための

プログラムなのだ。

「そうでなきや、あんな歌手が空前の人気を持ち得るはずがないわ」
昨日のパーティーを思い出しながら、エリックは半分納得する。個人的には嫌いな歌手ではない。だが、そういった個人的な感想が問題なのではない。彼は、このプログラムが一般に出回りだした時期を聞く。

何らかの意図をもってこのプログラムを配布したのであれば、周到な準備を整えているという事であろう。いよいよ、日本軍など瑣末な問題に過ぎなくなってきたようだ。

エリックは立ち上がり、一夜の宿の礼を言う。礼には及ばないと涼しげに言うジユンコに、その通りだと言い返しておいた。

第十四話 投げかける想い

マリアの無事はグレートバリアリーフ号に伝えられていた。彼女から直接電話があったのだという。胸を撫で下ろす間もなく駆け出そうとするキリルを、艦長が呼び止めた。トウキョウ上空でのMS戦闘である。その当事者は、当然様々な手続きを踏まなくてはならない。

今回の出撃はアンノウンのデータ収集が目的であり、パイロットの持つ数値化のできないコクピットでの感覚も貴重な情報なのだ。ガルバルディは、もはやこの船では修理の出来ないレベルの損傷を受けている。その元を取らなくては、出撃させた意味がないであろう。

苛立つキリルの顔に、艦長はしかめっ面を作った。ブリッジクルーの一人が、そつとメモを渡してくれる。

「あんまり、派手に遊ぶなよ」

そう耳打ちしたクルーはキリルをブリッジから追い出す。メモには、電話番号が書かれていた。店の番号ではなく、彼女の自宅の番号だ。

嬉々として取り掛かった報告書が完成する頃に、エリックも船へと戻ってくる。皺だらけのスーツを着替えると、すぐさま調べ物を始めた。彼にすればずいぶんと真面目な態度だ。

エリックは報告書を提出し終えたキリルに、タマユラ地区へ出向くように頼んだ。トウキョウに入り込んでいる可能性のある傭兵の件について、シユバルベ工業の社員と接触して欲しいのだという。アポイントはすでに取ってあるそうだ。

「正直、そういうのがどれほど重要か分からなくなってきたんだけどな・・・」

だからこそ、少しでも判断材料は多い方がいい。エリックの真剣な様子に、キリルは気を引き締めた。

タマユラ地区で出会ったタルハ・アンワール・ガニーとユンディ・ミナカミ。建設用重機を扱う会社に勤めているという二人には、こちらの身分の一端を明かしている。彼らは自社製品が大量にタマユラ

地区に運び込まれた事に疑問を感じているようで、こちらの示唆した傭兵の件についても興味を示していた。

キリルはエリックから、メモリーチップを受け取る。情報を一方的に提供してもらおう事は出来ない。ギブアンドテイクが基本なのだ。チップの中身は、ジュンコ・ヤオイからもらったプログラムである。

待ち合わせの場所と時間をエリックに確認して、キリルは身支度を始めた。タマユラ地区までの電車の運行は問題ないようだが、都心への武装警察投入と平行して、身分証確認ゲートのセキュリティが強化されたという噂があった。普段使っている偽造の身分証ではなく、正規の身分証を借りる。そのために余計な書類を書かされるが、そこを怠る事だけは出来ないのだ。

高くなつた太陽を見上げ、タクシー乗り場に立つ。キリルは小さくため息をついた。早朝からばたついた一日である。彼は電話ボックスを探したが、あいにく近くには無かった。

江戸川上空で戦闘行為が行われていたらしいと、タクシー乗り場に並んでいる時に聞いた。特別行政府はそのような情報を流さないようにしているという話だが、トウキョウの住人は何でも知っていた。都営新宿線は江戸川の下を通っているので、通常運行が続けられており、ルーイとアメリカは、そちらの駅へと向った。

孤児院の方に顔を出してから家に帰るつもりだという彼女について、彼も孤児院に向う事にした。病院を訪ねて無駄足を踏んだ話を話すと、丁寧に謝ってくれる。ルーイは笑った。

「いいって、そんな事。でも、安心した」

「何？」

「友達と遊びに行くとか、結構普通の生活しているんだなって」

看護婦として昼間働いているだけではなく、夜もアルバイトをしていると聞いていたし、試験勉強もなかなか大変そうだ。祖国の母親に仕送りをしながらの生活は、それほど簡単なものでは無いだろう。

だから、そうやって遊びに行く余裕を持っているという事に安心す

るのだ。視線を窓に向けている彼女の横顔と、ガラスに映る彼女の顔を見つめた。

満員の車内では、どうしても互いに体を寄せ合わなくてはならない。ルーイは、彼女を背中から抱き締めた。ガラスの中の彼女が、ほんの少しだけ顔をほころばせた。その事に深い満足を覚えながら、ルーイは電車の揺れに身を委ねる。

二人は、幾度かの乗り継ぎをしてようやく孤児院に着く。子供達は丁度昼寝の時間らしく、黒いスーツに白いエプロンをつけた屈強な職員が、テキパキと掃除をしたり洗濯物を畳んだりしていた。ダルウィーシユ・ダルが、二人を台所に通してくれる。院長は来客中だそうだ。

「それほど長くはかからないかと思えます」

そう言ってダルは仕事に戻った。ルーイは、アメリカがこの孤児院に関わるようになった理由を尋ねてみる。日本人特別居留区への支援なども行っている団体であり、単なる慈善団体とは言いがたい組織だ。もつとも、その裏を何らかの組織がバックアップしているという話もないようなのだが。

アメリカは微笑んで、ただの偶然だと言った。寄付金集めのために病院に訪れた事があり、その時にたまたま知ったのだという。

「子供は好きだし、ピアノもあるし・・・」

彼女の視線が動いたので、彼はその方に振り返った。院長が来客に院内を案内するため、応接室から出てきたのだ。ルーイは表情を固める。

「アメリカさんに、キリロフ君も来ていたのね。こちら、ルポライターのエルフリーデ・シーハンさん」

丁寧にお辞儀をするアメリカを横目に見ながら、ルーイは会釈だけをする。ゆっくりしていつてねと言う院長に、アメリカは挨拶に寄つただけだからと言った。また手伝いに来ますと言って、その場を辞する彼女について彼も帰ろうとする。

だがルーイは、エルフリーデに呼び止められた。

基地内の慌しさは異常であった。作戦開始の日の早朝から、トウキョウ上空でアンノウン同士の戦闘が行われたのだ、殺気立つ雰囲気も理解できるというものだろう。ヒューはギブスが取れた部分をさすりながら、ヨコタの滑走路を眺めている。今回の作戦には不参加なのだ。

今夜22時に作戦は開始され、日本人特別居留区に対してMSだけで20機が投入される事になっていた。さらにヨコスカの大西洋軍を牽制するために空母一隻と複数の艦艇が浦賀水道に展開、多摩川と利根川にも部隊を配備しトウキョウ特別行政区に対して越境攻撃を行う日本自治区内の反政府勢力に睨みを利かせる。タマユラ地区に対しても、武装警察を中心とした部隊を送る事になっている。

特別行政区の発足以来、日本人特別居留区に対する攻撃は幾度となく行われているが、この規模は異例である。東アジア共和国内部の、再・再構築派に対する一種の恫喝であった。

「逆行してるっての……」

ヒューは走り回る職員の邪魔にならないよう、食堂の隅で新聞を広げていた。当局の手が入った新聞は、どうにも面白みが欠ける。情報統制など、戦時下の遺物でしかない。大西洋やユーラシアでは、既にそういった戦時の情報統制関連の法律は廃止されている。そして、これらの国が再・再構築を仕掛けている事とは、密接な関係がある。

プラントという独立国の存在と、二度の戦争で見せ付けられたコーデイネーターの性能は、連合に隠然たる脅威を与えている。それに対抗するためには、連合が現在のような国家の寄り合い所帯では駄目なのだ。プラントとの外交窓口を一本化し、軍事行動も連合が統括する。そのためには各国が個別に有しているその権限を、連合に委譲していかななくてはならない。しかしそれ以外の各国各地の個別の政策に、連合が口を挟む必要性は無かった。

それは連合を構成する各国の内部でも同じ事である。再構築戦争で生まれた国家はそもそも無理があり、プラントとの戦争状態が無くなれば、その無理を正そうとする動きが現れるのは必然である。情

報統制や軍事的抑圧は、それに油を注ぐだけなのだ。大西洋やユーラシアは、自国内における自治や分権の要求を幅広く認めつつ、軍事や外交、金融・通貨政策などは中央集権化を進めていた。分権と集権は、常にバーターで行われている。

「それが分かかってねえんだよなあ」

中央政府が統括すべき事案とそうではない事案を区別できず、全てを中央政府が決定し遂行しようという発想は、今後の世界戦略を欠いた思考と言わざるを得ない。しかもそれを強権的な手法で行うなど、旧世紀の発想だ。シャンハイは、再・再構築に理解を示しているという話だが、今は完全にペキン抑えられているという話だった。

新聞を閉じたヒューは冷めた茶を流し込み、席を立つ。作戦には参加しないと断つても、仕事がないわけではないのだ。彼は別の顔も持っているのだから。

イケブクロも、かつてはオタク文化の主要な発信拠点だった時代がある。アキハバラのように分かりやすい外見ではなかったが、そことは異なった趣向のコンテンツが集まる場所であった。今ではそのような文化も廃れ、ごく普通のオフィス街という外見をしているが、当時の面影を残す場所もいくつか存在している。

ハーモナイズコミュニティのトウキョウ事務所が入っているビルは、そんな場所の一つであった。階段の壁に貼られているポスターや、窓から見えるように貼られている絵は、男性だか女性だか良く分からないキャラクターのものばかりである。

当局の目は、こんな簡単なものでもくらませる事ができるのだ。

「その誤魔化しも、そろそろヤバいかもよ」

「君の場合は、れっきとした趣味だろう？」

事務所に集まっている数名の男女が、そんな話をしている。全員、ラフないでたちの若者だ。ややエキセントリックな服装は、おそらくブランドのものであろう。

規制を回避してネットに接続するための違法プログラムの仲介人

が、何人が捕まっているという情報が入ったのだ。プログラム自体は当局の手に渡っていないという話だが、油断は出来なかった。

だが今夜の時点で、とりあえずそのプログラムは一つの重大な使命を終える事になる。そのための準備は万全に整っていた。一人がその事を報告する。

「機材や人員は、善隣幫の全面的なバックアップのお陰で、滞りなくそろった。予算なんか余っちゃったよ」

「その点は感謝だな・・・で、どうなの？ その、リッて人」

全員の表情に困惑が浮かんだ。善隣幫の首領にして財界の重鎮であるリ・ウエン。彼の組織とは一応の協力関係にあるのだが、互いの理念は一致しているとは言いがたい。彼らにしてみれば、ウエンの発想は「古い」のだ。

だがそれだけに、彼が何をどこまで考えているかが読めない。下手をすれば利用されるだけで終わるのではないかとも危惧している。

「あのお爺さんが融和と共存を理解してるとも思えないけど・・・」

「ま、俺らは俺らでそれを表現するさ。老人の思想なんて関係ない」

彼らはパソコンの画面に視線を移した。江戸川の鉄橋が通過できるようになり、鉄道の運行が正常化する見込みだというニュースが流れている。一人が思い出したように言った。

「ハニスから連絡あったか？」

「何か失敗したって」

「・・・あいつ、先走りし過ぎ。今はまだ必要ないだろ、声はさ」

彼らがトウキョウで目指している事は、自分達が発信する情報で社会的なうねりを作り出す事である。融和と共存、その思想を言葉ではなく、もっと別の形で表現し発信しそしてムーブメントを起こすのだ。

人の進化と革新は、その更に先にある事であり、声はその時になつてようやく必要とされるものである。彼らはいくつかの打ち合わせの後、解散となった。

玄関先までアメリを見送りに出たキリルは、手持ち無沙汰に応接間に足を向けた。エルフリーデは、院長に施設内部を見せてもらっているようだ。彼女が自分を呼び止めた理由は定かでは無いが、どの道彼にとつて面白い話では無いだろう。少し冷めた紅茶を、ぼんやりとかき混ぜる。

嫌いなのではない、ただ苦手なのだ。命の恩人の一人であり、小さな頃から世話になっている人だ。その仕事は尊敬に値するものであろうし、見習うべき人なのであろう。でも、苦手だった。

最近、関わりにならないように心がけていたのだが、まさか地球の裏側で出会うとは予想外にも程がある。彼女の活動を考えれば、トウキョウの現状に興味を持つだろう事は分かるが、実際に出会う確率など低くて当然だ。

「ゴメンね、ルーイクくん」

声に振り返ると、ピンクのヘアバンドとそれが不必要なほど短い髪をした女性が入ってくる。ルーイの母親が若い頃、同じようなヘアバンドをしていたのだと聞いた事があった。

待たせた事を謝りながら、エルフリーデは向かいのソファに腰を掛けた。そしてバッグの中から手紙を取り出す。母親からのものだった。トウキョウで彼に会った事をたまたま伝えたら、彼女宛に届いたのだと言う。内容は、読まなくても分かる。ただ、息子の身を案じるだけの親からの手紙だ。

用事はこれだけかと聞こうとする彼の機先を制するように、エルフリーデが口を開く。

「あの人は、ルーイクくんの彼女？」

「え・・・」

立つタイミングを削ぐような質問に、ルーイは視線をそらせた。否定するのも白々しいが、肯定するのも勇気がある。穏やかに微笑むエルフリーデは、まるで母親のようだ。ルーイは唇を噛む。

大きくなつたとか、もう結婚を考える年になったのかとか、そんな他愛のない感慨を語るエルフリーデの様子が腹立たしい。そんな風に、自分に構って欲しくないのだ。

「メイファンさんには連絡しているの？ 何か心配して・・・」
「俺の事はどうでもいいだろ!!」

エルフリーデが驚いて手を止めたのを見た。彼女はそつとティーカップを降ろして、ルーイを見つめる。ルーイは何故か震えている声でまくし立てた。

「何で、いつもいつも俺の事ばかりなんだよ！ エル姉の方がよっぽど危ない事してるんだろ！ 考えるならまずそつちだろ！ クルトさんやロルフくんもいるんだろ、だったらまず自分の事考えろよ!! お袋も親父もそうだ、いつも俺の事俺の事・・・自分達が一番辛いんじゃないかよ！ それをまず考えてくれよ！ 俺の事なんか、その後でいいから・・・!!」

母が書齋で、父にすがって泣いていたのを見た事がある。エルフリーデと母が、夜中激しく口論をしていたのを聞いた事がある。彼女らが、どんな仕事に携わっているのか、それを理解する前から、彼女は彼女らがどのような仕事をしているか知っていた。

それでも彼女らは、それを彼の前では見せなかった。ただ精一杯、親として大人として、彼を慈しんでくれた。一欠の苦労も、一滴の不幸も、彼に負わせまいとしてくれていた。

だが彼が望んでいたのは、自分の事ではない。母が、父が、ただ普通に幸せであつて欲しかったのだ。自分自身の幸福を、子供に捧げるような生き方など、望んでいなかった。

目を拭ってエルフリーデを睨む。ルーイは見つめ返してくる彼女の瞳に気圧された。彼女がゆつくりと口を開く。

「ルーイくんは、知ってるよね。私が・・・愛した人の事」
それを永遠に失ってしまう悲しみを、彼に味わって欲しくは無いと言う。

戦争がそれを引き起こすのであれば、それに抗する。貧困がそれを引き起こすのであれば、それに抗する。抑圧がそれを引き起こすのであれば、それに抗する。無知がそれを引き起こすのであれば、それに抗する。そのために、この職業を選んだのだと彼女は言う。

彼女の身に降りかかった不幸は、もはや取り返せない過去の事であ

る。だが彼の、彼らの世代に降りかかる不幸は、それを防ぐ事も減じる事も出来るはずだと。だから、この職業を選んだのだと言う。

彼女の目は静かに澄んでいる。悲しみや憎しみや、そういった個人的な感情を、世界に対する憤りへと昇華させたような瞳。その瞳は焼けつくように世界を射抜きながら、決して世界を燃やし尽くさない。

ルイーは逃げるように視線を逸らす。母が時折見せるそんな瞳が、怖くてならなかった。その瞳が、母を飲み込んでしまうのではないかと、恐れていた。

「違う・・・違うんだって・・・」

彼は言葉を探す。彼が望むのはもっと単純な事だ。それなのに、言葉が見つからない。その視線を拒否する言葉が分からない。奥歯を噛み締めて沈黙に耐えた。

磁器の触れ合う音が、沈黙を揺らめかせた。エルフリーデがカップに口を付けている。紅茶を飲み干した彼女は、少し寂しげな微笑を残して席を立った。応接室のドアの向こうから、彼女が院長に挨拶をしている声が聞こえる。残されたまま、ルイーは視線を上げる事が出来ない。

不意に、アメリの事を想う。彼女の穏やかな微笑みに、彼は自分が惹かれる理由が分かった気がした。彼は彼女の幸福を願い、彼女はただ、それをそのまま受け止めてくれるのだ。

彼が望むのは、きつとそういう事なのだ。

これ以上の遅延は許されず、エヴィデンスはアツザムのMS搭載スペースへと収容される。数名のスタッフが、作戦行動中のアツザムの中で機体の調整を続ける事となっていた。

ミラージュコロイド装備とは言うものの、コロイドの剥離しやすい大気圏内での運用であり、周囲の風景が変化に富んでいるため、肉眼による発見は想定以上に容易なのだ。夜陰に乗じて特別行政区内へと移動するためには、そろそろツクバを出なくてはならない時間である。

「機体そのものの問題は無いのだろう」

格納庫の天井が開き、アツザムがゆっくりと上昇していく。四本の脚を生やした不恰好な栗のような姿が宙に浮いている様子は、なかなかシユールなものだ。チン・ヤンチャンは、傍らにいる疲れた顔の男に尋ねた。

ギリギリまでエヴィデンスを調査していたミツネ・ササは、黙って頷く。突如として発生したSEEDコンバーターの不調は、その原因が分からないままなのだ。少なくとも、機械的な問題では無いだろうというのが、現時点までに分かっている事である。

「そうすると、パイロットの問題か・・・」

「ですがコクピットのレコーダーには、これといった変化がなく」

SEED現象の発現に伴う、生理学的変化やSEEDコンバーターへの作用を記録するために設置されている装置を解析しても、通常と変わらない数値しか出てこないのだ。

もともと、その全容のほとんどが謎の現象を使用した装置であり、発生した不具合に対してその場で処方箋を出せるはずもない。だが、エヴィデンスは単なる実験機材ではなく、実戦で運用する兵器なのだ。原因不明の不調など、兵器にとっては致命的な欠陥であろう。

それを理由に出撃を拒否できないのが、彼らの立場の弱さであった。ヤンチャンにとっては慣れた事であるが、ミツネの表情は苦渋に満ちている。ただ、パイロットの士気は至って旺盛であり、その点の心配はなさそうであった。

ヤンチャンはもう一度、各種のデータに目を通してみる。順調な実験結果の中での発見は少ないものなのだ。実験の不調の中に理論の真髄が隠れている事は、よくある話だ。気になった点をいくつか箇条書きのメモにしておいた。

「・・・これは、ハニスの数値ではないな」

「それは、ノイズを除去する前のデー・・・ノイズ？」

ミツネも同じ事を思いついたようだ。ノイズとして処理したものの中に、ノイズではないものが混ざっていた可能性がある。

もしそれがハニス自身が持つノイズであれば、これまでも検出され

ているだろう。しかし、それがハニス自身のノイズではなかったとすれば、SEEDコンバーターに外部から干渉が加えられた可能性が出てくるのだ。

猛然とデータの精査を始めたミツネから目を離し、ヤンチャンは椅子を回す。ブラインドの角度を変えて、外が見えるようにする。日がようやく傾きだした。

報央社の各オフィスは、張り詰めた緊張の中にある。軍による日本人特別居留区での大規模軍事作戦。それに関する報道を取り仕切るのが、報央社の役割である。

東アジアの国営通信社である報央社は、当局の実行部隊として報道管制や情報統制を行ったり、メディアである事を利用した情報収集活動を行ったりしている。縦割りの著しい国家機関から、名目とはいえ独立している報央社は、様々なセクシヨンの人間が入り乱れて活動している唯一の場所である。

ユ・ケティンも同僚達と同様に、この作戦に危惧を抱いていた。「作戦実行までが遅すぎるんだ」

緊張の糸を緩めようとする者達が、自動販売機の前でたむろしている。ケティンは砂糖少なめミルク多めコーヒー濃いめのボタンを押した。同僚の話の聞くと、皆同じ事を考えているようだ。

だが、彼がそれ以上に気になるのは、その遅すぎる作戦に対して、日本軍からの積極的な動きが見えない事だ。確かに都心部では、幾度かの爆破テロやその未遂、ロケット弾による攻撃などが起こってはいた。

しかしそれは従来活動の延長であり、いわばルーチンワークのようなものだ。軍の作戦情報が一切外部に漏れていないため日本軍も動きようがない、などと考える楽天家はペキンにしかないであろう。アンノウンによる幾度かの襲撃は、軍の情報が漏れ出ている事の証拠である。

情報の漏洩すら前提条件として盛り込んだ上での作戦にはなつて

いるはずなのだが、それにしても敵の動きのなさが不気味だった。「動きがあるのは、それ以外の場所ばかりだ」

紙コップを投げ捨てた同僚がそう吐き捨てた。アングラ勢力を中心に、色々動いている事は、ケティンも掴んでいる。さらには特別行政区の保安局まで、不穏な動きを見せ始めているという。

特に武装警察を都心に投入してから、保安局との軋轢は日に日に増えていると感じた。ケティン指揮による二度目のタチバナ邸襲撃も、保安局が事前に動いた事で中止に追い込まれていた。もつともあちらにすれば、職務を遂行しただけと言うだろう。

既に、都内各所でも部隊配備は終わり、日本人特別居留区攻撃と呼応するように、特別行政区内に潜伏する反東アジア分子の摘発を行う手はずとなっていた。上層部は取り合わないが、間違いなく保安局との交戦になるだろう。ケティンは、ため息をコーヒーで押し流す。

きつと想定外の事が起こる、それだけは確実に予測できた。それに適切な対処を施さなければ、東アジアに未来は無い。東アジアの主権と独立を守るためにも、分離主義者は排除されなくてはならないのだ。

コーヒーを飲み終えた者は、次々と持ち場へ散っていく。皆、報央社の記者という表の顔以外の顔を持つ者達だ。

日が西に傾いている。部屋が西日の色に変わり、ブラインドが下ろされる。コーヒーのおかわりを頼みながら、キリルは資料に目を通し終えた。東南アジアを中心に活動していた民間軍事企業のメンバーが、タマユラ地区に入っている事は事実のようだ。その企業がプラント系である事に、キリルは深い失望の念を禁じえない。

ただMSやそれに関する武器などが日本人特別居留区に運び込まれているか否かは、分からないとの事だった。だが日本軍と呼ばれるテロ組織が、軍事顧問団を雇う事もないだろう。実戦部隊であると考えた方がいい。

「金の出所までは調べられん。それは君らの方が専門だろう」

「それに関しては、問題ない」

ジャンク屋組合からの情報で、日本軍に対する支援の多くに善隣幫が関わっているという事は調べが付いていた。キリルは資料を閉じる。ここは、タルハ・アンワール・ガニーとユンディ・ミナカミが滞在するマンションであった。喫茶店でやり取りできる情報ではないのだ。

一ヶ月から一年程度の契約で長期滞在者に貸し出されるマンションは、ほとんどの家具が備え付けの物であるが、それでも室内は新婚夫婦の新居のような雰囲気であった。その事に多少の居心地の悪さを覚えながら、キリルは資料の内容について二三の質問をする。

扱っている商品が商品なだけに、二人はトウキョウの行政関係部局にも繋がりを持っていた。そのため、かなり深い情報も入手出来るようだ。

「リーマンの愚痴ってのは、無関係な人間にこそほすもんだからな」
実務に携わる職員の多くは、東アジア中央政府のやり方を快く思っていない。だからこそ、聞くことの出来る話も出てくるのだ。同じサラリーマンとして、その気持ちは痛いほど良く分かる、そうタルハが言う。

キリルは聞いた。

「何故、ユーラシア籍の民間企業に？」

「アカデミーで赤服を取ってまで？」

コーヒーのおかわりを持って来たユンディがそう言った。調べれば一発だもんねと言う彼女は、アカデミーの成績優秀者に贈られる赤服の授与者であった。しかも整備課程で初の快挙であり、数少ない女性の赤服でもある。

「アフリカの地面耕してる男も、研究室で哲学書に埋もれてる女も、赤服よ」

そんな知り合いばかりといって笑う彼女を、キリルはじっと見据えた。アカデミーとは本来、市民軍であるザフトの中核となる人材を育成するための教育機関である。その卒業生は、プラントの礎、コーデイネーターの守護者たるザフトを指導する立場の人間であるべき

なのだ。

少なくとも、同じアカデミーの卒業生であるキリルは、赤服でないにせよ、そうだと思っている。だが、目の前の二人は全く違った。

キリルの視線の意味を察したのか、二人は真顔になった。頭の中を整理するように、ゆっくりとコーヒーマシンに口をつけ、同じようにゆっくりと言葉を紡いだ。

「社長の技術に、同じ技術屋として惚れていたってのもあるわ」

「コーデイネーターの貴女が？」

「遺伝子上のアドバンテージなんて、工場に三日入れれば吹っ飛ぶわよ」

それは技術屋としての個人的な理由だと言った彼女は、コーヒーマシンを置く。そして、ザフトでは自分達が体験した事を十分に生かせないと感じたからだという。彼女はキリルに従軍経験を尋ねた。

ペディオオニーテ動乱後、ザフトが関わった戦争はなく、宇宙では海賊やテロ組織の掃討作戦が小規模に行われているだけである。当然、キリルに従軍経験はなかった。それは良い事だと、ユンディは言う。

そして、戦争は色々なものを否応なく見せ付け、それを見せ付けられた者は変わらざるを得なくなると言う。ザフトに対する意識の変化は、その一つだと付け加えた。

「私らは整備員だったし、MSを弄ってただけよ。でも、人の生き死に直接関わった子は、もつとずっと重くそれからの生き方を受け止めたのだと思う」

「ザフトはその重さを受け止める場所では無いと？」

「少なくとも、私らにとってはそうだというだけの話よ」

自分達のささやかな幸福すら、あの時の光景に立ち返って捉えなおさなくてはならない生き方。ザフトの掲げるものでは、その生き方を支えられない。

その結果が、しがないサラリーマン生活ではあまり意味は無いのかもしれない、タルハはそう言って笑うが、キリルは笑わなかった。彼にとって、ザフトとはそのような軽い物ではない。

ザフトとは守るものであり、解放するものだ。連合による差別、抑圧、迫害、そういったコーデイネーターの脅威を排除し、人類の次な

る発展へと備えるための存在だ。コーディネーターが「調整者」たるためには、その守護者たるザフトが単なる暴力装置などであつてはならないのだ。

現在のザフトが、ただの軍隊に成り下がっている事は悲しい現実であろう。その点に関して言えば、彼女らの考え方も全くの間違いとは言いがたい。だが、そうであればなおさら、ザフトを正すために行動する事こそが、コーディネーターのあり方では無いのか。

キリルは資料を鞆にしまつて立ち上がった。エリックからもらつたメモリーチップをテーブルの上に置くと、無言で一礼だけして部屋を辞した。

守るもの、解放するもの、それがザフトのあり方であるのなら、自分自身もそのようにあらねばならないはずだ。彼が想うのは、マリアの美しい横顔であつた。

第十五話 発火

夜の一角が異常に明るい。聞こえてくる音は、幼い頃に聞いたことのある気がする音だ。静まり返った街に、遠くの轟音が伝わってくる。空気だけでなく地面をも揺らすようなそれは、不気味な振動で街を押し包んでいた。

いつもより早い時間から急に始まった交通規制のせいで、ルーイは荒川を渡り終えるのが精一杯だった。交通規制は、この轟音が理由なのであろう。彼はおぼろげながら覚えてきた地図を、懸命に頭の中に広げて道を守る。ともかく、線路伝いに進んでいけばいいはずだ。

道を守るパトカーや特別行政区の広報車は、外出禁止令が発令されている事を盛んにスピーカーで流している。交通規制による帰宅困難者は、最寄りの学校や公民館に行くように告げていた。だからルーイは、物陰に身を隠しながらの移動となる。しかし他に出歩いている人間がいないので、車にさえ気をつければ見つからずに進めるはずだ。

ルーイは全力で飛ばす。子供のとき以来だろうか、コーデイネーターとしての能力を全開にして動く事など。ナチュラルと暮らしていると、全力で体を動かす必要性などなくなるものだ。

「くっそ・・・ちゃんと動けよ・・・」

だから息が上がるのも早い。もちろんナチュラルと比較すれば、倍以上の速さで倍以上の長さを走っているだろう。だが、そんな事は慰めにもならない。焦る気に置き去りにされるように、体は急速にその速度を失っていった。

パトカーの灯りを見て、近くの路地に身を潜めて息を整える。道が間違っていない事を祈るだけだ。耳をつんざく音に肩をすくめて空を見上げる。一瞬だけ眼に入ったのは、おそらくMSの姿だ。

聞こえてくる音は、やはり聞いたことのある音。戦争の音だ。

目標となっている場所は、孤児院からは比較的離れているはずだし、今向っているアメリカの家とも逆方向だ。だが、大掛かりな外出禁止令まで発しているのである、楽観的な予想などできない。

ようやく落ち着きだした心臓を叱咤して、ルーイは再び走り出す。アメリカの無事を確認し、その安全を確保しなくてはならない。

エルフリーデの事や、孤児院の事も心配ではあるが、彼女らであれば間違いなく無事であろう。そういった点に関しては、自分などよりずっと能力のある人達だ。しかし彼女は違う。

「アメリカ・・・」

あの優しいな微笑みは、戦争などという場から最も離れたところにある。だから、彼は惹かれたのだ。戦争の影を目に焼き付けてしまったかのような瞳とは対極にある、穏やかな微笑み。

そのためであれば、痛む膝も疼く足首も関係なかった。ルーイは膝に手を付いて、荒く息を吐いた。赤一色に統一された信号が、真っ直ぐな道に整列しているのが見える。それで、彼の足が止まるわけは無い。

タクシーの運転手に精算を頼み、キリルは道路に出る。そこは、検問に並ぶ車で長い渋滞が出来ていた。しかし、場所はギリギリ山手線の外側であるため、身分証確認ゲートの設置数は多くない。道を選んで行けば、強行突破しなくても済みそうだ。

電話が通じれば、ここまで焦りを覚える事はなかったかもしれない。だが、電話回線も交通規制と同時に制限され、連絡をつける事が出来なかったのだ。マリアの電話番号を肝心な時に生かすことが出来なかった。キリルは走りながら自分に悪態をつく。

「それ以上に、忌々しい・・・うちの組織は！」

プラントの様々な部局から人員を引き抜き、トウキョウがザフトの地球での拠点になり得るかどうかを調査するために結成された組織。しかし、それにも関わらず東アジア軍の動きをまったく捉えられていなかったのだ。自分を含めて、一体何をしていたのだろうか。

日本軍はこの事態に備えて、傭兵の招聘などを行っていたのだ。向こうの方がはるかに優秀ではないか。ここまで届く音に振り返ってみると、空を切り裂くビームの筋が見えた。その色から判断すると、

かなりの高出力であろう。

しかも、地面から空に向けて撃ち出されたという事は、日本軍が有しているビームか、もしくは日本軍が飛行可能な兵器を有しているという事だ。テロ組織の掃討作戦ではすまない事態になっているのかもしれない。

キリルは視線を戻して走り始める。走りやすい格好ではないが、長距離走は得意分野だ。一刻も早く、彼女のもとにたどり着かなくてはならない。

この非常事態である、本来であれば直ちにグレートバリアリーフ号に戻って、情報の収集と情勢の分析を行わなくてはならないのかもしれない。だが今いる場所から港まで、各種交通規制の中を移動するのは極めて困難である。

だから彼は、マリアの家に向っているのだ。軍が動いているのである、何か不測の事態が発生する可能性は、決してゼロではない。

彼女を守る事が今の自分の役目である。それは言い訳でも何でもなく、彼の本心だ。

「マリア……」

美しく聡明な彼女の横顔を思い出す。彼女を今の境遇から救い出すためにも、その身の安全は最優先にしなければならぬ。彼は今朝、彼女をアンノウンから守る事も助け出す事も出来なかった。

だから今度こそ、彼女を救ってみせるのだ。それが出来なければ、トウキョウの片隅でか細い歌声を震わせるだけの彼女を、救い出す事など出来るはずがない。

道にはまだ車が走っているが、人通りは一気に少なくなっている。防災用のスピーカーからは、夜間外出禁止令が発令中であることが、何度か放送されていた。大通りを避けて、細い道を選ぶように走る。

こんなところで誰かに捕まって、余計な時間を費やすわけには行かない。幸い、だいぶ土地勘を掴んできた辺りを走っているので、しばらくの間は大通りを通らなくても済むはずだった。

遠くから聞こえる爆発音は、もう気にならない。今はマリアの事だけを考えている。

膝を撃ち抜かれたサイドダガーが姿勢を崩し、そこに無数の砲火が降り注ぐ。壁しか残っていないようなビルの中から、対MSロケット弾が撃ち出されてくるのだ。撃ち上げられる対空ビームに、ウインダムバックスパックが破壊される。抵抗は予想通りだが、火力が予想外であった。

シールドを揺さぶられながら、サイドダガーのパイロットは毒づいた。敵が軍隊だとは聞いていないと。支援の戦闘へりを狙う敵対空砲陣地にグレネードを投げ込み、脚部機関砲で携帯ミサイルを搭載したトラックを狙う。

「信号弾？ MSだと!?!」

地図をディスプレイに表示して、味方の信号弾の位置を把握した。群がっていた戦闘車両を蹴散らした部隊に転進を命令する。半数の3機を315号線を伝って亀戸方面へと向わせた。

コクピットのアラームが鳴り、パイロットは後部モニターに視線を流す。日本軍がへりを有しているという話も、今初めて知った。頭部機関砲で牽制し、ビームライフルを構える。突如メインモニターの一部が消えた。死角になった場所から放たれたロケット弾の直撃を受けて、右腕部の脱落が表示される。

ビームライフルを失ったMSにへりが執拗な攻撃を仕掛けるのを確認しながら、廃墟となったビルの屋上に陣取った狙撃手が、次弾の装填を行う。大型の対物ライフル、銃身に複数の薬室を設けた姿からムカデと呼ばれている物だ。全薬室のチェックを終え、スコープを覗く。MSの装甲には通用しないが、カメラやセンサーであれば余裕で破壊できる。

へりの動きを見ながら引き金を引いた。耳栓無しでは耐えられないほどの銃声とともに撃ち出される弾丸は、ウインダムのメインカメラに吸い込まれる。一瞬動きが止まった敵機に、味方のへりが砲弾を浴びせかけた。

へりの砲手が次の標的に向けて視線を巡らせると、味方がいるはず

のビルにミサイルが飛び込んだのを見た。さらに空中から降下してきた敵の第一陣に続いて、高速道路を通ってきた第二陣が高架から飛び降りているのを、暗闇の向こうにぼんやりと見る。

「馬鹿な!!」

着地と同時に対MS地雷を踏んだ機体の中で、パイロットが叫んだ。侵攻ルートを予測されていたのだろう、少し離れた場所でも派手な爆発音が聞こえる。高架の上では、味方機が飛び降りるのを躊躇している。高架の上に立つ20mの巨人は、例え夜でも的であろう。一機がビームの直撃を受けて上半身を消し飛ばされた。

脚部を全損した機体の中で、パイロットは頭部機関砲を周囲にばら撒く。周囲の地雷を排除しない事には、味方が降りられない。数箇所が地面が爆発し、ある程度のスペースが確保される。パイロットは味方機に降りるよう促す。

向きを変えて再度地雷を排除しようと、機体を支えていた腕を動かす。それがすぐそばの地雷に接触した。

「厩橋の部隊の足止めは成功のようだ。こつちも上手くやれよ」

味方の連絡を聞いて暗闇の中で身を潜めている兵士が言葉を交わしあう。対MS地雷の存在は既に敵にも知れ渡っているのだろう、東アジア軍は大通りを避けるように移動している。対MS地雷は大型で、ある程度広い場所でないとは設置できないのだ。瓦礫が不自然に撤去されている場所は、確実に避けている。

それでも敵が不用意に飛ばないのは、こちらの対空砲の存在であろう。アフリカで猛威を振るった小型ビーム砲の威力は、ここでも健在であった。モニターを監視していた兵士が合図を出し、全員がそこを見つめる。

三機の敵MSが、味方の装甲車両を追跡していた。そのまま逃げ切れずに、マシンガンの直撃を受けた装甲車両が吹っ飛ぶ。モニターを見つめる顔は苦渋に満ちた。だが、敵は仕掛けのポイントに入っている。

連続した爆発音とともに、地面が裂ける。三機のMSがその地割れに吸い込まれた。通りの地下には、もともと営団地下鉄半蔵門線が

走っていたのだ。モニター前の兵士達は、目の前に現れたMSの下半分を見て歓声を上げる。貨車に載せられたレールガンが咆哮し、地下鉄の線路上に落とされた三機のMSは一撃の下に貫かれた。

「MSは囷かよー」

上空の偵察機で地上を観測している兵士が吐き捨てる。日本軍のMSを発見したという情報を元に、味方部隊の動きはそれを意識したものにへと変わった。それを敵に見透かされていたのだろう、進攻ルートで各地で待ち伏せ攻撃を受けている。

正確な損耗数は把握できていないが、既に計画を立てた段階での予測を上回っているだろう。旧中川付近では、日本軍のMSが大立ち回りを演じていた。待ち伏せ攻撃で、味方増援の到着がまちまちとなるため、到着した部隊から順に各個撃破の形となってしまっている。ドムのバズーカがウインダムを吹き飛ばす。

川の水面をホバー走行しながら、三機のドムは交互に砲撃を繰り返していた。蔵前橋通りと総武本線の間の200mほどの区間に陣取っており、双方の橋には強固な陣地が形成されているため、攻撃を仕掛けられる場所が限られる。焦れて上空から攻撃を仕掛けようとするれば、相手の思う壺とばかりに対空砲火を浴びせられる。

十分な数で一気に攻撃すれば対処できる相手であるが、その十分な数がそろわないのだ。陣地から砲撃に、サードダガーの部隊がじりじりと後退する。

「急げ、背後をつけるぞー」

錦糸町の駅では、クレーンが地下鉄の線路から総武本線の線路へと貨車を移していた。艦船用の大型レールガンを積んだそれはディーゼル車に押されて亀戸駅へと向う。傭兵隊が釘付けにしている敵部隊を背後から砲撃するのだ。廃墟のようになっていはいえ、亀戸周辺のビルが遮蔽物となつて、錦糸町からは直接狙う事ができない。

突然、照明弾が空を照らし、7号小松川線高架の上の数機のMSが射撃体勢に入っているのが見えた。ディーゼル車の乗組員が一斉に退避する。だが破壊されたのは、レールガンではなくその前方の線路のみであった。

乗組員が地面に伏せていた顔を上げると、高架の上の機体は姿を消している。代わりに音もなく宙に浮かぶMSが羽根を広げていた。そのシルエツトが、照明弾の残光の中に浮かび上がっている。

「アンノウン．．．だど？」

偵察機からのレーザー通信が最後に伝えた情報だった。東アジア軍の前線司令部が置かれている市ヶ谷では、作戦終了時間を待たずに撤退する事も視野に入れだしている。後は、それを上が理解するかどうかだった。

荒川と隅田川、そして首都高速七号線に囲まれた、ほぼ正三角形の区域が日本人特別居留区である。東アジア軍は、ここを拠点にトウキョウ特別行政区でテロ活動を続ける日本軍と名乗る組織を掃討するため、軍部隊を投入していた。その規模は、これまでのような報復目的の空爆とは一線を画するものである。

ヨコタを発進した空中からの降下部隊が9機。6号向島線の駒形パーキングエリア付近から突入する部隊9機に、堀切付近から突入する部隊が3機。東京湾から荒川を上り京葉道路付近に上陸する部隊が6機。449号線、京成押上線、6号線を渡って突入する部隊が各2機ずつの計6機。それとは別に、タマユラ地区との境界線に当たる7号小松川線を警備するために3機。これに各種支援車両や戦闘機も投入されている。戦後のMSを使用した作戦としては、東アジア軍最大規模の作戦であった。

これは単なるテロリスト掃討ではなく、東アジア共和国内の分離独立を目指す各勢力、そして再・再構築に理解を示す上海閩に向けた示威行為である。国家の威信、軍の面子がかかっているのだ。日本軍はそれを見越していた。

「日本の浮沈をこの一戦に掛ける！ 祖国の奪還は、今ここから始まる!!」

日本軍の司令部に高揚した声が満ちる。序盤の作戦は十分すぎる成果を挙げていた。あとは、この成果を夜明けまで守りきる事であ

る。振動が絶え間なく伝わってくる地下の司令部は、常に人が出入りしていた。

飛び込んできた兵士が腹を押さえたまま倒れる。助け起こすより前に、床に鮮血が広がっていく。同時に侵入者を伝える警報が鳴り響いた。司令部の兵士が銃を取るのと、銃声はほぼ同時。東アジア軍は、MSだけでなく特殊部隊の展開も同時に行っていたのだ。

通信機材が血飛沫を浴びる中、抜刀した司令官がヘルメットごと敵兵の頭を叩き割った。刀を返す暇もなく銃弾を浴びた司令官は、最後の執念で床のスイッチを押す。

「京島の司令部が自爆しました！」

別の司令部で指揮系統の再構築が行われ、伝令の兵士が散っている。東アジア軍に対して単独でテロ活動を行っていた謎のMSは、今も積極的な動きをみせていないが、そういった不確かな要因に作戦の行方を左右させるつもりは無かった。敵の動揺が消えないうちに、二の矢、三の矢を放つ。

北千住で待機していたもう一つの傭兵部隊にも出動を命じ、指揮下の機械化部隊の投入も決定した。これからは、トラップや奇襲の効果が薄れる。MSと正面から戦わなくてはならないのだ。

ここからが正念場となる。司令官は鉢巻を締め直した。

「ブレは仕方ないか・・・」

ウインダムのパイロットは、ようやくメインモニターの映像を回復させた。だが、サブカメラを潰されているため、画像の補正能力が低下している。狙撃兵の隠れていたトーチカを踏み潰し、前進の合図を出す。

頭上を飛ぶ航空機の数が減っている。敵が対空兵器を重点的に装備していた事と、味方が厄介な敵の攻撃ヘリの排除を優先した影響だろう。ヨコタから増援がある事を祈りつつ、ウインダムのパイロットはシールドを掲げて足を進める。そのシールドに衝撃が走った。

その重みは、今までのものと別物。対MS用に開発された携帯式や小型化された兵器の衝撃ではない。関節などのウイークポイントを狙うのではなく、真正面からMSを破壊しようとする衝撃。

地面に設置された大型のビームやレールガンの類かと前方を注視するが、その視界の隅で味方機が胴体を貫かれたのを見た。先ほどとはまったく別の場所からの攻撃。センサーが移動する物体を捉えた。「遅えよっ!!」

操縦席の中でオペレーターが叫ぶ。瓦礫の山の上に六本の脚を使つて器用な姿勢でバランスをとる機械が、手にしたビームライフルを発射した。その一撃はシールドに防がれるが、別の機体から発射されたロケット弾数発が直撃している。

多脚多腕型汎用建設重機。不整地であつても安定した作業を可能とする六脚と、クレーン並の懸架能力を有する四本の腕を持った作業機械である。その手にMSが持つのと同様の武器を持たせているのだ。

エネルギー供給の関係上、ビームやレールガンの連射は不可能だが、その威力は携帯式の対MSロケット弾や小型ビーム砲とは雲泥の差であった。全高はMSの四分の一ほどであり、瓦礫の山や廃墟を遮蔽物にしなからの戦闘も可能である。

もつとも、建設機械なので補強を施してあるとはいつても耐弾性は無きに等しく、MSとまともに戦えるものではない。だが、熱源が増加し熱紋照合が難しくなつた暗闇で、数の優位を維持しながら戦えるのであれば、MSに対して十分な脅威となる。

残つたウインダムを、7機で包囲していた。各機の砲門が一斉に開かれる。

「手遅れになるぞー!」

「分かつてるー!」

日本軍の陣地が構築された旧中川にかかる鉄橋の下に取り付き、その橋桁の切断作業をしていた水中型ダガーのコクピットでは、同じやり取りが何度も繰り返されている。不明確な通信を拾い上げてみるに、どうにも友軍が不利に立たされているらしい。

橋桁の切断と炸薬の設置が終わり、ダガーはその場を離れる。大音響と共に鉄橋が崩落し、その上の砲台が川の中に落ちた。同時に水中から頭を出したダガーは、水面を滑っていたドムに銛撃銃を発射す

る。コクピットを貫かれたドムは姿勢を崩し、そのスピードのまま水面を跳ねて爆発した。

もう一本の橋を飛び越えて撤退するドムに代わって、派手派手しいカラーリングを施したウインダムが飛び込んでくる。ビームが飛び交い、水面に着弾したそれが激しい爆発を起こす。

「テロリストどもが・・・！」

ヨコタの東アジア軍司令官は、齒軋りをしながら呻く。夜明けまではまだ時間があった。市ヶ谷からの撤退要請には、ヨコタの裁量で動かせるMSと支援機を緊急発進させる事で応える。三機のシャンディエンが、ハンガーから滑走路へと移動してきた。

火をつけた煙草をすぐに捨てる。鮮血の生臭さと錆臭さが煙の匂いと混ざり、えもいわれぬ味となったのだ。防弾スーツにヘルメットで完全武装した保安局警備部特務課のシユウ・サクラは、口寂しさを紛らわすようにため息をつく。

軍が日本人特別居留区に対して攻撃を行う事は事前に知らされていなかった。ましてや、それと同時に軍警察や特殊部隊による都内各所での反政府活動家の一斉摘発が行われる事も知らされていなかった。だから、彼は彼の仕事を果たすためにこんな格好をしている。

電話を借りていた隊員が戻って状況を伝える。煙草がないのが、どうにも我慢できない状況のようだ。

「機動隊を出してたら戦争だったな・・・」

出せばよかった、と吐き捨てて、シユウは眼前の屋敷に足を向ける。ブンジ・タチバナの邸宅も、軍の特殊部隊による襲撃を受けていた。

住み込みの家政婦が、パジャマに上着を羽織っただけの姿で現れ、皆さんに甘いものでもと言う。事中ですのでと断り、彼は邸内に入った。邸宅の人間が無事だったのは、彼らが間に合ったからではなかった。庭には、武装した兵士の死体が転がっている。

月明かりを反射しているのは折れた刃物の破片であり、庭にはまだ数本使われていない日本刀が突き刺さっている。特殊部隊を撃退し

たのは、縁側で胡坐をかいて目を閉じている男だ。

「いやはや、コレクションが実際に役立つとは思いませんだ」

そう言って笑うのが、ブンジ・タチバナその人である。庭先の日本刀は、彼が収集している骨董品であった。実際に役立つという事は本物だったんですね、などとのん気な事を言っていた。縁側の男は、指定暴力団・菱丘組の組長、ユウゾウ・カトウがボディガードとして派遣した者だった。おそらくはコーディネーターであろう。

死体は証拠物件として保安局で回収させてもらおうと申し出るが、目の前の老人はどうにも捉えどころが無い。住み込みの家政婦といい、この状況で動揺の一つも見えないのだ。

「昔のトウキョウはもつとひどかった時期もある」

そんなシウウの疑問を察したかのようにブンジがつぶやいた。とりあえずの用は済んだので、その場を辞するシウウを呼び止め、ブンジがパソコンを起動させた。いくつかの操作の後、ディスプレイに映し出されたのは、東アジア軍のマークを付けたMSが、煙を吹きながら倒れる様子であった。

その映像の意味が分からなかった。昔の戦争映画でもなければ、CGアニメーションでもないだろう。だとすればここに映っているのは、現実の今の光景だ。

「旧世界、ですか？」

「善戦してますなあ、日本軍も」

東アジア軍による日本人特別居留区侵攻と、それに抵抗する日本軍。その映像は、特別行政区内の多くの人間が触れられる状態になっているだろうという。

シウウは、ますますこの人物の事が分からなくなる。ただ、その穏やかな顔に憂いの影が差しているのを感じ、少なくとも悪人のカテゴリーに入る人間では無いだろうと判断する。

隊員の一人が廊下を走ってやって来た。上野で、軍警察とマフィアが大規模な銃撃戦を行っているという。

トレーラーが牽引するのは、通信機材を満載したコンテナである。日本人特別居留区が見渡せる7号小松川線のほぼ中央で、トレーラーは路肩に寄っていた。傍らに立つのは、エヴィデンスである。

東アジア軍がMSの増援を投入した様子を捉えるエヴィデンスのメインカメラの映像は、そのままコンテナ内部にも伝えられる。中にいる男が嬉しそうな声を上げた。

「被写体が増えたぜ・・・減りすぎで、画面が寂しかったんだよ」
「写せるか？ 90番台のカメラ全滅だぞ」

別の男が、機器を操作しながら聞く。壁面一杯に並べられた小型モニターには、日本人特別居留区の様子がくまなく映し出されている。だが、何も写していないモニターも虫食いのように点在していた。責任者らしき男が、映っていないカメラをフォローするようにと、通信機に対して怒鳴っている。

モニターの映像は、居留区内に多数設置した量子通信の原理を利用した小型の無線式カメラのものである。しかし戦闘による損壊は当然想定されていたため、カメラクルーも居留区内に複数送り込んでいた。ハーモナイズコミュニティは、この戦闘をライブ中継しているのだ。

量子通信機や量子データを画像へと変換する装置は、ザフトでも開発途上のものであり、精度や信頼性はお世辞にも高くない。それでも、生の映像を入手できるという利点は大きかった。善隣幫からの十分な資金援助があればこそ出来た事である。

だが、その投資に見合う結果は出ていないはずだ。ハーモナイズコミュニティが設置した、特設サイトのアクセス数はカウントストップになっていく。彼らの開発したソフトを持っている人間の全員が、この映像を見ているといっても過言ではない。

「よっしゃ、イイ絵きたー！」

多脚多腕型作業機械が一齐に発射したワイヤーに絡め取られ、一機のサードダガーが転倒する。そこに群がる日本軍の兵士が、MSの全身に時限爆弾を設置して退避したのだ。関節部、装甲の裏面、メンテナンスハッチや放熱ダクト、ことごとくウイークポイントを狙われた

サードダガーは、爆発のたびに痙攣するように跳びはね、そのまま動かなくなる。

映像が更新されるたびに、サイトの掲示板はスレッドとレスポンスを増やしていき、サーバーもパンク寸前であった。イケブクロの本部では、人員総出でその対処を行っているであろう。もともとの計画は善隣幫のリ・ウエンから打診された事であるが、この凄まじい反響は予想を超えるものである。

圧政に立ち向かい戦う者達の姿。それが、映像コンテンツとして魅力的なものだという事は理解していた。さらにその姿は、ハーモナイズコミュニティの掲げる融和と共存という理念とも重なるものである。それを記録・保存し共有する事も、組織にとって有意義な事である。

『私達は、戦っても良いのです』

この深遠な理想を、より多くの人と共感しあうためにも、この映像はきつと役に立つ。廃墟の影からカメラを構える男が、次の撮影対象を探す。

本物の音は、意外と粗末なものだ。パンパンと軽く弾けるような乾いた音は、拳銃の発射音だ。その音よりも、同時に聞こえる怒鳴り声の方が余程、迫力があるだろう。電柱の影に体を寄せ、キリルが大きく息をついた。

東アジアの軍警察の制服を着た数名が、サブマシンガンを手にも道々駆けていく。一人が頭を大きく揺らめかせて倒れると、一斉に銃声が響いた。その軽快な発射音をかき消すような怒号とともに、周囲の路地から男達が飛び出してきた。どの男も、趣味は悪いが普通の服を着た者達である。

人数の差もさる事ながら、サブマシンガンを恐れないかのような勢いと、現地の言葉で怒鳴りながら迫ってくる男達の形相に、軍警察の人間が逃げ腰になっているのが分かる。拳銃ではなく、刃物を持って襲い掛かる者もいるのだ。

「なんぼのもんじゃあ!!」

ついに、軍警察の人間が袋叩きにされだした。キリルは、全ての視線がそちらに集まっている事を確認した上で走り出す。事態は、悪い方向に進んでいるらしい。おそらく、トウキョウの各所で同じような光景が繰り広げられているだろう。

アンダーグラウンドの大勢力であった、菱丘組と善隣幫が提携したというのは、つまりこういう事だったのだ。東アジア軍による、日本人特別居留区への軍事進攻は、特別行政区内の反東アジア勢力の一斉摘発とセットで行われる。それを予期した上で、軍への対抗手段としてマフィア同士が結託したのだ。

だが、単なる利害得失だけでマフィアがここまでの事をするとは思えない。マフィアの側も大きな痛手を被るからだ。どちらのマフィアも、何らかのイデオロギー、思想のようなものを持っているはずだ。それはおそらく、現在東アジア軍に攻撃を受けている日本軍とも共通するものだろう。トウキョウの情勢は、今夜を境に一気に流動化しかねない。

「何者……」

キリルの前に立ち塞がったアロハシャツの男が、それ以上の言葉を発するより早く、彼の膝は男の顔面にめり込んでいた。トウキョウの情勢より、マリアの事の方がよほど心配だ。

軍警察もマフィアも、街中で平然と発砲している。軍警察の摘発行為が、適切に適法に行われているかも分からない。東アジア国籍でない人間に対して、余所者という視線を隠そうとしないこの土地で、マリアのような外国人は常に不安定な立場にある。ましてや、非常時という便利な言い訳がまかり通るであろう状況では、より一層危険性が増すはずだ。

再び静かになった街で、キリルの足音がヒタヒタと響く。時々立ち止まっては、電柱に張られている番地を読んだ。通りの向こうから物音が聞こえてくる。

「全員やっつく方が後腐れないじゃん」

辛うじて聞き取れたその言葉と同時に、キリルは反射的に身を翻し

た。銃弾の飛び去る音が聞こえる。街灯もない夜、かなりの距離があるにもかかわらず、正確に狙われていた。

軍警察やファイア、いやナチュラルでは無いであろう一団が、闇を透かしてキリルを見る。

運の良し悪しというものは分からないものである。非常灯の黄色い灯りだけが点々としている場所を歩きながら、彼は後ろを振り返る。前を歩いていた男が足を止めた。

「足元、気をつけて」

地下鉄は運行を見合わせているとはいえ、その架線の電気まで止まっているとは限らない。ルーイは、カズヤ・イシに連れられて、地下鉄のトンネル内を歩いていた。タマユラ地区から特別行政区へと、密かに潜入して取材活動を行っていた彼と出会ったのは、全くの偶然であった。

土地勘のある彼のお陰で、アメリカの家まで迷う事無く行くことが出来たのだが、逆に東アジアの軍警察から追われるはめになってしまった。アメリカに余計な迷惑を掛けるわけにはいかず、玄関先で彼女と一言交わしただけで、立ち去らざるを得なくなった。

カズヤはトンネル壁面の扉を開け、メンテナンス用の通路へと入る。ずいぶんと無用心な施設だと思っていたら、カズヤが笑った。

「日本の諺に、蛇の道は蛇つてのがある」

ここはその蛇の道そのものなのだ。トウキョウの地下には、もう一つの巨大都市が存在する。

地下街、地下道は言うに及ばず、駐車場、地下鉄、共同溝、排水路、下水道、さらには暗渠化された河川に至るまで、まさに網目のごとき空間が広がっている。それらは個々に存在しているように見えて、その実、色々な場所で繋がっているのだ。現在、トウキョウの地下迷宮を網羅する地図は存在しない。平面ではなく立体的に入り組んでいるため、地図化も容易では無いだろう。

トウキョウのアングラ勢力の中には、その手の情報に精通したナビ

ゲーターのような人間が存在し、彼らの「地下の土地勘」がそれらの勢力の活動を強力にバックアップしているのだ。今のように本来なら施錠されているべき場所を開けておくのも、彼らの仕事である。

日本軍をはじめとするテロ組織も、この地下迷宮を通って都内各所に出没しているのだ。身分証確認ゲートの無い地下空間は、慣れれば地上より簡単に移動できるという。

「もつとも私は、全然慣れていませんけ……」

ルイーはカズヤの口を塞いだ。そのまま大きな配電盤の影に身を隠す。間違いなく足音が聞こえた。息を凝らし、視線だけを足音の方に向ける。だが、足音の主もこちらに気付いているようだ。

「……こっちは丸腰だ」

キリルはそう言って足を止めた。敵であれば間違いなく撃たれている距離である。何もしないとこの事は、敵では無いということだろう。沈黙の後、二人の男が恐る恐る顔を見せた。

張り詰めた空気の中で互いに視線で探り合う。キリルが用意していた肩書きで名乗ると、二人の男も自分の身分を明かした。彼が道に迷っている事を正直に話すと、二人は案内を買って出てくれる。おそらく、彼と同じように追われる身なのだろう。

マリアの無事は何とか確認できたのだが、その場に留まる事はできなかった。彼女を無用な危険に晒さないためにも、その場を離れて追っ手を彼女の家から遠ざけなくてはならない。

そんな彼に、彼女は逃げ道を教えてくれた。彼女の住むアパートのすぐ裏手の空き地にある建屋から、地下鉄の点検用通路に入り込めたのだ。近所の人ならみんな知っていると、彼女は笑って言っていた。

彼は、ルイー・キリロフと名乗った男と並んで歩く。道を知っているのは彼ではなく、もう一人の方であった。

第十六話 変わる空気

朝焼けの空は、天気崩れを告げているのかもしれない。火災が起きていたり、高熱の物体が放置されてあったりする状況なので、降雨も一概に悪いとは言えない。だが、怪我人の救助や治療を考えると、雨を良い事態だとは言えない。

手渡された資料に目を通し、指示を出す。発煙筒の煙は、先発隊が上陸地点を確保した事を知らせるものだ。目を凝らすと、応急の整地作業とテントの設営が始まっているのが見える。

「お嬢、分かっておられるとは思いますが」

「ダル、私はもう子供では無いのです」

果たすべき役割は承知しているといつて、視線を川の向こうに向けた。日本人特別居留区は、全域が薄い黒の霧に包まれているようだった。ほんの数時間前まで、激烈な戦闘が行われていたのである。

ナタリア・フアリロスは、ダルウィーシュ・ダルを伴って船を降りる。甲板の昇降機が唸りを上げて、満載されていた物資の荷降ろしが開始された。この日に備えて、備蓄を続けていた医薬品や毛布、それに水と食糧である。対岸からはさらに二艘の船が物資を運搬してくるのだが、足りない事は明白であった。

自分達のような支援団体は他にもあるが、数も組織も不十分であり、何より特別行政区自体がそのような団体を危険視している。彼女らのように迅速な対応が出来る所は無いであろう。少なくとも、外出禁止令を無視して物資の運搬作業を開始するような組織は、フアリロス・フアマリアを置いて他には無い。

彼女らがトウキョウに進出したのは、特別居留区に対する人道支援のためである。孤児院の経営はあくまでも付帯業務であった。

「自分達が必要とされる事が、不幸な事だというのは・・・」

自動小銃を手に周囲を警戒するダルに、ナタリアはそつとつぶやいた。「つらい事です」とは答えず、遠くを見つめるダルの厳しい視線はどこまでも頼もしい。

物資を運び込んでいる荒川の河川敷は、主戦場とならなかつたとは

いえ、戦闘終了の直後である。日本軍は殺気だっているであろうし、脱出できなかった東アジア軍もいるかもしれない。野戦陣地と見紛うばかりの野戦病院が、急ピッチで設置されていく。

別の船から車が降ろされたのを確認して、ナタリアは病院設営と平行的に救助活動の指揮を執り始める。先発隊として乗り込んでいたオートバイの部隊が戻り始め、特別居留区内部の様子が少しずつ分かり始めたのだ。徐々に、想像を上回る事態だという事が明らかになっていく。

「医療団の病院船は、正午過ぎに夢の島に到着の予定です」

「飛行許可は下りません。トウキョウの全管制権を一時的にヨコタが握っているようです」

「タマユラ地区内の二病院が重傷者の受け入れを約束してくれました」

次々と入ってくる報告を処理しながら、周囲が騒々しくなってくるのを感じる。既に人が集まりだしているのだろう。表に出て、包帯巻きの一つでも手伝いたいという思いをしまいこんで、ナタリアは次の指示を出す。設営作業が完了したら、ただちに特別行政区に戻り、物資と人手を集めるための準備に取り掛からなくてはならない。

マンションの地下駐車場から表に出ると、夜が明けていた。開ききった瞳孔に、朝日は強烈過ぎる。ゴミ集積所にゴミ袋が積まれているところを見ると、外出禁止令は解除されたようだ。

ようやく慣れてきた目で辺りを見回す。住宅街のど真ん中といった感じで、まだ人通りは少なかった。途中何度か水の流れている通路を通ったため、靴とズボンが気持ち悪く濡れている。人に見られたら間違いなく怪しまれるだろう。信号機を見上げていたカズヤ・イシが、ようやく場所を把握したようだ。

「上野の近くに出るつもりだったが、歩きすぎたようだ。浅草橋だよ」
彼らは一晩中、地下の道をペンライトの僅かな光をもとに歩いていたのだ。ルーイは頭の中に地図を思い浮かべてみる。一度も地上に

出る事無く、直線距離にして10km近くもある場所まで移動できたことになる。しかも、地下鉄の構内などは警戒されている恐れがあると、そういった広い通路は極力避けて移動していた。

こんな迷路のような通路が、東京の地下全体に張り巡らされているのだ。表同様に得体の知れない都市だと思う。

「電車は動いているのだろうか？」

キリル・ローレンスと名乗った男性がカズヤに聞く。プラントの非営利組織職員と言っていたが、多分違うのだろう。歩いている途中も、盛んにメモを取っていた。自分達と同じ種類の人間か、もつとヤバイ仕事をしているのか。どの道、深く関わらない方が良さだろうとルーイは考える。

外出禁止令が解かれてすぐに電車が動き出す事もないだろうと言うカズヤに、キリルは口を引き結んで考え込むような表情を見せた。だがそれはルーイも同じである。ホテルのあるところまで、再び歩かなくてはならないと思うと気が滅入った。

少し行った所に仮眠くらいは取れる場所があるとカズヤが言うので、ルーイはそこで休憩を取る事にした。検問や取締りの類はまだ残っているかもしれない。下手に出歩かない方が身のためだ。

だがキリルという男性はその申し出を断る。一刻も早く戻らなくてはならない用事があると言った。カズヤに礼を言って、握手を交わした彼は、そのまま踵を返して南の方へと歩いていく。

「君達、何をしている？」

不意に呼びかけられ、ルーイとカズヤは振り返る。濃紺の車両から降りてくる、濃紺の防弾服は、伝統的なトウキョウの警察官の戦闘服であった。遮光バイザーを下ろしたまま身分証だけ示して、もう一度何をしているかを聞いてきた。

「ジャーナリストです。外出禁止令の出たトウキョウの様子を、ね」

留置所で仮眠を取る気もないと言うカズヤが素直に警察の質問に答えると、あっさり解放される。ルーイは背後の視線を気にしながらカズヤについていった。

「いいんですか？」

「ああ、本当にブン屋だよ」

気にする事もないと部下に言って、シユウ・サクラはバイザーを上げた。煙草を啜えると、火をつけて一気に吸い込む。一晩ぶりの煙草は、流石に爽快だった。

東京湾の真ん中に停泊していたグレートバリアリーフ号は、もといた棧橋へと進路を取っていた。東アジア軍による特別居留区攻撃と、トウキョウ全域に出された外出禁止令をうけて、ひそかに埠頭を離れていたのだ。軍警察が強制捜査にやってくる危険性があった。

実は複数のルートから、東アジア軍の動向については情報が入っていた。だが、その確証を得るための調査を行っている最中に攻撃が開始されたのだ。各調査員との情報共有に難があった事もあり、キリルを始めとする数名の人間がまだ戻ってきていない。

「間抜けな話だよ、それにしても」

エリック・リブーは、衛星とのレーザー通信で入ってくる情報に耳を傾けながら、冷めたコーヒーを流し込んだ。彼も、東アジア軍の動向について、ジュンコ・ヤオイからいくつかの情報を入手していた。

おそらく彼女は、その正確な日時も知っていただろう。その上で、彼にそれを教えなかったという事は、それに見合う情報をザフトが彼女に提供できなかったという事だ。彼女が不実なのではなく、全てがギブアンドテイクの世界では当然の事なのだろう。過ぎた事をこれ以上考えるのは非生産的だ。

今、彼らがしなくてはならない事は、今回の軍事侵攻に伴うトウキョウ情勢の変化と、東アジア情勢の推移を予測する事である。だがこちらは、さらに大変な作業であった。

「まず、正確な情報がないのだから・・・」

一番大きな会議室に、船に乗っていた全ての課員を集めて対応策が協議されているのだが、話は全く前に進んでいない。

レーザー通信で入ってくるのは、各国で報道されているニュース速報に毛の生えたようなものであって、情勢分析の足しになるようなも

のではない。トウキョウに取り残された課員が、どれだけ有用な情報を持ってきてくれるかに掛かっていた。

諦めに似た沈黙が続く会議室で、エリックは拳手をせずと言う。「これで、終わりだと思っっている人はおられますか？」

互いに顔を見合わせるが、どの顔もそうは思っていないと言っていた。エリックも同じである。しかし、もしこれが始まりなのだとしたら、次は何が起こるといえるのだろうか。

再度の軍事侵攻や大規模な報復テロと考えている者もいないであろう。彼らがトウキョウで収拾した各種の情報には、そのような『普通の展開』を予想させるものは全くなかったのだ。軍事侵攻などという『普通の展開』の方が、予想外だったのだから。

おそらく、仕掛けたはずの東アジア軍は、逆に嵌められたのだ。この日本人特別居留区攻撃を引き金として、何かを仕掛けようとしている者がいる。

それが何者かについては、全員の意見は一致しているであろう。だが肝心の、何を仕掛けるのかについては、全く予測がつかなかった。

今は一刻も早く埠頭に戻り、出来るだけ多くの情報を収集して次に備える事である。会議室の電話が鳴り、埠頭の連絡事務所にキリル・ローレンスが到着している事が伝えられた。

怒る気力さえ失われた、そんな雰囲気漂っている。ヨコタは基地機能全体が茫然自失しているかのようだ。テロリストの掃討を目的に、大規模なMS部隊を投入した今回の作戦は、おそらく戦史に残る大敗北を喫したのだ。

MSによる市街地での戦闘というのは前例が少なく、しかも敵はゲリラ戦を仕掛けてきた。トラップや待ち伏せといった基本的な戦術のみならず、都市構造を利用した陣地構築や兵器の移動、携帯火器の効率的な運用など、日本軍は入念な準備を持って東アジア軍を待ち構えていた。

投入兵力の六割以上を失うという結果は、ヨコタの機能自体にも大

きな影響を与えかねないものであった。それはトウキョウ特別別行政区に駐留する東アジア軍そのものの影響力に直結する事態である。「その上だ・・・！」

ユ・ケデインは思わず机を叩いた。同時に行われた、特別行政区内の反東アジア活動家の摘発に際して、想定外の抵抗が各地で行われたのだ。日本軍のメンバーによる妨害工作などは予測していたが、マフィアが組織だった抵抗を行う事は予想外であった。

善隣幫と菱丘組の提携という情報は入っていたが、それがこのような形で機能するとは考えられていなかった。コウキ・ヨシオカなどを使って、マフィア組織の切り崩しなども図っていたが、ほとんど効果がなかったのだろう。それらの情報を活用できなかったのは、完全に自分達の失態である。結果として、反東アジア活動家の摘発は十分な成果を挙げたとは言いがたく、無駄な犠牲者を出しただけだった。

さらに、東アジア軍の今回の行動は特別行政区からの不信感を増すことにもなってしまった。ヨコタは外出禁止令の延長を計画していたのだが、特別行政区はそれを押し切り当初予定通りの時間で、外出禁止令を解除してしまったのだ。公共交通機関も早々と動き出している。

「せっかく減った敵がまた増えたって事だ」

ヒューは自室で茶化すように言った。目の前にいるのはヨコスカから来たと言う、大西洋軍のエージェントであった。ヨコタの混乱は末端のレベルまで広がっているようだ。

彼の持つて来た情報によると、今回の戦闘では日本軍も深刻な打撃を受けているという。招聘した傭兵は全滅し、準備されていた重火器や航空機の類も使い尽くしてしまったようだ。さらに日本人特別居留区と特別行政府の間にかかっていた橋のいくつかは、使用できない状態になり、人道支援助物資の搬入も困難になっている。

日本軍の兵士は言うに及ばず、住民にも大きな被害が出ているのだが、救援活動すらままならないのが現状であった。窓の外を見ていたエージェントの視線がヒューの方を向いた。

「東アジア軍には負けに等しいが、現実には相打ちだ」

トウキョウに存在した二つの軍事組織が同時にその機能を失い、今は奇妙な空白が生じている。その空白に、何かを捻じ込もうとする人間がいるのだ。ヒューは確認をこめて聞いた。

「次の舞台は、トウキョウ全域って事か？」

「そのために君がいる」

トウキョウに滞在、居住する大西洋連邦の国民の安全確保。今度こそ、本当に必要となるのだろう。ヒューはエージェントを丁寧に部屋から送り出した。

詳細な情報は、エヴィデンスが戻ってくる前から入っていた。ハニス・アマカシの使っていたコンピュータは、ハーモナイズコミュニティのサイトに自動的に接続するようになっており、それを介して施設内でも映像が見られるようになっていたのだ。

深夜であったにもかかわらず、ツクバの地下基地の職員は固唾を呑んで、東アジア軍と日本軍の交戦を見つめていた。どんな深夜番組よりも興奮できる映像である事に間違いは無い。

「ハニスは・・・動いていなかったな」

そんな夜の興奮が鎮まらない施設の中で、チン・ヤンチャンは朝のコーヒーをすすっていた。就寝前に少しだけ映像を覗き、彼はいつものどりの時間に寝た。カフェスペースの話題が、昨夜の戦闘一色に染まっている中、彼は自分の身の振り方を考える。研究生活の中で政治センスが磨かれるというのも、おかしな話だ。

今回の事態を、程度の差こそあれ日本自治政府は当然知っていたはずだ。だがツクバに対して、それに対応した動きを取るようには伝えられていない。ハニスは単独で動いていただけである。彼は、オーブにいた頃からつながりのある組織の意向で行動したのだろう。

自治政府は、日本軍に対する側面支援としてツクバを動かしてきたのであるし、利根川を越えてトウキョウ特別行政区へとロケット弾攻撃を行うテロ組織も黙認してきた。それが今回は全く動かなかった。

日本軍の意図と自治政府の意図に、重大な齟齬が生じている可能性

が高い。ヤンチャンはそう判断した。そして自分はどう振舞うべきかを考える。

「博士は見られましたか!？」

寝不足を感じさせない顔でミツネ・ササが聞いてくる。曖昧に答えておいたのだが、ミツネはお構いなしに話し始めた。プラントとの戦争が終わって二十年近くがたつ。地球圏の各地で紛争が起こっているとはいえ、「生の戦争」を見た事のない世代は着実に増えているのだ。

あの映像を配信していたのはプラントの組織だという。成人年齢の早いプラントでは、戦争を知らない世代が早くも社会に出ているのだ。だから、戦争をコンテンツとして消費できる。

自分のやってきた研究の事を考えると、そんな彼らを不謹慎だとは絶対に言えない。だが、嬉々として戦争を話す年若い科学者の姿に、普通の大人として寒々しいものを感じるのも事実だった。

「・・・研究はどうなっているかね？」

「? 順調ですか・・・何か?」

そろそろ仕上げに取り掛かった方がいい、ヤンチャンはミツネにそう言っ、コーヒーを飲み干した。

寒い季節では無いので、完全防備の服は暑い。それを一晩着ていれば、否がおうにも臭いが出る。加えて彼は、煙草を吸うのだ。性に合わないと思いつつも、シャワーを浴びる。庁舎内を歩くには相応しくない風呂上りのラフなスタイルで、シュウ・サクラは鑑識のオフィスを訪ねた。

いつものように甘すぎるコーヒーが差し出される。女性に帰らなかったのかと聞くと、残業をしていたら外出禁止令が出たとの事だった。

「ま、当分帰れないわ・・・色んなもの、持ってきてすぎ」

昨夜の騒ぎで、大量の証拠物件が鑑識に運び込まれていた。通常の刑事事件として扱うべきではない事件であるにも関わらずだ。

「上の方針が固まる前に、俺の分だけでも調べとけ」

「・・・大丈夫じゃない？ 桜の代紋は取られたって、プライドくらいは残ってるでしょ」

心底つまらなさそうに、女性は言う。おかわりを素直に受け取りながら、シユウは横目で女性を見た。今回の一件で、保安局は完全に面子を潰されている。その上、特別行政区の内部でも、東アジア軍の強引なやり方への反発が表面化していた。外出禁止令の解除はその影響であろう。軍からは、外出禁止令を延ばすようにと圧力があつたはずだ。

特別行政区域内での軍警察の展開などはまだ続いているが、それらはいくまでも特別行政区と保安局による「特別な配慮」に基づくものであり、正式な手続きや権限に基づくものではなかった。つまり保安局は、いつものように自らの職務権限に基づいて行動できるのだ。

特別行政府の権限を停止して東アジア軍がトウキョウの全てを掌握するには、戒厳令を敷くしかないが、日本人特別居留区攻撃に失敗した今、ペキンが更なる強硬策に出るとは考えにくかった。今回の攻撃でさえ、反対派の押さえ込みには時間がかかっているのだ。

「戦争か・・・」

昨夜は菱丘組と善隣幫の構成員が、各所で軍警察や軍の特殊部隊と銃撃戦を繰り広げていた。マフィアもこの日に備えていたのだろう。だが、それでお終いになるとは思えない。むしろ軍が及び腰になっている今こそ、マフィアにとってはチャンスであるはずだ。積極的な攻勢に出る可能性が高い。

その時、保安局はどう動くか。いや、どう動くべきなのか。単なるマフィアの抗争であれば、そんな事は考える必要もない。だが、そうでは無いとしたら。

「何で、ヤクザ屋さん達が軍とやりあつたりしていたの？」

「○暴の連中の方が詳しく教えてくれる」

空きっ腹には丁度いい砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを飲み干して、シユウはカップを返した。早いところ警備部長に掛け合つて、機動隊の全部隊に待機命令を出してもらわなくてはならない。

廊下ですれ違った刑事部の知り合いに、特別強襲部隊の準備をしておくように声を掛ける。言われなくてもやっていると言った刑事は、背広の前を開いてみせた。防弾チョッキと拳銃を既に装備済みである。

考える事は、皆同じのようだ。

住宅街の一角にある小さな喫茶店。外側からは店を構えている事はほとんど分からず、近所の人を相手に半分趣味でコーヒーを振舞っている店なのだそう。いかにも民家を改造したといった感じの店内に、ルーイは足を踏み入れた。寝不足気味の頭にコーヒーの香りが染みる。

店主や常連客とカズヤは知り合いらしく、一声掛けるだけで店の奥へと入っていった。ルーイが追いかけると、ソファアの置いてある個室のような部屋が広がっている。そこには先客がいた。

「モリくん、区内にいたのかね？」

「イシさん・・・キリロフさんも!？」

驚いた顔のヨシト・モリに、カズヤが昨夜の事を手短かに話した。ヨシトも特別行政区に入ったところで、外出禁止に巻き込まれてしまったのだ。それでも、夜の間かなりの場所を歩き回ったようである。

彼は神妙な面持ちで言った。今回の一件は特別行政府の住民に対して、非常に大きな意味を持つ物になるだろうと。彼は、手にしていたノートパソコンを開く。保存されている映像は、昨夜ネットを介して流されていたものさそうだ。

ルーイはその映像を凝視した。日本軍と東アジア軍の戦闘が、昨夜リアルタイムで配信されていたという事実も驚きであるが、そこに付けられている各種のコメントはさらに驚くべきものであった。『ナシヨナリズム』という旧世紀の亡霊が、ネット上に蘇ったかのようだった。

街中を身分証確認ゲートで分断され、公共交通機関のダイヤも気まぐれのように変更される都市。それでも住民は、不平を口にする事無

く、ただ淡々と日々を過ごしていた。休日になれば量販店がにぎわい、放映されるテレビにはスポーツとバラエティー番組が並び、アイドルのコンサートに熱狂する。そんなどこにでもある都市の姿しか、ルーイは見えていなかった。

「……こりゃ、寝てる暇もなさそうだな」

店主から渡されたおしぼりでゴシゴシと顔を拭いていたカズヤが、そうやって鞆の中の携帯レコーダーの電池をチェックしていた。彼の顔は驚きというより、納得の顔であり、このような状況になる事がある種当然だと感じているようだった。

その映像はトウキョウの住民の多くが触れられる環境にあり、現にヨシトが取材をした公民館では、外出禁止令によって帰宅できなくなっていた人達が、この映像に熱狂していたという。

さらには、区内に展開していた軍警察とマフィア組織の銃撃戦の映像などは、付近の住民が密かに撮影したものがアップされており、ここにも大きな反響が寄せられていた。カズヤが耳を澄ませる。店内に客が入りだしたようだが、どの客も一様にこの映像の話題を口にしていた。

「ゼネストもあり。てか、うちの組合の人そんな事を前から言っていましたよ」

参加するしかないでしょ当然、とモーニングセットを注文した客が話をしている。

カズヤがルーイにメニューを渡した。パンとコーヒーしか無い店だが、まずは腹ごしらえだと言う。戦争などより、よっぽど取材のしがいのある対象にめぐり合えそうだと、カズヤが真顔を窓の外に向けていた。

そこから見える庭木ですら、不穏な空気に揺れている、ルーイはそんな事を思った。

渋谷に建つ高層ビル。その最上階からは、まだ煙を上げ続ける日本人特別居留区の様子がうつすらと見える。昨日の夜は、そこが赤々と

燃えていたのが見えただろう。先ほどまで幹部がそろっていたその部屋は、今一人の老人がたたずむだけである。リ・ウエンは感慨のため息を押し留めて窓の外を覗んだ。

これは、発端に過ぎない。昨夜の戦闘は、日本独立を達成するため
の号砲なのだ。日本で生まれ、日本で育ち、日本語を話す。そんな彼
が日本の独立を願うのは当然であり、日本の独立を目指すのはある種
の義務であった。しかし同時に、彼はかつての日本を取り戻そうとし
ているのでは無い。

「リ・ウエン・・・か」

それは父祖より受け継いだ名であり、一族の歴史を継ぐものであ
る。華僑とは同族の水平的なつながりであると同時に、過去から未来
へと繋がる時間的なつながりでもあるのだ。それは、国籍などという
国民国家の枠組みによって寸断されるものではなく、自分自身の存在
と共に背負ってゆくものだ。

彼にとって、自分が華僑である事と日本人である事は全く矛盾しな
い。例えその感覚が、かつての日本においては理解されない感覚で
あったとしてもだ。

彼が独立させる日本は、血で日本と結ばれた人間を国民とする国で
は無い。自らの良心を「日本」に結びつけた人間を国民とする国家だ。
国民とは、血縁や国籍などの形式や手続きによって決まるのではな
い。自ら選び、自ら引き受けるものだ。そして国民である事を選び引
き受けた者によってのみ、国家は形作られる。

彼の語る日本は、東アジア共和国政府に屈従し、自治区という隷属
を受け入れ、日本を手放してしまった人間を相手とするものではな
い。自らが日本人である事を深く受け止めた人々こそが、今から生ま
れる日本を担うのだ。

「それが、今始まる」

ウエンは椅子に深く腰を掛けた。ビルの周辺にはすでに保安局が
到着しており、警備を始めていた。昨夜はここでも銃撃戦が起こって
いたのだ。狙われる事は分かっていたので、善隣幫の実戦部隊の中
でも選りすぐった精鋭をヨコハマから呼び出して軍警察に備えさせて

いた。

彼にとって嬉しい誤算だったのは、ギャングと呼ばれる一団がそこでの戦闘に加わっていた事である。元々は、都内の繁華街にたむろする複数の不良少年グループであり、普段は互いに抗争と呼ばれる無意味な暴力沙汰を起こしたりしている連中だ。

その彼らが、軍警察との戦闘に味方として介入してきた。火炎瓶程度しか持たない彼らであるが、圧倒的な土地勘によって軍警察を翻弄し、陽動としてはこれ以上ない働きを見せてくれた。

軍警察が撤退した時、彼らは口々に「日本万歳」を叫んでいたのだ。その報せを聞いたとき、ウエンは涙がこみ上げてくるのを感じた。トウキョウの住民が、ここが日本の首都・東京である事を思い出したということなのだ。

東京に住む全ての人々が、日本軍が東アジア軍と対峙し果敢に戦う姿を目撃した。東アジア共和国の野蛮さを目の当たりにし、それに立ち向かう「日本」という理性を見たのだ。それが、人々の目を覚まさせた。

自ら何を引き受け、何を受け止めるのか。

今、東京の人々は、自ら日本を選択し、日本人である事を引き受けた。それこそ、彼が夢見る日本独立を成し遂げる人々だ。

もはやヨコタは機能を失い、東アジア軍は形骸と化した。日本独立といううねりを押し留める力は、トウキョウには残されていない。あとはそのうねりがトウキョウ特別行政府を押し流すのを見守るだけでいい。

少し早めに出勤したのは正解であった。病院はいつも以上に混み合っている。昨夜は、さらに修羅場だったというのだ。この近所でも銃撃戦が何件か起こっていたらしい。個室には、運び込まれたマフィアの構成員が何人か入れられているという。

待合室に設置されたテレビは、いつものように朝のニュースを流していた。トップニュースはユーラシア連邦との外相会談の話題であ

る。だから、人々はその放送がまがい物である事をよく知っていた。老年の患者ですら、ネットにアクセスし生の情報を入力できるのだ。

待合室の話題は、昨夜の映像で持ちきりであった。誰の口調も高潮し、日本軍の勝利を祝っていた。

「カグタさん、401号室の検温お願い」

アメリカは婦長に頼まれ、外来から病棟へと足を向けた。同僚の看護婦とエレベーターを乗り合わせる。彼女も、昨夜の映像の話を聞いてきた。アメリカは、パソコンを持っていないと苦笑いをしておいた。

そして、おおつぴらに東アジアへの批判を口にしても大丈夫なのかと聞いた。少なくとも今までは、そのような話題が街で堂々と話されていた事がないのだ。同僚の看護婦はハツとしたような表情を見せるが、すぐに表情を緩めた。

「個室のヤクザ屋さん、軍と戦ったのよ」

そして見事に軍を追い払ったのだという。それが何になるのかは分からないが、少なくとも今までのような東アジア政府や特別行政府に対する配慮を必要としなくなったということだ。

トウキョウに来てからかなりになるが、アメリカもこの街の人々の鬱屈を感じていた。表面的な不便さに対する不満、そういったものとは異なる次元の怒りや憤りのようなものが、間違いなく存在した。しかしその思いは、特別行政府や東アジア軍を前にして、表からは見えなくされていた。

それが昨夜の一件で、あちこちから頭をもたげ始めているのかもしれない。ナースステーションの話題も医師の話も、軒並みあの映像の話だったのだから。入院患者の一部にも、映像を見ていたものがあるのだ。

「就寝時間はちゃんと守ってくださいね」

アメリカは体温をチェックしながらそう注意する。いつものように一息入れる暇もないままに午前中を過ごし、慌しく昼食を取る。事務員がピラを回覧用の掲示板に張り出していた。みんなそこに集まっている。

それは、病院職員や看護師の組合によるデモ行進を呼びかけるもの

であった。東アジア軍の非道を糾弾し、日本人特別居留区住民の救済を訴えるためのデモ行進だという。アメリカもそれに誘われる。

彼女は、試験の日が近いという理由で断った。アメリカには、ちゃんと試験が開催されるかどうかの方が心配なのだ。

夜の街も活気づいていた。いつもより速いペースでボトルが入り、普段は笑わないママの目も、流石に笑いを隠せないでいた。ただ、客層には違いがあった。普段は軍関係者とマフィアの関係者が半々とあったところなのだが、今は軍関係者の姿が見えない。その分、マフィアの武勇伝には尾ひれが付いて舞い踊っている。

「チャカなんざ、玉が無くなりや玩具だ。だけどおいらの白鞄は違うぜ。腰抜け兵士のマシンガンをこう、すばんと・・・」

マフィアの中でも下っ端の下っ端が来る店である、話は九分九厘嘘であろう。そしてマリアの仕事は、その嘘に付き合い客に気持ちよく酒を飲ませることである。男のろれつが、いよいよ怪しくなってくる。彼女は、最後にもう一本ボトルを入れさせると、その場を後輩に任せて店の奥へと戻った。

水を飲み、パンとバナナを頬張る。時間が遅くなってくるにつれて、酒以外の注文は減ってくるのだ。化粧直しを終えるのを見計らったかのように、フロアから呼ばれる。指名ではなくヘルプのようだ。着ている服はセンスもよく、まだそれほど酔っていないような様子の男。見覚えが無いが、チーママが相手にしているという事は上客なのだろう。挨拶をして男の隣に座る。何も言わずに、マリアの名前でボトルを一本入れてくれた。笑顔を浮かべているチーママが、警戒しろという視線を彼女に向けていた。

男は当たり前のように昨晚の映像の話を切り出す。私も見てしまったと話を合わせるが、男は自分の武勇伝を語りに来たわけではなかった。

「もつと凄い事が起こるよ」

その時、トウキョウ市民は目撃者ではなく当事者になる。男はまる

で予言のような口調でそう言った。

「怖いわ、そんな事」

丁寧にしなを作って言ったチーママに、男は静かに笑ってみせた。「君達も、東アジア政府の拙劣な政策の被害者じゃないか」

テーブルを拭きに来た黒服がマリアを別の席のヘルプへと回す。代わりにママが男の席へと向った。マリアは、ほとんど酔いつぶれている客の介抱をしながら、先ほどの男の様子を見つめていた。

小一時間ほどで静かに帰って行った男を見送ると、マリアはママに男の正体について尋ねてみた。ママは関わりを持つな言う。

「幫の関係者よ・・・ただ、最近の幫は、やってる事が妙なのよ」

店の外で煙草を一服しながらママがつぶやくように言った。店を構える時、いやその以前から幫には色々世話になっている。トウキョウの特別な基盤を持たない人間にとって、幫は頼もしい存在である。だからこそ、幫の変化には敏感なのだ。

昨夜以上の事態がトウキョウで起こると男は言った。それはおそらく、起こすという事なのだろう。それがこの店で働く娘達にとって、何らかのメリットとなる可能性は極めて低い。だからせめて、関わるなと言うのだ。

煙草を消して店に入ったママの背中を見る。マリアの手には、男が帰り際に密かに渡した名刺が握られていた。

第十七話 舞台設営

「ゼネストは三日後です」

最大限の努力をした結果だと、スグル・ハタナカは強調した。日本人特別居留区における戦闘がネットで放映された結果、特別行政区内の各団体も一気に強硬姿勢を明確にし始めたのだ。もはやゼネストを中止させる事は不可能で、準備期間の名目でその実施日時を僅かに後ろへとずらす事しかできなかった。

特別行政区の職員組合執行部にいるスグルにとって、それがゼネストで終わらないだろう事は容易に想像がつく。ヨコタがいつまでもシヨック状態にいるはずがなく、既に都心部への軍警察の重点配備は始まっているのだ。軍警察による特別行政区内の巡回も、遠からず再開される予定であった。

一部の市民団体や日本軍の支持団体などは、行政区内の各地でデモや抗議活動を開始しており、一触即発の事態に陥っている。今は保安局がそれらの行動を監視・保護しているが、何かのきっかけがあれば軍警察との衝突が起こるだろう。

「この結果を、君らは予測・・・していなかったのだろうか」

畳敷きの客間は静かで、庭の木々がかすかにざわめく音と鳥の鳴き声の時折聞こえるだけであった。ブンジ・タチバナは羊羹を口に入れながら言う。

「だが、リ先生は予測していた。いや、この状況はあの人を作ったものだ」

床の間を背にするブンジから見て右手側に座るのは、ハーモナイズコミュニティーの関係者である。流行の最先端を行き過ぎた服装と、奇抜さを通り越した髪の色が、部屋の雰囲気の中で浮いている。だがその彼も、表情は同じように深刻であった。

特別居留区における日本軍の戦いをネットに流したのは、ハーモナイズコミュニティーである。そもそもそれが可能となるようなプログラムを配布したのも、彼らであった。それはハーモナイズコミュニティーの理念や行動原理に合致する行為だったからであって、現在のよ

うな混乱を意図したものではない。彼らの語るムーブメントとは抽象的なものであり、政治的な具体性を有するものではないのだ。しかし、それらの活動資金を出したのは善隣幫である。

リ・ウエンはそれを利用していたのだ。東アジア軍に抵抗する日本軍、軍警察と戦うマフィア、それらは一夜にしてトウキョウの、いや東京の英雄となった。そして今の東京は、人々をその英雄的行為へと駆り立てようとしている。おそらく、ゼネストはそのまま暴動に変わるだろう。

ヨコタへのMS等の増援は、作戦失敗による責任処理が終わるまで棚上げにされると、東アジア中央政府は決定していた。軍を仕切っていたペキン閥は、完全に政府中枢での主導権を失っている。

MSや戦車などの多くを失ったままのヨコタに、都内全域で起こる暴動を鎮圧する能力は無い。だからといって、無抵抗のままトウキョウを去る事もないだろう。つまり、多数の犠牲者が生まれるという事だ。

「タチバナ先生・・・何とか、お力を」

スグルは畳に頭をつけた。トウキョウという街の現状についての不満や不信は、彼とて持っている。だが、それは多数の市民の流血によって解決すべき問題ではないはずだ。

ブンジは湯飲みを傾け、庭を眺める。家政婦の女性が別の来客を告げた。彼は、その来客もここに通すように言う。

「リ先生の仕込みは完璧だ、正攻法で何とかできると考えてはいけない。ドカンと派手な事をやらなければ」

ベーコンの焼けた匂いは空腹を刺激する。食卓の上で緑と赤を彩るサラダも食欲をそそる。コーヒーマーカーがドリップを終え、白いカップに香ばしい液体が注がれる。それでも、ベッドの上のふくらみは微動だにしない。

朝食の準備を終えた男性は、一つため息をついて毛布を引き剥がす。小さく丸まった女性の耳元にかすかな口付けをして、ささやく。

「ユンデイ、とりあえず何か食べるよ」

「・・・いらない」

「子供じゃないんだ。食べて、次の事を考えろ」

タルハは静かな声のまま、きつい口調で言った。真つ赤な目で睨んでくるユンデイを起こし、温めた牛乳を差し出す。彼女好みの熱いミルクは、口に入るまで時間がかかる。タルハはテレビをつけた。相変わらず、何も報道していない。

本社からの連絡もまだないという事は、対応を決めかねているという事だろう。自社製品の戦闘利用、予測はされていたがその事実は重かった。

対策は当然施してあった。戦闘利用する際には、武器等の制御システムを車体の側の操縦システムと接続しなければならない。電気システムなども同様である。そのような改造を施した場合、OSが強制的に全機能を停止するような罫を仕掛けていた。そのプログラムを組んだのがユンデイなのだ。

製品の性質上、武器等の運搬や移動に使用されることを防ぐ事はできない。だがMSのように直接的な戦闘に使用される事態は避けようと、自信を持って組み込んだプログラムがあっさり突破されたのだ。

彼女にとっては二重のショックであった。ようやく冷めてきたミルクをすすする。

「プラントの開発局レベルの解析能力だな・・・」

「関係ないわ・・・私の腕の限界よ」

寝乱れた髪のまままで食卓に着いたユンデイは、猛然とテーブルの上の物を口に運ぶ。抜本的な対策は今後考えるとして、今は再度の戦闘使用を防ぐための対策を考えなくてはならない。シユバルベ工業製多脚多腕型汎用作業重機が兵器として使われる事を、これ以上許すわけには行かないのだ。

タルハの分の朝食まで平らげた彼女は、そのままの格好でコンピューターを立ち上げる。画面に顔を向けたまま、タルハにはザフトの人間とのアポイントを頼んだ。

彼らであれば、軍用の高出力超短波無線を持つているかもしれない。多脚多腕型汎用作業重機は、複数で運用する時は互いに通信をやり取りして作業を行っている。N J下であるため無線には赤外線や超短波を利用しているが、その通信機能を使えば不正改造されたOSを外から停止できる。相手がその機能にまで手を出していればお手上げであるが、今はそこに賭けるしかない。

身支度を整えた彼は、顔くらいは洗えよと言って、部屋を出て行った。彼女はその言葉を聞き流してキーボードを叩き続ける。

ピアノの音を聞いて安心した。神経質になった子供たちにとって、何よりの事だろう。子供達の歌声を遠くに聞きながら、必要な書類をそろえた。既に特別居留区に設置した救護施設からは、悲鳴のような報告が入ってきている。

一つだけ救いがあるとするれば、寄付の集まりが異常なほど良いという事だった。額の多寡こそあれ、どこの企業どこの団体に行っても、寄付を快く引き受けてくれるのだ。活動資金のやりくりは、何とかなりそうである。人手に関しても、特別行政府は動かないが、区内の大小のボランティア団体が人員の派遣を準備していた。渡河の許可が下り次第特別居留区へと向えるだろう。

書類のチェックをしながら、ナタリア・ファリロスは不安も抱えていた。この国において、この手の活動とは基本的に歓迎されないものだったからだ。今までは、寄付を集めるためにどれだけ苦労したか分からない。

「それがあの夜を境に変わった・・・」

トウキョウ全体が、一種異様な熱気を帯びているのを、ナタリアは感じていた。この国の用語でいうのなら、「空気」というものが変わったのだ。人々は、その空気を読み損なうまいと、我先にと行動を起こしている。

特別居留区への義援金を募る街頭募金があちこちに立ち並び、集会所や公園では横断幕やプラカードの準備をしている人達が集まって

いた。

そこには、不慣れた身分証確認ゲートに文句も言わず並んで待っていた人々の姿などなかった。たった一晩でそこまで変わってしまった人々に、ナタリアは不気味さすら感じるのだ。

「坊ちゃん、どうされました」

ダルウィーシュ・ダルの声に、ナタリアは視線をドアの方に向けた。子供が一人、部屋の中を覗きこむようにしてドアに隠れていた。彼女は書類を置いて、その子のもとに向う。

「ゴメンね、サチ。まだお仕事なのよ。アメリカお姉ちゃんとお歌、歌ってらっしゃい」

ナタリアは子供に頬ずりすると、彼を遊戯室の方へと促した。職員が一人が、その大きな体をかがめるようにして子供の手を取る。

「お嬢……」

「ダル、印鑑証明のコピーはまだ残っていましたか？」

ナタリアはダルの持つていた書類を受け取るとそう聞く。あの夜の戦闘音は、孤児院にも響いてきた。子供達が不安を覚えるのは仕方ない事だろう。だが、特別居留区で被害にあった人々の事を考えれば、どうしてもそちらを優先しなくてはならなくなる。

子供達に付いてやりたいとも思うが、今はすべき事が多い。ナタリアはダルに、アメリカがどれくらいまでいられるのかを確認しておくように言った。

区内に取り残されていた課員がようやく全員戻り、グレートバリアリーフ号ではその報告が行われている。どれも断片的な情報ばかりであるが、事態の輪郭をどうにか把握できるレベルには情報が集まっていた。

ネット上に流れていた戦闘の映像も入手できたため、その分析も行われる。傭兵の使用していたMSの形状からは、ザフトの関与も疑わざるを得ない。当然、その場は紛糾する。課員の一人が怒鳴るように言う。

「我々は何なんですか？ 道化ですか？」

彼らがトウキョウで活動するのは、ザフトの新たな橋頭堡として、この極東の島国が使えるかどうかを調査する事である。だがその頭越しに、テロ組織の支援などを行っている連中がいた。それがザフトの総意であるのなら、自分達の存在意義は否定されたも同然だ。

エリックは頭の後ろで手を組みながら、天井に視線を向けた。蛍光灯が煌々と照らす天井は、明るいのにどこか寒々しい。

「総意ではないだろう・・・だから傭兵なんて使っている」

前大戦時から指摘されている事であるが、ザフトにおける現場の独走はしばしば味方をも混乱させる要因となっていた。今回の件も、どこかの半端者が勝手にやったと考えるべきであろうし、そうでなければ色々面倒な事になる。

市民軍であるザフトを、現代的な軍制を持った軍隊に改革しようという機運はザフト内にも生まれていた。プラント当局は、それを機に軍事費の削減をも視野に入れていたであろう。

当然そこには反発が生じ、その不満分子の中に過激な行動を起こす者がいてもおかしくない。エリックは続けた。

「少なくとも、トウキョウ情勢は予断を許さない。上がごたついでる中で動けば、現場がどんな目に合うか分からない」

報告の中には、軍警察による過剰な取り締まり行為の存在を指摘するものや、市民暴動の可能性を示唆するものもある。そんな中を下手に歩き回るのは、危険極まりない。今後は公式報道やネット情報の収集とその分析に集中し、情勢が落ち着くまで対外活動は控えるべきだと提案する。

全員に異議がないと確認したところで、キリルが挙手をした。彼は立ち上がって、アンノウンに対する調査は続けたいと言った。今回の戦闘においても、交戦は確認されていないながら、その存在はいくつかの映像で捉えられていた。

大破したガルバルディからの戦闘データ収集は終わり、既にプラント本国へと送られているが、十分なデータが得られているとは言いがたい。トウキョウ情勢とは特に関係のない調査かもしれないが、今を

においてその調査が可能な時はないと訴える。

今まで何も発言していなかった艦長が口を開いた。

「次は・・・壊してくれるなよ」

栈橋を離れ避難していたグレートバリアリーフ号は、東京湾上で大洋州の貨物船と接触していた。その時に、もう一機のガルバルディを受領していたのだ。キリルは深く頭を下げる。

あの機体は、必ずマリアの前に現れる。キリルはそう確信していた。

思ったほど人数は集まっていない。だが、こういった集会を行えるという事自体が普通ではないのだ。期間限定の歩行者天国でさえ、膨大な書類を有する手続きと、おびただしい数の警備を必要とするのが、今までだったのだから。

新宿御苑に集まっているのは、日本人特別居留区へ特別行政府からも支援の手を差し伸べるようにと訴えるための集会で、ざっと見て百名弱といったところだった。主催者らしき人間が、拡声器を片手に何か注意を行っている。似たような集会は、区内の各地で行われていた。

目黒では東アジア軍の軍事行動に対する抗議集会が行われており、軍警察が詰めている目黒駐屯地を刺激している。機動隊は区内の駐屯地を中心に人手に割いているため、新宿御苑には、特務課の一小隊のほか交通課の警官が配備されているだけであった。軍警察による特別行政区内の巡回が再開されれば、保安局は対応のための人手を確保できなくなるかもしれない。

先の事をいちいち考えないように、シユウ・サクラはミニパトに乗っていた婦人警官を呼ぶ。

「何て言ってた？」

「きちんと整理して歩いて下さいって」

「お前らなあ・・・」

ガキの使いじゃないんだぞと言って、集会がデモ行進をするコース

を確認するように言った。御苑に沿って特別行政区の中央庁舎に向ってくれるのならいいが、逆方向に歩くと市ヶ谷だ。

これ見よがしに置いているMSが何かをするとは思いたくないが、今のトウキョウの空気は、そんな予想を上回りそうなのだ。その時、自分がどのような身の振り方をすればいいのかが、分からなくなりそうだった。

警察官として市民の安全を守る。

シユウはいつの間にか自分達が保安局員ではなく、警察官になっている事に気付く。警視庁が制式に保安局に変わったのは、前大戦が始まるか始まらないかの頃だった。彼は、最初から保安局員として入庁した最初の世代だ。

頭が妙な感慨に耽っていたので、煙草を啜えて気を引き締める。何も、落ち着かせるばかりが煙草の効能ではないのだ。灰皿を探すと、言って、部下にその場を任せた。

「シマを召し上げられたか？」

「・・・！」

男の怒りの形相の面前に煙草を差し出した。葉巻しか吸わない人だったなど、それを引っ込めると男に何をしに来たのかを聞く。やつれた顔のコウキ・ヨシオカは、急速にその表情を萎ませていった。

携帯灰皿に吸殻を押し込み、シユウは良く晴れた空を見上げた。明け方の雲行き通りに雨になってくれれば、少しはマシだったろうにと思う。

本社への連絡をしておきたいといって、ルーイはヨシトとカズヤの二人とは別れた。どの道、二人ともそんな言葉は信用していないだろう。むしろ取材の足手まといになる人間を都合よく厄介払いできたと思っているに違いない。

公共交通機関は平常通りの運行なので、通勤時間帯ともなれば人通りは増える。スーツにネクタイ姿の男性、早足にヒールの音を響かせる女性、見慣れてしまった東京の朝の風景がそこに広がっている。少

なくとも、目に映るものは代わり映えのないもののはずだ。

だがルーイとて、街の空気が変わった事は分かっていた。その空気は、彼にとつて非常に居心地の悪いものだからだ。

「くっそ、つまんね・・・」

その場の人々を何かに駆り立てるような雰囲気。風のようにはつきりとした主張を見せるのではなく、ただまとり付いて心の奥を苛むような空気。

それは、母やエルフリーデから感じるもののような鮮烈さを持たず、もつと澱み濁っている空気だ。だからこそ、危険に感じる。この空気は、自ら立つ事を望むのではなく、他者の犠牲を欲するものだ。ルーイは路線図を見上げた。

アメリカは今、どこにいる。家か、病院か、孤児院か。焦っている自分を自覚しながらどうする事も出来ない。改札をくぐった直後に、電話をすればいいことに気付いた。改札をくぐり直して孤児院へと向う。

彼女の事が心配だった。孤児院にいる事は確認しているため、その身の無事を案じているのではない。この街の不穏な空気が、彼女に何をもちたらずかが分からないから不安なのだ。

「大丈夫・・・大丈夫だ」

言い聞かせるのは不安だからだ。彼女の穏やかな微笑が、とても脆いものに思えるから。あの優しい歌声が、とても弱いものに聞こえるから。この街の片隅で、ひっそりと過ごしていたあの美しい人が、この澱んだ空気の中で溺れてしまうのではないかと感じたから。

日本人特別居留区を迂回するように走る電車は、いつも以上に遅く感じる。乗客は込み合う車内で、未だうつつすらと煙を上げている特別居留区を見つめ、口々に東アジアの非道をなじり、日本軍の健闘を称えていた。昨日まで、昨夜のスポーツや歌番組の話題を口にするだけであった人々が、そんな事を話している。その、今まで見たことのない光景に、ルーイは慄然とした。

そして、一刻も早く彼女のもとにたどり着き、この場を、トウキョウを離れなくてはならないと思う。きつと、昨晚とは比べ物にならない

い事が起こる。爛々と輝く電車の乗客の目が、ルーイにそう確信させた。

こんな場所に、あの人がいてはいけない。ルーイはそう確信した。

サブカルチャーの世界における党派性というものは、極めて複雑である。自己責任を基調とした自由と反権力の世界という牧歌的な構図は、旧世紀の早い時期に失われた。自らの趣味の世界で完結するノンポリな人々のコミュニティという図式も、それを確固として維持できる人々は少数派だった。

ゴズミック・イラを象徴する遺伝子イデオロギーの嵐が吹き荒れた時、サブカルチャーはその嵐に巻き込まれる事なく独自の文化を構築していた、そうハーモナイズコミュニティは宣伝する。だが、それが誇大広告に過ぎない事は、ネットの住人であれば分かる事だ。

それどころか、メインカルチャーの側が積極的に総括と反省を始めた現在において、遺伝子イデオロギーに固執する者は、サブカルチャーの世界に活路を見出しているくらいである。表の世界ではあらかたパージされたブルーコスモスも、ネットの中ではいくつもの花畑を持っていたりするのだ。

そもそもノンポリという事は、簡単に染まってしまうという事ではない。アキハバラの街を見ればそれが良く分かる。

「仕事の速さだけね・・・感心できるのは」

あの映像が流れた翌日には、街のポスターを彩る女の子達の服装が変わっていた。メカと美少女というのは、日本オタクシーンの永遠のキーワードであるが、目と鼻の先で本物の戦争が起こった翌日に、露出の多い軍服で戦闘機に乗る女の子の絵が街に張り出されるのである。死の商人の端くれであるジュンコ・ヤオイとしても、その感覚は異常だと思った。

それは代替行為であり、人々の中にある好戦的な雰囲気やガス抜きとして作用するという見方もあるかもしれないが、おそらくそうでは無いだらう。加盟業者に流れてくる注文書を見れば一目瞭然だ。

日本人特別居留区の日本軍を多大な犠牲を払って排除した東アジア軍は、トウキョウ特別行政区全体を日本人特別居留区へと変貌させたのだ。アキハバラが特別なのでは無い。

改めて善隣幫、いやリ・ウエンに恐れのような感心を抱く。顧客とすべき相手ではなかったのだ。真正面のビルで凜とした表情を見せる女の子が構える自動小銃は、その銃の形式が分かるほど無駄に細かいディテールだった。ジュンコは視線を室内に戻す。

「組合としては、何かが起こる前にトウキョウを離れたい」

しかし、とジュンコは続けた。

「愛着があるわけではないが、この街には色々世話になった。幫に利用されたままというのも気に食わない」

組合としてはトウキョウから避難する準備を進めさせてもらうが、彼女個人としての協力は可能だと伝える。ハーモナイズコミュニティから来たという青年が、生意気そうな顔のままぎこちなく頭を下げる。おそらく幹部なのだろう、相手にへりくだるといふ事に慣れていないのだ。

若者の仕草が癪に障るといふ事は、もう若くないといふ事だろうか。ジュンコは頭を振ってそれを否定すると、相手の求める機材とその搬入場所の確認を行った。納期まで時間がない上に大量注文だ。腕が鳴るのを感じる。

強面の男達が、人の輪をかき分ける。車道にはみ出ていた人ごみが左右に分かれ、黒塗りの車が道を進んでいく。駐車場のゲートが閉まると、再び人ごみが車道に溢れた。完全防弾仕様の車であるが、人ごみから投げかけられる声は聞こえていた。

建物を取り囲む人達は口々に、公正な報道や検閲の反対を叫んでいる。トウキョウの大手メディアは、未だに昨夜の詳細な情報を報道できないうまなのだ。その原因が、ここにあると見られている。

東アジア共和国の国营通信社である報央社。地球圏の各地に支社を置き、各国のニュースを東アジア国内に配信する会社であるが、そ

こが東アジアの諜報活動の一翼を担っている事は、業界の常識であった。トウキョウ特別行政区の支社も、当然そのような活動を行っていた。

そこに乗り込んだのはコウキ・ヨシオカである。トウキョウの情勢は、もはや彼の理解の範疇を超越していた。

「ユ・ケティンを出せって言ってるんだ！ 本名だ、知ってるだろ！」

お茶を出しに来た女性社員にそうすぐむが、完全に足元を見られていた。彼の率いる凌雲会は、トウキョウのアングラを統べるマフィアの最大派閥として、東アジア軍とは対等のビジネスパートナーだったはずだ。

それが、今ではこの有様だった。トウキョウ中が鉄火場になり、東アジア軍は自分達をも明確な標的としているのだ。

どうしてこうなったのか、自分は一切のミスをしていないはずだ。コウキは怒りと不安に震える手を押さえ、茶碗を手にした。しかし応接室のドアが開く音に驚き、思わずそれを落としてしまう。

ユ・ケティンは、コウキを笑うことすら出来なかった。思えば、この男を提携相手に選んだ事から間違いは始まったのでは無いかとも思う。だが、それとて自分のミスであった。少なくとも、平時においては十分に有能な男だったのだから。

だが今のような非常時にまで、この男と繋がっておくメリットは無い。ケティンは尊大な態度を示して言う。

「ヤクザの世界では『けじめ』と言うのでしたか・・・どう、責任を取るおつもりで？」

「なっ・・・!!」

「先日、あなた方の抵抗によって我が軍が多大な被害を受けた事はご存知でしょう」

この場であなたに責任を取ってもらっても、こちらは困らないと言う。コウキの部下が背広の中に手を突っ込むと同時に、ケティンの拳銃がコウキの額に押し当てられている。

「報央社のジャーナリストをなめてもらっては困る」

蒼白になったコウキに、責任の取り方はそちらで考えるようにと

言つて、応接室を追い出した。おとなしくトウキョウを逃げ出すならそれでよし、他に何をしたところで、もはや何も出来ない男だ。

ケティンは深いため息とともに、その男の事を忘れる。

店はいつもとより空いている感じだ。酔っ払いの大声も聞こえず、隣の席で何が行われているのかを考えなければ、静かにグラスを傾けられる雰囲気だった。席に着くと、チーママが横に座る。

「ごめんなさいね、ローレンスさん。マリアちゃん、今日はまだなの」彼の好みより若干濃い水割りを舌の上で転がしながら、キリルは落胆を表情に出さないようにする。マリアは試験直前なので、遅い出勤になっているのだ。本当は休んでもよいのだろうが、生活を考えるとそうもいかないのだとチーママは言う。

そう思つて店内を見回すと、見知ったホステスがいらない。みんな、この時期だけ短期で働きに来る女性だそうだ。この店で働く女性は、ママやチーママなどごく一部を除けば、全員がマリアと同じような境遇にある。研修制度でトウキョウに働きに来て、毎年試験に臨んでいる。

それに受からない限り、いつまでたつても正規の労働者としては扱われず、低賃金での労働を余儀なくされるのだ。だから、このような場所で働かざるを得ない。

「でも、その試験も今年は・・・」

最後まで言い終わる事無く、チーママは別の席から指名を受けた。マリアがいないのであれば長居する事も無いと、キリルはグラスを煽る。店を出ようとしたところ、ママに呼び止められた。

誰も座っていないカウンターに腰を据える。オンザロックの氷が、グラスの中で小さな音を立てる。キリルの視線は、店の隅のピアノへと向けられていた。彼の耳の奥には、いつもマリアが奏でていた音楽が響いている。

あんなに美しい音を生み出す人が、扇情的なドレスに身を包んで夜な夜な男の相手をしている。そんな事実が、胸を締め付ける。

「幫が何を企んでいるか・・・知ってる？」

「それはこちらが聞きたい事です。だが、今夜の騒ぎは別の組織だ」
ママは驚いた顔をした。マフィアも、プラントから来た音楽関係者というのも、全て善隣幫と関係のある組織だと思っていた。彼女は、頭をめぐらせて構図の修正を図る。どうやらリ・ウエン以外にも筋書きを書いている人間がいるのだろう。

ゼネストはどうなるのかという問いに、キリルは分からないと答える。疑い深いママの視線に、彼は苦笑した。プラントは、トウキョウ情勢に関して積極的な情報収集を諦め、事後的な分析に力を入れているのだ。彼女が思っているほど、彼らは有能な機関では無い。

ウイスキーのアルコールが、喉を熱く通る。苛立たしげに煙草を取り出したママを視界の隅に捕らえた。この世界を泳ぎ渡るには、それ相応の才覚が必要なのだろう。夜の世界とは、表の世界と裏の世界の接点に存在する。女の媚びを店で売り、男は金と情報を支払う。そんな場所なのだ。

グラスの氷が融ける前に、キリルはウイスキーを飲み干した。

彼は確信する。あの人は、こんな世界に身を置くべきではないと。

あの歌声は、明るい世界で響くべきなのだ。

投光機の光の中では、既に足場の解体作業が始まっていた。解体を受け持つ作業員と、機材のチェックを行うスタッフが入り乱れ、現場は軽いパニックである。カクテル光線が溢れ、スピーカーが激しくハウリングを起こす中、ヘルメットも着けないままの男が複数の図面をもとに指示を行っていた。

この国の故事に一夜城というものがあるそうだ。一晩で砦を作り上げてしまった人物の才覚を語る故事であるが、真に称えるべきはそのプランに対応できたこの国の現場作業員のクオリティの高さであろう。瞬く間に解体の終えられた足場は、トラックに載せられ次の現場に向う。そのトラックが退くと同時に、別のトラックが次の機材の搬入に来るのだ。

「マジで、一晩で終わるぞ・・・これ」

男は機材のチェックを他の者に引き継がせると、トラブルを伝えてきた現場へバイクを走らせる。

ブンジ・タチバナなる人物が提案した計画は、荒唐無稽な無理難題だと思われた。ハーモナイズコミュニティの執行部の中には、速やかな撤退を主張する者もいた。それでも、トウキョウに降りてきた者達を中心に、計画への参加が決定されたのだ。

それは、自分達が引き起こした事態に対する責任というより、ある種の恐怖感からである。自分達の行為が持つ力が、現実的な力であった事に対する恐怖。

彼らは「融和と共存」という理念を掲げるが、テロリズムは使用しない。融和と共存を叫ぶテロリストが何を生み出すかは、既にクライン派なりターミナルなりが証明している。だからこそ、彼らはサブカルチャーを足がかりに、理念を表現してきた。

だがそれでさえ、使い方によってはテロリズムを生み出す事ができるのだ。自分達が、非暴力だと信じてきた行為そのものが、暴力を生み出さうという現実は、恐怖に値するものであった。

しかしここで逃げれば、自分達が行ってきた事の否定的な結果だけが残る。歌を捨てた歌姫の姿に失望したからこそ、彼らはもう一度「文化」の力に賭けたのだ。男はバイクのブレーキを掛けながら、ブンジ・タチバナが言った言葉を思い返す。

「ラクス・クラインになるか、ミア・キャンベルになるか・・・君たちは、その瀬戸際にいる」

到着した現場では、機材の配送ミスでセッティングに支障をきたしていた。今から正規の機材を手配する時間はないため、手元にあるもので何とかしなくてはならない。男は、各担当者を集める。

「リミットは4時です。それ以降は、別の人達の準備がある」

「配電関係は何かならあな」

「足場外してないから、セットの方を動かせば入るだろ」

「人は今手配してる」

作業着に軍手、ヘルメットに安全靴といった姿の人達は、既にフォ

ローに動いていた。機材同士のマッチングに関しては、コンピューター関係の技師をイケブクロから呼ぶ事になった。

今、トウキョウ中で、このような突貫工事が進められている。あとは時間との戦いだ。

ゼネストの開始は、地下鉄の始発が動く時間。明るくなれば、様々な抗議集会も企画されているのだろう。

「そこに、コレをぶつけるのか・・・」

音もなく空を飛ぶMSのコクピットで、ハニス・アマカシが笑う。こういった計画は、結果が見えないところが面白い。そして、彼は考えた。

あの歌声が響くべき舞台が整ったではないかと。

第十八話 東京祭

晴れ上がった空に、ポンポンと花火が上がる。甘い香りや香ばしい匂いが、色んな方向から漂ってくる通りは、たくさんの人でごった返している。掬い上げた金魚を誇らしげに見せる子供に、両親が微笑みを向けている。中学生らしき幼いカップルが、露天の少し怪しげなアクセサリーを手に取っている。

屋台の前に設えられたベンチには、ビールを片手に談笑する男性がいる。向こうのテーブルには、マージャンを打っている人達の姿が見える。模造紙に書かれた即席のトーナメント表に従って、囲碁と将棋の試合が始まった。

大通りの頭上には、提灯をぶら下げた電線が渡され、ビルの壁面にも垂れ幕や幟が飾られている。色とりどりの屋台からは、絶えず威勢のいい掛け声が聞こえてくる。街灯にくくり付けられたスピーカーから案内が流れた。

「11時より、特設ステージにおきまして、のど自慢パフォーマンス大会が開催されます。飛び入り自由です。こぞってご参加下さい」

ギターを抱えた二人組がステージに向った。大道芸人が口から火を吹き、見物客から歓声上がる。似顔絵屋の前で、女の子が澄ました顔を見せている。ラムネのビンを持ったまま転んだ男の子が泣き声を上げ、近くにいた老人がそれをあやす。スピーカーは迷子の子供の事を伝えていた。

隣り合うたこ焼き屋がしのぎを削り、駐車場に止まっているクレーパーの移動販売店には、若い女性が列を成している。ヒーローのお面をねだる子供の横で、怪獣の人形を買い求める大人がいた。

スピーカーから流れていたBGMが途切れ、ステージの様子が伝えられる。演歌の熱唱を終えた女性が拍手と共に舞台袖に下がった。中年男性によるビッグバンドの、玄人顔負けの演奏が喝采を浴びている。

近所の中学校の吹奏楽部が演奏し、ステージ前では小学生がマーチングを披露する。合唱曲には、観客も声を合わせた。

全てのパフォーマンスが終了すると、ステージに設置された画面が切り替わる。

「みんなあ〜！ 楽しんでるう〜!!!」

ステージを見物していた客だけでなく、道行く人や屋台に並んでいた人達までもが、画面を見て声を上げた。トウキョウでのライブコンサートを成功させたプラントの歌手。彼女の存在は、その時と比べても格段に知名度が上がっていた。

別の場所でライブを行っている彼女の様子が映し出され、彼女の歌がステージのスピーカーから流れる。彼女がいる場所まで届くのは無いだろうかというほどの、掛け声と歓声。リズムに乗った人々がジャンプするたびに、本当に地面が揺れているような音がする。

「家族と恋人と友人と、みんなで楽しんでえ！ 私も・・・みんなと一緒に楽しんじゃう！ 行くよ、新曲!!」

人の流れが滞らないよう、制服姿の警官が交通整理を始める。その警官に、町内会の詰め所からジュースが差し入れられる。

トウキョウは、その全域が祭の最中にあつた。それは突然始まったにもかかわらず、人々は待ちかねていたように街に繰り出していた。

第一報が入ったのは、朝の8時を過ぎた頃だ。しかし、しばらくの間はその報告の意味が分からないままであつた。一時間ほど後に映像の配信が始まり、それを通じてようやく事態が判明した。しかし、それが何故そうなったのかは、すぐに分かる事ではなかつた。

計画では、トウキョウ特別行政区の全域でストライキが決行され、それに応じて労働組合や学生自治会、市民団体などが各地で抗議集会を起こすはずであつた。善隣幫は菱丘組と共にそれに呼応し、軍を中心として東アジア関連施設への襲撃を敢行する予定である。

そうすれば、各抗議活動はそのまま暴動へと変化する。トウキョウに駐留する東アジア軍にそれを抑える力は残されていない。そして、新宿の庁舎から特別行政区長官を追い出し、ヨコタから東アジア駐留軍司令官を撤退させる。後は堂々と東京の独立を宣言し、日本自治政

府との連携を表明すればいいのだ。

「タチバナ・・・先生か」

リ・ウエンは呻くようにいった。安全を考慮する幹部の言葉に従って、ヨコハマに戻った事が失敗であった。自分の企ての全容をどの時点で把握していたのかは分からないが、僅かな準備期間でこれだけ大掛かりな事をやってのけるのは、ブンジ・タチバナのコネクションにおいて他には存在しない。

彼のコネクションはリ・ウエン自身も利用したものであるし、彼を完全に味方側だと思っていたわけでもない。だが、どれほどの警戒を払ったところで、このような発想に対処できたとも思えなかった。

東京に立ち込めていた積年の不平や不満、それを暴動というエネルギーへと転化させるために行ってきた準備を、土壇場でひっくり返された。ブンジ・タチバナは、祝祭という形でエネルギーを発散させようというのだ。市民の流血を避ける、それだけが目的であろう。

配信されてくる映像は、ゼネストによって出勤の必要がなくなった市民が家族と共に、通りという通りで行われている祭りに参加する姿だ。音楽関連のイベントを中心に組んでいるという事は、ハーモナイズコミュニケーションが関わっているのだろう。

あまりの奇策に、対応策が思い浮かばない。善隣幫の実働部隊に軍への襲撃を実行させたところで、これでは何の反応も起こらない。むしろ反発を呼ぶだけだ。

「・・・読まれて、いるだろうか」

映像の中には、保安局の機動隊が警戒に当たっている様子も映し出されていた。東アジア軍による何らかの介入行動に対する備えであろうが、それは同時に「東アジア軍を騙る者」への警戒行動でもある。保安局には実働部隊メンバーの情報もそろっているだろう。

この祝祭はエネルギーを発散させるだけではなく、別のエネルギーをも生み出すだろう。トウキョウに今までは違う新たな不安定さを生み出すという事だ。だがその新たな不安定さを、再び実際の反東アジア共和国行動へとつなげるための引き金は、リ・ウエンの元にはない。

通りの人だかりがその密度を増した。今までの熱気とはまた違う熱気が、人だかりの向こうの方から流れてくるのが分かる。今さら向きを変えようにも、この人の流れに逆らって動く事は難しいだろう。

公共交通機関が軒並みストップしているため、自分の足を使って移動するしかない。人通りのない道を選んで歩けば良かったのだろうが、地図を完全に把握していない以上、迷う可能性もあった。だから、多少人が多くとも広い通りを歩く事にしたのだが、完全に裏目に出た。

総武本線の高架をくぐったあたりから、人の動きは完全に止まっていた。外堀通りも人で埋め尽くされている。ルーイは、屋台と屋台の隙間を抜け、その裏側のスペースで一息ついた。

「おう、ごくろうさん」

「ハ、ハイ」

日本語で話しかけられて、咄嗟に言葉が出なかった。屋台のものを買い求められる状態では無いので、店の人も一服しているようだ。ルーイは、何が始まるのかを聞いた。店の人はなまりのある共通語で教えてくれる。

「神田祭の神輿が出るのさ。時期は外れちまったが、ここんところシケた祭ばつかったんでな、みんな張り切ってやがるわけよ」

そのまま祭の由来を話し出しそうな雰囲気だったので、ルーイは礼を言ってベビーカーを一袋買い求めた。そしてこの人だかりを抜ける方法を聞く。一度戻って、靖国通りを西に行き、白山通りを北上がれば、とりあえずは大丈夫だろうと教えてくれる。

ただし、ドーム前は同じように込んでいるかもしれないと付け加えられた。プラントから来た歌手がライブを行っているのが東京ドームなのだ。ルーイはもう一度礼を言って、通りに出る。

カステラを口に入れながら、何か飲み物も買わなければと思った。幸いにも、売っている場所はいくらでもある。ルーイは足を速めながらも、周囲をキョロキョロと見回していた。

一晩で様変わりしてしまったトウキョウの様子に、なかなか感想の言

葉が出てこない。道行く人々の様子に、昨日までの歪な熱気は感じなかった。同じ熱気でも、今のものはルーイを不快にはさせていない。しかし同時に、この熱気はトウキョウの人達のものだとも感じた。色とりどりの屋台が通りの両側を飾り、大きな交差点には野外ステージが設置されている。老若男女関係なく街に繰り出しその祭を楽しんでいるが、

「ノリに・・・ついていけない」

それがルーイの感想だった。街の人々の様子は、何の予告もなく唐突に始まったこの祭を、心のどこかで祝う準備をしていたという事だろう。少なくともルーイは、一緒になってこの騒ぎを楽しもうとは思えないのだ。それは一種の疎外感のようなものであり、不安を呼び起こすものだ。

彼は道を急ぐ。アメリカに寄り添っていたいと、寄り添っていて欲しいと感じていた。

当てが外れるにも程があった。少なくとも今のトウキョウの街は、ヘルメットや防弾ジャケットを着て歩き回れる場所ではない。

「アキバなら、ミリオタのコスプレで通るかもしれないがな」

ヒューの言葉も、どこに向けていいか分からないものだった。ともかく、今しなくてはならない事は、在留大西洋邦人の居所を確認する事である。だが、トウキョウ中で謎のフェスティバルが開催中であるため、多くの邦人がそれに参加したり見物に繰り出したりしている。映像で流れる街の人ごみを見て、ヒューは周りの部下と共に深くため息をついた。

大西洋連邦は、トウキョウ特別行政区におけるゼネラルストライキ実施の情報を入手し、それが反東アジア暴動へ発展すると予測していた。ヨコスカでは大型ヘリや飛行艇を準備、区内に潜入させた部隊によって暴動発生後速やかに邦人を三浦半島の基地まで脱出させる事になっていた。

ヒューはその水先案内人なのだが、まさかの事態になかなか次の行

動に移れないでいる。ゼネストを一大フェスティバルにしてしまうなど、前代未聞の事だ。

「だから、先に脱出させておけばよかったんだよ……」

服を着替えながらも、ヒューの愚痴は止まらない。暴動まで予測しながら邦人への退去命令を出せないのは、連合内におけるユーラシアとの主導権争いを有利に進めるため、東アジアとの関係を悪化させたくないからだ。治安面に不安があるのでトウキョウへの渡航を制限するなど言えば、メンツとやらにこだわる東アジア政府との関係がきしむのは目に見えている。

実際に暴動が起これば、多少の領域侵犯を行っても東アジアは文句を言えないと踏んでいるのだ。その方がヨコスカの存在意義も強調できるだろうという、軍の思惑もある。だから実際に暴動が起こる事を前提としながら、対処療法的手段しか用意していないのだ。

普段着に着替えたところで、この祭を楽しめる雰囲気ではなかった。身分証確認ゲートは現在完全に運用が停止されている上、この人ごみであれば自分達の素性が知れる事もないだろう。だが彼らは、その人ごみの中から特定の人を見つけ、その人を速やかに自宅へと帰さねばならないのだ。

はつきり言って、どうやってそれをやればいいのか分からない。とりあえず、全在留邦人の自宅住所を尋ね、在宅か否かの確認から始める。電話は繋がりが悪い上に、東アジアによる盗聴の危険が付きまとう。

「……ま、酒だけは飲むな。せめて、な」

ヒューはおどけてそう言ってみせた。部下達も愛想笑いを返す。街に繰り出し、ビール片手に野外ライブでも楽しめたら、どれほど素敵な事か分からない。

それでも、暴徒化した市民と破れかぶれの軍隊とが殺し合いをする街中を走り回る事に比べれば、人探しの方が格段にマシだと思いう事にする。ヒューはまず、持っている紙幣を細かくする事にした。何を買うにしても、その方が格段に便利だ。

これはおそらく、世界史に残る一級の謀略であろう。これに至った経緯を説明する事は、ザフトにとって計り知れない知識をもたらす事になる。最新鋭兵器を幾度となく敵に盗まれ、先端技術が簡単に漏洩してしまうザフトにとって、この種の謀略はもはや神の領域と言っても過言ではない。

これまでトウキョウで集めてきた各種の情報を洗い直す。断片的な情報も、一つの筋書きが見えれば不思議なほどスムーズに繋がるものだ。最終的にその筋書きは、市民による暴動と東アジア軍の撤退という形に結びつくはずだったのだろう。それを、直前でひっくり返した者がいる。

おそらくその人物は、東京市民の心情、日本人の心理を誰よりも深く知っている者なのだ。人だかりの中を練り歩く神輿の様子が映し出されている。大きな神社ではなく、ごく小さな神社でも同じような事が行われているらしい。

「こういうのは・・・プラントにやないからな」

今後ともザフトは、地球各地で活動していかねばならない。現地の住民が何を考えどう行動するか、それを感覚的に察知できない以上、正確な情報と的確な分析に基づくアプローチが必要となるのだ。エリック・リブーは、諜報活動の真髄に触れたような気がした。

だから彼には、キリルの姿が不真面目なものに見える。しかしキрил自身は、それに気がついていないだろう。彼は電話を掛けていた。「キрил?」

「よかった・・・繋がった」

マリアの声を聞き、キрилは安堵の息を漏らす。電話口の彼女は少し笑った。何を心配していたのかと。

キрилは口を濁す。彼の不安の正体ははつきりとしていない。だが豹変したトウキョウの様子は、例えそれが祝祭であったとしても不気味なものだ。本当なら、彼女の元に駆けつけたいくらいなのだが、今の彼はここから動く事ができない。

「少し外が賑やかで勉強の邪魔だけどね」

「そうか、試験か・・・」

「ええ、明日」

キリルは思わず聞き返した。今の状況で、試験など可能なのだろうか。一応ゼネストの実施中であり、公共交通機関などはみな止まっている状態だ。マリアが言う、この祭は日本人のためのもので、自分達には直接関係がないと。

その言葉に、返す言葉が無かった。受話器からは外からの音が漏れ聞こえてくる。キリルが一言謝った。

「どうして？」

「その・・・邪魔をしてしまった」

「いいの、声が聞いて良かったわ。もう少し、がんばれそうよ」

電話口での苦笑いは、彼女に伝わってしまったのだろう。受話器から彼女の穏やかな微笑が伝わってくる。会いたい、その一言を飲み込んで、キリルは受話器を置いた。

ネットで配信される映像は次々と更新されており、また個人による動画や写真の投稿も増え続けていた。少なくとも、山手線の内側部分はほぼ全域で何らかの催し物が開催されているようだ。それより外側でも、駅周辺などでは同じようにイベントが行われている。

この騒ぎは、ハーモナイズコミュニティという組織が単独で仕掛けたものでは無いだろう。当然、これまでの様々な反東アジア活動を背後から支援していた勢力によるものでもない。

「そして、日本自治政府が関与しているものでもない・・・」

チン・ヤンチャンは、綺麗に整頓された研究室の一角で、書き上げたばかりの論文の束を見つめながらつぶやいた。

不安定だったトウキョウ情勢が、一気に不透明になった。それに対して、日本自治政府はどのような対応を取るのか。その時、ツクバにいる自分達にはどのような処分が下されるのか。

ヤンチャンらの行っていた事は明確なテロ行為であり、そう簡単に無罪放免されるものでもないだろう。だが、次の研究環境を求めて就

職活動を行うモチベーションを、彼は持っていなかった。

書き上げた論文はSEED現象に関する研究の一部であるが、彼は行き詰まりのようなものを感じているのだ。自分自身の研究を振り返れば、それは常に何かの後追いだったような気がする。そして一度も、追いつくことはなかった。

SEEDの研究も、彼が先鞭をつけたものではない。もちろん、宗教的であったりオカルトチックであったものを、科学として捉え直す事はした。それが科学的な考察に耐えうるものであり、次の成果を生みうる物である事も認識している。

現にミツネ・ササは、ヤンチャンの打ち出した仮説に基づいて、SEEDコンバーターの原理解明につながる理論を構築し、それを実用に可能なレベルにまで仕上げている。そんな若い研究者の姿が、ますます彼のモチベーションを失わせていた。自分にもあんな時期があったのだろうか。

若い才能への羨望や、自身の衰えに対する不安ではなく、彼が自分のような科学者になってしまう事を考え、憂鬱になるのだ。彼のような才能が、アカデミズムから最も離れた場所に埋もれてしまっている事を嘆くのだ。受話器を取って内線に繋ぐ。

「ミツネ君を・・・ああ、済んでからでいい」

出撃直前のエヴィデンスの調整を行っていると言うミツネを、ヤンチャンは呼ぶ。パイロットのハニス・アマカシは、ハーモナイズコミュニケーションの人間だ。トウキョウの騒ぎに、彼も参加する予定があるのだろう。

MSで参加できるようなイベントを期待しているのだろうか。ヤンチャンは、トウキョウの様子を映し出しているパソコンの画面を消した。

「じゃあ、都心環状から三号渋谷線に入って。六本木の駅場所分かる？ 営団地下鉄の日比谷線。そこに簡易のリフト設置してるからそれで地下まで降ろして、大江戸線使って移動して。学校の近くで上

に上がれるはずだから」

ひつきりなしに掛かってくる電話は、区内各地における物資の消費状況を知らせるものだ。バッテリーやプロパンガスのような燃料、氷や食材、機材の部品、その他諸々様々なものをここで差配しているのだ。

トウキョウの街の上を走る高速道路と、街の下に張り巡らされた地下鉄が、その物流を支えていた。ゼネストによって高速道路は一般車両通行禁止であり、地下鉄は全て運休である。そこを利用して、迅速に物を運んでいるのだ。

ジュンコ・ヤオイは、壁に貼られた地図を見ながら受話器に向って指示を出し続ける。

ジャンク屋組合といっても、扱うものが機械だけとは限らないのだ。傭兵が機械を食べて生きていけるわけでもない。

しかし今回の仕事は、流石に規模が違った。何しろ、トウキョウに住む人間全てを相手にしなければならないのだ。準備期間も異常に短く、余裕を持って物資を手配する事が出来なかった。だからこそ、限りある量を上手にやりくりしなければならぬ。

「三田線から南北線に移れるでしょ。飯田橋で上に出て、五号池袋線に上げて。トラック回しておくから。で、そっちには巣鴨の余分を回す」

人々は祭を楽しんでいるようだが、ジュンコにその余裕は無かった。だが、彼女にとっては、こういった仕事の方が余程面白い。何より、予算を気にせずにパフォーマンスだけを向上させればいいのだから。

物資の購入もその輸送も、ただ同然の価格で行っていた。いったい、どのような手品を使ったのかは知らないが、どの業者も喜んで協力してくれるのだ。東京を舞台としたこの祝祭を、市民は一丸となって成功させようとしている。それだけ、人々は鬱屈したものを抱えていたのだろう。

声の出しすぎで乾いてしまった喉を水で潤して、一瞬電話の止んだ事務所で椅子に腰を下ろす。いつも事務所にいる男は、別の場所でト

ラックの配車を行っていた。窓から見えるアキハバラの姿は、いつにも増して混沌としていた。

食べ物などを売る屋台が出ている事は当然だが、ある一角では自作の本をテーブルに並べて売っていた。中には、長蛇の列が出来ているテーブルもある。

もはや普通の服がコスプレに見えるほどに、誰も彼もが何かの衣装を着ていた。人気アニメのOPを再現している集団があるかと思えば、往年の人気ナンバーを熱唱している者がいる。アイドルらしき少女の歌に合わせて、そろいのTシャツにハッピを着た男達が踊っている。

普段は屋内でひっそりと行われている事を、路上で行っているのだ。かつて存在したという歩行者天国の再来であった。アングラがそのまま噴出したような光景は、なかなか壮観である。

逆を言えば、トウキョウ特別行政区は、東京の持つこの力をずっと押さえ込んできたという事だ。

「敵うわけがない……」

再び電話が鳴り出し、彼女は僅かな休憩を切り上げて再び指示を送り始める。

夜空に花火が打ち上げられている。隅田川の川面に色とりどりの花が映り、夜そのものが明るくなる。上空に吹く僅かな風が絶えず煙を海側に流しているため、絶好のコンディションで花火は開き続けた。いた。

屋上を開放するビルも多く、見物人は屋台の食べ物を手に花火を見物している。こんな大規模な花火は、久しく開催されていなかった。「時期外れとはいえ、隅田川の花火は風情がありますな」

川に浮かべられた船の中で、猪口を傾けながら老人が言った。目の前で揚げられる天麩羅に舌鼓を打ちながら、杯を重ねる。花火見物のための船は一艘だけであった。隅田川は日本人特別居留区との境界線であり、そこへの立ち入りは原則禁止なのだ。花火の打上げ音にブ

ンジ・タチバナが、外を見る。

音さえ聞こえてきそうなほどに、西岸部は明るい光に満ちていた。祭は夜になつても続いているのだ。銚子を手にした彼は、酒を正面の人物に勧める。初老の男性は、居住まいを正してそれを受けた。

ブンジが笑い、かしこまらなくてはならないのはこちらだと言つた。

「いえ、全ては先生のご尽力の賜物」

「いやいや。親分さんにも、色々和无理をお願いした」

「まさか、これが私たちの仕事です」

男性は菱丘組の構成組織の一つで、トウキョウのテキ屋を統括する極星会の会長である。今日、トウキョウ中に出店している屋台の七割以上が、彼の組織に何らかの形で関連しているのだ。

ブンジ・タチバナが発案したこの祭典は、ハーモナイズコミュニケーションの企画力と情報力、極星会の行動力を車の両輪とし、穏健派労働組合がそれをバックアップする形となっていた。今のところ、その推移は順調である。

リ・ウエンの筋書きのように市民と軍が流血の事態を招かないようにとの思惑はもちろんあるが、それ以上に彼はトウキョウを何とかしたいと思っていたのだ。監視と管理の中で心を閉ざしてしまったようなこの街を、記憶の中にある活気溢れる街にしてみたかった。

神田祭や三社祭に代表される東京の祭や、隅田川の花火大会など、多くの人で賑わうはずのイベントは、治安上の懸念があるとの理由で、当局によって厳しい規制がかけられていた。特にここ五年ほどは、花火を打ち上げるどころか、神輿を引き出す事すら出来なかったのだ。

それだけに、人々はこの祭典に期待を掛けていた。無理なスケジュールでも間に合わせる事が出来たのは、東京の人々の思いがそれだけ強かったということだ。

花火見物に招かれたブンジは迎えの車を断り、朝早くに家を出て東京の街を横切るように隅田川まで歩いた。流石に足腰には堪えたが、道行く人々の表情や街の活気は、彼が取り戻したかった物であった。

「後は・・・」

ブンジの視線が反対方向に向けられる。西岸部とは全く逆に、死んでしまったかのように静まり返る東岸部、日本人特別居留区に思いを馳せた。

せめてもの慰めは、イベントを通じて行われている募金活動が順調に進んでいる事であろうか。いや、そのようなものは何の慰めにもならない事は、ブンジもよく分かっていた。何もかもが、今この瞬間に必要とされているのだから。

外の物音は一向に収まる気配を見せない。ドンチャン騒ぎという表現が日本語にはあるが、まさにそんな音が聞こえてくるのだ。一通りの作業を終え、集中力を弛緩させたウンデイ・ミナカミには、その音が耳障りで仕方がない。組み上げたプログラムのチェックを行わなければならないが、再び集中力を取り戻すのは難しそうだ。

目薬の最後の一滴を瞳に落とすが、もはや効果を感じられないほどに目が疲れているのが分かる。指は吊りかけており、肩はガチガチに凝っていた。そろそろと全身を伸ばして、明るい夜空に視線を向ける。

「つたく、のん気なのか何なのか」

通りには夜店が立ち並び、食欲をそそる匂いが風に乗って漂ってくる。素人バンドの演奏だろうか、あまり上手くないギターの音が聞こえてきた。タマユラ地区でも、トウキョウ特別行政区の祭典に呼応するように、様々なイベントが開かれている。

「花火が上がってる」

部屋の扉を開けたタルハ・アンワール・ガニーがそう言って、窓から首を出す。同じように外を覗くと、遠くの空に大輪の花が咲くのが見えた。今聞こえてきた音は、きつともっと前に打ち上げられた花火の音だ。

しばらくそれを眺め、二人は部屋に引っ込んだ。タルハの買ってきたものを食べながら、テレビを着ける。どの局も祭の中継を行っては

いるが、そもそもこの祭が何なのかを説明してくれる局はなかった。タマユラ地区の北側にそびえる分離壁、その向こう側ではついこの間大規模な戦闘があったばかりである。それにもかかわらず、このような事が出来るのは何故なのだろうか。あの壁の向こうでは、今も多くの人々が助けを求めているはずだ。

ユンデイは首を捻るが、今は別の事を考えなくてはならない。タルハに機材の状況を聞いた。

「ザフトの連中とは連絡がつかなかった・・・が、警備会社の人々が接触してきた」

「・・・？」

彼の話では、タマユラ地区で大規模な騒乱が起こる可能性があるのだと言う。日本軍シンパと、タマユラ地区における権益保持を狙うグループが共通の利益のもとに行動するらしいのだ。

ふっと言葉を切ったタルハに代わって、ユンデイが自分の予想を述べる。

「その騒乱にも、うちの製品が使用される。警備会社には、それに対処する手段がない」

「だから協力してもらえないか、と」

タルハが最後の言葉を引き取った。相手方の申し出を断る理由などどこにもなく、むしろ自社製品の問題であるため、こちらこそ協力を求めるべき立場であろう。問題は、その方法である。

こちら側のプランを伝えたところ、それにぴったりの機材を用意してくれるという事であった。ユンデイはそこに引っかかりを感じた。タルハも腕組みをして考え込んでいる。

確かに、背に腹は代えられない事態ではあるが、

「モルゲンレーテの実験とかに利用されるんじゃないや・・・ないわよね」

どうにも、生臭い世界に足をつ突っ込んでしまったようだ。だが、これ以上は自分達が考えても、どうしようもない世界である。食卓の後片付けをタルハに頼むと、ユンデイは再びパソコンに向う。

外からは、相変わらず賑やかな人々の声が聞こえてくる。

重機の搬入が始まって、瓦礫の撤去作業に手を付けられるようになった。まだ圧倒的に数は少ないが、とりあえず平らな場所を確保する事はできるだろう。死体と怪我人が並んで寝かされている状態だけでも解消しなければ、いよいよ感染症の懸念が現実のものになる。

フアリロス・フアマミアが設営した野戦病院は、際限なく増加する人の数に対応しきれなくなっていた。他にも複数の団体が、日本人特別居留区で救援活動を行っているが、機材などが最も整っていたフアリロス・フアマミアの病院が、それらの活動の中心にもなっているのだ。

「お嬢、ぐっ苦勞さまで・・・」

「私への挨拶は構いません」

色が変わってしまった白衣の男性をそう制して、ナタリア・フアリロスは状況を見て回る。特別行政区内での資金集めを一段落して、こちらの様子を見に来たのだ。幸いにも、目標額は余裕で達成している。

テントすらない河川敷には、怒声とうめき声、そして泣き声が満ちていた。多くの人達が懸命の救護活動を行っているが、それを上回る数の人が集まってきているのだ。日本人特別居留区は、半分が焼け野原でありもう半分が瓦礫の山になっていた。少しでも安全な場所を求め、人々はここを目指して来ている。もはや河川敷だけではなく、土手の上まで人で埋まっているのだ。

ナタリアの裾を引く手があった。彼女は素早く屈みこみ、その手の主を診る。だが、うめき声がかすかに言葉を発すると同時に、その人は事切れてしまった。まだ幼さの残る少年は、日本軍として戦っていたのだろうか。実弾の入った弾倉がいくつつか、腰のベルトに残っていた。

彼女は歯を食いしばって顔を上げた。血と泥とし尿の臭いが入り混じる空気を吸い込んで、涙をこらえた。少年の目を閉じさせ、手を胸の前で組ませる。

立ち上がった彼女の視線の先、そのはるか遠くに花火が上がった。

高い建物が軒並みなくなり、隅田川の打上げ花火が、荒川の側からも見えるのだ。音もなく開く美しい花に、ナタリアは涙を溢した。

「ダル、行きましよう」

傍らの男性にそう言っ、彼女は足を進める。涙は拭わず、流れるままにする。不条理を、こんな悪趣味な光景として現したものは、一体誰なのだろうか。

いや、これは不条理などではない。トウキョウの人間は全て、この惨状を知っているはずだ。爆撃の音を聞き、戦闘の光景を映像として見ていたのだ。そこで人が暮らしている事を知っているはずだ。そんな全てを知っていてなお、あのように浮かれられるのであれば、それはもはや異常だ。

ナタリアの背筋に、冷たいものが触れた。トウキョウの騒ぎが何故起きたのか、それは彼女の与り知らぬ話である。だがどんな理由があらうと、あの騒ぎは異常なのだ。何かきっかけがあれば、その異常さは惨状へと姿を変えるだろう。

そんな思い付きに確信めいたものを感じ、彼女は体を震わせる。焼け焦げたMSのシルエツトが、花火の光に淡く照らされた。

第十九話 爆弾

雰囲気には慣れていている。張り詰めているようで、どこか諦めに似た空気が漂っている場。ただ、いつもより人の数が少ないような気がする。ゼネストによって公共交通機関がストップしている影響だろう。本来なら、人数が減るなどという事はありえないはずなのだから。

顔写真の貼られた受験票を机の左隅に置き、ポケットから鉛筆と消しゴムを取り出す。手荷物は全て別室に置かなくてはならないのだ。腕を組み、目を閉じた。心を鎮め、集中力を高める。

外国人特別研修生日本語検定試験、受けるのは今年で五回目である。これに合格しなければ、正規の労働者として見なされない。特別研修生は、社会保障を受けられず、最低賃金よりも低い研修賃金で働くしかないのだ。病気にでもなれば、即座に生活に行き詰る。帰国のための費用すらなく、わざと犯罪を犯して強制送還される道を選ぶ者もいるという噂まである。

たいていの研修生は、普通の仕事だけでは家族への仕送りまで出来ないため、別の仕事を掛け持ちしている。しかし特別研修生は、入国時に申請した職場以外での労働を原則禁じられているのだ。そのため、掛け持ちの仕事はほとんどが不法労働であり、その賃金も極めて低いものとならざるを得ない。

だからここにいる人達は、誰もがマリアと同様に苦しい生活を送っている人達だ。それでも、苦しい生活費をも切り詰めて家族へ送金している。

「なあ、試験はちゃんと実施されるんだろうな」

前の方の席で、そんな会話がなされていた。会場の時計は、試験実施時刻の十分前を指していた。マリアはもう一度目をつぶる。

代々木の会場に時間までに到着するように、朝早くに家を出た。早朝の街には、昨日の騒ぎの残滓が残っていた。そればかりか、その騒ぎを再び始めようと準備を行っていた。清掃車と配送の車が、ひっきりなしに道を行きかっていた。

それは、どこまでも自分とは無関係の光景である。その事がより一

層、マリアの胸を締め付けるようだった。この街の人達は、自分達が今日、どんな気持ちでこの試験に臨んでいるのかを知らない。知ろうとしないのではない、ただ純粹に知らないのだ。

使えなくなれば強制送還させればいいだけの労働力。それを維持するための試験。この試験についてどんな噂が流れていようと、それを受けるしかない自分。不安定な政情が一向に改善しない彼女の祖国には、家族を養う手段などどこにもない。

マリアは頭を振った。今は試験に集中すべき時だ。スピーカーからチャイムが流れるが、試験官の姿は見えなかった。会場がざわめきだした時、スピーカーからアナウンスが流れる。

「ゼネストの影響で、試験問題及び答案用紙の配送が遅延しております。そのため、九時より開始の試験は時間を変更して実施します」

午前の試験が丸々なくなり、午後の試験の後、夕方の五時から午前に予定されていた試験が行われると言う。会場のざわめきに、僅かな安堵が流れた。マリアもそっと息を吐く。

もしこの試験が中止になれば、どうなっていたか。それが心配でならなかったのだ。

院庭には既に近所の人が集まっていた。今日もここではバザーが開かれると言う。朝食を終えた子供達も、職員と一緒にその準備をしていた。今日はお汁粉が振舞われるらしく、大きな鍋が用意されていた。

「サチくんですか？ いや、見てないですけど」

ルーイはそう答え、辺りを見回す。尋ねた職員は頭を下げて、台所の方に向った。ルーイは昨日一晩、この孤児院に泊めてもらっていた。

本当であればアメリカのそばに居たかった。だが試験直前の彼女の邪魔をする事は出来ず、食事の差し入れだけをして彼女の家を離れたのだ。孤児院に来たのは、その時彼女に頼まれたものを届けるためだった。彼女がもう着なくなったと言う服を何着か、バザーに出すた

めに持って来たのだ。

日本人特別居留区への支援活動のために、職員が多くが出払っていたので、ルーイは夜の間だけでも留まって欲しいと頼まれ、ここで一晚を過ごしたのだ。ここにいる職員に比べたら、何とも頼りのない用心棒だったと思いつながら、ルーイは孤児院を出ようとする。

先ほどの職員がウロウロとしていた。まだ子供を捜しているのだろう。

「僕も探しましょう」

ルーイはそう声を掛けた。彼はそのまま院の外に出る。別にあてがあるわけではないが、おそらく外に出ているだろう。足を駅の方に向けた。

昨日、あれだけ騒いだというのに、今日も早くから屋台やステージでは準備が整えられていた。気の早い屋台からは、早くも食べ物匂いが漂ってくる。都心部ほどではないが、ここも駅周辺はかなりの賑わいだったのだろう。

人の数が増えてくると、迷子を捜すのも大変になる。ルーイは足を速めた。屋台が立ち並ぶ通りを素通りして、駅構内に入る。切符売り場の前で立ち尽くす子供がいた。手には、何を買ったのか紙袋を一つ提げていた。

「電車は走っていないよ」

子供のそばでしゃがみこんだルーイはそう言う。どこか行きたいのかと聞くと、子供は小声で答える。

「ママのところ」

あの孤児院で唯一、院長の事をママと呼ぶのが彼だった。その子、サチが何故院長をそう呼ぶのか、詳しい事は知らない。院の子供の中では年長の方だが、他の子供たちと比べても幼い感じのする子だ。ルーイは、孤児院に戻ろうとサチに促す。

おとなしく言う事を聞いた彼の歩調に合わせて、ルーイも孤児院に向けて歩き出す。子供に対してどう接していいか分からず、ただ無言で歩くのだが、何となくそれも変な感じがした。ルーイが口を開く。

「院長先生はお仕事だろ、あんまり、邪魔したら・・・」

ルーイは言葉を切った。うつむき加減のサチの表情に、わがままな子供の様子を見て取る事が出来なかったのだ。彼はただお祭見物に出たかったわけでも、院長に構って欲しかったわけでもないのだろう。

だから、何も言わないのだ。ルーイには、その気持ちが分かるような気がしたから。

孤児院に戻った彼は、日よけのテントの設置を手伝う。

街行く人々の笑顔に、部下の頬も緩んでいるのが分かる。それを咎めだてしようとは思わないが、やはり緊張感に欠けると言わざるを得ない。現在の任務は、歩行者天国の交通整理でも、祭の揉め事処理でもないのだ。

シユウ・サクラは、しきりと酒を勧めてくる町内会長に対して慇懃な態度を取り続ける。既に赤い顔をしているこの手の酔っ払いに、怒鳴るだけ無駄なのだ。部下の報告を聞き、次の指示を出す。シユウは、一つの報告に眉を顰めた。

「・・・方向は間違いないか？」

「低空なんで、目撃情報は確かです」

ヨコハマ方面から飛来したヘリコプターが、渋谷の高層ビルに到着したという情報だった。日本自治区からの越境飛行は軍のスクランブル対象であるが、ヨコタに動きは無いようだ。低空で発見が遅れたためか、ヨコタの機能不全のためかは、この際関係なかった。

飛来した方向と到着した場所から、それが善隣幫の関係者である事は確実であった。この事態に対して、何らかの手を打つてくると言う事かもしれない。シユウは、警戒を強めるように指示を飛ばす。

このにこやかな街の姿の裏側に、激しく燃え盛る感情が存在している事は、シユウも感じていた。予定通りにゼネストが行われれば、人々のその感情は容易に暴力へと転化しただろう。そうなれば、シユウは苦しい立場に追い込まれる事になったはずだ。彼の仕事は、それを取り締まる事なのだから。

ゼネストから発展した市民暴動を取り締まるより、この祭に紛れて騒乱を画策する職員を取り締まる方が、よほど警察官らしい仕事である。厄介なのは、その職員とやらが東アジア軍の人間だけではないという事だ。

シユウの手元には、ヨコハマを拠点としてトウキョウでも大きな勢力を持つ華僑系マフィア・善隣幫と、日本最大の指定広域暴力団・菱丘組の手配者リストがあった。先日、東アジア軍警察とやりあったのも、この連中である。

ただ幸いな事に、現在行われているイベントの出店を仕切っているのが、菱丘組の構成組織である極星会であり、菱丘組の中に騒ぎを起こそうという目立った動きは無いようだ。問題は、善隣幫である。

渋谷のビルに入ったのが、その頭目と見なされる人物、リ・ウエンである事に間違いは無いだろう。だが、彼らの考えている事が不明確なのだ。暴力団対策課だけでなく、外事部、公安部なども独自に追っているらしいのだが、はつきりとした事が分からない。保安局の各セクションが、それぞれ東アジア中央政府に対して近い遠いなどの異なった立場を取っているため情報の共有もなく、縦割りの弊害が増幅して現れているのだ。

「ヨシオカを絞めとくんだったか・・・」

ゼネストは三日間の予定であり、このイベントもそれに合わせたものだろう。あと二日を無事に乗り切る事、それが第一の仕事であった。

ジユースの空き缶に煙草の吸殻を捨てたシユウは、近くの女性に分別が出来なくなると怒られる。彼は丁寧な謝って、空き缶を洗って捨てた。この分なら、ゴミ捨て場に爆弾を設置する類の事は不可能だろう。彼は防犯のイロハを改めて思い知らされた。

船内は賑わっていた。グレートバリアリーフ号は、船の一般公開を行っているのだ。埠頭にも出店が立ち並び、仮設のステージ前ではマーチングバンドのパフォーマンスが行われている。

船の食堂はレストランとして開放され、特別価格のランチコースが人気を博していた。小さな子供が、神妙な顔つきでナイフとフォークを動かしている。ホールではお抱えの楽団がクラシック音楽を奏で、カップルが静かに耳を傾けている。

ザフトの調査員が寝泊りしている場所は、関係者以外立ち入り禁止の区域であるが、流石にこの雰囲気の中で仕事をしようとも思えなかった。メールの送信を終えたエリックが、背筋を伸ばしながら言う。

「ま、仕事もないしな・・・」

不測の事態に備え区内での活動は禁じられている上、このお祭り騒ぎの何を調査分析すればいいかも分からない。ジュンコ・ヤオイからは、この騒ぎを仕掛けたであろう人物の名前は教えてもらっている。だが、その人物に接触するにしても、ある程度時間を置いてからでないと内容のある話は聞けそうにない。

椅子を回転させたエリックは、キリルが睨んでいるノートパソコンの画面を覗き込んだ。アンノウンとの交戦データの一部である。キリルが視線をそのままに、厳しい声で聞いた。

「何か、対策は無いのか？」

「ねえよ、そんなオカルト対策」

謎の力を発生させるMS、エリックもその力については噂程度には知っている。SEEDコンバーターと呼ばれる謎の装置によって発生する力場。前大戦時に、条約違反のMSとともに極秘運用がなされていたという話だ。

だが、それは真面目に話せば一笑に付される程度の話であり、エリックも週刊誌の都市伝説だと思っていた。いや、その実物らしき姿を見せられたところで、容易に信じられるものではない。

金属を切り裂き引き千切り、ビームの軌道を捻じ曲げビームサーベルを折り曲げる。連合の対ビーム防御兵器に関する技術が極めて高いのは事実であるが、あのような性能を見せるバリアの存在は、エリックも知らなかった。だからといって、オカルトめいた話をそのまま信じる事もできなかった。

「この祭典に免じて、出てきくれないことを願う方が建設的だぜ」
「そうだな・・・」

キリルは短くそう言って、もう一度映像は最初から見直す。そんな願いを聞き届けてくれる相手ではない、キリルはそう確信している。何故彼女が狙われたのかは分からない。だがそれは、気まぐれや悪戯の類ではないはずだ。何らかの意味があつて、彼女を狙った。ならばもう一度、彼女を狙って現れるはずだ。

だから彼は、対策を練る。マリアを守るために。

被写体には困るわけがない。機嫌のいい人々は、快く質問に答えてくれる。だが、これは一体何の取材だというのだろうか。トウキョウの街で何が起こっているのか、現場を歩けば歩くほどそれが分からなくなってくる。

カズヤ・イシは質問に答えてくれた男性に礼を言いながら、胸に内で毒づく。それが顔に表れたのだろうか、ヨシト・モリが怪訝な顔をした。

「気持ち悪いとは思わんか？」

「旧世界への攻撃があつたばかりで、このバカ騒ぎという事ですか？」
それもある、そう言つてカズヤはカメラを構える素振りを見せた。

トウキョウ特別行政区で爆弾テロというのは珍しい事ではなかった。それにもかかわらず都市活動に大きな支障はなく、市民生活に大きな影響が現れる事はなかった。日本人特別居留区への攻撃であっても、それは変わらないはずだ。これまでのように、翌日から当たり前前の生活が続くはずだった。

それがどうだろう。地下鉄の駅が爆発して死傷者を出しても何も変わらなかつたトウキョウは、日本人特別居留区への東アジア軍の攻撃とそれに反撃する日本軍の映像が流れただけで、ここまで変わってしまったのだ。それは、とても気持ちの悪い事である。

確かに、この街に通底していた不満のようなものは存在した。タマユラ地区を拠点に、区内への潜入取材を繰り返すうちに、それははっ

きりした形ではないが見えるようになっていた。

「それが・・・こんな形になるか」

入り口を開放してあるビルに上がって、窓からカメラを出す。人の海の上を、神輿が船のように渡っていた。威勢のいい掛け声が、ここにまで聞こえてくる。写真に写るのは、活気溢れる祭の様子だ。

だが本来このカメラに写るはずのものは、こんな様子ではないはずだ。彼らはもともとゼネストの取材をするつもりだったのだから。

今のトウキョウは、本来取るべきであった姿を何者かによつて意図的に変えられたのだ。それが良い事なのか、悪い事なのか、それを判断する事は不可能だ。だが、今の状態が「不安定」である事に変わりはない。それが「安定」目掛けて動き出せば・・・

「何が、起ころう？」

つぶやくように、カズヤは言った。少なくともそれは、ゼネストという言葉で表現できるものでは無いだろう。

すなわち、ゼネストという姿すらトウキョウが本来取るべき姿ではなかったという事なのだ。首を傾げただけのヨシトの表情に、カズヤは苦笑いを返す元氣も無かった。

ジャーナリストとしての経験がヨシトよりもはるかに長いカズヤは、もつと明確な不安を抱えている。何かが起こる前の嫌な予感。だが、取材機会が訪れないことの方が良い事とは、ジャーナリストとして取材しなければならぬ事なのだ。

「充電とフィルムの補充はしておこう」

彼らのカメラは、被写体にポーズを要求する事ができない。出来るのは、その姿を全て逃さずにフィルムに焼き付ける事だけだ。そのための準備だけは、しておかなくてはならない。

誰一人いない、正確には生きている人間が誰一人いない場所。これだけの焼け野原と瓦礫の山である、死体ならいくらでも出てきそう。焼け焦げたトラックが横転したまま放置され、破れたドアのガラス部分に人型の炭が引つかかっていた。

ただ音響探査では、周囲で車両が走り回っているのを捉えている。生存者の捜索かもしれないが、見つかるのは死体ばかりだろう。ハニス・アマカシの目は、空しか映していないモニターを見つめている。エヴィデンスを搭載したアツザムは現在、日本人特別居留区のほぼ中心に潜んでいた。仕掛け爆弾と地雷によって大きく陥没した道路に、ミラージコロイドによって時折歪む透明な巨体がすっぽりと収まっている。軍が早期に動くかと思っただが、まだ様子を見ているようだ。

しかしどの道、ツクバに生きる道は無い。自分達を切り捨てにくる日本自治区軍を相手に立ち回りをしたところで、彼にメリットなどないのだ。彼にとって必要だったのは、自らのSEED現象発現条件の確定と、それを任意に発現させるための訓練。そしてSEED現象によって膨大なエネルギーを生み出すSEEDコンバーターの現物である。

その双方を手にした以上、テロリストの真似事も終わりであった。あとは、あの「歌声」を手に入れるだけでいい。

「人の遺伝子をも震わせる、あの声……」

ハニスの瞳は深く深く透き通っていた。

仲間達はトウキョウでまた何事か行っているようだが、彼にしてみればそれはヌルいやり方でしかない。文化の発信によって、既存の体制、秩序に対してカウンターを打つ。それがやがて既存のものを変革させる力となる。その事自体に異論は無い。

だがそれで変わるのは社会だけである。人間そのものは変わら無い。人の瞳は曇り濁ったままだ。人間の自由とは、変化への進化への可能性の事なのだ。SEEDとは、その一つの形だ。

幼い頃に聞いたラクス・クラインの歌、それは彼にとつての啓示であった。彼女が政治化したとき、彼は知った。その啓示は人によって為されたものではなく、あの歌声によって為されたものなのだ。

ハーモナイズコミュニティに参加しながら、彼は常に主流派とは異なる行動を取ってきた。SEED研究の被験者としてオーブに降りたのも、彼の独断である。故に、彼がこれからしようとしている事も

また、独断であった。

「あとほただ、巡り合う時を待つだけだ」

彼はモニターに写真を映し出す。彼の探す人物の写真、そして彼女に関する様々なデータ。そこから推定される、彼女の現在位置。彼は時計を見た。

エヴィデンスを動かすのは、夕方以降となる。流石に、真昼のトウキョウをMSが飛び回るわけにも行かないだろう。彼は目を閉じて、音楽のポリリズムだけを上げた。非可聴領域まで再現できるスピーカーから流れるその歌は、彼の心の琴線をかき鳴らし続ける。

ビルの最上階から、地上の様子を窺う事は難しい。だが、今そこで何が行われているかは、部屋に設置された複数のモニターによって確認する事ができる。都心部だけではなく、郊外にもこの騒ぎは波及しているようだ。

この祭典は、トウキョウを一気に非日常の空間にした。一時を非日常で過ごした人々は、そのまま日常へと帰っていく。この祭典が終われば、トウキョウ特別行政区は再び何事もなかったように、市民生活を始動させるだろう。日本人特別居留区での東アジア軍の蛮行など、日々のテロ事件と同じ文脈でしか語られなくなる。

それは、リ・ウエンがもつとも恐れた事態であり、もつとも手を焼いた事である。人々に「日常」の異常さに気付かせ、それを打破するための行動に駆り立てる。そのために、あらゆる手段を講じてきた。「どれほどの時間をかけただろうか・・・」

今回は、初めてそれが成果を生んだ。

日本軍に対して資金援助や傭兵の斡旋、各種装備の調達をバックアップし、東アジア軍の能力を大幅に損耗させる事に成功した。同時に、日本軍による都心部でのテロ活動能力も失わせ、情勢沈静化後の治安面での不安を解消させた。

そして、アングラ勢力の結集、市民レベルでの抗議活動、そして行政府一般職員を巻き込んだ形でのゼネラルストライキ。あと一押し

でそれらは統一された反東アジア行動になるはずだった。現時点で大型兵器のほとんどを失った東アジア軍に、東京市民の行動を押さえ込む力は無い。

あとは東アジア軍の撤退を見届け、東京の独立を宣言すればいい。そうすれば、東アジア共和国を構成する各地域に、そのうねりが伝播する。ペキンによる強権的統治がもはや限界を迎えている事は、明白な事実なのだから。

そのビジョンが、今日の前で崩壊しようとしている。あの夜、自らが日本人である事を自覚したはずの人々は、今再びそれを忘れようとしている。

「戦う事を恐れるだけで、何が見えるというのか」

市民の流血を避ける、そのために日本人としての尊厳を手放させようというのだ。行動を規制され、発言の自由を制限され、入手できる情報すら操作される、そんな檻のような「日常」に再び戻そうというのだ。文化の発信、サブカルチャーによるカウンター、そんなもので政治は動かない。

今のトウキョウは、壮大な茶番劇を演じているに過ぎないのだ。部下からの報告を受けたウエンは、打開策の見えない状況に焦りを覚える。

保安局の各セクションが自分達を監視しているのは当然であり、菱丘組が動いていない以上、善隣幫が重点的に狙われている。下手にこちらから動けば、一斉摘発の可能性もあるだろう。

「奥の手も・・・間に合わんか・・・」

市ヶ谷がMSを動かしたり、ヨコタから都心へと部隊の移動があったりすれば、一気に状況は動く。しかし、東アジア軍に打撃を与えすぎた事が裏目に出ていた。彼らとすれば、このままお祭り騒ぎで終わってくれば御の字なのだから。

握り締めた拳をぶつける先もなく、彼は窓から東京の街を見下ろす。

化粧をしたのが久しぶりのような気がする。スキンケアをサボり続けていたために、ファンデーションののりが悪いのだが、あまり時間も掛けられない。スーツのスカートがきつくなっており、この仕事が終わったらダイエットに取り組む事にする。そういえば、丸顔がさらに丸くなったようにも感じる。

「柔らかい方が、抱き心地はいいぜ」

などという夫の意見には決して耳を傾けず、ユンデイは体重計の針を正しい位置に戻しておいた。ダイエットに取り組むためにも、この仕事は成功させなくてはならない。

タマユラ地区でも、特別行政区内と同様に、街中で様々なイベントが行われていた。電車も、両地区を繋ぐ区間だけが臨時運行されており、人の行きも頻繁に行われているようだ。主な大通りは軒並み歩行者天国と化しているため、タクシーを使えない。様々な食べ物の香りをつつ切って、二人は目的のビルへとたどり着く。

面会の相手は、タマユラ地区の警備保障会社で顧問を務めている男性であるが、指定された場所は、地区の中心部から離れた海沿いの倉庫街であった。流石に、ここまでくると人もいない。

「これ・・・本物ですか？」

タルハが当然の疑問を口にした。倉庫の奥に無造作に置かれている機械は、特殊な電子兵器であった。量子通信の原理を応用し、対象となる電子部品に直接プログラムを送り込む事ができる兵器、俗に量子ウイルスなどと呼ばれているものだ。

ドラグーンシステムがデバイス側の自律プログラムと量子通信を併用しているのは、量子通信が未だに十分な情報量を伝達できないからである。そのためこの量子ウイルスを送り込む装置も、その信頼性は驚くほど低く、兵器としての実用化を各国とも断念しているのが実情だ。

テストのために作られたものや、極秘で実戦投入されたという噂も聞くが、どれも都市伝説の域を出ないものであった。それが今、目の前にある。何でも、かねてより善隣幫から注文を受けていたアキハバラのジャンク屋組合が入手したものらしいのだが、それを何故かこの

倉庫に放置していたそうだ。日本人特別居留区攻撃の翌日、匿名でリークがあり警備保障会社が差し押さえたのだと言う。

「確かにこれが動けば、確実にうちの機械を止められますが」「止めてもらわねば困ります」

警備保障会社のハルサ・ニビは言った。一部過激派が、タマユラ地区での騒乱を画策しているのだ。

その計画とは、日本人特別居留区とタマユラ地区を分断する分離壁を破壊し、特別居留区の人間を大量に難民としてタマユラ地区に流入させるといったものだった。それをもつて「人道上重大な懸念を生じる事態」とし、オーブ本国による軍事介入を招こうというものだった。

タマユラ地区租借期限の延長交渉をしないという本国の方針に対して、既得権益を有する側が巻き返しを図っているのだ。それも最悪の形で。

「そんなことしたら・・・戦争ですよ」

「ですから、止めて頂きたい」

計画の発動時期は不明確だが、おそらくはトウキョウ側で何らかの混乱が起これば、そののどさくさに紛れて過激派も動くだろうとのも事だった。いつまでこの祭が続くかは、誰にも分からない。

ユンデイとタルハは、機械とコンピューターに強いスタッフの手配を頼むと、目の前の機械に取り付いた。

駅前の騒ぎとは異なるが、孤児院で行われているバザーも盛況であった。近所の人が持ち寄ったものを、再び近所の人を買っていく。子供達が焼いたクッキーやケーキも、よく売れていた。神妙な顔でお釣りを数えている子供の表情を、ルーイは小さなカメラに収める。

院の前に車が止まった。院長が姿を現すと、職員達は整列して彼女を出迎える。彼女の表情を見ると、そのような対応に辟易しているようだ。彼らはそれを改めようとは思っていないのだろう。

バザーの手伝いをしてきている近所の人達に挨拶をして回り、彼女は建物の中に消える。ルーイは街の様子を聞いておこうと思った。

「救護所からの報告は？」

「こちらです、お嬢」

受け取った書類に目を通しながら、ナタリアは上着を着替える。ゼネストでどの企業も動いていない事や、祭でほとんどの人が出払っている事から、寄付の要請は一時休止する事にした。その間、日本人特別居留区で陣頭指揮を取る事になっている。

生存者の捜索はすでに打ち切られているが、これからは被災者の生活支援が必要となる。物資等の集まりはいいのだが、それを適切に配分するために、人手が必要とされるのだ。

ドアの向こうから聞こえるのは、電話口で何事かを激しい口調で訴えている彼女の声だ。ルーイはその場を離れようとする。この状況では流石に邪魔が出来ない。園庭に戻ろうとした彼は、廊下を歩いてくる子供を見つけた。

その子は、お盆を手に慎重な足取りで進んでいる。お茶と、きつと駅前の屋台で買ったのである。うたい焼きが載せられていた。真剣なその表情に、ルーイはそつと道を譲った。その子は片手を離し、危なっかしい手付きでドアをノックする。

「サチ？ どうしたの？」

「ママ・・・これ」

ドアを開けたのは、出かける準備を整えたナタリアだった。既にダールは表の自動車で待っている。作業服にヘルメットを抱えた姿の彼女は、しゃがみこんでサチの顔を見つめる。

「ママのために買ってきてくれたの？」

頷いた彼の顔がパツと明るくなる。ナタリアはたい焼きを手にし、湯飲みのお茶を飲み干した。彼女はたい焼きを半分に割って、大きい方を彼に差し出す。

「ゴメンね、サチ。一緒にお祭行けなくて」

彼女はそう言うと、彼の頬に優しくキスをして立ち上がる。ちゃんとみんなのお手伝いをするのよと言い残し、彼女は遠ざかっていった。

残されたサチの表情にさす陰、ルーイには分かるような気がした。

彼は何も一緒に祭見物に行きたかったわけでも、タイ焼きが食べたかったわけでもないのだ。母に、ただ一時の休息を取って欲しかっただけなのだ。何かに駆り立てられるように活動する母の姿に、言いよらない不安を覚えるのだ。

まるで自分自身を削るように、他人の事しか語らない母の姿に、無自覚の不幸を感じるのだ。子はただ、そんな母に幸福であつて欲しいと思うだけなのだ。

しよんぼりとたたずむサチの姿を、ルーイは掛ける言葉も見つけられず自分の事のように見つめていた。そう言えばこの子は、アメリカの弾くピアノをいつも一番近くに座つて聴いている子だった。

十二時を回つたところで、再度試験時間の変更が伝えられた。二度に渡る急遽の時間変更に対して、忍耐を見せていた者達もその一時間後に伝えられた試験中止の連絡には、怒りをあらわにした。事務局が詰めている部屋には何人も人が押し掛け、怒鳴り声だけが廊下に響き渡っている。だが事務局の人間も、ほとんどがストライキでここには来ていない。

彼らの不安を掻き立てるのは、再試験の日程が不明である事だ。年に一度しか行われぬ試験が開催者側の都合で中止となれば、何らかの措置がとられてしかるべきである。そうでなければ、ここに集まっている人達はもう一年、研修生という立場で劣悪な労働条件に耐えなくてはならないのだ。

例え、この試験の合格率が宝くじを当てるのと同じくらいの低確率であつたとしても、そこに賭ける以外道は無いのだから。アメリカは筆記用具を持って立ち上がった。机の左隅に置かれた受験票に手を伸ばそうとするが、それを止める。

「・・・必要、ないものね」

再試験は行われまいだろう。彼女と同じように考えている者も多いようで、彼らは一斉に帰り支度を始めていた。幾度かこの試験を受けていれば、自然と分かつてしまう事もある。ここは、低賃金労働者

以外は unnecessary 都市なのだ。

荷物を置いてある部屋に出入りする人達に、不満の顔は無かった。この試験を受けたところで、合格できるとも思っていなかったのだから。結果だけ考えれば同じ事なのだ。アメリカが、窓際に置いてある鞆に手をかける。

テキストの表紙が、微かに開いた口から見える。『外国人特別研修生日本語検定試験・最新予測問題集』二年前に買った物で、内容を丸暗記するくらいに使い込んでいる。端がすれ切れた表紙が、それを物語っていた。アメリカの目から涙が溢れた。

諦めてなど、いるわけがないのだ。何としてでも試験に合格し、きちんと働く場を確保する。例え一縷であっても、望みを持ってこのテキストを繰っていたのだ。

医療従事者としての資格を祖国で取得し、その専門技術を持って働けるという触れ込みで、この国にやって来た。祖国よりも進んだ医療環境の中で、更なるスキルアップも可能という話だった。その話がどうしようもない誇大広告だったという事はすぐに分かったが、逃げ出す事など出来なかった。

父は戦争で死に、一人残った母を養っていくためには、政情不安と経済混乱によって働く場のない祖国ではなく、ここで働くしか方法がないのだ。窓際に置かれた鞆を掴もうとした彼女の目に、外の様子が飛び込んでくる。

色とりどりの屋台が道の両脇に並び、その間の道をたくさんの人が楽しげに歩いている。交差点に設けられたステージでは、バンドによる演奏が行われていた。晴れ渡る空の日差しは、それを見守るかのよう穏やかだった。

アメリカは手にした鞆を再び棚へと置いた。

そしてそのまま、部屋を後にする。事務局の前は、まだ人がごった返しており、当分の間騒ぎは収まりそうになかった。彼女は試験会場となつているビルを後にする。

やがて彼女は、背中に大音響を聞き、激しい爆風が通り過ぎるのを感じた。

第二十話 スタンピード

緊急幹部会が再度招集される。解散寸前だった対策室には再び人が戻り始め、基地に出した待機命令解除の命令を停止する。会議室のスクリーンには、現在のトウキョウの様子が映し出されていた。急変が相次ぐ事態に、集まった者は一様にうんざりとした表情をしている。

「ともかく、各部隊には当初の計画通りの行動を」

「ツクバの接收も急がせろ」

オオサカにある日本自治区行政院では、一週間以上前からこの日に備えた準備を行っていた。東アジア軍による日本人特別居留区攻撃、それがどのような影響をもたらすかを正確に予測した上で、対応策を練っていたのだ。

東アジア共和国中央政府への働きかけは奏功し、トウキョウ特別行政区への部隊増派は阻止する事ができた。オーブや大西洋には、この問題に対して一切の関与を行わないとの約束も取り付けている。

あとは駐留東アジア軍の能力欠如という事実を持って、日本自治区軍のトウキョウ進出の理由とすればよい。ゼネストがそのまま市民暴動へ発展すると、自治政府は予測していた。

その予測は、希望的観測に基づいたものでも、誤った情報に基づくものでもなかったはずだ。少なくとも、リ・ウエンはそれを画策していた。だからこそ、彼の思惑を利用する形で、計画を立案したのだ。

それがあのお祭り騒ぎである。実際の展開は全く異なるものだったのだ。おそらくは、全く別の場所で全く別の思惑が動いたのだろう。

「部隊移動は二時間を目途に完了します、しかし・・・」

言いよんだ言葉を促すと、東アジア軍部隊にも動きが見えるという。残存のMSなど大型兵器を中心に、多摩川と利根川の両方面へと部隊が動いていると言う。たいした数は残っていないが、橋梁破壊などの工作が行われると厄介な事になる。

「こちらが呼応していると思われるわけか・・・」

日本自治区軍と駐留東アジア軍との交戦は、流石に避けなくてはならない。もし交戦が不可避であるのなら、相手側に100%非がなくてはならない。しかし、ここで手をこまねいて時間を浪費すればいい、リ・ウエンのシナリオ通りの展開となるだろう。それもまた、避けなくてはならない。

だが、ゆつくりと考えている余裕は無かった。犠牲者の数は、今も増え続けているのだ。当初計画では、暴動発生から自治区軍のトウキョウ突入まで一時間となっていた。しかもその暴動は、新宿と市ヶ谷を結ぶ線を中心に局所的に起こるものと想定していた。

トウキョウからの第一報が入って既に一時間、部隊移動に二時間、さらに東アジア軍による何らかの抵抗を受けながら特別行政区に入るとなると、さらに三時間は見積もらなくてはならないだろう。時間だけでも六倍、暴動の規模が予測よりも大きいため、犠牲者数は想定の十倍では済まないだろう。

スクリーンに映し出されるのは、炎上する車であり、爆発するガスボンベであり、火の着いた瓶を投げる男であり、銃を水平に構える兵士であった。燃え残ったタコ焼きの屋台の飾りが、その光景に言い様のない寒々しさを与えている。

盾に当たる銃弾の音は、半端なものではなかった。防弾仕様とはいえ、軍用の小銃弾を想定したものではないのだ。後方から撃ち込まれた催涙ガス弾に、敵が怯んだ隙に部隊を後退させる。車両の陰に隠れて、状況を確認した。近くの公衆電話の端末に差し込んだ部品からケーブルと受話器が延ばされ、都内各所との連絡が取れるようになっていくのだ。

受話器についているボタンを押しながら、次々と入ってくる情報を聞き取る。都内に配備していた機動隊はほぼ全てが何らかの交戦状態に入っているようだ。

「いいか、やり返すのは構わん！　だが、やり合うな！」

ひたすらそれだけを命令する。今のシユウ・サクラに細かな事など

指示している余裕は無い。彼の頭上も銃弾が飛び交っているのだ。後退してきた隊員が合図を出す。

部隊が身を隠していた三台の車両から一斉に放水が行われ、同時に刺激臭が立ち込める。催涙ガスの原液を混入した水を高圧放水しているのだ。激しかった自動小銃の音がピタリとやむ。覗き込むと、激しい水流に追い立てられるように、カーキ色の軍服が走り去っていく。

真ん中の車両で放水装置を操作していた隊員が、体を仰け反らせて落下した。ビルの上から狙撃されたのだ。ボンボンというガス弾を発射する音とガラスの割れる音が響き、ビルに催涙ガスが撃ち込まれる。

ガスマスクのような装備を有していない兵士は、煙から逃れるように非常階段に飛び出し、そこを高圧放水銃で狙い撃ちされる。階段の踊り場から、二人の兵士が転落した。

「地図ー」

シユウは負傷者の救護と、部隊の取りまとめを命じる。その間に、彼は先ほど聞いた情報を地図上に並べた。次に行くべき場所を決めなくてはならない。再び受話器を取る。

「目黒は完全に制圧か・・・その人達は動かすなよ、騒ぐのは全員ヤーさんだ。検挙しろ」

「主戦場は靖国通りですか？」

「新宿の庁舎を見捨てたって事は、市ヶ谷に集中するって事だろうか」
暴動を起こしている市民と、それを鎮圧しようとする軍の間に入り、市民への被害を最小限に食い止める、それが保安局警備部のとりあえずの方針であった。だがその方針を貫けるような状況ではない。東アジア軍は、ほぼ無差別に攻撃を繰り返しており、一般市民の避難誘導などを行っている保安局員も標的とされている。

そのため、機動隊はそれに対する応戦を行わざるを得なかった。幸いな事に、練馬と朝霞の両駐屯地から派遣された東アジア軍部隊は、化学戦を想定した部隊ではなかったため、機動隊のガス弾が比較的有効に利いていた。さらにはマフィアの実働部隊が、ゲリラ戦さながら

に東アジア軍部隊を襲撃している。

しかし目黒の駐屯地では、市民と軍との戦闘により既に百人を超える死者が出ている模様だ。今新宿の特別行政府庁舎周辺に集まっている人達が、駅を越えて市ヶ谷方面に向かえば、その比ではない惨事となるだろう。

「動ける部隊を全て外苑西通りに集めよう。富久町西と四谷四丁目では暴徒を止める。御苑から溢れる人間は、神宮の方に誘導」

シユウは、整列している部隊に移動を命じた。問題は、どれほどの部隊が、実際に動ける状況にあるかという事だ。

一つ一つを聞き分ける事ができれば、それは人の声かもしれない。だがそれらが合わさりうねる様に聞こえると、もはや人の声とは違うものになる。それは、一頭の巨大な生き物の咆哮のようなものだ。

環七通りを行進していたデモ隊の先頭は足を止めるが、後方にはそれが伝わらない。そのため行進している人の間の距離は狭くなり、さながら満員電車のような様相を呈していた。鹿浜橋を渡って都心部に入ろうとするデモ隊の前に、即席のバリケードが築かれている。東アジア軍は橋を通さないつもりだ。

デモ隊を先導する様に歩いてきた機動隊員が、盾を構えて隊列を組む。デモ隊を後退させ、その場を収めるのが彼らの役割だ。だが、環七通りを埋め尽くすような人の圧力を止められるわけもなく、通りから周辺へとあふれ出たデモ隊の一部が軍のバリケードに対して投石を開始した。

それを合図とするように軍の発砲が始まる。機動隊の拡声器は、人々に下がるようにと必死になって指示しているが、銃声と悲鳴、硝煙の臭いに混ざる血の臭いは、人々の理性を失わせるのだろう。足を止めかけていたデモ隊が前進を始めた。

「隊長……！」

隊員の叫びと共に、紺色の機動隊車両が跳ねるようにして爆発した。バリケードの裏側から現れた装甲車が重機関銃を向けている。

辛うじて小銃弾に耐えていた機動隊の盾も、もはや役には立たない。声を上げるまもなく、機動隊員が文字通りに消し飛ばされていく。

デモ隊は先頭から順に人々が倒れていき、逃げようとする人は何も分からずにただ進もうとする人達とぶつかりあう。重機関銃だけでも止めようと突進した機動隊の車両が、横転して炎を吹き上げる。

「よし。前進して暴徒どもを蹴散らせ！」

バリケードの中で指揮を取っていた軍人が号令をかける。小銃を構えなおした兵士達は、突如頭上で巻き起こった音に視線を向けた。

バリケードを設置する鹿浜橋の上に掛かる首都高速川口線。その高架から壁を突き破ってトラックが落下してきたのだ。一人の兵士は、その運転席の男と目を合わせた。その目が笑っている事に恐怖を感じるより早く、爆風がバリケードを満たした。トラックの直撃を受けた装甲車は押しつぶされ、爆発によって兵士達の反撃能力は失われた。

デモ隊が唸り声とともにバリケードを乗り越える。踏み潰される兵士、殴り殺される兵士、引き摺られ川に投げ込まれる兵士、生死を問わずに殺された。

熱狂の波に飲み込まれながら、ルーイは必死に理性を奮い立たせる。橋を渡りきったところでデモを抜けて横道に入った。トウキョウ全体が、このような惨状を呈しているのだろう。

アメリを探し、助け出さなくてはならない。ルーイは震える脚を叱咤して走り出した。

何事においても、初動というものが肝心である。その点において、ヒューはミスを犯したと言わざるを得ない。だがこの突発的な騒乱に対して、どのような初動を行えばミスではなかったと言えるのだろうか。

唯一の救いは、昨日のうちに在留邦人全員に接触し、彼らが大西洋軍から派遣されている理由を伝えておいた事だ。そのため多くの人々が、今日の外出を控えてくれた。騒乱が確認された時、居場所の分

かっている人達は速やかにトウキョウから脱出させる事ができた。

問題は警告を行ったにもかかわらず、フラフラと祭り見物に出かけた人である。家の近所のイベントに行っているのだから、まだしも、都心部に出かけられていればその安全を確保するのは容易ではない。

「国際問題になっても知らんぞ!!」

ヒューは力いっぱい手榴弾を投げると、立ち上がって自動小銃を乱射する。手を挙げて部下の射撃を止めさせると、人通りのなくなった道を駆け抜けた。倒れた兵士の部隊章を横目で確認し、軍部隊の区内での展開の様子を推測する。

伊達に東アジア軍に潜り込んでいたわけではない。非常時における区内での部隊展開について、MSの運用も前提としたプランの策定に携わったりしていたのだ。今回はMSを使わないプランであるが、それでも予測は容易になる。問題は、予測できたところで完全に戦闘を回避できるわけでは無いということだ。ヒュー達が探している対象は、軍が鎮圧対象としている人達の中にいるのだから。

火炎瓶やコンクリート片を投げつけている人が立て籠もるビルの前に、装甲車が進み出てきた。部下の一人が背中筒を下ろして肩に担ぐ。ボスツという低い音と共に発射されたロケット弾が装甲車を突き破った。爆発した装甲車に歓喜の声が上がる。

ヒューはそれを無視し、ハンドマイクを使って大西洋の公用語で呼びかけた。聞きなれない言葉での呼びかけにビルの歓声が止んだが、それに応じる声は聞こえない。

「……っそ、全員なんて見つけ出せるかよ」

部下の気持ちを代弁するように吐き捨てる。ヨコスカからは応援の部隊が派遣されているがこれ以上人数を増やせば、間違いなくバレる。だが、現行の人数で居場所の分からない在留邦人を全て探し出すなど、不可能な話であった。

破壊された装甲車に付けられていた番号から、それがヨコタ所属のものだと分かる。ヨコタに残存していたMSは日本自治区への牽制のため出撃しているはずだが、戦車や装甲車の類の一部は都心の制圧のために動かされているのだろう。今まで以上に、動きにくくなる事

は明白だ。

自分達の安全を考えれば、これ以上の活動は出来ないと判断した方が良さそうだ。ヒューは地図を頭に思い浮かべながら、脱出用ヘリとの合流ポイントまでの道順を考える。そこにたどり着くまでに一人でも在留邦人を見つけたらラッキーであり、見つけられなかったとしても最善は尽くしたと言えるはずだ。

部下にそれを伝えようと立ち止まった彼は、道に影が通り過ぎるのを見た。部下達も一斉に空を見上げる。

空を横切ったそのMSに、ヒューは見覚えがあった。

本郷三丁目から営団地下鉄東大前にかけての一带は区内でも有数の激戦地となった。東京大学のキャンパスで抵抗していた学生団体に対して軍が攻撃を行っていたのだが、その背後から東京ドームに集まっていた市民が襲い掛かったのだ。さらに、上野や浅草を拠点としていたマフィア組織がそこに合流し、事態が悪化した。

機動隊が別の場所へと移動した事から、市民と軍が直接ぶつかり合う事態になっていたのだ。通りのビルは軒並みガラスが破れ、並んでいた屋台も全て潰され燃え落ちている。火炎瓶の直撃を受けた車両が急停車し、中から兵士が転がりだした。薄暗くなった街の中、その炎は不気味に明るい。

圧倒的な数の差によって、軍部隊は各個に包囲殲滅されている。数名ずつで東大の各建物を一つずつ制圧していく作戦が完全に裏目に出ている。投石や火炎瓶だけでなく、化学薬品や携帯用のガスボンベを利用した火炎放射器で抵抗する学生、拳銃や短刀で武装したマフィアに攻撃を受け、それに怯んで後退すれば湧き出るように現れる無数の暴徒に取り囲まれる。

死体の山を築きながら軍部隊を押し返していく暴徒の群れに、軍部隊は退路すら奪われていった。

「・・・あれ、戦車じゃないですか!？」

撮影拠点としているビルの屋上から、ヨシト・モリの指差す方向に

カメラを向ける。白山通りを下ってきた戦車三両が、西片交差点で向きを変えるのが望遠レンズの向こうに見えた。そのまま道沿いに向ってくる戦車の砲塔が、僅かに向きを変える。

振り返ってシャッターを切った。戦車砲の直撃を受けて大きく抉れたのは、東大の中心にそびえる安田講堂。カズヤ・イシは、周囲の様子を写真に収めるよう指示し、シャッターを切り続ける。

時折銃弾が飛び去る音が聞こえるが、構っていられる事態ではない。本郷弥生交差点で再び向きを変えた戦車は、人間を蹴散らしながら爆走する。無限軌道に巻き込まれる人間の写真と、戦車砲を浴びせられ崩れていく東大の建物の写真を、交互に撮っていく。どこからか投げつけられた火炎瓶が戦車の上で燃え上がるが、全く意に介さないように、戦車は進む。

背後でうめき声が上がった。ヨシトがもんどりうって倒れる。肩を押さえる彼に駆け寄ろうとした時、カズヤはダンプカーが猛スピードで走るのを見た。彼は再びカメラを構える。

荷台にガスボンベを満載したダンプカーが、東大正門前のT字路目掛けて突っ込んでいく。砲塔を東大側に向けた戦車がそれを旋回させた時には、ダンプカーは一両の戦車に衝突していた。同時に、積まっていたガスボンベが一気に爆発する。

音ではなく衝撃波そのものが襲い掛かる中、カズヤはそれをカメラに捉えていた。道路が直径二十メートルくらいの大ききで陥没し、他の二両の戦車もその穴の中で沈黙している。

口の中に入った砂利を吐き捨てるが、この凄惨さがもたらす不快感は残ったままだ。カズヤは急いでヨシトの応急処置を始めた。

ボディガードにとつて、黒いスーツとサングラスは制服のようなものなのだろうか。いかにもといった感じの男達が、硝煙のくすぶる拳銃を下ろして合図を送る。プラントの警備会社から雇った人間である、相手が正規の軍人であつてもナチュラルであれば遅れをとる事は無い。

「見るな！ 走れ!!」

警備責任者の声に追い立てられるように、数名の男女が通路を走り抜ける。ハーモナイズコミュニティのメンバーと、つい数時間前までここでコンサートを行っていたアイドルである。

コンサートに集まっていた観客が、暴徒に変貌するのにたいした時間がかからず、彼らはその騒ぎに巻き込まれないよう、身を潜めていたのだ。情報では、北西方向が比較的落ち着いており、いったんそこから回避した後、イケブクロの本部から避難したメンバーとともに脱出する予定となっている。

会場となった球場を横切る形で移動する。暗い中にそびえるセツトが、とても寒々しい。ここで歌を聴いていた人達が、今はトウキョウの各地で暴れている。彼らはそこに恐怖のようなものを感じた。

会場となっているドームを出る。すぐ横の庭園の中に車を隠しているため、そちらに足を向けようとする。会場周辺の様子も、変わり果てたものとなっていた。当たり前のように、動かなくなった人間が倒れている。

「・・・歌わなきや」

「はあっ!？」

足を止めようとしたアイドルの手を、メンバーの男性が無理やりにつ引っ張る。彼女が何を言ったのか理解できない。

「止めなきや・・・こんなの・・・」

「止まるかよ！ 早く走れ!」

「だってミリアは・・・」

「あれは、火が着かないように歌ったんだ。俺達とは逆でな!!」

融和と共存、自由と正義、それを伝えるために彼らは活動していた。サブカルチャーによるカウンターでメインカルチャーを揺さぶる。アングラのムーブメントで社会にうねりを生じさせる。それは全て事態を動かすもの、火を着けるものだ。

だが、一度動いてしまった事態はどうする事もできない。自分達の作り出したものだからといって、それは制御できるものではないのだ。着火と消火は全く別物なのだから。

この事態に、彼らは直接的な関与はしていないかもしれない。だが、トウキョウに満ちていたエネルギーに一つの方向性を与えたのは、彼らの活動だ。人々の漠然とした不平や不満に、自由の希求や愛国心という形を示した。そしてそれが、このような形で表現されたのだ。

その形は、彼らの目指す表現とはあまりにも異なっていた。だから彼らは、このような事態を想像すらしなかった。

今ならラクス・クラインの愚かさも理解できる。このような事態を開けるのは、これを上回る圧倒的な暴力だけなのだ。それを持たない彼らは、ただ逃げる事しかできない。

喧騒の中心は都心部へと向かったのであろう。住宅街は静まり返っていた。だがそれは、不気味で空虚な静けさだ。ブンジ・タチバナは家政婦を呼んだ。近所の様子を見てきて欲しいと言う。女性や子供、老人がちゃんと避難できているかを確認しておきたいのだ。「先生に付いて行ってもらえば大丈夫でしょう」

彼が先生と呼ぶボディーガードの男性に、床の間に飾ってあった刀を渡す。コレクションもずいぶん少なくなってしまった。ブンジの身を案じる家政婦に、もっと危険な事もしてきたものだと言った。人のいなくなった邸宅で、ブンジはパソコンを起動させる。都内の様子を映し出しているサイトは複数存在し続けており、そのどれもが酷い情景を映し出していた。こうなる事を恐れて、あれだけ大規模なイベントを企画したのであるが、結局は一日半程度の時間を稼ぐしかできないかった。

騒乱の発端は、代々木における爆発事件だという話である。情報は錯綜しているが、その点は概ね間違っていないようだ。爆発したビルにいた人に、かなりの犠牲者を出したようだった。

あれだけの人数である、パニックが起こるのは半ば必然である。そしておそらく、リ・ウエンはその機を逃さなかったであろう。菱丘組も動いたはずだ。爆破事件は東アジア軍の職員によるものという

噂はあつという間に都内を駆け巡り、祭に来ていた人達はそのまま東アジア軍への抗議活動の参加者となった。

市ヶ谷や目黒の駐屯地では、もはや戦闘と呼べるような事態にまで発展し、朝霞や練馬の駐屯地を出発した部隊も、各地で銃撃戦を行っているという話である。善隣幫や菱丘組の構成員がその中心だと思いたいが、マフィアにそこまでの度胸があるとも思えなかった。

新宿の特別行政府庁舎は、既に暴徒化した市民が侵入しており、その機能は完全に麻痺している。そして、東アジア中央政府から派遣されてきた上級幹部達の行方は、不明のままであった。

「どうで・・・」

間違ったのか。誰がこの事態を望んだのか。それを論じても、今は意味のない事である。現に、事態は最悪の方向に進んでしまったのだから。

トウキョウ特別行政府という体制が、このような事態を生み出す潜在的な圧力を有していたのは明らかである。だが、その政治的無策の被害者たる東京市民が、この暴動の被害者となるのなら、それは不条理であろう。東アジア中央政府の政策にどのような正当性があるとしても、人命が失われる事態とは比べられない。

パソコンのディスプレイに映るのは、道路の上で倒れたまま動かない人の姿だった。その人の姿は、リ・ウエンの語った理想の底の浅さ、薄っぺらさを如実に示している。彼の語る独立とは、結局このようなものでしかなかったのだ。

ブンジは嘆息と共に立ち上がった。そよ風に揺れる庭木は鮮やかな緑のままであり、夕空はただ晴れ渡っていた。それが、どうしようもなく悲しく見える。

かき集めた機動隊車両で作ったバリケードが次々と突破される。拡声器で割れた声も、群集の唸り声の前にかき消される。シュウ・サクラが最後に聞いたのは、明治神宮や新宿御苑に誘導した群集が再び市ヶ谷方面に向かいだしたという連絡であった。

「シヤレにならん!!」

新宿の特別行政区庁舎を占拠した群集は、庁舎から脱出した東アジアの要人や残存する軍部隊が立て籠もる市ヶ谷駐屯地に向けて前進した。それでも、市ヶ谷の基地に一機だけ残っていたMSは、大きな威嚇効果を示してくれていた。先回りした機動隊が群集を市ヶ谷に近づけないように誘導した時、予想外にスムーズに進んだのは、その威嚇効果ゆえである。

だが、上空に遊弋していた謎のMSが飛び去る瞬間、市ヶ谷の基地に立っていたMSが、まるで上から踏まれたように潰れてしまったのだ。群衆からは歓声が上がリ、同時に駐屯地を遠巻きにしていた人達が動き始めたのだ。

当初予定していた外苑西通りで群集の足止めが出来ていれば良かったのだが、実際には靖国通りの住吉町交差点と、外苑東通りの片町交差点手前の高架でバリケードを張る事しかできなかった。既に片町交差点は、東アジア軍が簡易の陣地を構築している。このバリケードを突破されれば、間違いなく群集と軍の戦闘になる。

それが分かっていたいながら、シユウにはどうする事もできなかった。靖国通りを埋め尽くす群集をどう制御しろと言うのか。爆発音と銃声に、シユウは命令を変える。

東京湾の中ほどに退避していたグレートバリアリーフ号の船内が慌しくなる。房総半島側の港に停泊していた東アジア海軍の艦船に動きが見えたのだ。都市部に対して、艦砲やミサイルを放つとも思えないが、今は何が起きても不思議では無い状況である。レーザー通信によって絶えず入ってくる区内の情報は、どれも想像を絶するものであった。

そんな中で、ハーモナイズコミュニティのメンバーから救援要請が入ったのだ。プラント市民である彼らを保護する責任はザフトにある。艦長はMSの発進を指示し、さらに救助したメンバーに対する尋問の準備も行わせた。

トウキョウで起こった様々な事象、そこに彼らの影が見え隠れしていたのだ。この機を逃す理由はどこにもない。艦長はブリッジの慌しさの中でつまらなそうに言う。

「助けられた側に口を閉ざす権利はないよ」

人員輸送用ユニットを搭載した可変MS・ドウルが、後部デツキにせり出してくる。普段はステージやデツキチエアが並べられている場所だ。整備員が船内に入ったのを確認して、ドウルは上昇していく。空中で変形した機体が飛び去っていくと。それを追うようにもう一機のMSが海中から飛び出した。

キリルの乗るガルバルデイが、護衛の任についてた。だが彼が守るものは、目の前を飛ぶ可変MSでもなければ、それに乗せられる人間でもない。キリルはペダルを踏み込む。

東アジア領内をザフトのMSが勝手に飛行している、普通であれば戦争になってもおかしくない事だろう。だがガルバルデイのモニターは、大西洋連邦のマークを付けたMSに守られる大型ヘリの一団を映していた。そのまま三浦半島の基地へと向うのだろう。あれが、正規の外交ルートで了解を受けた部隊だとも思えなかった。

「マリア・・・今行く」

そうつぶやいてドウルを追い越した。ハーモナイズコミュニケーションの合流地点は、茗荷谷近くの学校という事になっている。コクピットのモニターに地図を呼び出した。

マリアが試験を受けていた場所から帰宅するには、明治通りを北上するのが普通だ。だが区内の混乱を避ける事を考えれば、明治神宮、東宮御所、皇居と日本人であれば騒乱を起こさないであろう場所を伝っていくだろう。無理をして帰宅するのではなく、どこかで難を逃れている可能性の方も高い。

彼女はガルバルデイの姿を知っている。見れば反応を示してくれはらずだ。夕闇が迫りだし、機体各部の警告灯を点す。周囲を警戒しながら、八角形のホールの横に着地した。

かつてこの国の元首が住んでいたという場所は、不思議なほどに静かであった。だが、この薄闇に包まれた街では、今でも凄惨な戦いが

続いている。外部マイクを入れると、遠くから声が聞こえる。キリルはその方向に向けて、ガルバルデイのモノアイを回した。

「!!」

距離にして二キロも離れていない場所に、翼を広げたMSが浮かんでいるのが見えたのだ。下からのサーチライトを浴びて陰影深く浮かび上がるその姿は、傲然そのものといった様子である。

きつと同じ人を探してここにいるのだ。キリルは奥歯を噛み締め、感覚を確かめるようにレバーを握り直した。

区内のあちこちから煙が上がり、よく晴れた空だというのに視界は心なしか澱んで見えた。もつとも、これから暗くなれば視界の有無など、意味を成さなくなってくる。暗くなる前に、探しものを見つけておかなくてはならない。

モニターに表示されるマークは、コンピュータがフル回転で仕事をしている事を示している。カメラが捉えた映像の中から、対象となる人物を検索するシステムを使って、トウキョウの人ごみを探し回っていた。あの声の持ち主の写真に合致する人物がいれば、たちどころに分かるはずだ。

東アジア軍が航空機やMSを区内に展開していなかったのが幸いし、エヴィデンスは目撃者に驚きを与えたものの、さしたる邪魔を受けない事無くトウキョウ上空を飛行する事ができた。心配なのは、この騒ぎの巻き添えを食って、彼女が死んでいるのではないかという事くらいだった。

「それは・・・もったいないなあ」

人の持つ進化の種、それを芽吹かせる事の出来る声など、そうそう手にはいる物ではない。プラントが有していた膨大な数の遺伝子情報を蓄積したデータベースは、レクイエム戦役時に宇宙要塞ごと消えている。いまや、あの声の正体たる遺伝子を持つ者がどこにいるかを知る者はいないのだ。

眼下に広がるのは、人の愚かな営みの中でも最低のもの。宇宙とい

うフロンティアを目前にししながら、いまだに人類は地面の上でのた打ち回っている。

そんな人類にとって、彼女の歌声はまさに福音となる。

人類にとつて最後の可能性、広大な宇宙へと乗り出すために不可欠な能力。ジョージ・グレンが発見した地球外生命体の痕跡は、人類に一つの扉を与えたのだ。あとはその鍵を開けるだけだ。

SEED、それこそが宇宙への扉の鍵であり、彼女は人類の内に隠された鍵を取り出す者なのだ。ハニス・アマカシの瞳が、どこまでも深くなった。モニターに拡大された群集の映像の中で、四角いカーソルが揺れながら停止している。

「見つけた」

群集に流されながら、彼女は少しずつ通りの端へと寄っていく。そのままの流れから抜け出し、人のいない小さな路地に身を隠すように立ち止まった。ハニスは、小さく舌を鳴らす。

隣に男がいたのだ。何か言葉を交わしているようなその様子に、あの声の価値も分からない者が、と毒づく。エヴィデンスをゆつくりと旋回させ、彼女の方へ向おうとする。下からうるさく警告を繰り返していたMSは、先に踏み潰しておいた。ハニスは改めて目標を定める。

「・・・邪魔をするな!!」

エヴィデンスが腕を振るうと、一条のビームが放たれた方向へと弾かれる。ビームを放ったMSはそれを予期しており、跳ね返されたビームは八角形の建物を貫通する。夕暮れに溶け込むような暗色系の色に塗られた機体は、見覚えのあるものだ。

ハニスはサブカメラの一つに標的の映像を追尾させるよう設定し、自分の意識は向ってきた機体へと集中させる。ピンク色に光るモノアイは、睨みつけるようにエヴィデンスを凝視していた。

「伏せてー」

ルーイはそう叫んでアメリに覆い被さるように道に倒れこんだ。

頭上を突風が通り抜け、近くのポリバケツが空高く舞い上がる。

殺気だった群衆からようやく抜け出たと思ったとたんには、MSの登場である。ルーイはアメリを抱えるように起き上がらせると、商店と商店の隙間に身を潜ませる。彼女を気遣うように、震える肩を抱いた。

怪我人の避難所のようになっていた学校の校庭でアメリを見つけたのは、偶然以外の何物でもない。試験会場から騒ぎの中心を避けるように逃げるだろうという予測は立てていたが、この広いトウキョウの無数の人の中で彼女を見つけさせたのは、非常時でなければ運命だろう。

ルーイは彼女を連れて、その学校を後にした。人の流れが市ヶ谷方面へと向っているので、外堀通りを渡って北西方面へと抜ければ、比較的安全だろうと踏んだのだ。結果としてそれが裏目に出た格好になる。もつとも、あの場に留まっついて安全だったかどうかは分からないが。

「歩けそう？」

コクリとうなづいたアメリの手を取る。遠くで響いている重い金属のような音は、きつとMS同士が戦闘をしている音だ。二人が足を踏み出した時、再び突風が襲った。巻き起こる砂埃に、ルーイの気が一瞬だけ逸れる。緩んでしまった彼の手から、アメリの感触が滑り落ちるのを感じた。

「アメリ!!」

彼の叫び声を遮断するように、崩れ落ちるビルの壁面が狭い道を分断する。

第二十一話 幕引き

日が暮れた街は一気に暗くなる。街灯や信号機が軒並み壊されているからか、そもそも電力供給に支障を来たしているからかはよく分からないが、トウキョウの街は真つ暗であった。もし明るい場所があるのであれば、それは火事の現場である。消火作業に当たる人間が、今のトウキョウにどれほどいるのだろうか。

数台のオートバイが、ブレーキの音もけたたましく停車する。ヘルメットを取った女性の顔を見て、敷地の入り口を守っていた男達が深く頭を下げて、その女性を迎え入れた。

「お嬢、ご苦勞様です」

「院長です。それより子供達は？」

代々木の爆発事件から始まった大規模な暴動が、荒川を越えて孤児院の周辺にまで波及するのに、それほどの時間は掛からなかった。ここに被害が及ばなかったのは、院の職員が中心となって周辺住民と共に暴徒が住宅街に入り込むのを防いだからだ。

暴動は、都心部だけではなく郊外の広い範囲にまで及んでおり、一部では商店に対する略奪や住宅街での大規模な窃盗事件なども発生しているようである。ナタリアは強面の職員達の姿に、心底感謝した。

子供達は早くに寝かしつけているため、院はひっそりと静まり返っていた。日本人特別居留区から戻った者達も、物音を立てないように気を配りながら建物の中に入る。女性職員がシャワーを勧めてくれるが、疲れた体にはそれも億劫であった。着替えだけしてソファアームに体を沈める。

都心部の状況を探りに行った職員からの情報によれば、想像以上に酷い状態であるらしい事は分かった。日本人特別居留区への攻撃が失敗に終わった時から、ヨコタを始めとする区内の基地で、暴動や大規模テロに対する警戒はしていたらしい。そのため軍部隊の区内展開が早く、あちこちで市民との衝突が発生したようなのだ。

市民に対する無差別の発砲も許可されていたらしく、犠牲者の数は

さらに想像以上だろう。偵察に行つたまま戻つてこない職員もいるのだ。

「とりあえずは・・・」

大洋州にある本部と連絡を取つて、情勢が落ち着き次第援助活動が開始できる態勢を整えておかなくてはならない。日本人特別居留区の様子は何ら改善をしていないが、一部を特別行政区での救助活動に振り向けなくてはならなくなるだろう。

やらねばならない細かな事が、次から次へと浮かんできて考えが一向にまとまらない。眠つてしまえば楽なのだが、今はそうも言つてられないだろう。部屋のドアの開く音に、ナタリアはさつと振り向く。

引き摺るように毛布を持っている子供が、驚いたように立っていた。

「サチ・・・起きていたの？」

「・・・ママ、これ」

ナタリアは気が付いた。彼女は毛布を持って来たサチを手招きし、ソファアの上で彼の体ごと毛布で包まった。自分がこの子の事を心配しているように、この子も自分の事を心配しているのだ。ならば、やらねばならない事は一つしかない。

眠いのを我慢してずっと起きていたのだろう。ナタリアの胸の上で、サチはもう寝息を立てていた。彼をそつと抱き締めながら、ナタリアは眠る事にする。

夜になってからが勝負だと、警備保障会社の顧問は言っていた。暗視スコープで外を見張っていた男が合図を出す。敵が動き出したようだ。通信機からは、港の方で集会を行っていた市民の一部が騒ぎ始めたと伝えている。

「下手な陽動だな」

タルハ・アンワール・ガニーが、機械の最終調整を行いながら呆れたように言った。肩をすくめるだけのウンディ・ミナカミは黙々と

キーボードを叩いている。

特別行政区で騒乱が起ると、タマユラ地区は特別行政区との間にかかる橋とトンネルの全てを封鎖した。特別行政区から避難してくる人を受け入れるべきかどうかで揉めたいが、一切の例外を認めずに封鎖しようだ。それと同時に、タマユラ地区で行われていた全てのイベントを強制的に終了させ、一般市民には外出の自粛を呼びかけたのだ。

混乱なくいったわけではないが、とにかくトウキョウで起こっているような大規模な騒乱は発生を抑える事ができていた。タマユラ地区の行政担当者や警備保障会社は、こういった事態を想定し、対応策を用意していいだろう。

あとは、一部強硬派の暴発を食い止めるだけである。オーブは租借地となっているタマユラ地区を、期限通りに今年で返還する予定であり、既得権益の維持を狙う連中に余計な事をされては迷惑なのだ。富裕層や企業家の租税回避、アングラ勢力のマネーロンダリングなど、この土地はオーブ政府にとっても頭痛の種なのである。

「完了・・・あとは、ちゃんと動いてくれるだけでいいわ」

ユンデイはそう言つて、外の様子が映し出された映像を見る。日本人特別居留区とタマユラ地区を隔てる分離壁、その一角に大型のトレッラーが何台も停車していた。コンテナが開かれると、中から六本の脚で歩く機械が現れる。シユバルベ工業製の多脚多腕型作業重機。それが建設重機として使われていないのは、その手に装備されている物を見れば分かる。どれも、軍用の兵器が搭載されているのだ。

モニターを見ていた男性が舌打ちをした。どの武器もザフト製らしく、武器の出所をたどってもせいぜいジャンク屋くらいまでしかたどり着けないだろう。黒幕連中に突きつける証拠にはなりそうに無い。

その武器で分離壁を破壊し、日本人特別居留区の被災者を難民としてタマユラ地区に大量流入させるのが、彼らの狙いであった。人道的危機を理由とすれば、オーブ政府も動かざるを得なくなるという考えである。

そして難民保護を名目としてタマユラ地区の租借期限を延長させる。トウキョウでの騒乱の後であれば、東アジア中央政府も日本自治政府も文句を言えないはずだった。

「そんな事になる前に・・・」

「何とかしましょう」

二人が合図を出して機械を起動させる。量子ウイルス送信装置、無線でコンピューターウイルスを侵入させる機械であり、そのウイルスはプログラムそのものを書き換えるほどに強力なものである。

不安点はその送信精度の低さであったが、そこはどうやらクリアーできたようだ。モニターに映る機械が一齐にその動きを止め、運転席から出てきたオペレーターが慌てた様子で点検を始めていた。付近に隠れていた警備保障会社の社員が一齐に飛び出し、犯人達を検挙していく。

ユンディとタルハは軽い抱擁を交わした。自社製品の不正使用を防ぐ、それが今の二人にできる精一杯の事だった。

見覚えのある機体、そして覚えのあるシチュエーションだ。エヴィデンスが放つ斥力をかわす動き、間違いなくあの時のパイロットだ。ハニス・アマカシは、画像検索システムの追尾機能がきちんと稼働している事を確認して、ペダルを踏み込んだ。深く透き通った瞳が、真っ直ぐに敵を見据えている。

すっかり暗くなった空に、暗緑色のMSは溶け込むようであった。モニターは夜間用の映像へと切り替わっているが、ハニスは警戒する。照明弾やフラッシュなどの目くらましを行うには絶好のシチュエーションだ。敵MSから撃ち込まれるビームを全て上空へと弾く。地上には彼の歌姫がいるのだ。

エヴィデンスの周囲を旋回するようにこちらを窺う敵の出方を、ハニスはじっくりと見極める。敵がバッテリー機である以上、長時間の戦闘は不可能なのだ。必ず先に動いてくる。

「来いよ・・・へっぽこナイト」

あの声の価値など分かりようの無い男に、歌姫を引き渡す事など出来るはずが無い。あの声は人類全ての者に進化の福音を告げるものであり、一人の男に愛をささやくためのものではないのだ。牽制の斥力を発生させると、敵はそれに応じるかのように動いた。

真横から突っ込んでくる敵MSの方を向く事もしない。ビームライフルの攻撃を真つ直ぐ弾き返し、突進コースを遮る。敵の回避コースを潰すように斥力を連射し、そのうちの一つが敵のシールドを捉えた。

アルミ箔でも破るかのように簡単に引き裂かれたシールドは既に放棄された物であり、エヴィデンスの眼前にはビームサーベルを振りかぶる敵の姿があった。振り下ろされたビームサーベルは、文字通りに折れ曲がった。

それでも敵は怯まない。そうなる事を予想していたような自然な動きで、腕部に装備された機関砲を乱射する。至近距離から撃ち込まれる砲弾は、全て空中で静止し空き缶のように潰れていく。エヴィデンスは腕を振りかぶった。

「ぬあっ!!」

ハニスは思わず目をつぶる。機関砲弾の中に含まれていた曳光弾が弾け、モニターが一瞬だけ白くなる。作戦か偶然かを問うより先に、ハニスは周囲に展開している斥力の出力を上げた。MSごと吹き飛ばすつもりだ。

回復したモニターに敵の姿は映っていない。それどころか、あの女の画像を追尾していたモニターも、今の光で目標を見失っていた。舌打ちしたハニスは怒りを込めて、エヴィデンスの腕を体ごと背後に向けて振るった。敵MSが構えていたビームライフルが捻じ曲がって爆発する。

「もう少し・・・」

キリルの目が一瞬だけ地上の映像へと向う。マリアの無事と、彼女が逃げる方向だけは確認できた。今は、目の前のMSをその場から少しでも遠ざけるだけだ。

幸いにも、トウキョウの騒乱は市ヶ谷に収斂しつつある。彼女の逃

げた方向はそれとは逆方向。安全とは言わないが、今はガルバルデイで助けに行く事の出来る状況では無い。目の前の敵を排除しなければならぬのだ。このMSは確実に彼女を狙っている。

ガルバルデイにビームサーベルを握らせ、宙に浮かぶ敵の周囲を旋回する。今回は、敵が突然動きを悪くしたため辛くも撤退に追い込めた。しかし、そんな幸運が二度起きるとは思っていない。ならば、どうするか。キリルはレバーを押し込んだ。

加速度を全身で感じながら敵の動きに集中する。謎の力が発生する部位は腕と翼。その内、翼は空中に浮かぶためにも使われているだろう、攻撃への転用は少ない。それらの動きを見て機体を左右に振る。当たれば一発でアウトだが、回避に専念すれば凌ぐ事も可能だ。

「でも、それじゃ・・・!!」

意味が無いとビームサーベルを振り下ろす。相変わらず情けない形に曲がるビームサーベルに、キリルは歯噛みする。ならばと、左腕の機関砲の砲口を敵の装甲へと密着させた。

暴発覚悟で放った砲弾は、ガルバルデイの左腕部のみを破壊する。おそらくビームサーベルでやっても同じ事だ。あの斥力は装甲表面を覆うようにも展開されているのだろう。バランスを崩したガルバルデイは、そのまま左腕全体を捻じ切られる。辛うじて距離を取って機関砲を乱射した。

先ほどの事を警戒したのか、敵の追撃が緩い。だがラツキーパンチの効果も、敵を仕留める事には役に立ちそうに無い。自分の焦りが反映されているのか、敵の動きに余裕が出てきたように見える。もはや、バッテリーと推進剤の事は考えていられなかった。

通信機が音を拾った。Nジャマー濃度を考えれば、目の前の機体が飛ばしている電波であろう。それは、聞き覚えのある歌だった。

「・・・マリアの？」

そのつぶやきは敵にも通じたのであろう、歌の向こう側から哄笑が聞こえた。

「それが歌姫の名前か。だがお前が知ってるのは女の名前だけだ」

吹き飛びそうになった冷静さを繋ぎとめ、キリルは機体を振る。斥

力が巻き起こした突風が機体を揺らした。

「それにMSの通信機じや、この歌の真価は伝わらんだろうな！」

男の言葉の意味は分からない。だが、マリアが狙われなくてはならない理由がそこにあるのだという事は分かる。そしてそれは、あのMSが持つ奇妙な力とも関わりのある事なのだろう。

それらは、ザフトにとっても何らかの有益な情報なのかもしれない。しかしそれを得るためには、あのMSをパイロットごと鹵獲しなくてはならない。撃墜すら出来ない相手に、それは不可能な事であった。無線機をそのままにし、音声を記録できるようにしておく。

キリルはガルバルディを高速道路の高架へと着陸させる。既にマリアのいた場所から十分に引き離す事ができていた。カメラを上空に向け、キリルは気合を入れ直すように宙に浮く敵を睥む。

なまじ相手の保有戦力を把握していたため、無駄に多くの人員を投入する事になってしまった。特殊な身体強化措置を施された兵士によって構成された特殊部隊に対抗するため、施設内に溢れんばかりの兵士を突入させていた。その結果は、犠牲者ゼロである。

トウキョウ特別行政区に対する揺さぶりのため、日本自治政府が極秘裏に設立・支援していた武装組織の拠点であったツクバの秘密施設は、もぬけの殻であった。正確に言えば、組織の中核である実働部隊が研究者達とともに行方をくらませていたのだ。施設に残っていた一般職員は、大挙して現れた兵士の姿を呆然と眺めている。

運用されていた特殊兵器などのデータは、綺麗に消されているであろう。慌てて逃げたわけではなく、こうなる事を予測して事前に準備を始めていたという事だ。おそらくただ逃げたのではなく、次の引き受け先まで見つけた上での脱出だ。

「MSが？」

部隊の指揮官が上がってきた情報に首を傾げる。ツクバが運用していたMSが、現在トウキョウで交戦中だという。十分に確認の取れた情報では無いので、判断が難しい。だが、例えそのMSの情報が事

実だとしても、それがここに戻ってくる可能性は極めて低い。重要なMSであれば持ち去っているだろうし、そうでないのなら自分達にとっても確保する価値は無い。

施設の調査や一般職員への取調べなどは専門官に任せる。指揮官は部隊を取りまとめ、直ちに利根川へと向かう事を決定した。多摩川方面の部隊は川を渡り始めているはずの時間だ。

「第一、第二京浜に産業道と東名、首都高・・・」

多摩川にかかる橋は多いが、MSキャリアーなどの大型車両を動かせる道となると限られていた。そのため、守る側はそれを念頭に置いた布陣となる。最悪の場合橋を爆破してでも封鎖すればいい。だが現状の駐留東アジア軍は、日本人特別居留区侵攻の失敗によってMSなどの大型兵器の数は少なく、多摩川に掛かる全ての橋を守るほどの兵力は有していなかった。

そのため、第二京浜道路と稲城大橋に装甲車や兵員輸送車を主とする部隊が現れた時、対応が遅れた。日本自治政府の主力と思われる部隊は、既に東名高速の川崎インターに迫っており、ヨコタを出撃した東アジア軍の残存MS部隊は全て東名高速へと集まっていたからだ。

いまだ騒乱の続く都心部へ迅速に兵力を投入し事態の收拾を図る、それが日本自治政府の目的であった。中央道なら新宿までノンストップであるし、第二京浜道路を使えば皇居まで一直線である。ゼネストだの謎のイベントのお陰で、障害となる一般車両は当初から少なかった。

自治政府はMS部隊を囿として東名高速で移動させ、歩兵を中心とした部隊を本命として別ルートを進ませたのだ。わざわざ多摩川でMS戦などせずとも、特別行政区の中枢をトウキョウから追い払えば駐留軍は撤退する。

そもそも、市民と軍が衝突する都市部での騒乱において、MSなど使い勝手の悪い兵器でしかない。しかし東アジア軍が、使い勝手など考えずにMSを投入すればどうなるだろうか。MSによる対人掃討戦闘、想像すらしたくないものだ。

「だから、ここに足を止めてもらおう」

自治政府のMS部隊は、本命である歩兵部隊の移動を支援するための囿であると同時に、特別行政区市民から駐留東アジア軍の残存MS部隊を引き離すための囿でもある。

東名高速を上っていた車列が多摩川を目前にして停車した。そして次々とその荷台を起き上がらせる。自治政府のマークを光らせたダガーが、川の向こう側に潜んでいるだろう東アジア軍のMSを威嚇するようにそのカメラを発光させた。

廊下に響いていた銃声と銃弾が壁を削る音が、ようやく静まった。代わりに血の臭いが充満している。窓の無い廊下であるため、その臭いは容易には消えないだろう。毛足の長い絨毯が血をたつぷりと吸い込んで、おどろおどろしい染みをあちこちに作っている。同様に、壁や天井にも血痕が飛び散っていた。

大きくヒビの入ったヘルメットは、もはや使い物にならない。ユ・ケディンは忌々しげにヘルメットを脱ぎ捨てる。生き残った部下は片手で数えるほどしかいなかった。

トウキョウで始まった謎のイベントは、代々木で発生した爆発事件によって暴動へと発展した。少なくとも、自分の知る範囲でその爆発事件に関与した者はいない。そのためそれを、善隣幫による自作自演と判断したのだ。リ・ウエンが当初からトウキョウにおける大規模暴動を企図していた事は明白なのだ。

おそらく、あのイベントは彼にとってもイレギュラーだったのだろう。そのためあのような爆発事件を発生させ暴動を誘発させたのだ。「……この二人は、リ・ウエンのボディガードのはずだ」

もはや標的を守る者はいない、ケディンはそう言っただけで武器のチェックをする。足元に転がるのは、奇妙な笑みを浮かべたまま全身を蜂の巣のようにされた二人の女であった。おそらくコーディネーターか何かであろうこの二人のために、ここまで突入してきた彼の部隊は、全滅に近い被害を受けたのだ。

チャイナドレスの中から手品のように取り出される様々な刃物が

防弾装備の隙間を狙うように投げつけられ、壁や天井すら走るように異常な身体能力によって弾丸は避けられ、手にした刀によって鮮やかに首を刎ねられた。リ・ウエンに対して、幾度かの暗殺が試みられているのだが、その全てが失敗に終わった理由は、おそらくこれだったのだろう。

生き残った部下が、拳銃を構えて廊下を進む。渋谷にそびえる超高層ビルの最上階、それがリ・ウエンの居場所である。

暴動発生時、東アジア軍は急変する事態に対応しきれず、その動きは想定より鈍かった。一方、当初は各地で自然発生的に起こっていただけの暴動は、あつという間に軍や特別行政府機関を標的にしたものと変質した。そこに善隣幫や菱丘組などのマフィアが介在していた事は明らかである。

そのため通常の部隊とは別に、この暴動を裏で指揮する組織を標的とした部隊も出動させていた。ケティンが指揮する部隊は、その総本山ともいえる善隣幫のトップを狙っているのだ。

だが、障害はマフィアだけではなかった。通常部隊が暴徒に対する発砲を始めた事から、区内に展開する保安局員は東アジア軍への敵対を明確にしたのだ。そのため、機動隊などとの交戦も余儀なくされた。日本軍のテロに対する備えとして重武装化の進んでいた保安局は、軍部隊にとっても大きな脅威だった。

ケティンの部隊も、このビルにたどり着くまでに多くの犠牲者を出す結果となっていた。彼は低くつぶやく。

「意地くらいは見せるさ……」

どの道、東アジア軍はトウキョウを撤退するしかない。日本自治政府がこの状況を放置するはずもなく、トウキョウ特別行政区を東アジア中央政府が統治するという仕組みは維持できなくなるだろう。だからこそ、ただ逃げるなどという結果にはしない。

それ相応の犠牲と被害を代償として与えなければ、東アジア共和国という国家そのものが形骸化する。当然、反東アジア活動家には死が与えられなくてはならない。

最上階の突き当たり、重厚なドアがゴールを告げている。部下がド

アの両側に控え、中へと飛び込む体勢を取った。突然、背後のエレベーターホールで、この場に緊張感に不釣合いなチンという音がする。

振り向いたケデインの眉間に、銃弾がめり込んだ。

「へ・・・ハハハハハっ！ このヨシオカ様をなめてんじゃねえぞ、コラあ!!」

ブランド物のスーツでみっともなくめかしこんだ男が、拳銃を片手にあらん限りの罵詈雑言を口にしていた。さらにコウキ・ヨシオカは、酔った様な足取りでケデインの死体に近づき、銃弾を浴びせ続ける。

その白いスーツが自分の血で染まるのに、時間は掛からなかった。

高速道路の高架の上でモノアイを上に向けているMSの姿に、自分がおびき寄せられた事に気付く。歌姫のいるであろう場所からずいぶんと離れてしまったようだ。ザフトがああ声の正体に気付いたとは考えにくく、おそらくはパイロットの独断での行動であろう。

無視するには大きすぎるリスクに、ハニスはため息をつく。彼女を手で掴んだままでは高度も上げにくく速度も出しづらい、つまりあのMSを振り切って逃げる事は難しいという事だ。SEEDコンバーターに影響を与える可能性がある事から、エヴィデンスはコクピットに複数の人間を乗せることを想定しておらず、もう一人を乗せるようなスペースはなかった。

このままじっくりと時間をかければ、やがて推進剤とバッテリーを失い、敵MSは動けなくなる。それまで、こうやって睨み合いを続けても良かった。

「だから、その前に!!」

キリルは自分を叱咤するようにそう怒鳴ると、ペダルを踏み込む。ガルバルデイをかすめる様に飛んだ斥力が、高速道路の遮音壁を薙ぎ払う。

敵の真上に躍り上がったガルバルデイが、腰のグレネードを投下す

る。空中で静止するような格好になったグレネードは、爆発と共に黒い煙を吐き出す。熱紋センサーをもくらしませるフレアスモーク。そのまま背後に回りこみ、腕部の機関砲を乱射する。

煙の全てを吹き飛ばすように斥力が展開された。機関砲は一発も装甲に届いておらず、羽ばたくように動かされた背部ユニットから撃ち出される斥力が、ガルバルディを揺さぶる。

振り向き様に振るわれた腕から伸びる斥力は、空間そのものを歪めているかのように周囲の景色を揺らめかせた。強く発光したカメラが、敵の苛立ちを伝える。

「いい加減・・・してもらおうか!!」

ハニスの声に反応するように、SEEDコンバーターの出力が上がる。その深く澄み渡った瞳は、モニターに映るMSの動きを酷く緩慢なものに見せていた。それが余計に、彼の苛立ちを募らせる。

彼の目的はあくまでもあの女であり、その奪取が成功するのであれば、それ以外は別にどうでもいいのだ。戯れにMSを撃墜するような時間の無駄は、彼の趣味では無い。

しかしどうやらこのMSに関しては、早くに撃墜しなければ時間の無駄になりそうだ。ハニスは叫ぶ。

「あの声の価値も知らぬ者があー!」

プラントという小さな構造物を、コーディネーターという卑小な被造物を、その手にしただけで満足してしまった人類。それらは本来、人間のさらなる進化への足がかりに過ぎないものだ。人はもはや、地球というささやかな揺り籠に眠る幼子であってはならない。成熟した知的生命体として、宇宙という広い世界へと踏み出すべき存在なのだ。

そのために必要な進化、それを促すのがあの声だ。人の遺伝子の中に眠る進化の種、それを芽吹かせる恵みの雨、それが彼女の声なのだ。そして進化を果たした人間は、あのクジラのように宇宙へと自由に羽ばたくのだ。

「俺とエヴィデンスは、その先駆けなんだよ!!」

「世迷言!!」

混線する無線にキリルは怒鳴り返す。それは自分自身を押し切るためでもあった。敵の語る事は、まさに彼が信じたコーディネーターの理念そのものだからだ。そこに空疎さを感じたのは、敵がマリアをただの手段として語るからである。

今のキリルはその言葉に共鳴できない。人類の進化や、コーディネーターの存在意義は、マリアを救い得ないからだ。トウキョウの片隅で、その美しい歌声をか細く響かせていた女性に必要なものは、そんな抽象的な言葉では無い。もつと、具体的な力だ。だから彼はガルバルデイのкокピットにいる。

今、この瞬間、彼女を危険から遠ざけるために、彼が行使できる最も具体的な力。キリルの瞳が見開かれた。

崩れ落ちたビルの瓦礫が山のように道を塞いでいた。それを駆け上ったルーイは、それ以上の勢いで駆け下りていく。コーディネーターとして生まれた事に感謝する暇もなく、彼は道を駆ける。

上空で戦闘していたMSは遠ざかったようだが、それで危険が去ったわけではない。殺気だった目をした人々が、続々と市ヶ谷方面へ向っている。それらの人々を出来るだけ避けながら、ルーイの目はアメリを探し回る。

夜の空を時折鮮やかな光が横切った。しばらくして聞こえるのは、ビームライフル独特の甲高い音。MSはいまだに戦闘を続けている。ルーイは大声を出す。

「アメリ！ そっちは危ない!!」

足を止めた彼女に追いつき、キリルはその手を取る。MSが戦闘を行っている首都高速に近づかず、かつ人の流れに巻き込まれないよう、ルーイは外堀通りから早稲田通りへと入った。右手上空では、二機のMSがしきりに交錯しているのが、夜空の中でもはっきりと見える。

空を飛んでいるMSである、このくらいの距離は無いに等しいであろう。ルーイは彼女の手を引くのをやめ、やおらその体を抱え上げた。こうやって走った方がはるかに速い。少し驚いた顔のアメリに

微笑みかけると、ルーイは足を速める。

彼の首に抱きつく形だったアメリカがその力を緩めた。ちゃんと掴まっているようにと言おうとしたルーイの前で、アメリカは指を指した。足を止めた彼は、今まさに決着が付こうとしているMS戦を見つめる。

敵の動きが変わった。いや、エヴィデンスの動きが鈍くなった。ハニスの目は計器の数値の上を走り回っている。ツクバに戻ったときも、不調に陥った理由はつきり説明できず、SEEDコンバーターのパイロットに対する感受性を強くする調整を行ったのみであった。そのツケがこんな形で現れた。両腕に発生させた斥力を交差させるようにしてビームサーベルを受け止め、その圧力を利用するように距離を取る。反撃に移ろうにも、コンバーターの出力が思うように上がらない。機関砲弾の衝撃がコクピットに伝わるのは、十分に弾を跳ね返せていないからだ。

防御用に展開させている斥力を腕に集めて、突っ込んでくるMSを薙ぎ払う。完全に見切られていたその攻撃は、ただ虚しく空気を揺らす。モニターに敵のモノアイが大写しになった。

「SEED持ちか・・・!!」

間一髪で間に合った斥力もビームサーベルの威力を殺しきれず、装甲の一部が融解した。それ以上にハニスを驚かせたのは、SEEDコンバーターの反応である。

人間の脳神経系にSEED現象が発現すると、それに反応した特殊無機超高分子が斥力を発生させる。SEEDコンバーターは、その斥力を制御するための装置でもある。

もし仮に、ハニス以外にSEED現象を発現させる者がいればどうなるか。ハニス以外のSEED現象に反応して生み出される過剰な斥力を制御しようとする方向に、コンバーターは働くはずだ。現に計器の数値は、コンバーターのセーフティーが発動する直前の数値を示していた。強制的に出力を低下させる事によって、発生した斥力による機械の自壊を防ごうとしているのだ。

「・・・あの声」

敵のパイロットはあの女と共にいた。それなりの時間を過ごしていたのかもしれない。そうやってあの声に触れ続けていた人間がSEEDを発現させる事は、ごく自然な事だ。少なくとも、ハニスの考える理屈の上ではそういう結論になる。斬撃を受け止めようとした腕が斬り落とされた。

エヴィデンスとガルバルデイが交錯する。

「はんっ!!」

息を詰めるような声を上げ、キリルはレバーを押し込んだ。ガルバルデイの頭部に接触した敵の腕は、そのまま顔を押し潰す。そして振り下ろされたビームサーベルは、敵の機体の肩口から脇腹へと抜けていた。

溶けた金属の爛れた傷口を見せながら、敵は力なく落下していく。爆発しないその機体は、切断された姿のまま地面に転がった。ガルバルデイにも、もはや軟着陸を行う余裕は無かった。

エアバッグだらけになったコクピットから這い出したキリルは、コクピットからケーブルを延ばして自爆コードを設定する。周辺被害は免れないが、とりあえず人の姿はなかった。

本来なら、敵の機体の回収などを行えるようにするべきであろうが、キリルにそんな事を考えている余裕は無い。自機の処理を忘れなかっただけマシなのだ。パイロットスーツのまま駆け出す彼が考えるのは、ただマリアの事だけである。

敵のパイロットが話していた事も、不意に自分の集中力が増して、敵の動きが先読みできるように感じた事も、今の彼には関係のない事だ。ましてや、背後で爆発炎上するMSや自分の傷の事などに気を留める事は無い。

港の一角で行われていた何かの集会は、解散させられたようだ。トウキョウの方ではまだ騒ぎが続いているようだが、タマユラ地区は静かに夜明けを待っている風情である。川一本を隔てた向こう側が地

獄のような光景である事を、この街は知らないまま終わるのだろうか。

柄にも無いそんな物思いを消し去ったのは、ブレーキ音であった。大型のコンテナを引くトレーラーが三台、それにマイクロバスが二台である。バスから降りてきた男に、ジユニコ・ヤオイは近づいて挨拶をする。そして、さっそく始まったコンテナの積み込み作業を見ながら言った。

「お聞きしていたものより多いですね」

「ええ、説得に成功しまして」

ミツネ・ササは、バスの方を見た。そこには、チン・ヤンチャンも乗っている。

もともと日本自治政府がツクバを切り捨てるだろう事を警告したのはヤンチャンである。ミツネらはその警告にしたがって、研究成果や重要な実験機材などを伴って脱出する準備をしていた。

特別行政区を拠点とするジャンク屋組合を通じて、新たな研究の引き受け先を見つけてくれたのもヤンチャンであった。そのため彼らは、安全にツクバから脱出する事ができたのだ。

だが、当のヤンチャン自身は、何故か脱出をしようとしなかった。そんな彼を説得というより強引に連れ出し、研究資材などをとりあえずまとめて運んだため、コンテナが一つ増えたのだった。ミツネがバスに戻ると、バスはそのまま船の中へと進んでいく。ヤンチャンは、ただ自分の顔の映る窓を見つめていた。

若い者が、自分の能力を買ってくれる事には感謝する。だが彼にはもはや、科学者としてのモチベーションがなかった。自分自身の研究が、人類に対して何らの足跡も残さないであろう事に、戦慄のような物を覚えるのだ。

名誉が欲しいわけではない。ただ、言いようの無い虚しさを感じる。若い頃に持っていた野心が解消され、管理職まがいの仕事から解放された時、彼は始めて科学の意義を考えるようになった。そして出した結論は、自分自身の研究の無意味さであった。

今のヤンチャンがすべき事は、手遅れになつてから虚しさに気付く

事がないように、若い研究者を指導する事なのかもしれない。

「出航は夜明けです。オーブからは飛行機でカーペンタリアへ、あとはシャトルで上がるだけですのぞ」

「ご協力、感謝します」

若い責任者が律儀に頭を下げた。ジュンコは微笑を浮かべる。世間知らずの科学者連中だと思った。彼女にとって、彼らは商品ではない。中古MSよりもはるかにリスクの高い商品だが、リターンはそれに見合うものである。

正直、彼らの研究がどのようなものかは知らない。だがそれに興味を示し、向こうの当初提示額の二倍の手数料を請求したにもかかわらず、あっさりとそれを承諾する組織がいた。それでビジネスは成り立つのだ。彼女が悔やむのは、三倍の請求にしておけばよかったという事だけである。

そして、その情報に食いつかなかったザフトには見る目がないとも思った。グレートバリアリーフ号にいる、あの生意気な男がこの事をどう思っているだろうか。ジュンコは一人笑った。

もつとも、この研究者達を受け入れたのは、どうにも胡散臭いオカルト色の強い組織だ。ハーモナイズコミュニティの一組織という話だが、ターミナル残党の影が濃く残っているという情報もあった。それを考えれば、この連中がろくな研究をしていないという事だけは分かる。ザフトが食いつかなかったのも、その辺の事情かもしれない。

ジュンコはこれで得た収益を元手に、オオサカの日本橋で新たにジャンク屋を始めるつもりだった。すでに事務所の準備もしている。

出港後は、オーブの業者が引き継ぐ事になっていた。コンテナの積み込み作業が完了したのを確認し、彼女は船を降りる。そのまま迎えの車に乗り込んだ彼女に、船の中で起こった騒ぎを知る術はなかった。

トウキョウ特別行政区の高級幹部は、東アジア中央政府から派遣された者である。新宿の庁舎が暴徒に占拠されたとき、彼らは市ヶ谷の

東アジア軍基地に避難していた。本来なら専用のヘリコプターでヨコタまで脱出するはずなのだが、特別行政区の職員の多くが暴徒の側に立っていたため、ヘリを飛ばす事ができなかったのだ。緊急用の地下通路を使って、市ヶ谷まで移動していた。

今は、ヨコタから脱出用のヘリが飛んでくるのを待つだけである。先ほど到着したヘリは、着陸直前に撃ち落されてしまっていた。保安局の高压放水車両を甘く見すぎていたようだ。

区内各地で暴徒の排除を行っていた部隊は、全て市ヶ谷に集結している。正確に言えば追い詰められたのだ。市ヶ谷までたどり着けずに区内で孤立してしまった部隊は、全て全滅の憂き目にあっているだろう。市ヶ谷は暴徒に包囲されていた。

「四面楚歌ですな・・・」

「所詮は烏合の衆です！」

周囲から聞こえてくるのは、東アジア軍の排除を訴える声と日本万歳の声ばかりである。この期に及んで、まだ抵抗の意志を失っていない将校の士気に、行政政府の高級幹部は頼もしさよりも呆れを感じる。

多摩川と利根川に展開していたヨコタのMS部隊は、日本自治政府軍との交戦に入ったという通信を送って後、連絡が無い。市ヶ谷にこないという事は、来られないという事であろう。ヨコタは完全に戦闘能力を失ったという事だ。後は、上での話し合いで決着が付いて、ここを無事脱出できる事を祈るしかない。

もともと市ヶ谷は戦闘基地ではなく、集まった部隊が簡易の陣地を構築して備えているだけである。周囲を埋め尽くす暴徒が一斉に押し寄せたら、それこそ波に浚われる砂の城と同じだ。

「やはり敵は北面と東面が薄い。戦闘車両でこれを突破し、外苑東通りと靖国通りの機動隊を基地からの支援攻撃とともに排除する。機動隊を潰せば暴徒も崩れるはずだ」

軍の行動に口を挟む権限は有していないが、今のこう着状態をこちらから崩すメリットを見出せない。高級幹部は、窓の外を見ようとした。防弾仕様のガラスの向こう側は夜の闇であるが、そこには氣勢を上げるトウキョウの市民がひしめいているのだ。

それを押さえ込むには、自分達が体を張らなければならぬ。シユウ・サクラは空になったタバコの箱を投げ捨てる。片町交差点に陣取る彼の部隊の後ろからは、市民の歌声が聞こえてくる。

「日本の国歌は立派なもんだな・・・他所の国の国歌なら、全員突撃してもおかしくない」

今の状況とはかけ離れた曲調に、シユウはそう言った。再構築戦争で旧世紀の国家の粹組みが失われたにもかかわらず、そういったものは根強く残り続けるのだ。状況を打開する糸口は見えないが、ともかく市民と軍の衝突を抑える事はできていた。

もつとも交差する二つの道には、多数の犠牲者がそのままの姿で転がっている。夜でなければ、正視に耐えない光景であろう。機動隊による陣地構築が完了する前に、市ヶ谷基地への突入を試みた集団がいくつもあり、彼らはみな基地からの攻撃によって排除されている。

だが区内で活動していた日本軍の残党や善隣幫は、迫撃弾やロケット砲のような大型火器も有しており、これにダイナマイトやガスボンベを使ったマフィアの自爆攻撃が加えられた事で、市ヶ谷の側にも大きな損害が出ていた。

「ヤーさんどもが死ぬなら構わんさ」

犠牲者の多くは一般市民である。このトウキョウの形容しがたいうねりに飲み込まれたように、石や鉄パイプだけで銃口の前に突進していく人達がたくさんいた。そういった人達を守ろうと、隊員の多くも犠牲になった。

だからといって、ヘリの撃墜はやりすぎである。殺気だった隊員達もまた、このトウキョウのうねりに飲み込まれていた。

「八幡町の隊からの通信です！ 装甲車の部隊に突破されたと!!」

耳を疑う暇もない。基地からの発砲も始まり、各隊は反撃を開始している。背後の群集の声が大きくなり始める。聞き慣れてしまった飛翔音は、迫撃弾の音だ。どこかのビルの屋上から、基地に向けて撃ち出しているのだろう。

突進してくる装甲車の前に滑り込んだ機動隊の車両が、車体を折り曲げながら装甲車を止める。スクラムを組むように機動隊車両や消

防車が集まり、本村町交差点を封鎖する。横道に逸れようとした装甲車が仕掛け爆弾に引っかけ横転した。

装甲車の機関砲と基地から撃ち込まれる機関砲が、封鎖車両を削り取るように破壊していく。それを阻止せんと、基地の入り口に構築されていた陣地に機動隊員が突撃を敢行した。閃光手榴弾が光り、高圧放水車が二十気圧以上の水を噴射する。

銃弾に撃ち抜かれた隊員は盾に、倒れた隊員は踏み越える。陣地の機関銃手が放水によって吹き飛ばされ形勢が傾いた。陣地に取り付いた機動隊員は、組体操のようにバリケードを乗り越え陣地内へと侵入していく。自動小銃や機関拳銃が役に立たない距離で、盾を手にした機動隊員が兵士を次々と押し倒し制圧していく。

怒声はやがて歓声に代わり、陣地の機関砲が装甲車を狙いだした。

「靖国通りは止まったんだな……」

燻る車の陰で腕を押さえるシユウは、搾り出すような声でそう言った。外苑東通りを突進してきた二両の戦車は、片町交差点の陣地を一蹴して住吉町交差点へと向きを変えた。集まっている人を轢き殺し、砲弾を周囲のビルに撃ち込みながらである。

人が一番多く集まっている新宿方面へと向うつもりであろう。犠牲者が何人になるかなど、分かったものではない。シユウは伝令を飛ばす。この際、多少巻き添えにあう人がいたとしても、仕方が無い。

血の道を作りながら爆走する戦車の姿を遠くに見ながら、タイミングを計る機動隊員は唇を噛み締める。血の味を感じながら冷静さを保ち、その時を待った。その足元にあるのは、発破装置のスイッチである。押し込まれると同時に軽い衝撃が足元を揺らす。

同時に戦車の姿が忽然と消えた。区営新宿線に仕掛けられた起爆装置が作動し、曙橋駅の天井部分を爆破したのだ。住吉町交差点は大きく陥没し、二両の戦車はその穴の中で瓦礫に埋もれていた。戦車の上面ハッチから這い出してきた兵士に、火炎瓶が直撃する。

「バリケードを作り直せ……次は戦車も止めれるやつだ」

そう言ったとき、シユウは動かなくなった。

あてなどあるはずがなかった。それでも走らずにはいられない。彼女の無事をこの手で確かめなくては、何のためにここにいるかも分からなくなる。

謎のMSのパイロットが話していた事、それは彼女に深い関わりのある事なのかもしれない。だがそれは、キリルの知っているマリアには、何ら関係のない事だ。ただ美しく聡明な人、そしてただただ狂おしいほどに愛しい人。それこそが意味のある事であり、キリルにとつてのマリアだった。

人類も進化も遺伝子もSEEDもコーディネーターも、何一つとして意味は無い。だから、自分がザフトの人間である事も今は意味のない事であった。今必死に走っているのは、キリル・ローレンスという男である。

もつれる足を叱咤し、上がる息を抑えつけ、遠のく意識を手繰り寄せる。それでも、目に映る瓦礫だらけの光景が混濁していくのを止めることが出来ない。

「手間かけさせんなー！」

微かに戻った意識が捉えたのはキリルが探していた人ではなく、キリルを探していた人間だった。エリック・リブーと数名のメンバーが、横たわったキリルを助け起こす。

「マリアは……」

言葉を発したつもりだったのだが声が出ていなかったのだろう、エリックが一方的にまくし立てる。彼らはガルバルディの爆破処理現場から、血痕を追って彼に追いついたのだ。キリルの左足には、べつたりと血が付いていた。それが十分に乾いていないのは、出血が続いているからだ。

応急手当を受けながら、キリルはそれでも起き上がろうとした。周りの人間が何かを言っているのは分かるが、全く聞こえない。男の一人がアンプルと注射器を取り出したのが見えたところで、キリルの記憶は途切れる。

「薬だけで持つのかよ!?!」

「持たせろ！ コーディネーターはヤワじゃない！」

手持ちの輸血パックでは量が不十分で、強心剤の投与で心臓を動かしている状態だ。エリック達は乗ってきた車にキリルを乗せ、猛スピードで発進させる。後部座席の人間が、時折空に向って携帯用の信号弾を発射している。

日本自治区政府軍が区内に入り始めており、市ヶ谷では東アジア軍が降伏しその撤退が始まっている。多摩川と利根川で残存MS隊を排除した部隊は、そのままヨコタとイルマの基地へと向っているらしい。トウキョウ特別行政区は、完全に日本自治政府が掌握していた。

もうしばらくすれば、区内全域で自治政府軍が治安維持活動を開始するだろう。そうなれば、ザフトの人間が平然と車を運転してはいられなくなる。上空の飛行規制が始まれば、脱出は困難になるだろう。

「その先のグラウンドで回収する!!」

真上からスピーカーで呼びかけられた。サンルーフから見上げると、ドウルが着陸のために変形をしたところであった。なりふり構っていられる状況では無いため、ここまでMSで侵入してきたのだ。再び変形したドウルが開放したハッチに車を飛び込ませた。

機体が急上昇する感覚を全身に感じながら、エリックは輸血パックの置いてある場所を聞いた。怒鳴るようなその声が、狭い車中に響く。

いくつものサーチライトに照らされながら、ヘリコプターが上昇していた。市ヶ谷に立て籠もっていた東アジア軍の最後の部隊が、撤退していくのだ。だが向う先のヨコタからも、早晚撤退しなくてはならなくなるだろう。リ・ウエンはそれを苦く見つめる。

彼がいるのは渋谷の高層ビルの最上階ではあるが、市ヶ谷周辺の様子までははつきりと見えない。配下の者が撮影した映像が、部屋のモニターに映し出されているのだ。基地の周囲を取り囲む人達は、歓喜の雄叫びを上げ続けていた。

だが、その中心にいるのはリ・ウエンではない。日本自治政府の

マークをペイントした戦闘車両が、まるで最後に現れたヒーローのように、人々の喝采の中にいた。

「・・・ツメが甘かったか」

ブンジ・タチバナの仕掛けたトウキョウでの大規模イベント。それは、菱丘組傘下のテキ屋組織やハーモナイズコミュニティ、さらには急進的な動きから距離を置いていたいくつかの労働組合など、ウエンが計画のために利用していた組織の一部を使う事によって、彼の意図を阻止しようと計画されたものだったのだろう。配下の実働部隊は保安局にマークされており、対処する手立てすらなかった。

そのため、一度は計画の中断すら考えた。しかし何者かが突発的な爆弾テロを起こした事によって、状況は幸運にもウエンが考えていた方向へと転がった。

だがそれによって、一日半もの時間を無駄にしてしまった。自治政府の付け入る隙を与えてしまったのだ。結果、日本自治政府はまるで解放軍のように東京へと入ってきた。徒手空拳で東アジア軍に対峙していた人々にとつて、日本語で呼びかけ東アジア軍へと銃口を向ける軍隊の姿は、頼もしく映って当然である。

「だが・・・奴らはこの国を捨てる!!」

ウエンは握り締めた拳を机に叩き付けた。彼が夢見る日本の独立を、自治政府は果たそうとしないだろう。彼らとは幾度となく接触をしていたが、ウエンが自治政府を計画のパートナーに選ばなかったのは、その点における決定的な考え方の相違である。

だからこそ、東京で日本独立の声を上げる必要があつたのだ。その声は日本『自治』政府を間違ひなく揺さぶるはずだった。

「李大人、準備が出来ました。お早く」

部屋に入ってきた幹部の声に、ウエンは大きく息を吸って気持ちを落ち着けた。今は身の安全を図ることが先決である。自治政府は東京を東アジアから取り戻すだけでなく、次の災いの芽を摘んでおこうとするはずだ。連中にとつて、日本独立を画策する者は危険分子ではない。それが『自治』政府の発想だ。

血でどす黒く汚れた絨毯、ここまで入り込んで来た者がいたのだから

う。だがその血痕はダミーの扉の前に固まっていた。ウエンのいる部屋は、エレベーターホール脇の小さな扉から出入りするのだ。

エレベーターで屋上に出ると、ヘリコプターが待機していた。ヨコハマの本部まで戻れば、ひとまずは安全である。今後の事は、そこで考えればいい。

命さえあれば、次のチャンスはあるのだ。寿命が訪れる瞬間など誰にも分かりはしない、ならばその瞬間まで機会を追い求めればいい。日本独立の夢は、決して潰えるものではない。

黒いスーツの男達が警戒する中、ウエンはヘリコプターへと乗り込む。自治政府軍の航空機が東京の空を抑える前に脱出する。ローターの回転数が上がり、ヘリコプターは上昇を開始する。

機首が僅かに下がり滑る様に前進を始めたヘリコプターに、異音が走った。機体が傾き、ローターの羽根が一枚千切れ飛ぶ。屋上の男達が驚愕の悲鳴を上げ、ヘリコプターはビルの壁面を転がるように落下していく。粉々になったビルの窓ガラスがキラキラと光りながら、落ちていくヘリコプターを彩る。

「こちら地上班、ヘリの墜落を確認」

「了解、これより撤収する」

設置されていた大型のライフル銃を手際良く解体しながら、スーツ姿の男達が狙撃ポイントから姿を消した。

街のあちこちで歓声が上がっていた。白地に赤い丸の旗が、道を走る装甲車に向って振られている。装甲車のスピーカーから流れる声は、連合の公用語ではなく現地の言葉だ。医療関連の支援部隊がトウキョウに向かっていている事を伝え、負傷者を運びこむ先を指示しているようだ。

小さな公園に集まっていた人達は声を掛け合って、怪我人を指示された場所へ連れて行く準備を始めている。焚き火だけが周囲を照らすような夜の闇の中でも、人々の声には張りがあった。騒乱の終結を感じたルーイは、無事を確かめるようにアメリを抱き締める。

遠くからの光に照らされるだけの彼女の微笑みは、とても疲れたものに見えた。これだけの目に遭ったのだ、当然の事かもしれない。

「とにかく、指示された避難所に向おう」

トウキョウから出る算段は、そこで休んでから考えればいい。オオサカのユーラシア領事館と連絡が付けば、彼女を難民としてトウキョウから連れ出す事も出来るはずだ。引受人は、自分がなればいいのだ。

抱き上げようとしたら自分で立てると言うので、彼女の手を取って立ち上がらせる。公園の入り口に一両の装甲車が横付けされ、武装した兵士達が人々の誘導を始めた。

この騒乱では、マフィアが大規模な活動を行っていたり、商店への略奪行為があったりした。東アジア軍が撤退したからといって、即座に治安が回復するわけではない。保安局は区内全域で活動できる状態に無く、現在は自治政府軍が治安維持の任務を行っているのだ。

公園を出ようとする二人は兵士に呼び止められた。二人の兵士が立ち塞がるような姿勢で、二人を見つめる。

「外国の方ですか？」

「・・・ええ。ユーラシアのテレビ局の者です」

「その女性は何？」

「彼女は、トウキョウで働いている研修生です」

ルーイは身分証を差し出した。特別行政区が発行した物であっても、瞬時に信用力が失われたわけではないだろう。パスポートはホテルに預けたままなのだ。しかし、アメリカには差し出すものがなかった。身分証を紛失したという。

これだけの騒ぎである、その事に不自然な点など無いであろう。だが兵士達の姿勢は変わらなかつた。

「男性の方は行ってもらつて結構です。女性の方は、こちらに来ていただけますか」

「待って下さい、彼女の身元は私が証明できます！」

半分はでませだが、ルーイはアメリカに手を伸ばした。彼の手は兵士の体によつて遮られる。

「何でもない簡単な調査です。騒乱に関わったマフィアには、外国系の構成員が多数いたという情報がありますので、念のためのものです」

ルーイは言葉を失う。不意に『外国』という壁が立ち塞がったような感じだ。あの騒乱に関わっていたほとんどの人間は、トウキョウの一般市民だ。それにもかかわらず、この連中は『外国人』をピンポイントで狙っている。自分が許され、彼女が許されなかったのは、身分証の有無だけなのだろうか。

言葉はなくとも体は動いた。いつその事、この兵士達を殴り飛ばして連行されれば、彼女の傍にいられるかもしれない。だが応援に来た兵士を含めて五人がかりで押さえつけられ、アメリカが別の車に乗せられるのを見つめるしか出来なかった。車に乗せられる瞬間に振り返った彼女は、いつものように柔らかく微笑んでいた。

しかし彼が届けられたものは、彼女の名を呼ぶ叫び声だけだった。

長い夜が明けようとしていた。

騒乱に加わっていた人よりもずっと多くの人々は、自宅で不安な時間を過ごしていた。空が白み始める頃にテレビの放送が再開され、日本自治政府が発表する区内の情勢が伝えられるようになった。安心とはいかないが、不安の一端は解消されつつある。しかし、一家そろって無事だった家ばかりではない。安否の分からない家族がいる家も多かった。

住宅街の一画が、ほんの少し騒がしくなる。夜通し町の見回りをしていた町内会の人々が、町内で亡くなった人が出た事を人づてに伝え合っていた。その家の前には、立派な車が何台か止まっている。

朝早くから弔問客だろうかと噂し合う人々に、その家の家政婦が葬儀は内々で行うのでお気遣いなくと伝える。

「先生が亡くなったと言うのは本当ですか!？」

飛び込んできた男を家政婦が案内する。右腕を三角巾で吊り、頭に包帯を巻きつけ、右目に眼帯までつけたスグル・ハタナカが、タチバ

ナ邸の床の間に通された。騒乱の中で大怪我を追ったのだが、ブンジ・タチバナの訃報を聞いて救護所を出てきたのだ。

白い布が顔に被せられたブンジが、布団に横たわっている。普段彼はベッドのある寝室で寝起きをしているのだが、この日に限っては床の間だった。布団を囲むように座っている者も、どこか状況を飲み込めていないような顔である。

彼が懇意にしていたフリーの記者が、一枚の紙を差し出す。毛筆で書かれたそれは、遺書であった。自殺である。

遺書の内容は、トウキョウにおける大規模な騒乱に伴う多数の死者へあてた謝罪であり、それを防ぎ得なかった自分自身に対する悔悟の言葉であった。そして、このような形で責任を取る者を自分一人に留め、トウキョウの復興に各人が各人の役割を十二分に果たすようにとの激励であった。涙で遺書が濡れぬよう、スグルは顔を上げた。

「何で……間違いだと……」

ユウゾウ・カトウが畳に手を付いて、絞り出すような声で言った。この騒乱に、彼が率いる菱丘組は大きな役割を果たしていた。遺書には、日本独立という気運が不可避である事と、その思い自体は間違いでないという事が書かれていた。

だがそれがもたらした事の重大さを前にすれば、ユウゾウの行動も大きな過ちであると言わざるを得ない。だがブンジはそれを言わなかった。彼らがこのトウキョウで果たしてきた役割は小さくなく、今後果たしていくであろう役割もまた小さくない。

再構築戦争の時から、混乱した東京で行き場を失った者達を引き受けてきたのは、行政機関ではなく彼らなのだ。彼らは必要悪であつても、不要な悪ではなかった。必要悪が不要とされる日まで、彼らにも役割は残り続ける。

「それでは、私はこれで」

カズヤ・イシが立ち上がり、家政婦に頭を下げる。遺書に書かれたことを、彼なりのやり方で実行に移さねば、ブンジの死は無駄死になるとなる。

彼は『このような形で責任を取る者を自分一人に留め』と書いて

あつた。それは直接的には、ユウゾウのような人間に死ぬなど言つたのだろう。だがカズヤは、こつちも読み取つた。このような形で責任を取らされる者を出すな、と。

このトウキョウでの騒乱がどのような形で決着するのか分からな
い。だが、自治政府と中央政府が、何らかの取引を行うような形での
決着は、トウキョウ市民に納得をもたらす物では無いだろう。

その時、誰かが目に見える形で責任を取らされる。その欺瞞を告発
するのは、ジャーナリストの役目だ。カズヤは空を見上げる。

この空模様では、ようやく昇つた朝日もすぐに隠れてしまうかもし
れない。

エピローグ

『前略 ルーイ・キリロフ様』

以前、ご依頼された件に関して、お答えいたします。プラントのアカデミーで講師をしている友人に問い合わせたところ、あの歌の歌詞はアフリカの一部で使われている現地語では無いかとの事でした。

そこで、農業技術者としてアフリカに降りている友人に尋ねてみたところ、意識ではありませんが、歌詞を翻訳してもらえました。同封した紙に、それを記していますので、ご確認下さい。

彼女の行方については我々も追っていますが、めぼしい情報は今のところありません。我々のトウキョウでの活動もあと少しで終わってしまいますが、ギリギリまで情報収集は続けるつもりです。

ナ

タリア・フアリロス』

簡潔な内容の手紙は、一瞥しただけで机に置く。ルーイは、同封されていた紙を広げて書かれているものを読んだ。アメリカがいつも子供達に聞かせていた歌、彼はそれをレコーダーに保存しており、その歌が何を歌っているものなのか調べてもらっていたのだ。

彼はレコーダーのスイッチを入れる。聞こえてくるのは、ピアノの伴奏と彼女の歌声。その旋律に物悲しさを感じたのは道理である。それは嘆きと悲しみの歌だった。親を失った子供が、大地をさ迷い歩く歌。大地に伏して涙を流しても、子供は生きている限り親には会えない。歌詞は、そう結ばれていた。

リピートされ続けるその歌を聴きながら、ルーイは思う。彼女は、ずっとこんな歌を歌っていたのだ。それはどうしてなのだろう。

あそこが孤児院だからだろうかとも思うが、それではあまりにも悲しすぎる。歌詞の意味も知らず、ただ一緒に声を出していた子供達があまりにも不憫だ。彼女が、そんな残酷な事をするとは思えない。だとすれば、この歌は彼女自身の事を歌っているのだろうか。

荷物を詰めた鞆を担いで、ルーイは部屋の鍵を閉める。一人暮らしには十分すぎる狭いワンルームを後にして、彼は空港に向った。会社

には休暇の届けを出してある。これからトウキョウに行くのだ。今の気持ちとは正反対の快晴であった。

耳に詰め込まれたイヤホンから聞こえてくるのは、彼女の歌だけである。トウキョウから戻ってからずっと、彼女の声を聞き続けた。

それは半ば意識的にしている事である。あの日々を苦い思い出にしておもうとする無意識の自分に抗うように、彼女の存在を自分自身に刻みつけようとしていた。それは一種の苦行である。自分自身の情けなさに、自ら向き合う事を強いていた。その辛さを抱えてでも、彼女の事を過去にしたくはないと感じているのだ。

だから彼は、その自分の想いを恋や愛だとは思っていない。もっと重く、ずっと切実なものなのだから。

空港に向かうタクシーの中で、ルイーは新聞の切り抜きを取り出す。半年前、トウキョウ特別行政区で発生した大規模な騒乱において、その混乱に乗じて破壊活動を行った者達がいた。日本自治政府はその容疑者達を裁判にかけて、法に則った処罰を行うと発表している。

しかし、その手続きや裁判の方法に重大な疑義が生じていると、新聞記事は伝えていたのだ。国際面のベタ記事に過ぎないが、すでに刑の執行も始まっていると書かれていた。

定年間近ともなれば、出張で取引先に出向いた後で観光地を巡って帰ってくるなどという事をする者もいるらしい。仕事の引継ぎが終われば、関係の深い取引先に定年の報告をするくらいしかする事がないので、出張にも若い頃のような慌しさがなくなってくるのだ。出張に出る前、社内でもそんな話を聞きながら、この会社も大企業になったものだと思った。

カラ・ツオピンは、今日の夕方の便でシャンハイに戻る。用件が終われば長居は無用であり、観光地を巡る趣味も持ち合わせていなかった。確かに、世界中を飛びまわっていた頃に比べればのんびりとした

出張かもしれない。それでも、会社の金で余計な事をするほど、会社に浸かつてはいない。

彼は上海第七銀行の行員である以上に、金融屋であった。ビジネスに対するプライドとモラルこそが、成功のための唯一の手段である。それ故、彼は東京における日本独立の動きに投資はせず、また日本自治政府が進める政策への融資を控えるようにとのレポートを社に送付したのだ。

「それでは、よろしくご検討下さい」

機嫌よくそう言った相手は、日本自治政府の行政院長。普通の国なら首相にあたる人物だ。秘書の持つて来たコーヒーを口にしながら、今後の展望を得意気に語っていた。相槌を打ちながら、カヲは窓の外に視線を送る。世界有数の高さ誇るそのビルの最上階からは、オオサカが一望できる。

話は聞き流しているため、何を言っているのかよく分からない。だが、男が得意の絶頂にある事は分かった。

トウキョウ特別行政区の廃止と東アジア駐留軍の撤退、タマユラ地区の返還、そしてユーラシアが返還を申し出ている北海道を日本自治区に帰属させるという決定。全て、オオサカの思い描いたとおりに事は進んでいる。

トウキョウにおける騒乱の結果、東アジア中央政府内における軍とペキン閥の影響力は消えうせ、東アジア共和国の主導権はシャンハイ閥を飛び越えて日本自治政府へと移った。今後は大西洋やユーラシアとの連携を模索しながら、連合加盟国における再・再構築の動きに合わせていくだろう。

再構築戦争によるブロック経済圏と、対プラント戦争を遂行するための地球連合という仕組みは、今や無駄の多すぎる仕組みなのだ。戦後復興に一応の目途が立った今、次の経済成長に向けた適切な資源配分を可能とする政治経済体制の確立が求められている。

しかし、それが十分に定まるまでは、しばらく不安定な状態が続くだろう。政治の動きに焦って合わせようとするより、今はじつと世界の流れを見極めるべき時だ。それがカヲの判断であり、楽天的で稀有

壮大なビジョンをとうとうと語る行政院長の姿に、やはりその判断が間違いでない事を確信する。

「トウキョウは落ち着きましたか？」

「ええ、犯人の処罰も順調です。ビジョンなき独立など、テロ屋の題目に過ぎませんからな」

その点に関しては、カヲも同じ意見である。再・再構築は旧来の国家を再興する事ではない。リ・ウエンの失敗は、十九世紀の国民国家をCEに打ち立てようとした事である。

しかし、とカヲは思う。日本自治政府が犯人としている者には、一貫した基準が設けられているのだ。大陸系のマフィアか、不法滞在の外国人である。彼らは、十九世紀の国民国家を否定しながら、二十世紀のナシヨナリズムを振りかざしている。そのツケは、近いうちに払わなければならないだろう。

それは口にせず、代わりにカヲは自分が乗る飛行機の時間を告げる。彼の会社は日本自治政府のプロジェクトへの投融資を控えるのだ。何が起こったところで、資金が焦げ付く事は無い。

成人の息子を宇宙港へ見送りに行くなどという事は、親バカではなく何らかの欠陥を抱えた親子がやる事だと思っていた。その考え方を改めた方がいいのか、それとも自分達親子が抱える欠陥を見極めた方がいいのか。それは、これからゆっくりと考えるべき事であろう。

宇宙港の展望スペースからは、今しがた出港したカーペンタリア直行便の姿が見えた。噴流炎の輝きを残して、あつという間に小さくなっていく。サーシャ・ローレンスは、それをずっと目で追いかけていた。

良い母親だったとは思っていない。子供も作ったのではなく、出来たに過ぎない。第二世代コーディネーターである彼女にとって、同じコーディネーターとの間で自然生殖を成し遂げたという事は、そのまま彼女の身体的遺伝子的優位性を示す事であった。自然に出来た子供は、彼女自身のステータスであって、それ以上のものではなかった。

プラントの育児政策は充実しており、フルタイムで仕事をしながら子育てをする事は楽だった。裏を返せば、自分自身の手ではたいした事をしていなかったようにも思う。

息子の自分に対する反発は、そんな環境から生じる必然的なものだったのだろう。彼がザフトやコーディネーターの理想を掲げて、自分の功利主義的な政治姿勢を非難するのは、端的に自分を嫌っているからなのだ。それでも、その事を取り立てて問題だとは思っていないかった。

しかし、息子が危篤にあると聞いた時の衝撃は今でも生々しく覚えている。容態が悪すぎてカーペンタリアからプラントへと運ぶ事ができないので、せめて生きているうちに地球に降りてきてもらえないかと言われてからの記憶は、ところどころが酷く曖昧になるほどにショックだった。

そして、その息子が一命を取り留めた時の安堵感も、生々しく覚えている。十数年ぶりに涙を流した。一目もはばかりず、ベッドの上の息子の温かな手を握り泣いた。

それを愛だというほど身勝手では無いが、自分自身が母であるという事は痛烈に自覚した。だから、息子が再び地球に向うという話を聞いて、宇宙港まで来てしまったのだ。シャトルの姿はもう見えなくなってしまうている。

「父の事は、愛していたのですか？」

カーペンタリアの病院で、息子はこんな事を聞いた。彼の名前は、彼の父親と同じものである。それは顔の記憶すら曖昧になった男への、愛の証左なのだろうか。彼女に答える術はなく、息子は深い悲しみの色を湛えて微笑むだけだった。

自分が母親にならないうちに、息子は大人になっていた。親の持つ弱さや卑小さをも、子供として愛する事のできる大人に。

きつと、息子には愛する女性がいるのだろう。彼女には出来なかった事を、彼は出来るようになったのだ。

やっと自分が親である事を自覚した時には、子供はずっと遠くに行ってしまった。その事が、ひどく悲しく、そして切なかつた。

サーシャは涙を拭う。ただ親として、そつと子供の幸福を願う事しか出来なかった。

大規模な火災の跡が生々しく残っている。半年では、復旧どころか焼け落ちた建物の解体作業すら着手できないのだろう。情勢は落ち着きを見せてきたとはいえ、本格的な復興はまだまだ先のようだ。

以前の活気を知る者にとつては人の数も少なくなったと感ずるが、それでも街自体は死んではない。被害の少なかつた建物などでは、既に店舗が再開されていたりした。呼び込みの男達を避けるように歩きながら、目的の店を目指す。

『キャバレー・ユンミン』は同じ場所に店を構えていた。ただ、開いているのかどうかはよく分からない。キリルはドアを開ける。

「……ローレンスさん？」

カウンターの隅でパソコンを弄っていたのはチーママである。客は誰もいなかった。キリルはカウンターの椅子に座つてボトルが残っているか尋ねる。こちらから聞かずとも、チーママは今の状況を説明してくれた。

あの騒乱の後、ママは自治政府に拘束され、そのまま音信不通になったという。この店で働いていた女性の大半が、アルバイトの禁止されている研修制度利用者や不法滞在者であったため、彼女らもほとんどが捕まったのだそうだ。運が良ければ強制送還、悪ければそのまま行方不明だという。

善隣幫や菱丘組などのマフィアとも深くつながっていた地域であり、自治政府はここで幾度も捜索を行った。チーママが捕まっていないのは、ひとえに彼女が『日本人』だからだ。全ては三国人の陰謀である、それがこの国の伝統的な思考パターンなのだと、チーママは毒づいた。

「このお店、ママもオーナーもいなくなって……正直どうしようかって思ってるの。権利関係で揉める前に引き払った方がいいかなって」キリルのボトルからウィスキーを注ぎ、チーママはロックを煽つ

た。近辺の店はどこも同じような状況で、地権者だの抵当権者だの名乗る人間が現れては元から店を構えていた人達を追い出しているらしい。自治政府はここで大規模な再開発を計画しており、利権が生じているのだ。

「ママも元は不法滞在者で、幫から資金を借りてお店を始めたらしいわ・・・給料は安かったけどそういう子を雇ってたのは、ママなりに思う事があったんでしょね」

悪い人ではなかったし、多少の恩もある、せめて店の名前くらいは引き継ぎたい、チーママは酔った目でそんな事を言う。そしてようやく、キリルが聞きたかった話を始めた。マリアはあの騒乱以降、店には現れていないと。

そして、もし現れていてもその後で捕まっただろうと付け加えた。期待はしていなかったが、キリルは落胆を息と共に吐き出した。ダメもとで彼女の住んでいた家に行ってみようと思ったが、それを読まれたようにチーママが口を挟む。彼女の部屋は、今はもうないと。

彼女は店の奥に入って小さな段ボール箱を持って来た。一月ほど前に、彼女のアパートの大家から送られてきたものだそうだと。中身は、彼女の私物であった。

「家具とかは売って滞納家賃に当てたんでしょね。売り物にならない奴をコッチに送ってきたのよ」

せっかくだからもらってと、キリルは箱を手渡された。本やノート、小物類の中に、筒が一つ目立つ形が入っていた。開けて見ると紙が入っている。

それは似顔絵だった。色鉛筆で描かれたその似顔絵のタッチは、プラントの画家ロディ・ギャリのタッチに良く似ていた。似顔絵の紙はだいぶ古くなっているが、それが大事にされていた物なのはよく分かった。

似顔絵に描かれた壮年の男性は、彼女の父親なのだろうか。だが、絵の隅にしたためられた短いメッセージには、別の名前が書いてある。チーママは本名だろうと言う。マリアというのは源氏名だった。

懐かしくはあるが、嫌な臭いである事には変わりはない。タバコの煙が歩いてきたかのように、男がオフィスに入ってきた。コーヒーカップを傾けていた女が、ミルクと砂糖を探した。自分が普段使わないものは、戸棚の奥に押し込められてある。

「もう、退院したのね」

流石、私の旦那が治療に当たっただけの事はあると、女はコーヒーにたつぷりのミルクと砂糖を入れた。シュウ・サクラは不機嫌そうにそのコーヒーを受け取る。彼としては半年も入院するつもりはなかった。現に怪我は三ヶ月ほどで治癒し、リハビリなどの必要も無かったのだ。

それにもかかわらず入院を続けたのは、禁煙に強制力を持たせようとしたわけでもなく、たまった有給休暇を消費したかったわけでもない。トウキョウに入ってきた自治政府の目を逃れるためだったのだ。入院中のシュウに課せられた事は、保安局上層部が用意した想定問答集を丸暗記する事である。

女が差し出したメモリーチップを受け取り、付属の書類を手に取る。騒乱前に頼んでいた仕事なので、もはや必要の無いものなのかもしれない。だが、自分の置かれた状況を納得するための手がかりにはなる。

半年前の騒乱、その被害に対して誰がどのような責任を取るのか。最終的には政治とやらが決着を付けるのであるが、それまでに原因の分析や事件の経過が調査されなければならない。その部分で、特別行政区と自治政府が綱引きをしているのだ。

東アジア中央政府や東アジア軍は、トウキョウの権益を最悪の形で失った。その上、責任まで背負えとなれば、死に物狂いで反撃してくるだろう。解放軍を気取る日本自治政府が、騒乱への関与や自らの責任に言及する事は無い。そうなれば、泥を被るのは特別行政区である。

保安局は、自分達がいかにトウキョウ市民を守るために日夜活動を行っていたのかを猛然とアピールしている。その事自体に嘘は無い

のだが、真実だけでは不足なのだ。だから口裏合わせが必要になる。シユウが菱丘組の幹部と私的に接触を行っていたなどという事実は、決して表に出てはならない。

あれだけの殉職者を出しながら、その後を訪れたのが組織の保身活動であるという事に、シユウは心底呆れていた。進級も昇進も断つて、警備部の現場に戻ってきたのは、そんな上層部には何の用事もないからだった。

あんな騒乱を強引に収め、アリバイ作りのような裁判で目先を誤魔化しているのだ。機動隊が必要とされる場面は遠からずやってくるだろう。その時に同じ轍を踏まないためにも、現場にいる必要があるのだ。

「先生に、礼を言っておいてくれ」

シユウは女にそう言つて、鑑識課のオフィスを出て行くこうとする。女は彼を呼び止めた。

「奥さんと子供、疎開先から呼び寄せなさい。とりあえず、安全になつたんだから」

心配してたわよと言つて、預かっていたという手紙を渡す。元同僚だけあつて、彼の知らないところで連絡を取り合っていたのだろう。渡された手紙に、シユウは思わず頬を緩ませた。それを見られないように、慌ててドアを閉める。

横浜の病院で定期的リハビリをしていたヨシト・モリを尋ねた後、ルーイは特別行政区へと入った。カズヤ・イシと品川の駅で落ち合う。道路も鉄道も多摩川を越えられるようになっており、駅にも街にもあの身分証確認ゲートは存在していなかった。

だが、それ以外に変わった様子が見られない。確かに、一本奥の通りを覗けば、ガラスが割れたままのビルが残っていたり、いまだブルーシートが掛けられたままになっている建物があったりもするが、それ以外は半年前のままのような気がする。道行く人々も、半年前と同じ雰囲気のままだ。

今こうしてすれ違っている人々が、半年前トウキョウで騒乱の最中にいた人々なのだろうか。コンビニエンスストアで雑誌を立ち読みしているサラリーマンは、あの日石や鉄パイプを持って軍の駐屯地に押し寄せたのだろうか。

「・・・なるほどな」

ルーイの話聞いていたカズヤ・イシが一言つぶやいた。その疑問は、あの日を境に何らかの変化を来たした者であれば当然の事だろうと言う。そして、この街は頭がすげ代わったくらいで変わる街ではないのだと付け加える。

あの日、トウキョウに吹き荒れたのは変革を求めた風などではない。ただ無定形にうねる空気だった。人々は、その空気を読んで行動したに過ぎない。カズヤの視線は窓の外に向った。文化遺産指定を受けたばかりの東京電波塔の展望台には、多くの観光客がいる。騒がしいカフェスペースは、二人で話すにはもってこいの場所だった。

カズヤはレポート用紙の束を差し出す。裁判の傍聴記録だ。あの騒乱のルポルタージュを書くために集めている資料の一環だと言う。いつの間にか『トウキョウ・スタンピード』と呼ばれるようになったあの事件の全容は、いまだ不明のままであった。

自治政府は定期的に調査結果を開示するとしているが、あくまでもそれは騒乱が起こったからの経過に過ぎない。それまでに何が起こっていたのか、その一端を知るために、裁判の記録も必要となる。「もっとも、公判前手続きは結審するまで公開されんし、開示請求がすんなり通るとも思えんがな」

何より、裁判にかけられているのはマフィアの下部構成員や日本軍残党の末端活動家ばかりであり、騒乱の裏事情にまでは届かないはずだ。自治政府も、自分に火の粉がかかる可能性のある事を、わざわざ掘り返したりはしないだろう。

もちろん、あの日実際に何が起きていたかは、彼らの方がよく知っている。ルポにはそれらも必要だと言って、カズヤはコーヒーをすすすすた。

ルーイは資料をめくっていた手を止める。事件の中心にいたとき

れる華僑系マフィア、善隣幫。その構成員として捕まった人達のリストであった。

容疑は色々かけられているが、その中に一つだけ共通点があった。身分証の不携帯である。ルーイの手が震え始めた。

このリストに書かれた人の全てが、マフィアの構成員なのだろうか。ルーイの問いに、カズヤは首を横に振った。騒乱後しばらくの間、自然発生的に生まれていた自警団が騒乱の実行犯として捕らえた人々の多くは、マフィアとは無関係であろうと。

自警団によるそのような行為が頻発したのは、治安維持活動に当たっていた自治政府軍が率先して「非日本人」を犯人として検挙していたからだ。それが、あの時の空気だったのだ。カズヤはそう語る。

その概念についてルーイは深く追求しないし、しても無駄だろう。それ以上に、興味すら無かった。

彼は、資料の一点に視線を注ぎ続け、それ以外の事ができなくなっていたのだから。

トウキョウとは異なる活気は、経済状況や統治体制の差異ではなく、多分に文化的なものであろう。トウキョウを整った顔の無表情な美人だとすれば、オオサカは化粧は下手だが笑顔の素敵な女性といったところだろうか。

リップサービスも含めてそう言ってみたが、目の前の人物は別にオオサカに愛着を持っているわけでも何でもないだろう。日本自治政府の政庁がある梅田から南に下り、オオサカのもう一つの中心を成す難波から東へ少し行ったところに、ジャンク屋組合の新しい事務所が構えられていた。

いわゆる下町の雰囲気を留める場所があったり、巨大な電器店が派手な広告と共に立っていたり、伝統芸能の劇場があったり、大衆喜劇の舞台があったりと、一言で言い表すのが難しい雑多な場所である。こういう場所を選ぶのは、彼女の趣味ではなく、ただ実利を求めている。

ものであろう。ジュンコ・ヤオイが、自分の分だけお茶を淹れる。

エリック・リブーが問いかけた。

「仕事は、やりやすくなりましたか？」

湯飲みを傾けていたジュンコが手を止めた。鋭くは無いが、じつと向けられるその視線は、分かりきった事を聞くなと言っている。

「向こうでの最後の仕事にミソを付けられてから、悪い事ばかりですよ」

ジャンク屋組合がツクバから脱出させた科学者の一人、SEEDコンバーターの研究者が暗殺された事を言っているのだろう。彼女の言葉に、エリックは肩をすくめた。ザフトの関与も疑っているのだろうが、彼の知る限りにおいてはタマユラ地区にいたオーブの工作員の犯行である。

SEEDコンバーターに関する研究成果がその後どうなったのかはザフトも興味を持っているらしいが、行方は分かっていない。装置の現物は失われ開発者も殺害された以上、大掛かりな追跡体勢を組むような案件でもないのだろう。

それに、その一件があろうとなかろうと、ジュンコの仕事がやり易くなる事はないはずだ。トウキョウ・スタンピード以降、彼女達のような組織は、当局から危険とのレッテルを貼られているのだ。

東アジア軍との繋がりを持つていたし、善隣幫や菱丘組とも関係していた。日本軍を顧客とする事もあれば、オーブの組織を名乗る連中との取引もあった。彼女としてはジャンク屋として、真摯に業務に励んでいただけであるが、世間ではそれを死の商人と呼ぶ。湯飲みをテーブルに置いて、ジュンコは窓際に立った。

無言で外を指し示す彼女に従って、エリックはブラインドの隙間から下を覗く。メイド姿の女性がチラシを配っていた。あれは公安部の人間だと言って、ジュンコは小さく舌打ちをする。

発想は同じだなと、エリックは部屋を見回した。オタクカルチャーの王道を行くようなポスターに囲まれているのは、以前と同じだ。彼が再び地球に降りてきたのも、以前と同様に情報収集活動である。

連合加盟国内部における再・再構築と、連合加盟国間における連合

機能の再編は、車の両輪となって地球圏を動かすだろう。CEの次の世紀のグランドデザインが、描かれようとしている。

そこにプラントはどのように組み込まれるのか。そして単に受動的にその動きに飲み込まれるのではなく、主体的にその動きをリードしていくにはどうすればいいのか。それらを判断するためにも、まず必要になるのは情報である。

ジャンク屋を訪ねたのは、彼女らが古い枠組みの中を生き延びてきた組織であり、その組織の変容はそのまま新しい枠組みを示唆するものとなりうるからだ。少なくとも、エリックはそう考えていた。

少し期待はずれだったなど、彼は口に出す代わりに席を立った。大男から、カモフラージュ用のアニメグッズを受け取って事務所を出る。彼女らは、兵器ではなく人を商品として扱い始めている。

再・再構築が生み出す軋轢の中、最も危険なものが傭兵やテロリストといった破壊工作のノウハウを持った集団である。連合加盟国はそれらの取締まりを強化しているが、ジャンク屋はそこに商機を見出していた。取締りによって行き場をなくした傭兵やテロリストに、次のクライアントや活動場所を斡旋するのである。商品が僅かに変わっただけで、やっている事は何一つ変わっていない。

その先に、何か別のビジョンでもあるのかとも思ったが、そういった事でもないらしい。エリックは手帳に書いてあったいくつかの予定を変更する。余った時間は観光に回す事にした。

まずはパンフレットに書いてあった、動くカニの看板を見に行く事にする。

川を一本隔てると、復興の槌音は遠くなる。この区域には、大きな被害がなかったのだ。だが、街の様子はどこか閑散としており、空店舗や貸ビルの看板が目立っているような気がする。そして、壁を取り壊すための重機の音だけがやかましい。

タマユラ地区と日本人特別居留区との間にそびえていた分離壁の取り壊し作業が始まったのだ。タマユラ地区の租借期限満了と同時

に工事が終わるようにとのスケジュールで、工期が決定されたという。

オーブ系の企業は一斉に撤退を始め、関係者の多くはオーブへの移住を開始していた。租借期限が切れるまでは、日本自治区の企業が進出する事も出来ず、街は寂れていく一方である。

「・・・あの人」

ユンディ・ミナカミが指差す男性も、こちらに気がついたようだ。めつきり人通りの少なくなった街では、偶然の出会いもどこか間が抜けたものだ。大声を出したり手を振り合ったりするような仲でなければなおさらである。タルハ・アンワール・ガニーが、丁寧に会釈をする。

「奇遇ですね、ローレンスさん」

キリルはそのまま二人を喫茶店に誘う。正直、トウキョウに来てからの事はたいして考えていなかったのだ。とにかく、少しでも情報が欲しい。話を聞くと、彼らは騒乱の後もタマユラ地区に残って活動を続けていたのだそうだ。

日本人特別居留区では実際に兵器としての運用が成された自社製品の問題点や、その流通経路など、会社として調べなくてはならない事は多かった。さらには自治政府への説明や、タマユラ地区の警備保障会社などへの対応、警察への事情聴取なども頻繁に行われていた。騒乱の影響でしばらくはトウキョウに応援の社員を入れる事もできず、この半年はとんでもない忙しさだったとユンディは言う。

「最近ですよ、余裕が出てきたのは・・・ローレンスさんは、やはりお仕事で？」

キリルは曖昧に答えるが、今回のトウキョウ入りは完全な私用である。カーペンタリアで意識を取り戻し、プラントに戻って療養を続けていた彼が退院したのは、つい先日であった。本格的な職場復帰をする前に、何としてでもマリアの消息を掴んでおきたいと、トウキョウに戻ってきた。

とりあえずトウキョウの大まかな状況を聞くのだが、これといった情報は無いようだ。各地で復興作業が始まり、世間の注目はそちらに

向っているらしい。

いや、あの騒乱から無意識に目を逸らしているのかもしれない。こちらに目を向けてしまえば、再びあのような混乱が生じてしまうのでは無いだろうか。死者、行方不明者の全容すら未だに明らかになっていないのだ。

縮めたストローの包み紙に水滴をたらし、ウンデイが回りを見渡してから言う。騒乱の実行犯として捕まった人達に対する、刑の執行は既に始まっていると。

裁判も通常の犯罪の場合とは異なる手続きで進められており、強引な取調べや自白の強要など、悪い噂は耐えなかった。大抵の判決は自治政府領内からの追放なのだが、一部では死刑判決も存在するという。

「旧世紀から、死刑の好きな国だったらしいけどな」

タルハが苦い声で言う。しかも、冤罪の可能性は一切考慮されていないらしい。それどころか、迅速な裁判と刑の執行はトウキョウ市民の支持を得ていると言う。裁判の形を借りた政治的パフォーマンスでしかなかった。

市民の抗議活動に対する東アジア軍の無差別攻撃というそもそも問題を提起する者はなく、外国人犯罪者による破壊活動が騒乱の原因とされているようだった。

トウキョウ特別行政区が管理していたメディアの全ては、そのまま自治政府が管理する事になった。そして、復興救援活動のための広報を円滑にするための措置が、半年経っても解除されないままなのだ。特別行政区と同じ種類の情報操作を、自治政府も行っているようだ。「生情報も今じゃアクセスできなくなってる」

タマユラ地区からのオーブ系企業の撤退や、ハーモナイズコミュニケーションの事務所閉鎖などによって、特別行政区時代には辛うじてアクセスできた「当局に統制されていない情報」も全く入手できなくなっていた。

特別行政区時代には人々が競うように集めていた生情報は、今や要求すらされなくなっているのだ。唯々諾々と、自治政府の流す情報を

飲み込んでいるだけだった。

愚痴になつてゐるわねとユンデイが言つて、話を区切つた。つまらない沈黙が訪れる前に、キリルは必要な事だけを質問する。

裁判記録や刑の執行状況を調べるにはどうしたらいいかと。

江戸川を渡ると、街の雰囲気もずいぶんと落ち着いたものになる。都心部に比べて、騒乱の影響が少なかったからだ。もつともそれは建物の話であり、あの時このあたりに住んでいた人の多くは、都心部に向つて抗議デモを進撃させていたのだ。

「帰つてこない人も多いんです」

一通り書類を交換して、雑談となる。既に引き払う準備が出来ている建物はとても静かで、小さな園庭は寂しげだった。窓から差し込む光の柔らかさが、その寂しさを一層引き立てているようだった。

そんな雰囲気苦笑をもらした男性の口から、真っ白い歯がこぼれる。黒い肌に映える歯の色は、目の前の男性の油断ならない雰囲気と和らげていた。ナタリア・ファリロスが紅茶のおかわりを勧める。

男性は、大西洋連邦に拠点を置く企業の関係者で、彼女の運営する慈善団体への寄付を申し出てくれたのだ。ジョン・マグナルドと名乗つた男性に、ナタリアは見覚えがあるような気がしていた。そのため何度も顔を見返してしまふ。男性がその事に疑問を呈し、ナタリアは慌ててポットを手を取つた。

「トウキョウからは完全に引き上げるといふ事ですか？」

「ええ、こちらの団体への引継ぎも終えましたし」

彼女の運営する慈善団体、ファリロス・ファミリアが設立した日本人特別居留区への人道支援団体は、その目的を一定度達したという事で、現在も続いている一部の医療活動をトウキョウの市民団体などに引継ぎ、撤収する事になっていた。そのため、同時に運営していた孤児院も閉鎖となる。

孤児たちが暮らしていたこの建物は、行政が買い取つて同様の事業を続ける事になっていた。改装や増築を行うため、子供たちは現在別

の場所で暮らしている。

男性は、日本自治政府からの圧力や何らかの働きかけがあったのでは無いかと探りを入れていたが、ナタリアはそれを言外に否定する。確かに、相当危険な橋を渡って活動を続けてはいたし、当局の監視も受けていたが、撤退を考えたのはあの騒乱の最中であつた。圧力が理由では無い。

活動にのめりこむ余り、自分の周囲で自分の事を気遣ってくれる人がいる事を忘れていた。それに気が付いたので、一度足を止める事にしたのだと、彼女は言った。

「どうも走りすぎてしまうようでした……以前もそれで失敗したのに」「ですが、こういった事業はこれからがより一層求められるものなのでは？」

日本人特別居留区に対する東アジア軍の攻撃、トウキョウ全域で発生した騒乱、身寄りを無くした子供達は確実に増えている。行政はようやく腰を上げたところであり、態勢はまったく整っていない。

さらに菱丘組傘下のマフィアが、比較的年齢の高い孤児を積極的に組織構成員にしているという情報もある。確かにそういった組織の構成員になれば、孤児が犯罪に走ったり巻き込まれたりする事を一時的には防ぐかもしれない。だが、組織自体がそもそも犯罪を前提とする組織なのだ。治安の維持に役立つとは言い難い。

「特別行政区の頃から、菱丘組さんは市民の支持が高かつたんです」

孤児の受け入れも、組織の拡大活動ではなく慈善活動の一環として受け止められているのだ。理屈の上では納得しているといった感じがするナタリアの苦笑を見ながら、ヒューは首を傾げた。

邦人救出を終えヨコスカに戻ったヒューは、再びジョン・マグナルドの名前でトウキョウに戻ってきた。騒乱後のトウキョウの情勢を調査するためである。大洋州が本拠地であるこの慈善団体を尋ねたのもその一環だ。この後も市民団体や労働組合など、トウキョウの復興活動に携わっている非行政の活動を中心に接触していく予定だ。

応接室のドアがそつと開き、子供が中を覗いている。ナタリアの視線がそちらに移ったタイミングで、ヒューは立ち上がった。丁寧に頭

を下げ、部屋を出る。

ここに残っているという事は、あの子供は孤児では無いのだろう。ヒューはそう思つて首を後ろに向けた。だが、ナタリアがその子供に接する様子を見て、別段聞く必要のない事だと思う。ヒューは視線を戻した。

がらんとした遊戯室にピアノが一台、置き去りにされたように残されている。

レンタカーに載せてあつた音楽ディスクはプラントのものだった。最近売り出したアイドル歌手のものらしく、聞き覚えのある雰囲気のことだった。それがハーモナイズコミュニティの歌手が歌つていたものに似ていると気付いた時、目的地に着いた。

すれ違つた老人に会釈をする。空気を淡く彩っている匂いは、墓の前に立てられた細い香から立ち上るものだ。この国の言葉が刻まれた墓碑の間を縫うように歩く。墓地の一番奥に、目指すものはあつた。

そのそばに植えられた桜は満開であり、快晴の青空をバックに、美しいコントラストを描いている。キリルは足を止めた。寺の人が教えてくれたように、一人の男性がその墓碑の前にたたずんでいる。身寄りの無い人の遺骨を受け入れてくれるというその墓を、訪ねる人など限られているだろう。

彼の気配に気付いたのか、男性が振り向く。ややあつて、二人は顔見知りである事に気付いた。東アジア軍による日本人特別居留区侵攻時、地下の通路を一緒に歩いた相手だ。曖昧に頭を下げ、キリルは男性の隣に足を進めた。

「ローレンスさん、でしたね?」

自分の隣に立って墓を見つめる男性に、ルーイはそう問いかける。小さく頷いただけで、何も言わない彼の表情は震えるようだった。彼の知り合いも、あの騒乱に巻き込まれたのだろうか。それも、最悪の形で。再び、視線を墓碑へと戻す。

アメリカは、ここに眠っている。

母親のコネを使って、連合からユーラシア外務省を経由して日本自治政府の裁判記録を取り寄せたのだ。そしてその中に、彼女の名前を見つけた。トウキョウ・スタンピードの引き金となったとされる、代々木の爆発事件の実行犯として。

この裁判に関する噂は色々と流れている。裁判記録を見ても、虚偽の証拠や当局による供述の捏造を疑わせる部分は多々ある。しかし、彼女の調書だけは違った。そこには他の調書にはない、生い立ちからトウキョウへと来た経緯、そして犯行に至るまでの心理の変遷などが、事細かに書かれてあったのだ。

そしてそのほとんどは、ルーイの知らない事であった。彼女の死よ、その事に衝撃を受けた。そしてそんな自分を、身勝手だとも思った。彼女の事をどこまで知ろうとしたのだろうか。彼女の事は何一つ、水商売をしていた事さえ知らないままだったというのに。

あの時、自分はただ浮かれていただけであった。自分勝手な思いをアメリカに投げかけ、現実の彼女を見てはいなかった。あの柔らかな微笑みが、どんな思いの上に成り立っているのかを知ろうとしなかった。

ルーイは視線を隣に移す。キリルが目を袖口で拭っていた。

涙など、流す資格は無いのかもしれない。キリルは袖の染みを見ながらそう思う。自分は、最後まで客に過ぎなかったのだ。マリアを守る事も、救う事も出来なかった。出来ると、考えた事自体が愚かだったのかもしれない。彼女の事は何一つ、その本名すら知らないままだったというのに。

あの時、自分が見ていたのは何だったのだろう。マリアに向けていた想いの全ては、稚拙で無意味なものだった。怒りすら覚えるほどに、あの時の自分は何も見えていなかった。だが、いくら悔やもうとも、もはや取り返しはつかない。

地球に降りていたエリックのツテで、マリアが罪に問われた事を知った。同時に、判決は死刑でありそれは既に執行されていたとも知らされたのだ。そして、引き取り手の無い死刑囚の遺骨を受け入れて

いるというこの寺を訪ねたのだ。

寺の人に彼女の遺品を預けて墓の場所を聞いた時、キリルは先に人が来ている事を知らされていた。同じ日に同じ人を訪ねてくるとは仏様のお導きかもしれない、そんな事を言っていた。

キリルは涙を拭って尋ねる。

「キリロフさん、あなたは・・・アメリカ・カクタさんを訪ねて来られたのですね」

「!? どうして、それを?」

「彼女が、ホステスをしていた事は知っていますか?」

「・・・ええ」

「私は、その客でした」

花びらの散る音が聞こえそうなほどに、辺りは静かだった。ルーイはその言葉を嘘だと感じる。客、などでは無いはずだ。目の前の彼は、自分と同じ理由でここに来ているはずだ。彼も、自分がここに来た理由に気が付いているだろう。

自分達は、互いに知らぬまま同じ女性を愛していた。

二人の視線は、複雑にぶつかる。だが、どちらからともなく視線を外した。そして互いに、相手の愛が自分のような身勝手なものでは無い事を願うのだ。自分には、それが出来なかったから。

二人は墓碑を見つめる。彼女の名前すら残っていない無縁墓、その哀しさは彼女がトウキョウで感じていた哀しさにも似ているのかもしれない。そして彼らはあの時も、彼女を今のようになんも見つめるだけだったのだ。

舞い散る桜の花弁が、冷たい墓石にささやかな彩りを添えている。

自分達の存在は、この花弁のように、ほんの一瞬でも彼女の人生に色を添える事が出来たのだろうか。それとも、すぐに吹き散らされてしまう花弁のように、彼女の人生の傍をただ通り過ぎただけなのだろうか。

いつしか二人は、ともに歌を口ずさんでいた。それは同じ歌、彼女が歌っていた歌だ。キリルは涙を流し、ルーイは空を見上げた。消え入りそうな二人の声は誰にも届かず、ただ悔恨の彼方へと消えてい

く。
悲しい歌そのままに。

あとがき

この作品の着想は、ガンダムSEEDの設定の中で結局本編では使われる事なく終わってしまった宇宙クジラことエヴィデンス01を使つて、お話を作れないだろうかと思ひ立つた事が最初でした。そこで、いわゆる種割れ現象と、宇宙クジラの存在をリンクさせる、オカルトチックなSF設定を考えてみました。

お世話になつているサイトに掲載していた時は、SEEDコンバーターの開発者は普通に生き残つたのですが、これからも自分がこの二次創作を続けていく上で、この特殊設定は後々使いにくい事になるなと思ひ、展開を変更しました。

あとはこのオカルトチックな設定を生かすには、少し暗めの舞台が相応しいだろうと思ひ、スパイの蠢く街として東京の設定を考えました。

確か、「アラブの春」が始まつたのが、この作品の掲載を終えたくらいで、当局の規制を掻い潜つて、ネットと携帯電話、動画投稿サイトとSNSが市民運動の火付け役になるという事が実際に起こつたりもしました。意図はしなかつたのですが、期せずして現実の事件と作品内容が似てしまう事になってしまいました。

あと、外国人研修生の話は、自分の勤め先でも一時期、そういった人達を雇つていたことがあり、一部の人はありますが脱走したり勝手にバイトしたりといった事もありました。そういった実体験と、色々と問題が出ているという報道などを参考にして内容に反映させているつもりです。

東京に関しては、実際に行つた事も数度しかないので、地理などに関しては全く分かつていません。書いている時は、ずっと地図を見ながら書いていたのですが、やはり距離感がリアルに掴めなかつたため、移動にかかる時間なども全く分からず、実際に知っている人からすると、変な部分はあるだろうと思ひます。

地下鉄などを含めた三次元の地図は見つける事が出来なかつたため、地下鉄の天井を崩落させて道路に穴を開ける作戦が、実際に成立

するのかどうか良く分からない・・・

主人公の青年は、自分が一番最初に書いたガンダムSEEDの二次創作において登場させた人物で、彼の母親や知り合いの女性ジャーナリストはその作品の主要人物でした。この作品に関しては、それなりに思い入れもあるので、今読み返すと色々と書き直したい部分だらけになりそうなので、手を付けないままになっています。

お話はそのままにもう一度書き直したくもあるのですが、全六十話近くあると考えるだけでうんざりと・・・

ひ弱な青年が引き寄せた必然のように、悲しい結末になってしまいました。最後のシーンはそれなりに綺麗にまとめられたのではないかと思います。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。